

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第183集

# 八幡野 II 遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

八幡野Ⅱ遺跡正誤表

頁一行	誤	訂正
9-3	各国の・・・	各図の・・・
24-11～12	復原状状態	復原状態
33-25	焼導部	煙導部
55-14	(写真図版22-20・～24)	(写真図版22-20～24)
64- 4	遺物の化に、	遺物の他に、
65-表の8	新第三系新統	新第三系中新統
75-表	表の野線切れ	野線あり
86-13	～橙色を掘りこみ	～橙色土を掘りこみ
87-右下		※実線はC～C'
97-28	(堅穴式)	(堅穴式)
98- 4	・・・堅穴を掘り	・・・堅穴を掘り
118-表の56	石鍬(折	石鍬(折損)
135-右下	・・・の破版	・・・の破片
141-右下	・・・は須恵器壺のカメと	・・・は須恵器のカメと
163-写45	左側写真の位置がズレている。	

# 八幡野 II 遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

# 序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600カ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告は、東北横断自動車道秋田線建設に関連して、平成元年度から平成3年度にわたって発掘調査した八幡野II遺跡の調査結果をまとめたものであります。八幡野II遺跡は、和賀川右岸に形成された河岸段丘上に立地し、調査の結果、縄文時代の陥し穴遺構、古代の住居跡や土坑などが発見され、貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く利用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御協力、御援助を賜りました日本道路公団仙台建設局北上工事事務所、北上市教育委員をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成5年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 工 藤 巖

# 例 言

1. 本報告書は、岩手県北上市和賀町山口第40地割80ほかに所在する八幡野II遺跡<sup>はちまんの</sup>の発掘調査の結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、東北横断自動車道秋田線建設に伴って遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。

本遺跡の調査は、日本道路公団仙台建設局と岩手県教育委員事務局文化課との協議・調整を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施したものである。
3. 岩手県遺跡台帳の登載番号はME63-0181、調査略号は調査年毎にHMII-89、HMII-90、HMII-91、である。発掘調査面積は、58,070㎡である。
4. 調査年度、調査期間、調査面積、担当調査員は、以下のとおりである。室内整理は、工藤利幸・及川靖世が担当し、報告書の執筆はI-1を佐々木嘉直、そのほかを工藤利幸が担当。

平成元年度	5月15日～10月19日	25,160㎡	工藤利幸・村上 修・及川靖世
平成2年度	4月17日～9月25日	20,970㎡	佐々木嘉直・工藤利幸・及川靖世
平成3年度	4月16日～6月29日	11,940㎡	工藤利幸・安藤邦彦
5. 本報告書に掲載した写真図版の縮尺率は不同である。写真キャプションのうち陥し穴状遺構については、スペースの都合から“陥し穴”と略している。また、実測図の凡例は、III、“調査の方法”および各図版中に記載してある。
6. 遺物観察のうち土師器・須恵器の観察内容は以下のように記号化している。“Y=ヨコナデ、U=指頭ナデ、N=ヘラナデ、K=ヘラケズリ、M=ヘラミガキ、H=ハケメ、R=ロクロ調整痕、S=輪積成形痕、I=糸切無調整”
7. 各種鑑定・分析にあたっては、下記の機関・諸氏に依頼した。

岩質鑑定	佐藤地質工学研究所	佐藤二郎氏
炭化材樹種	(社)岩手県木炭協会	早坂松次郎氏
火山灰同定	奈良教育大学	三辻利一氏
8. 野外調査・室内整理にあたっては、下記の方々に御協力・御指導をいただいた。

浅田知世・小田島恭二・沼山源喜治・本堂寿一・桐生正一・熊谷常正・宮塚義人・山田昌久
9. 調査に関わる諸記録・遺物は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

# 本文目次

序

例言

I. 調査に至る経緯および調査の経過 .....	1
1. 調査に至る経緯 .....	1
2. 調査の経過 .....	2
II. 遺跡の位置と環境 .....	3
1. 遺跡の位置・立地 .....	3
2. 地質・地形の概略 .....	3
3. 調査区の状態 .....	5
4. 土層 .....	5
5. 周辺の遺跡 .....	7
III. 調査の方法 .....	8
1. 野外調査 .....	8
2. 実測図の表現について .....	8
IV. 遺構と遺物について .....	13
1. 竪穴住居跡 .....	13
2. 焼土遺構と土坑 .....	65
3. 陥し穴状遺構 .....	78
4. 近代の工房址 .....	99
V. 遺構外の遺物 .....	103
1. 縄文式土器 .....	103
2. 土師器・須恵器 .....	105
3. 石器・石製品 .....	106
4. 金属製品 .....	110
5. その他の遺物 .....	110
VI. まとめ .....	119
1. 竪穴式住居址について .....	119
2. 陥し穴状遺構について .....	119
3. 近代の工房址について .....	120

# 図版目次

図版1：遺跡の位置と周辺遺跡	4	図版40：H30-002土坑	68
図版2：調査範囲と周辺地形（付図）		図版41：E28-001土坑	69
図版3：土層断面図	6	図版42：F27-001土坑	70
図版4：遺構・遺物実測凡例	10	図版43：E27-001土坑	71
図版5：遺構配置図(1)	10	図版44：E27-002土坑	71
図版6：遺構配置図(2)	11~12	図版45：E27-005土坑	71
図版7：H13-01住居址(1)	15	図版46：F28-001土坑と出土遺物(1)	73
図版8：H13-01住居址(2)と出土遺物(1)	16	図版47：F28-001土坑出土遺物(2)	74
図版9：H13-01住居址出土遺物(2)	17	図版48：H29-002土坑	76
図版10：H14-01住居址(1)	19	図版49：K35-002土坑	77
図版11：H14-01住居址(2)	21	図版50：H26-001陥し穴状遺構	78
図版12：H14-01住居址(3)	22	図版51：G30-001陥し穴状遺構	79
図版13：H14-01住居址出土遺物(1)	25	図版52：K30-002陥し穴状遺構	80
図版14：H14-01住居址出土遺物(2)	26	図版53：K30-003陥し穴状遺構	81
図版15：H14-01住居址出土遺物(3)	27	図版54：L30-001陥し穴状遺構	82
図版16：I14-02住居址と出土遺物	30	図版55：L30-002陥し穴状遺構	83
図版17：I14-01住居址と出土遺物	32	図版56：L30-003陥し穴状遺構	84
図版18：I14-03住居址と出土遺物(1)	34	図版57：L30-004陥し穴状遺構	85
図版19：I14-03住居址出土遺物(2)	35	図版58：K32-001陥し穴状遺構	87
図版20：E28-01住居址とE28焼土	38	図版59：L32-002陥し穴状遺構	88
図版21：E28-01住居址カマドと小土坑	39	図版60：H29-003陥し穴状遺構	89
図版22：E28-01住居址内土坑	40	図版61：I29-001陥し穴状遺構	90
図版23：E28-01住居址出土遺物(1)	44	図版62：K31-001陥し穴状遺構	91
図版24：E28-01住居址出土遺物(2)	45	図版63：L32-001陥し穴状遺構	91
図版25：E28-01住居址出土遺物(3)	46	図版64：L32-003陥し穴状遺構	92
図版26：G28-01住居址(1)	48	図版65：M32-001陥し穴状遺構	93
図版27：G28-01住居址(2)と出土遺物(1)	49	図版66：L33-001陥し穴状遺構	93
図版28：G28-01住居址出土遺物(2)	50	図版67：J34-001陥し穴状遺構	94
図版29：G28-02住居址と出土遺物(1)	52	図版68：K34-001陥し穴状遺構	95
図版30：G28-02住居址出土遺物(2)	53	図版69：K35-001陥し穴状遺構	96
図版31：G29-01住居址	57	図版70：K36-001陥し穴状遺構	96
図版32：G29-01住居址出土遺物(1)	59	図版71：L35-001陥し穴状遺構	97
図版33：G29-01住居址出土遺物(2)	60	図版72：H09-01工房址出土遺物(1)	98
図版34：G30区小土坑群と焼土遺構	63	図版73：H09-01工房址(1)	99
図版35：G30区小土坑群周辺の出土遺物	64	図版74：H09-01工房址(2)と出土遺物(2)	100
図版36：E29焼土（No.1・No.2）	66	図版75：E30-01工房址と出土遺物	102
図版37：I13-001土坑	66	図版76：遺構外出土の遺物…土器(1)	104
図版38：F25-001土坑	67	図版77：遺構外出土の遺物…土器(2)	105
図版39：H13-001土坑	67	図版78：遺構外出土の遺物…土器(3)	107

図版79：遺構外出土の遺物…土器(4) ……………108	図版82：遺構外出土の遺物…石器(3) ……………113
図版80：遺構外出土の遺物…石器(1) ……………111	図版83：遺構外出土の遺物…石器(4) ……………114
図版81：遺構外出土の遺物…石器(2) ……………112	図版84：遺構外出土の遺物…石器(5) ……………115

## 写真図版目次

写真図版1：遺跡の位置と周辺地形 ……………123	写真図版28：土坑(2)と陥し穴状遺構(1)…………150 E 28—001、K 35—002
写真図版2：平成2年度調査区域全景 ……………124	H 26—001、G 30—001
写真図版3：平成3年度調査区域全景 ……………125	K 30—002、K 30—003
写真図版4：土層断面(1) ……………126	写真図版29：陥し穴状遺構(2) ……………151 L 30—001、L 30—002
写真図版5：土層断面(2) ……………127	L 30—003、L 30—004
写真図版6：倒木痕跡と集石 ……………128	L 32—001、L 32—002
写真図版7：H13—01住居址と出土遺物 ……129	写真図版30：陥し穴状遺構(3) ……………152 H 29—003、I 29—001
写真図版8：H14—01住居址(1) ……………130	K 31—001
写真図版9：H14—01住居址(2) ……………131	写真図版31：陥し穴状遺構(4) ……………153 L 32—001、L 32—003
写真図版10：H14—01住居址(3)と 出土遺物(1) ……………132	M 32—001
写真図版11：H14—01住居址出土遺物(2) ……133	写真図版32：陥し穴状遺構(5) ……………154 L 33—001、J 34—001
写真図版12：H14—01住居址出土遺物(3) ……134	K 34—001
写真図版13：H14—01住居址出土遺物(4) ……135	写真図版33：陥し穴状遺構(6) ……………155 K 35—001、K 36—001
写真図版14：I 14—02住居址と出土遺物 ……136	L 35—001
写真図版15：I 14—01住居址と出土遺物 ……137	写真図版34：H09—01工房址と出土遺物 ……156
写真図版16：I 14—03住居址と出土遺物(1) …138	写真図版35：E 30—01工房址と出土遺物 ……157
写真図版17：I 14—03住居址出土遺物(2) ……139	写真図版36：遺構外出土の遺物…土器(1) ……158
写真図版18：E 28—01住居址と出土遺物(1) …140	写真図版37：遺構外出土の遺物…土器(2) ……159
写真図版19：E 28—01住居址出土遺物(2) ……141	写真図版38：遺構外出土の遺物…土器(3) ……160
写真図版20：G 28—01住居址と出土遺物 ……142	写真図版39：遺構外出土の遺物…石器(1) ……161
写真図版21：G 28—02住居址と出土遺物(1) …143	写真図版40：遺構外出土の遺物…石器(2) ……162
写真図版22：G 28—02住居址出土遺物(2) ……144	写真図版41：遺構外出土の遺物…石器(3) ……163
写真図版23：G 29—01住居址と出土遺物(1) …145	写真図版42：遺構外出土の遺物…石器(4) ……164
写真図版24：G 29—01住居址と出土遺物(2) …146	写真図版43：遺構外出土の遺物…石器(5)他 …165
写真図版25：G 30区小土坑群と周辺出土遺物 …147	
写真図版26：F 28—001土坑と出土遺物…………148	
写真図版27：土坑(1)……………149 I 13—001、F 25—001 H 13—002、H 13—001	



# 表 目 次

・平成3年度までの年度別調査終了面積	1
・H13-01住居址出土遺物観察表	18
・H14-01住居址出土遺物観察表	28
・I14-01住居址出土遺物観察表	31
・I14-03住居址出土遺物観察表	36
・E28-01住居址出土遺物観察表	42～43
・G28-01住居址出土遺物観察表	51
・G28-02住居址出土遺物観察表	55
・G29-01住居址出土遺物観察表	61～62
・G30区小土坑群の周辺の遺物観察表	65
・F28-001土坑出土遺物観察表	75～76
・遺構外出土の土師器・須恵器観察表	116～117
・遺構外出土の石器・石製品他計測表	117～118

# I. 調査に至る経緯および調査の経過

## 1. 調査に至る経緯

東北横断自動車道秋田線は、岩手県北上市から秋田県秋田市に至る総延長107kmの高速道路である。このうち、第9次・第10次施工命令区間は、北上ジャンクションから秋田県境までの延長33.9kmである。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が昭和56年から分布調査を行っており、昭和62年4月13日付け「仙建北工第35号」による依頼をうけて分布調査結果を同年5月25日付「教文第117号」により日本道路公団仙台建設局に回答し、その取り扱いについて協議が重ねられ、止むを得ず消滅する遺跡については事前の発掘調査を実施することとした。

発掘調査の実施については、昭和63年度以降、岩手県教育委員会が発掘調査事業を日本道路公団仙台建設局に照会し、回答を受けたのち日本道路公団仙台建設局、岩手県教育委員会、岩手県文化振興事業団の3者の協議を経て、埋蔵文化財センターが担当することとした。事業着手後に調査の変更がある場合もその都度協議しながら進め、岩手県教育委員会文化課の調整を経て事業計画を変更して進めた。

本報告書の八幡野II遺跡の調査は、昭和63年12月27日及び平成元年1月21日の3者協議を経て、平成元年・2年・3年に調査することとなり、それぞれ4月1日付け委託契約により着手したものである。なお、平成元年度は途中から調査面積を増加することとした。

平成3年度までの年度別調査終了面積

※和賀町は平成3年4月から北上市と合併

遺 跡 名 (所在地)	調査対象面積	元年度調査面積	2年度調査面積	3年度調査面積	備 考 (計画変更)
柳 上 (北上市)	4,930㎡	90㎡	1,440㎡	3,400㎡	3年度継続調査
上 鬼 柳 IV ( " )	9,190		9,190		
上 鬼 柳 III ( " )	8,370		8,370		
上 鬼 柳 II ( " )	300		300		
上 鬼 柳 I ( " )	8,700		7,400	1,300	3年度継続調査
岩 崎 台 地 (和賀町)	50,500	29,250	17,550	3,700	
岩 崎 城 西 ( " )	5,550	5,550			2年度継続調査
梅ノ木台地 I ( " )	9,000	6,000	3,000		
梅ノ木台地 II ( " )	3,890			3,890	
兵 庫 館 ( " )	3,130	980		2,150	
上 坂 町 ( " )	4,710		3,090	1,620	3年度継続調査
観 音 館 ( " )	8,290		4,300		残りは4年度予定
煤 孫 ( " )	15,560		11,960	3,600	3年度継続調査
法 量 野 I ( " )	9,990		(9,990)	9,990	2年度粗掘
中 屋 敷 ( " )	6,080			6,080	
林 崎 館 ( " )	14,150		14,150		
本 郷 ( " )	15,490	12,540	2,950		2年度継続調査
石 曾 根 ( " )	3,150	2,450	700		2年度継続調査
月 館 ( " )	3,590	3,590			
八 幡 館 ( " )	3,820	3,820			
八 幡 野 II ( " )	58,070	25,160	20,970	11,940	2・3年度面積変更
田 中 館 ( " )	5,980	2,570	3,410		2・3年度面積変更
大 渡 II (湯田町)	59,300			15,000	面積変更・4年度継続
越 中 畑 V ( " )	6,600			2,000	面積変更・4年度継続
	92,000	108,780	64,670		

## 2. 調査の経過

秋田線建設に関連した八幡野II遺跡の調査は、平成元年度から同3年度までの3年次にわたって実施された。

元年度は、田中館跡の元年度分調査終了に合わせて諸準備を進めて同年5月15日の器機搬入・調査事務所の設営に始まり、同10月19日の器材撤収で当該年度の野外調査を終了した。本年度の調査面積は、諸種の事情等により変更・協議がなされ最終的には25,160㎡へと増加変更となった。調査は先ず、立木伐採後に残された未搬出木材の整理、残枝等の雑物除去・刈払いの後、基準点の設定・大調査区の割付測量を行った。大調査区・小調査区の割付は、田中館跡と一連の割付とし各調査区の呼称も同一方法をとっている。調査区割付の後、土層堆積状態・遺物の包含状態・遺構確認面などを把握するため各大調査区に2～3本のトレンチを設定し、人力による粗掘を行った。その結果、大調査区のE26～E28、F26～F27の区域に土師器片が比較的多く見られることが判明した。他の区域では縄文土器片が少量ずつ見られたものの、特に集中出土すると言うような状態ではなかった。また、土層等の変化についても土師器片集中区域周辺では炭化材小片や火山灰の小ブロックが散在していた。これらの結果を踏まえて人力による粗掘と併行してパワーシャベルを導入し、遺構確認・精査へと作業を進めた。検出した遺構は、平安時代の住居址1棟、白色火山灰が住居様に分布する地点1カ所、住居址外の土坑6基、焼土1基である。他に擬似現象として倒木根痕跡100数カ所、極新期の集石3カ所、松根掘跡を確認している。

2年度は、20,970㎡を調査対象面積として4月17日の器材搬入・現場事務所設営に始まり、9月25日の撤収で野外調査を終了している。2年度の調査区域は、元年度の調査区域に挟まれた区域から八幡館跡に隣接する東側を調査した。基本的な調査の進め方は前年度と同様であり、遺物が集中する区域はG28～G30に縄文土器片が、G28～G30・H28～H30に土師器片・須恵器片が集中し、土師器片が集中する周辺で地表から15～20cmの黒色土面に水分量の異なる地点3カ所を確認した。その他の区域は、縄文土器片・剥片石器などが散見される程度であった。検出した遺構は、平安時代の住居址3棟、同時代の炉跡1基、竪穴住居址1カ所、縄文時代他と考えられる陥し穴状遺構22基、その他の土坑1基、小柱穴19穴、焼土2カ所、近代の工房址1棟である。他に地籍界・地目界を示す近代～現代の溝および溝跡、などを確認している。

3年度は、11,940㎡を調査対象面積として4月16日の器材搬入・現場事務所設営に始まり、7月3日の実測図補描、写真撮影で終了している。器材搬出等は、諸々の事情により6月29日で終了している。検出した遺構は、平安時代の住居址5棟、土坑3基、近代の工房址1棟である。他に、前年度と同様に地籍界・地目界を示す溝・溝跡などを確認している。

## II. 遺跡の位置と環境

### 1. 遺跡の位置・立地

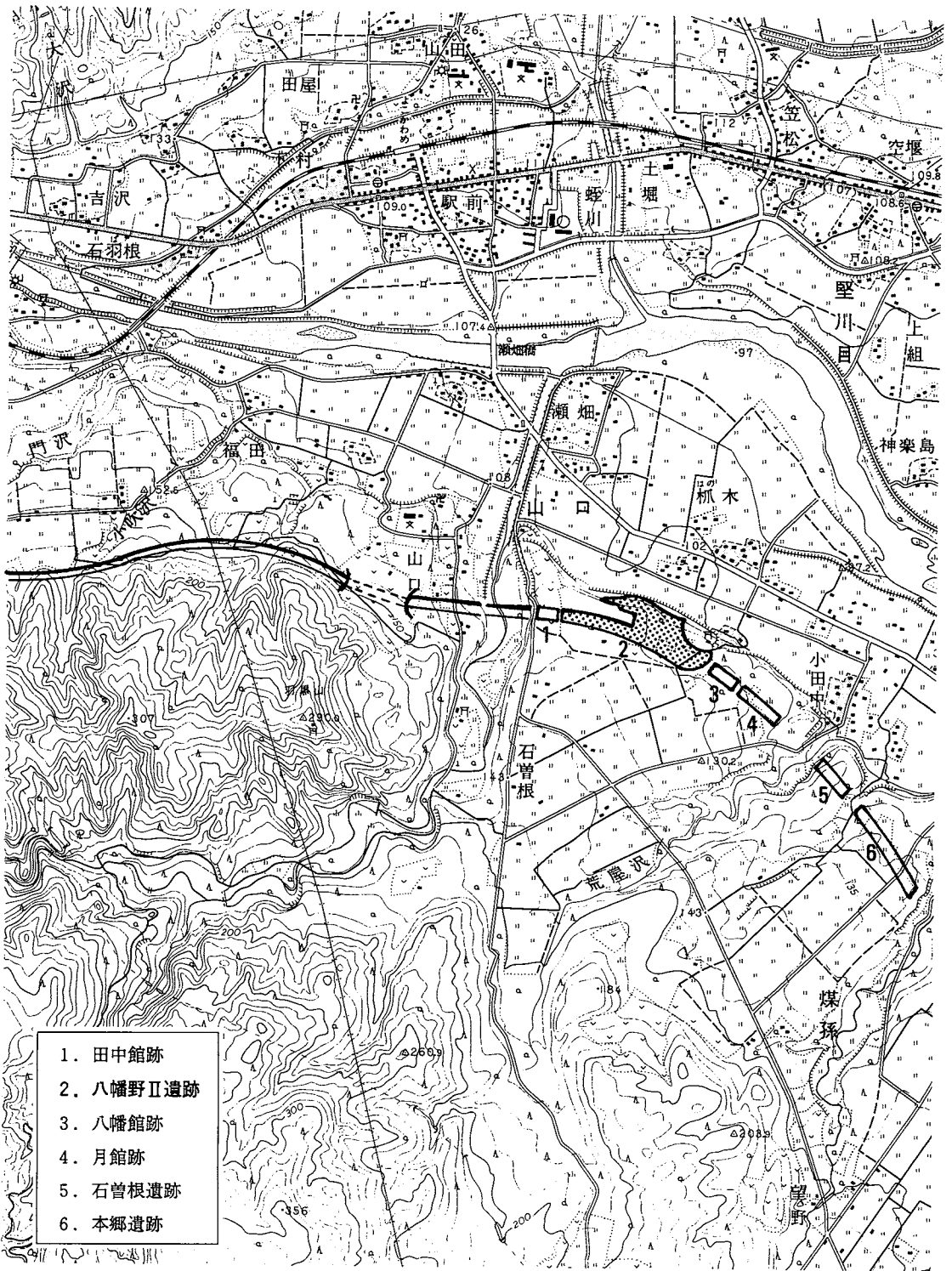
八幡野II遺跡は、岩手県北上市和賀町山口40地割80ほか地内で、東日本旅客鉄道北上線横川目駅の南南東約1.8kmから2.2km、北上市役所和賀町支所の南約1.6km付近に位置している。国土地理院発行の地形図1:25,000「和賀仙人」NJ-54-20-1-1(新庄1号-1)、および1:50,000「川尻」NJ-54-20-1(新庄1号)図幅中の北緯39度17分31秒・東経140度58分57秒付近から北緯39度17分30秒・東経140度59分10秒付近に位置している。

遺跡が所在する北上市は、岩手県中央部で奥羽山脈東麓に形成された北上盆地の中央部から中央西部に広がる嘗ての北上市、和賀町、江釣子村の3市町村が平成3年4月1日をもって合併誕生した新生「北上市」であり、かつての和賀郡和賀町山口地区に位置している。市境の北縁から西縁は花巻市・和賀郡沢内村・同郡湯田町に接し、東縁から南縁は和賀郡東和町・江刺市・胆沢郡金ヶ崎町・同郡前沢町に接する面積437.34km<sup>2</sup>の都市である。東部は北上山地西縁の山地・丘陵地帯でその西側を北上川が南流し、西部は奥羽山脈東麓にあり、奥羽山脈中に源を発する和賀川が東流している。

遺跡は、東流する和賀川の右岸(南岸)に形成された更新世低位段丘である金ヶ崎段丘の一つに広がっており、その西縁は和賀川の支流である鈴鴨川によって区切られ、東縁は荒屋沢によって区切られている。また、この段丘は鈴鴨川による扇状地性崖錐堆積物で厚く被われているため、礫堤状の起伏が見られる。同一段丘上に立地、隣接する遺跡として西側に田中館跡が東側には八幡館跡・月館跡が位置している。調査区域の標高は133~127、和賀川との比高は35~29mである。

### 2. 地質・地形の概略

岩手県の地形は、岩手県北部の安代町と西根町との境に位置する七時雨山山麓に源を發し、県中央部を南流して宮城県石巻市で太平洋に注ぐ北上水系、および岩手県葛巻町袖山に源を發し、葛巻町・一戸町・二戸市などを経て青森県八戸市で太平洋に注ぐ馬淵川水系の両河谷低地帯をはさみ、西は第三紀層の褶曲隆起帯に那須火山帯が重複した奥羽山脈、東は古世界を主とする北上山地が各々南北に伸びている。北上山地の東縁は太平洋に面する陸中海岸地帯となっている。北上市は、岩手県南部で北上盆地の中央部から西部に位置し、市域の東部を北上川が南流している。また、奥羽山脈に源を發する和賀川が西部地区の中央を東流して古川地区で北上川と合流する。北上盆地は、北上川および奥羽山脈に源を發し北上川に注ぐ幾つかの支流によって形成された地形で、特に北上川西岸地区および和賀川流域には河岸段丘や扇状地が良く



1:25,000 地形図  
わがせんにん

NJ-54-20-1-  
(新庄1号-1) 国土地理院



図版1：遺跡の位置と周辺遺跡

発達している。

和賀地区の地形には北上盆地の特徴が顕著に現われており、和賀川の下流域には北上川中流域に連続する大別3期の更新世段丘とその縁辺には完新世の段丘として自然堤防や氾濫原を含む河岸平野が発達している。遺跡は、これらの地形面のうち金ヶ崎段丘と呼ばれる更新世低位段丘上に立地しており、前述したように段丘の上を鈴鴨川等による扇状地性の崖錐堆積物が被っているため地表面には起伏が見られる。

### 3. 調査区域の状態

調査開始の直前までは、大部分の区域が杉の造林地であったが一部は昭和40年代初頭まで畑地として利用されていた。畑地として利用されていた区域やその周辺では畝跡や用地界を示す溝、耕作地からの排出礫の集積、区画毎のわずかな段差などが見られ、溝の中や耕作土からは陶器片・ガラス破片・農具の破片などが出土している。

### 4. 土 層

先に述べたように、調査区域の現況は杉の造林地および雑木林が大部分を占め、林地の一部は昭和40年代初めまで畑地として利用されていた区域が多い。また、八幡館跡よりの東側は調査開始直前まで畑地として利用しており、この区域で確認した陥し穴状遺構の多くに耕作による影響が見られる。

土層等の堆積状態は、崖錐性堆積物の起伏による影響が大きく区域・地点によって異っているが、現地表から最終の遺構確認面である崖錐性堆積物の上面までは層厚・層相に多少の差異は見られるものの同一層準とし把握できる。なお、以下に説明するII・III層は、鈴鴨川を要とするように放射状に分布する砂礫堤部では区別が判然としない地点も見られる。以下に、各土層の特徴について説明する。

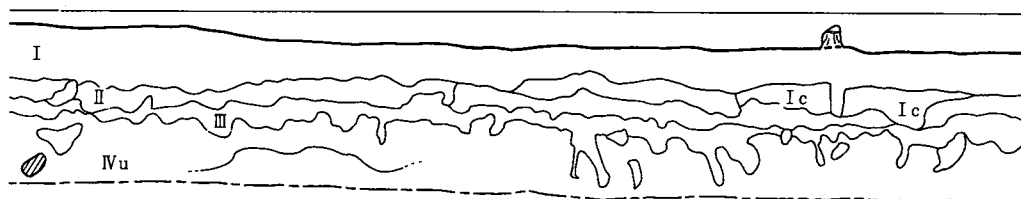
- I層：砂質の黒褐色土(10YR2/2~2/3)を中心とするが、地点によっては黒色土(10YR2/1)を呈し、旧耕作地では下位層の攪乱・混入物による変化が見られ、特に崖錐堆積物の砂礫堤が高い地点では下位の堆積物が混在し、黒褐色~極暗褐色などを呈する。また、砂礫堤周辺では構成物として砂~礫が多量に混在し、小礫質~粗砂質の黒褐色を呈する。層厚は15~35cmと幅があるが、これは砂礫堤間の微低地と砂礫堤の上位との差異と見ることができ、全体的に上部と下部に細別でき、上部は草木根の繁茂と未分解植物質の混在が認められ、下部は砂質~シルト質の黒褐色から黒色土へと漸変する。
- II層：I層と同様に地点によって差異が認められるが、概ね砂質~シルト質の黒色土(10YR2/2)である。層厚が極度に厚い地点では、下部に移行するにしたがって黒色土でも10YR1.7/

1に近くなり、III層との区別が判然としない場合もある。砂礫堤に近い部分では、II層とIII層との層界付近、その他に砂～シルトの薄層や浮石礫層が見られる。層厚は、15～30cmである。本層の上部が古代の遺構の確認層位である。

III層：小礫質～砂質の黒色土であるが、一連の層であっても地点によって10YR1.7/1・N2/1あるいは5 B2/1～1.7/1などを呈する。特に砂質土で層厚の深い地点や下位に粘土質土などの透水性の悪い層がある地点ではグライ化が見られる。砂礫堤に近い部分ではII層と同様に浮石礫層が見られ、礫層が浮上露出している地点ではII層とIII層との区別がほとんどできない場合もある。本層の上部が溝状を呈する陥し穴状遺構の確認層位である。

〈E 27区東西方向〉 E.L=128.500m

S = 1 : 40

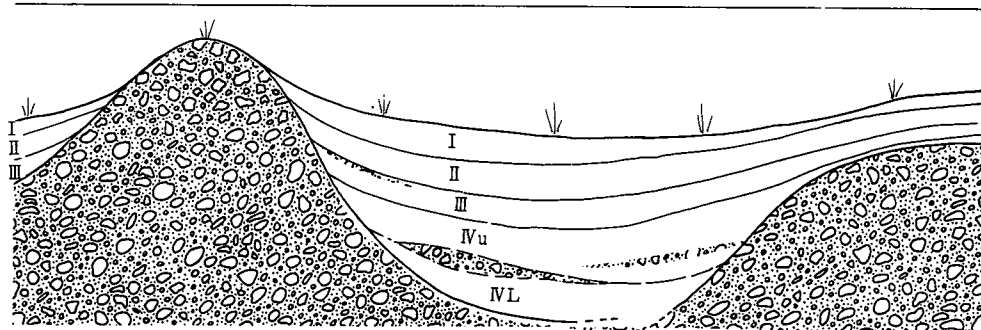


〈E 25区東西方向〉 E.L=128.900m

S = 1 : 40



〈模式断面図 東西方向〉



図版3：土層断面図

IV層：崖錐性堆積物を一括した。起伏が著しい砂礫堤および砂礫堤間に堆積する小礫質砂層～シルトおよび粘土質層の互層であり、層厚は5～7 mである。本層の下位には、層厚1～3 mほどの灰色やにぶい橙色の砂層・粘土層が見られ、更にその下位は礫層となる。本層上面が円～楕円方形などを呈する陥し穴状遺構の確認面である。

## 5. 周辺の遺跡

北上市和賀町地区では、今日までに180余箇所の遺跡が確認されており、これらの一部の概要については和賀町教育委員会から報告されている(和賀町教委1989～1991)。和賀流川域の遺跡分布を見ると、右岸では丘陵縁辺や更新世中位・低位段丘およびこれらが開析された支谷に沿って縄文時代～平安時代の遺跡が分布し、段丘縁辺部には下剋の強い沢や急崖を利用した城館跡が立地している。左岸では中位段丘縁辺や支谷に沿って縄文時代の遺跡が比較的多く分布し、一部河岸低地にも見られる。低位段丘および河岸低地には奈良時代～平安時代の遺跡が多く分布している。

以下に1989年から本格的な調査が行われている秋田線建設関係の近隣遺跡について、調査成果の概略を記す。

**田中館跡** (岩手埋文第166集 1991) 本遺跡の西に接し、「田中館跡」の郭外にあたる区域の調査である。確認遺構は、奈良時代の土坑・時期不明の柱穴群、遺物は奈良・平安時代と縄文時代の遺物が少量出土している。

**八幡館跡** (岩手埋文第149集 1990) 本遺跡の東側に隣接し、地形的にも調査成果としても何ら館跡を示すものは認められない遺跡である。確認遺構は、平安時代の竪穴住居址・土坑、縄文時代の陥し穴状遺構、遺物としては縄文時代・弥生時代・古墳時代～平安時代の各遺物が少量ずつ出土している。

**月館跡** (岩手埋文 第149集 1990) 八幡館跡の東側に隣接する館跡で、堀跡・柵列様柱穴列、縄文時代他の陥し穴状遺構、遺物としては縄文・弥生時代の土器等が少量出土している。

**石曾根遺跡** (岩手埋文第165集 1992) 月館跡の更に東に位置する遺跡で、縄文時代の竪穴住居址・土坑・陥し穴状遺構、掘立柱建物跡、遺物としては不連続ながら縄文時代早期から晩期・弥生時代等の土器・石器が出土している。

**本郷遺跡** (岩手埋文第164集 1992) 石曾根遺跡の東側に位置する中位段丘上に広がる遺跡で、縄文時代・平安時代の竪穴住居址・土坑・陥し穴状遺構・塚と集合墓、遺物は不連続ながら旧石器時代から中近世までの土器・石器等が出土している。



### III. 調査の方法

#### 1. 野外調査について

##### (1) 調査区の割付設定

八幡野II遺跡の調査区域は、田中館跡の東側に連続する本線部と和賀インターチェンジ部と本線の建設予定地であり、その範囲は東西約600m、南北最大約180mと建設予定地に沿って東西に長く伸びている。調査区の割付は、連続する田中館跡との関係から田中館跡調査区域内に設定されていた道路中心杭No87+40とNo86+80の2点を測量基準点とし、この2点を結ぶ延長線上とこれらに直交する方向に20×20mの大調査区を設定した。大調査区は、更に4×4mの小区画によって25区画に細分した。これらの調査区の割付呼称は隣接する田中館跡と一連の方法とした。その他、3年次計画であることから要所要所の杭はコンクリート杭とした。

大調査区の割付は、南北方向を北から南へA～N、東西方向を西から01～36とし、呼称はこれらの組み合わせでH09、G28……などとした。小調査区の割付呼称は図版6の小調査区割付例とし、大調査区名との組み合わせでH09A、G29A、などとした。基準点No87+40とNo86+80の平面直角座標第X系による成果値および杭高は以下のとおりである。

No87+40 X = -7898.7295m Y = 12802.41868m H = 132.500m

No86+80 X = -78806.17366m Y = 12861.95382m H = 132.298m

##### (2) 遺構確認・精査・記録

小調査区単位および小調査に沿ったトレンチでの試掘粗掘によって土層の堆積状態や遺物の分布状況を確認し、前述した基本土層のII層上面あるいはIII層上面までをパワーシャベルによって除去した。地点によっては15～20cmの耕作土（IA）直下が砂層や礫層となっており、ほとんど確認作業を必要としない場合もあったが、パワーシャベル稼働の後は人力による粗掘・検出作業とし、確認した遺構には大調査区毎に通し番号を付与した。通し番号は、住居址・大型土坑・溝には2桁の数字を、その他の遺構には3桁の数字を付与し大調査区名との組み合わせから“H14-01住居址”“G28-01住居址”、あるいは“H14-002土坑”のように遺構名とした。

土坑・陥し穴状等小型の遺構の精査方法は2分法とし、住居址や大型の土坑については4分法とした。各々の作業の段階で図化・写真撮影等必要な記録を行い、図化縮尺は細部を10分の1、その他を20分の1としている。写真記録は、35mm白黒・35mmリバーサル・6×7の白黒・リバーサルを用いているが、6×7での記録は少ない。

## 2. 実測図の表現について

本報告書における遺構・遺物の実測図に用いたスクリーン・トーン等による表現方法は、図版④に示した種類および内容である。また、各国の縮尺率については住居址・住居址状竪穴遺構・大型土坑を $S = 1 : 50$ 、カマド部・焼土・小型土坑を $S = 1 : 30$ 、陥し穴状遺構を $S = 1 : 40$ としているが、不定の図については各々にスケールか縮尺率を表示している。なお、曲率の著しい溝状の陥し穴遺構の長軸方向断面図については透影法による断面図を示している。

### (1) 遺構実測図

遺構実測図におけるスクリーン・トーン等の使用例は、カマド他の焼土層・貼付土・踏み締め土、および整地土の範囲、火山灰の集積部、礫などである。各々は平面図・断面図で異なる場合もあるが、極力同一の方式としている。各々の凡例は図版4のとおりである。

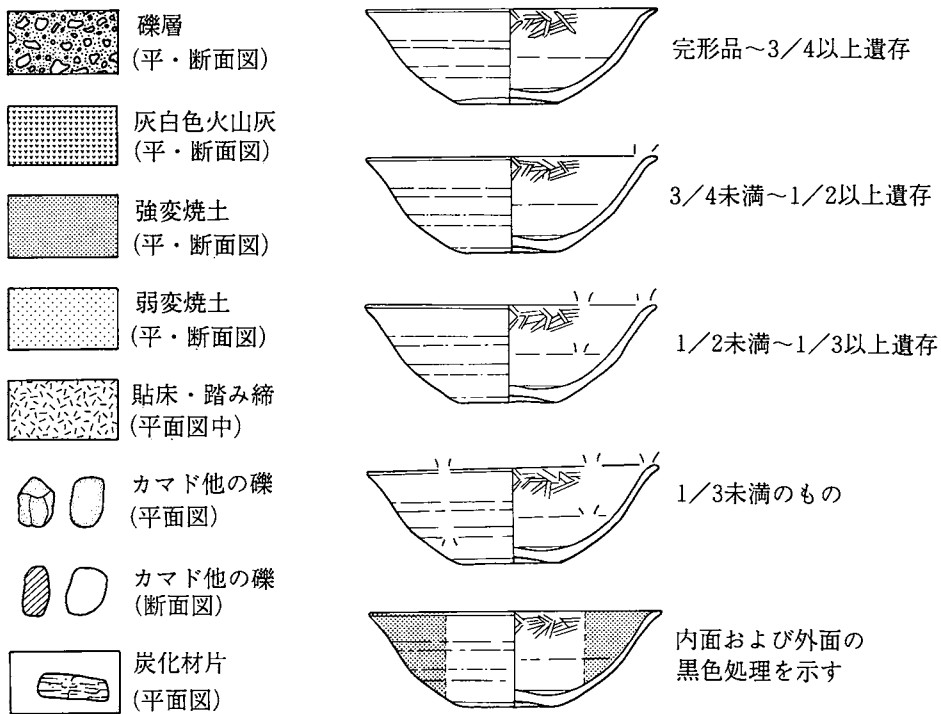
### (2) 遺物実測図について

① 出土した土器は、平安時代の土師器・須恵器、縄文時代の土器などが見られるが、大部分は平安時代のロクロ使用・ロクロ不使用の土師器である。土師器の器面調整には、ヘラケズリ・ヘラナデ・ハケメ・ヘラミガキ・ロクロ成形調整痕、黒化処理が見られる。しかし個体によっては調整時の乾燥度の差異や2次火熱を受けたことにより、ヘラケズリともヘラナデとも断定しがたい調整痕やミガキかナデかの断定が困難な調整が見られる。また、黒化処理を施したものと推定されるものの2次火熱により不明瞭な状態となっている坏も見られる。

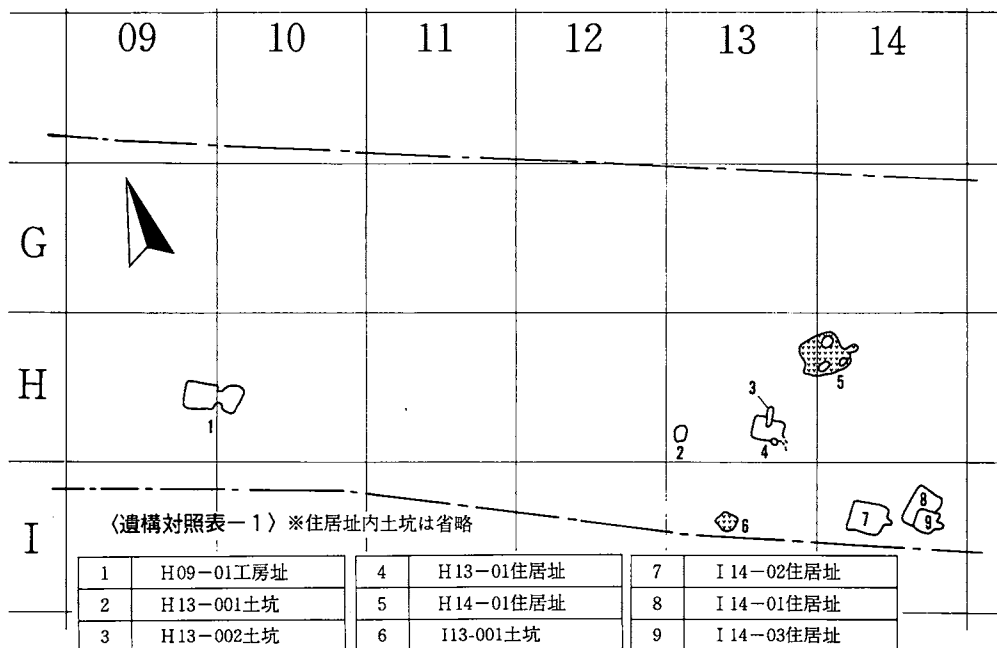
成形段階における輪積痕あるいは巻き上げ痕については、器内外面および断面図で明瞭に観察できる部分について図化している。土師器の拓影は、底面の木葉痕・回転糸切り痕の一部を採拓し、縄文土器の多くは拓影で図示している。

実測した土器は、実形品、接合復原できたもので全周の4分の1以上遺存し反転実測できたものである。また、底部周辺や口縁部破片でもその出土状態から当該遺構と直接関係するものについては4分の1未満のものでも反転実測している。調整痕の図化範囲は、内外面とも正面図の4分の1程度とし、器内外面に黒化処理を施したものについては4分の1程度の範囲をスクリーン・トーンで表現した。なお、須恵器については断面図を塗りつぶしている。

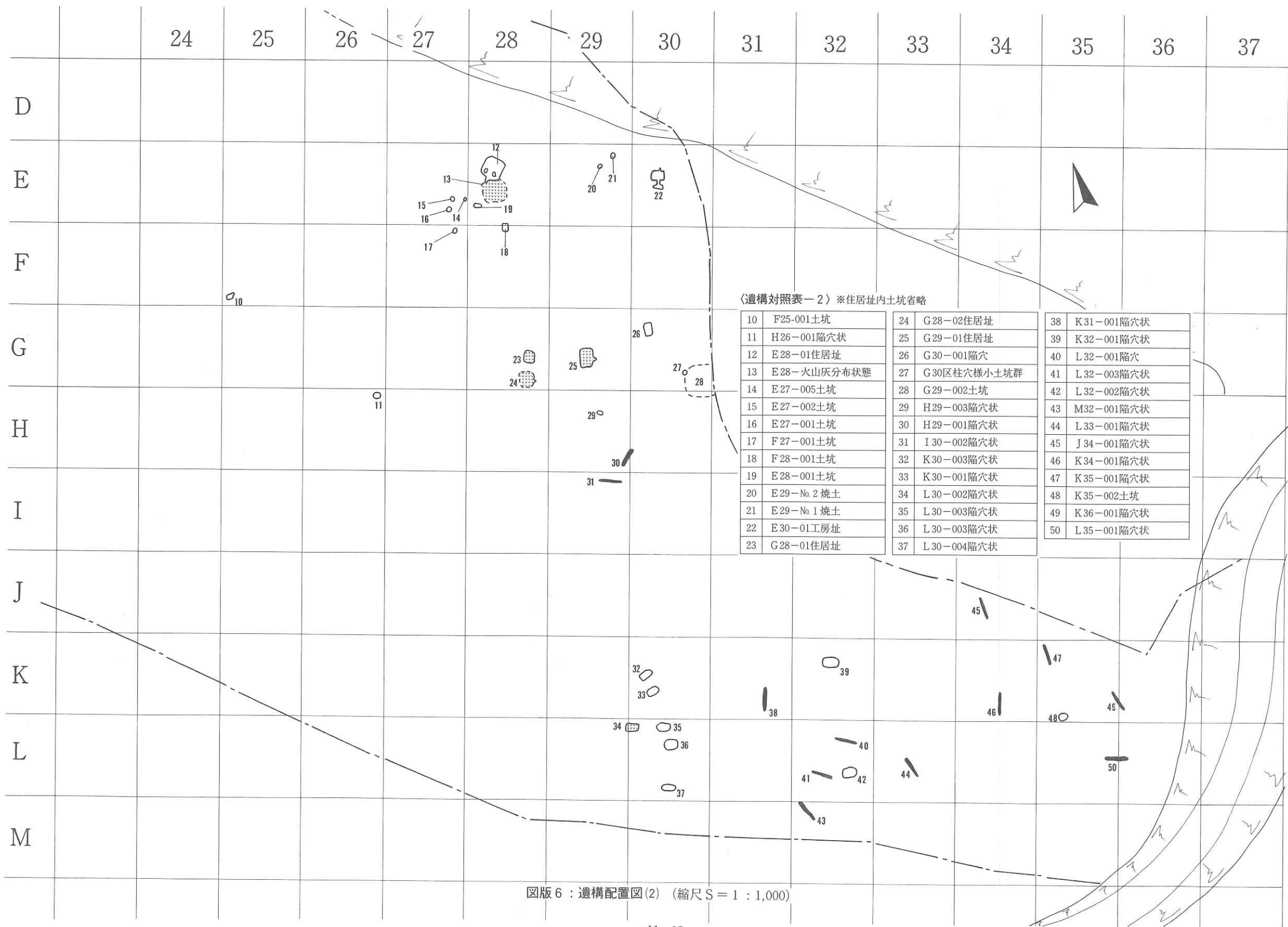
② 石器・石製品に見られる加工調整痕・使用痕（作用痕）については種類が少ないことから文章説明だけとする。くぼみ石の敲打痕集中部やくぼみ部や磨製石斧の粗い研磨面は、ドットで表現し、剝片石器などの光沢部をスクリーン・トーンで、そして図示困難な使用痕跡の範囲を―――で示している。砥石については線條痕・擦痕の方向を線で示している。



図版4：遺構・遺物実測図面例



図版5：遺構配置図(1) (縮尺 S = 1 : 1,000)



〈遺構対照表一2〉※住居址内土坑省略

10	F25-001土坑	24	G28-02住居址	38	K31-001陥穴状
11	H26-001陥穴状	25	G29-01住居址	39	K32-001陥穴状
12	E28-01住居址	26	G30-001陥穴	40	L32-001陥穴
13	E28-火山灰分布状態	27	G30区柱穴様小土坑群	41	L32-003陥穴状
14	E27-005土坑	28	G29-002土坑	42	L32-002陥穴状
15	E27-002土坑	29	H29-003陥穴状	43	M32-001陥穴状
16	E27-001土坑	30	H29-001陥穴状	44	L33-001陥穴状
17	F27-001土坑	31	I30-002陥穴状	45	J34-001陥穴状
18	F28-001土坑	32	K30-003陥穴状	46	K34-001陥穴状
19	E28-001土坑	33	K30-001陥穴状	47	K35-001陥穴状
20	E29-No.2焼土	34	L30-002陥穴状	48	K35-002土坑
21	E29-No.1焼土	35	L30-003陥穴状	49	K36-001陥穴状
22	E30-01工房址	36	L30-003陥穴状	50	L35-001陥穴状
23	G28-01住居址	37	L30-004陥穴状		

図版6：遺構配置図(2) (縮尺S=1:1,000)

## IV. 遺構と遺物について

本章では、各種遺構と遺構内出土の遺物について説明を行う。項目は、大きく“1. 竪穴住居址”“2. 焼土遺構と土坑”“3. 陥し穴状遺構”“4. 近代の工房址”とし、明治時代中葉以降から今日に至る地籍界溝、畑跡、集石、そして倒木痕については“1から4”の各遺構に関連するもの以外、特に説明は行わない。また、住居址内で確認した土坑・焼土については当該遺構の中で説明を行う。遺構外出土の遺物については、章を改め“V. 遺構外出土の遺物”で説明を行う。

本遺跡の調査で確認・調査した遺構は、平安時代の竪穴住居址9棟、住居址に伴う焼土4基、同土坑22基、平安時代と考えられる炉跡と柱穴様小土坑群1カ所、住居址外の焼土を伴う土坑14基、陥し穴状遺構および陥し穴状遺構に類似する土坑22基、近代の工房址2棟である。

### 1. 竪穴住居址

竪穴住居址9棟の分布は、大調査区のH13・14区、I13・14区の5棟、E28区の1棟、G28・G29の3棟の群に大別できる。しかし、E28の住居址を除いた2群は住居址形態や埋土の種類から必ずしも同時存在とは考えにくい。

#### (1) H13-01住居址 (図版7～9、写真図版7)

本遺跡は、H13-S・Xを中心とした区域に位置しており、住居址の中では最も西側に位置している。確認状況・層位は、抜根作業の後であることから基本土層の第Ⅲ層下部が遺構確認層で、確認の端緒はカマドおよび煙導部周辺の焼土粒・炭化物片と北側の破線部内に見られた炭化物片の分布である。北壁中央付近の下位には、H13-001土坑が存在する。

平面形は、長方形を基本形態としているカマド設置部とカマド脇小土坑が入り出し、各壁は木根等による破壊・攪乱のためやや不整となっている。長軸方向は概ね西北西-東南東の方向にあり、カマドは南東コーナーに設けられ竪穴の長軸方向とカマドの中心線とは斜行する。規模は長軸上端440cm・同下端395cm、直交軸上端300cm・同下端250cmで、壁高は部分による差が見られ22～16cmである。壁の外傾度は、北～西～南壁が50～60度で東壁が20～30度である。

埋土は、大別4層に区分したが各層は流入堆積方向の差異やその混在ブロック等の差異から更に細分している。1層は砂質の黒褐色土(10YR3/2)を中心とする色調を呈するが、同一の1a層でも東側と北側とでは漸変し10YR3/1に近い色調となる。また1b層は草木の細根が多く明るい色調を呈する。全体的に締りが弱く、粘性は認められない。2層は、灰黄褐色～にぶい黄褐色(10YR5/2～5/3)の砂質土小ブロックを不規則に含んだ砂質黒褐色土(10YR2/2～2/3)であり、更に灰白色火山灰の小ブロックが散在する。3層は炭化材小片～極小片を10%前後

含む細砂質～シルト質の黒色土 (10YR1.7/1～2/1) で、炭化材小片の多い 3 b 層は 10YR2/1 を呈し層として認識できるが 3 a 層は 2 層と 3 b 層との間に層厚 2～4 mm のシルト質黒色土 (10YR1.7/1) として介在する。a・b 層とも粘性はなく良好である。4 層は壁際および壁近くの床に堆積する層であるが東西南北およびカマド周辺と各々の地点で差異が認められる細分層で、何れも数種の小中ブロック土、炭化材小片、あるいは投げこみ礫などで構成されている。4 a は黒色土 (10YR1.7/1) ににぶい黄褐色～黄褐色のシルトブロックが 10% 前後混在。4 b は、10YR2/3・3/1 の黒褐色土やにぶい黄色土が小中ブロックで不規則に混在構成する層。4 c は、カマド周辺の壁際に堆積する層で細砂質暗褐色土 (10YR3/3～3/4) に炭化材小片とにぶい黄褐色砂ブロックが少量混在する。4 層は全体的に粘性がなく締りは普通かやや良である。その他、2 層に見られた灰白色火山灰は木根痕や小形動物等の活動痕を通して床面にまで分布している。遺物のほとんどは 2 層下部から 4 層中にあり、カマド周辺では 4 層土に被われて床に接するものが多い。

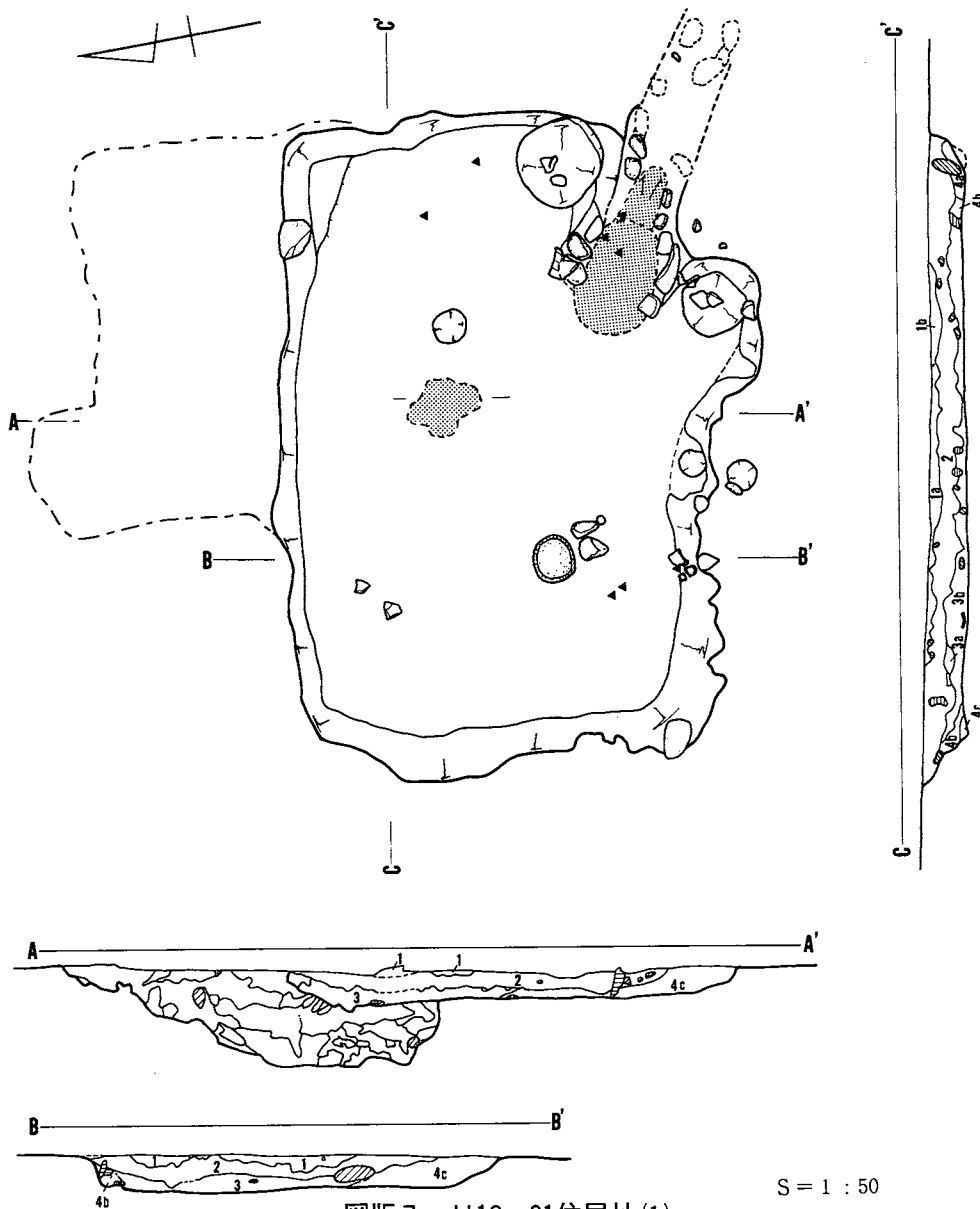
床は、基本土層の IV 層中に形成されており、全体的にゆるやかな起伏をもって北側に若干傾斜している。カマドの西側にあたる南壁よりでは礫層が露出し高く、北側では礫の露出が少なく砂質のにぶい黄褐色土が床土となっている。床面には炭化小片・焼土粒、および 4 層土が不規則に分布しているが特に貼床を行った形跡は認められず、またカマドの前庭部と旧期遺構の上部を除いて特別に踏み締められた形跡も認められない。床面で確認した施設・構造としては、カマドの他に地床炉跡と考えられる不整形な焼土 1 基、カマドの両脇に接して各々 1 基の小型土坑、本位住居址に伴うか否かは不明の小口径で浅いくぼみ 2 カ所がある。なお、北側の中央付近から竪穴外にかけて本住居址よりも古い時期の土坑 (H13-002 土坑) を確認している。

カマドは南東のコーナ部に設けられており、カマドから煙導へ通じる中心線は竪穴部の長軸方向と約 20 度の角度をなしている。カマド本体は床面より一段高く掘り残した部分に袖の芯材を埋置しており、袖の芯材は良く残っているが袖・天井部を被覆する土材や天井石は認められない。袖部の最大幅は 80cm、燃烧部と考えられる強変焼土の中心と袖部の中心とはほぼ同じ位置にあるが焼土は袖部よりも手前から形成されている。燃烧部は礫層を浅く掘りくぼめており、その範囲は幅 48cm・奥行 80cm ほどの楕円形を呈し、焼土化層の厚さは 10～4 cm である。煙導部の構築方法は掘り込み式と考えられ、その側壁部には偏平な亜角礫・円礫を埋置あるいは並列させているが全ての礫が残ってはおらず煙り出しよりでは礫の抜きとり痕を確認しているが、天井を構成・構築する材も不明である。煙導部底面は燃烧部の奥から 12 度前後の傾斜で立ち上がった後概ね水平となるが煙り出し部は不明である。煙導部の規模は、最大幅が概ね 50cm、内側の煙導幅 16～18cm で長さは 148cm までを確認しているが前述のように煙り出し部までは不明である。

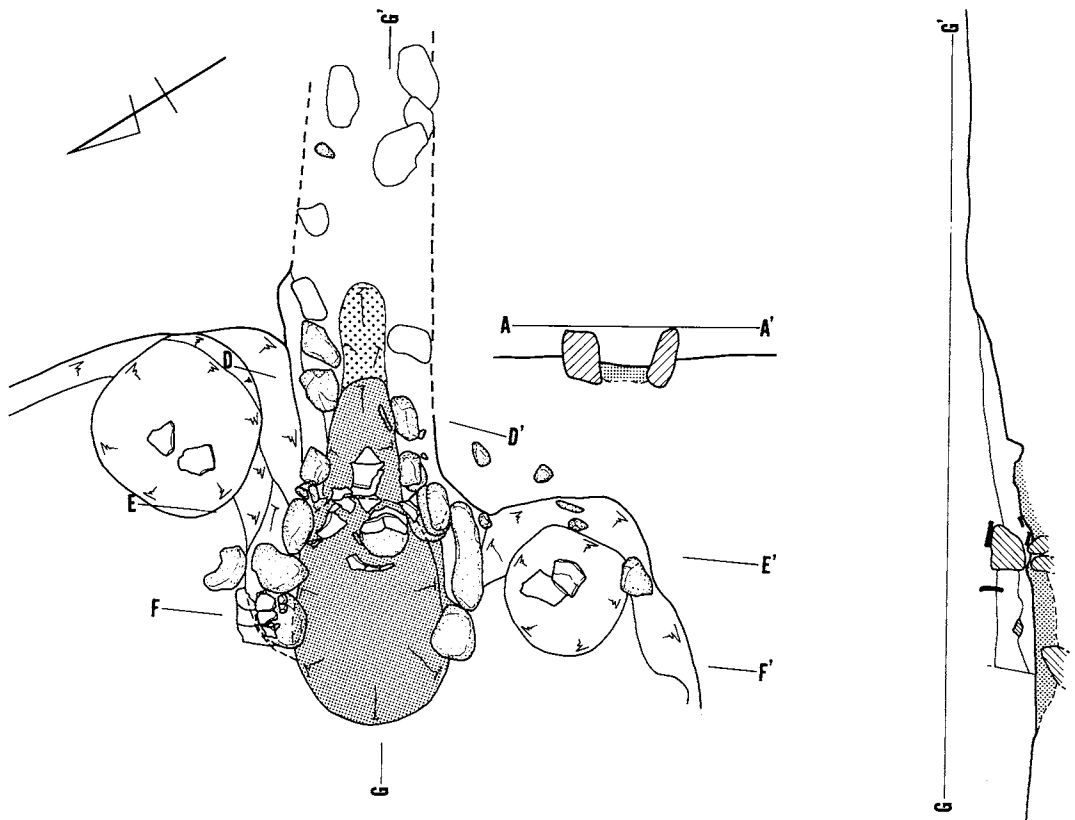
焼土 床面や壁が弱く焼土化した部分が数カ所認められ焼失住居、あるいは焼却住居と考えられるが、床の中央よりやや北に形成された焼土は住居の床土が強く焼土化したものである。焼土化範囲は40×50cmほどの不整形形で、層厚最大6cm（床土4cm、床上2cm）で特に掘りくぼめたり石囲等の形跡は認められない。

小型土坑は、何れも貯蔵穴と考えられる浅いもので埋土等は炭化材小片・焼土小ブロック・土師器片が底面にあり、その上を4c層が覆っている。規模は、北東側の土坑が69×60cmの口径で深さ14cm、南西側の土坑は48×48cmの口径で深さ10cmである。

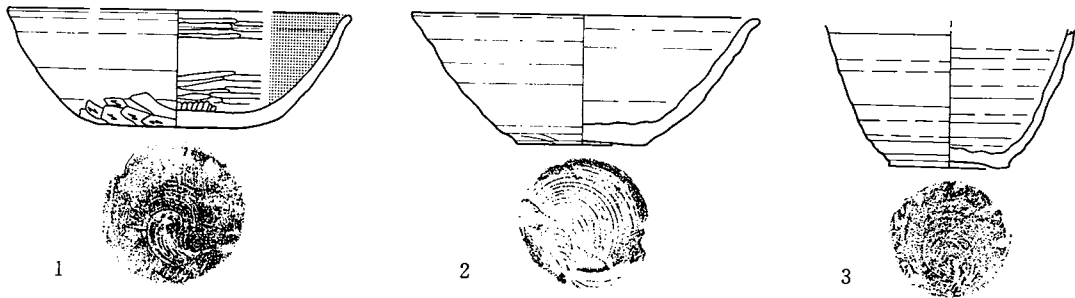
その他、周溝・柱穴は認められず、出入口を示す構造も見られない。



図版7 : H13-01住居址(1)



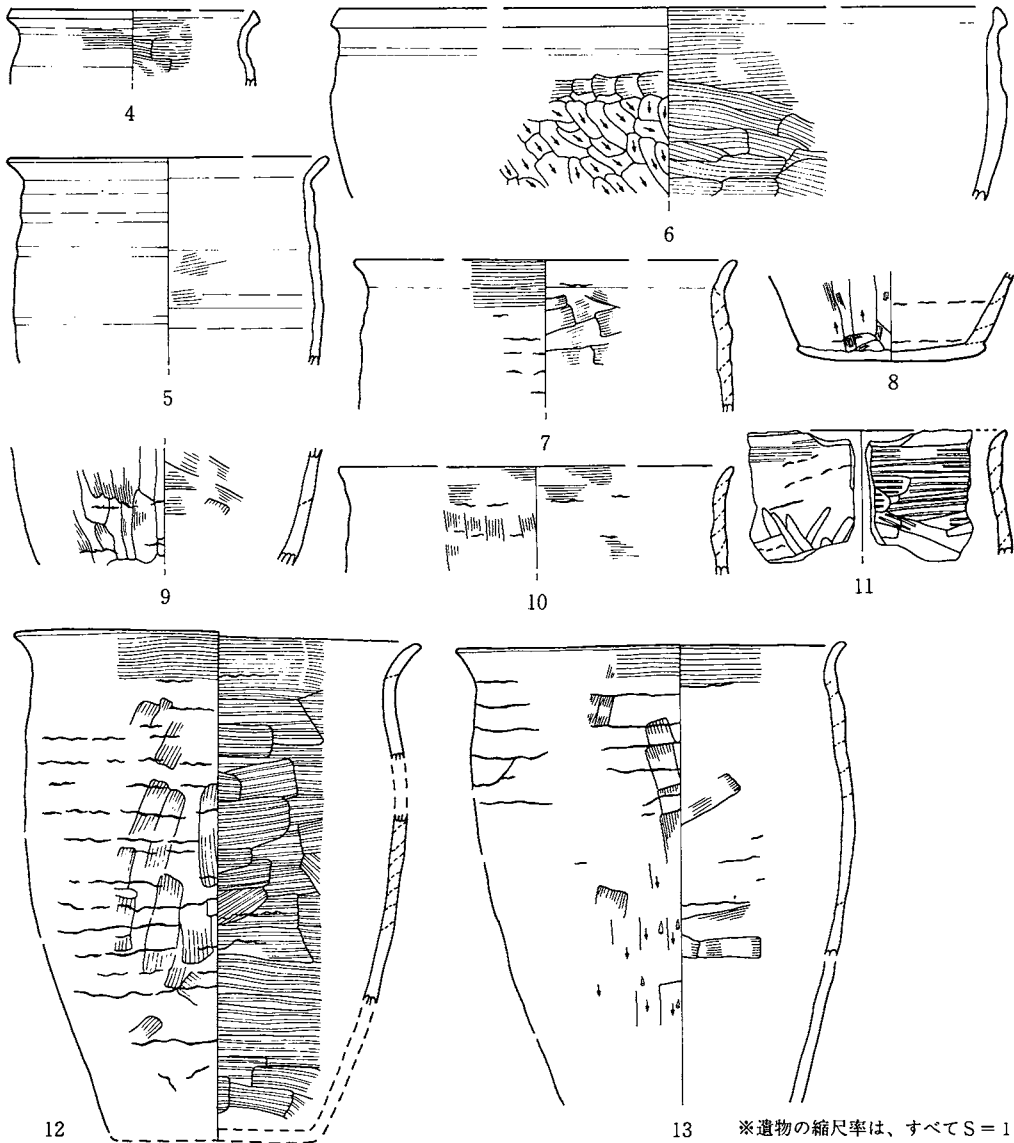
※遺構実測図は S = 1 : 20  
 遺物実測図は S = 1 : 3



図版 8 : H13-01住居址(2)と出土遺物(1)



出土遺物としては、土師器の坏・甕・鉄塊が出土しているが須恵器は見られない。出土状態は、埋土の2層下部から床面に包含あるいは分布するもの、カマド・土坑内に存在するものなど様々であるが完形品、あるいは略完形に復原できたものはない。坏は、ロクロ成形調整の後、底部周辺を手持ちヘラケズリ、内面研磨の後黒色処理を施こしたものとロクロ成形調整で回転糸切り無調整のものがある。甕は、ロクロ成形調整の小形のもの、ロクロ成形調整の後外面をヘラケズリ・ヘラナデで再調整、内面をヘラナデ調整したもの、そして輪積成形の後ヘラケズリ・ヘラナデ・ハケメ・ナデ等の調整を施こしたものの3種類が存在する。



※遺物の縮尺率は、すべてS = 1 : 4

図版9：H13-01住居址出土遺物(2)

<H13-01住居址出土遺物観察表>

通算 番号	図版 番号	写真図 版番号	器種	出土地点	外 面 調 整				内 面 調 整			法 量 mm			備 考
					口縁部	体部上半	体部下半	底 部	口縁部	体部上半	体部下半	口 径	底 径	器 高	
1	8-1	7-4	坏	床	R	R	K・N	I	M		M	(140)	58	44~45	内面黒色処理
2	8-2	7-5	坏	床	R	R	R	I	R		R	142	50~52	53~54	
3	8-3	7-7	甕	西中 上からⅢ層目	—	—	R	I	—	—	R	—	75	62	
4	9-4	7-6	甕	カマド内	Y	—	—	—	Y	N	—	125~130	—	( 37)	
5	9-5	7-10	甕	床	R	R	—	—	R	R・N	—	(170)	—	(110)	
6	9-6	7-11	(鉢)	床	R	K・U	—	—	Y	N	—	360	—	(102)	
7	9-7	—	甕	カマド内	Y	S	—	—	S	H	—	(200~ 205)	—	( 78)	
8	9-8	7-12	甕	床	—	—	K・MN	—	—	—	N	—	( 92)	( 46)	内底に爪形刺突
9	9-9	—	甕	床	—	S・M・N	—	—	—	N	—	—	—	( 60)	
10	9-10	7-13	甕	床	Y	S・H	—	—	Y	N	—	( 21)	—	( 55)	
11	9-11	—	甕	床	Y	S・M	—	—	Y	H	—	—	—	( 66)	
12	9-12	7-9	甕	床	Y	S・N	—	—	Y	H・S	—	217	—	266	
13	9-13	7-8	甕	床	Y	S・N	K	—	Y	N	N	207	—	246	

(2) H14-01住居址

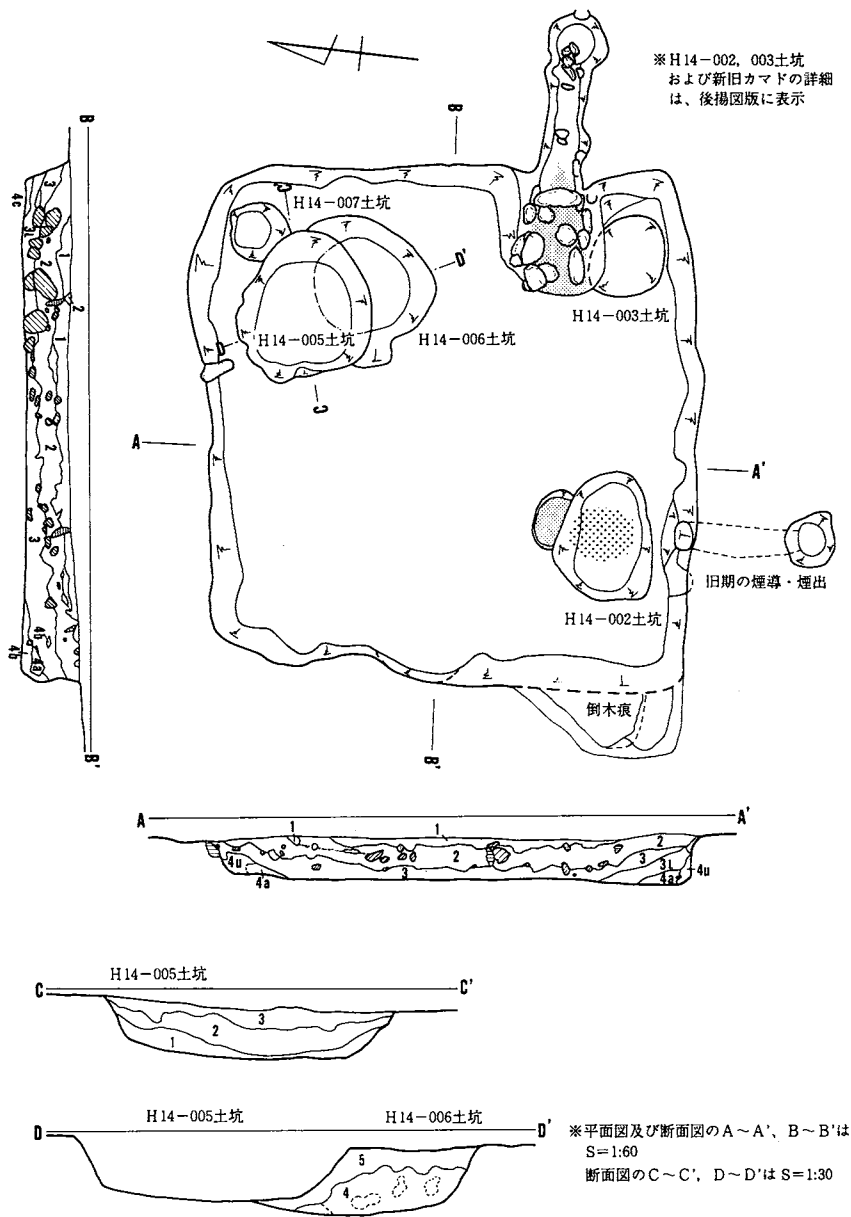
(図版10~15、写真図版8~13)

本遺構は、H13-J区からH14-F区を中心とした区域に位置しており、カマドの造り替えが明瞭な住居址である。確認に至る状況・層位は、H13-01住居址と同様であるが、確認時の埋土上部には多量の礫が投げこまれており明確な平面形を把握することができなかった。そのためⅢ層下部の黒色土および黒色土中の礫を除去したⅣ層上面で平面形を把握した。

平面形は、一部が倒木痕跡によって破壊されているもののやや不整形な正方形である。カマドおよびカマドの痕跡は、東壁の南よりと南壁の西よりとに認められ新期の主軸方向は東西に旧期の主軸方向は南北にある。規模は、東西上端が405~425cm・同下端が375~385cm、南北上端が390~410cm・同下端が350~375cmで、壁高は40~50cmの範囲にあるが床の中央付近は壁際より10cm前後高くなっている。壁の外傾度は、東・北が20~30度で南および西は倒木痕跡部を除けば垂直に近い状態である。

埋土は、大別4層に区分したが各層は流入堆積方向および人為と判断できる大礫の投入などにより、同一レベルの堆積土が分断された状態となっており堆積順を細分することは困難である。しかし埋積初期に形成された4層は、各堆積位置によって差異が明らかことから細分している。1層は、小礫~粗砂を不規則に含んだ砂質黒色土(10YR1.7/1)を主体とするが下位の2層と接する付近では中砂質となり、色調も黒色~黒褐色(10YR2/2~2/3)へ変化する。締りは普通かやや軟かく、粘性は全く認められない。2層は中砂質~細砂質の灰黄褐色~にぶい黄褐色土(10YR4/2~4/3)を主体とし、所々に細砂質暗褐色土(10YR3/3~3/4)が斑文状あるいは薄いレンズ状に分布する。全体的にこの細砂質暗褐色土は南側に偏在しており、更に本層の北側から西側には灰白色火山灰が大小のブロックで混在する。本層の下部から下位の3層にかけ大礫~巨礫が多量に存在する。包含遺物は、ロクロ土師器の坏・甕の破片で坏は内面黒

色処理、甕はロクロ成形調整の小形である。締りは地点によって差が大であるが全体的に締っており粘性はない。3層は、中砂～粗砂質の黒褐色土(10YR2/2～2/3)を主体とするが、北側から東側にかけては10YR3/2へと変化し、層全体としては斑文状を呈する。なお南側では、砂質黄褐色土の小ブロックが不規則に混在する。粘性はなく、締りは良好である。遺物は、カマド周辺の床直上で土師器片が見られる。4層は壁の崩壊土と黒色～黒褐色土(10YR2/1～2/2)との不規則な混合土層で、全体的に粘性なく締りもない。埋土全体に言えることであるが砂質で炭化物小片が非常に少ない。締りは自然層である基本土層の何れよりも締っている。



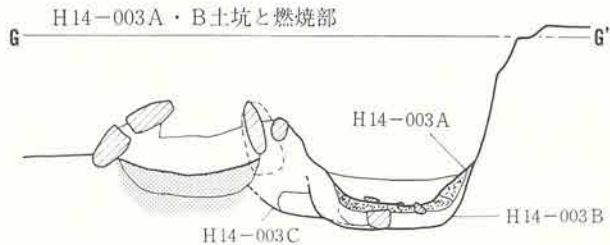
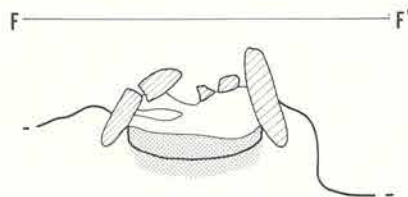
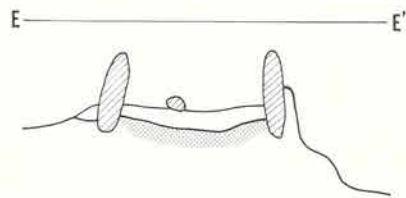
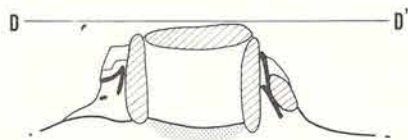
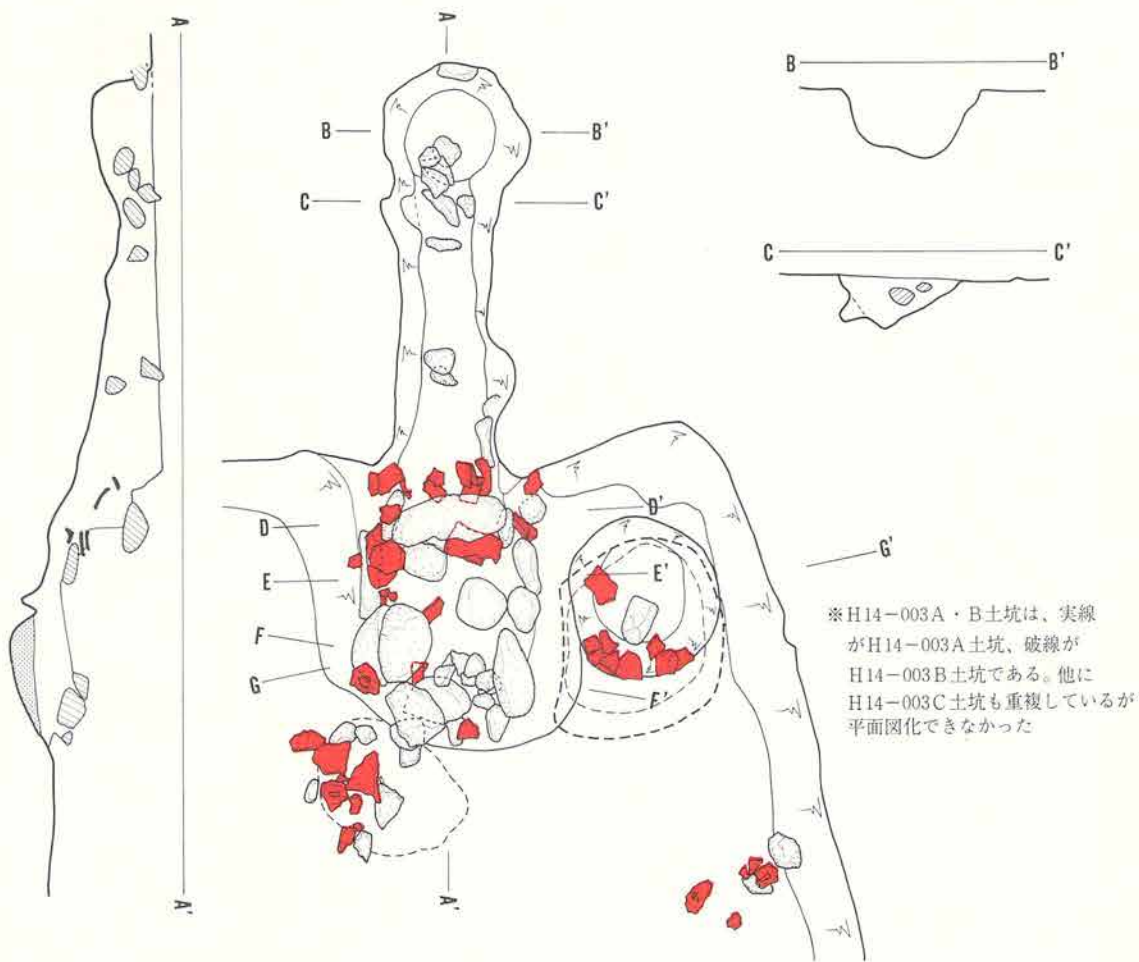
図版10：H14-01住居址(1)

床は、基本土層のIV層中に形成されており、全体的に中央が高く周辺の壁よりが低くなっている。床土は全体的ににぶい黄褐色を呈する中・粗砂質土で床面には炭化材小片や焼土粒がわずかに見られるが旧期土坑上部や旧期カマド部を除いては貼り床や踏み締め形跡は認められない。また掘り方痕跡も見られない。床面他で確認した施設・構造としては、2時期のカマドと大小7基の土坑を確認した。柱穴・周溝・炉跡と考えられる焼土は認められない。

カマドおよびカマドの痕跡は、前述したように東壁に1基、南壁に1基の計2基がみられ、各々の遺存状態から東壁のカマドが新期のものと考えられる。各々の中心線は、竪穴の中心線と平行、あるいは直交する方向にある。

東カマド（図版11、写真図版8～10）……カマド本体は、焚き口の天井石の移動と被覆土の流失が認められるものの奥の天井石と袖芯材の礫は比較的良好な状態で残っている。両袖の最大幅は約82cm、左袖の幅20cm、同右22cm、奥行87cmで、袖部には左右とも比較的偏平で不揃いな円礫4個ずつを直列に配置している。焚き口の天井石は破碎状態で焚き口等に落下しているが奥側の天井石はほぼ原位置にあり、奥の天井石の後方や芯材礫の間隙には土師器カメの破片が使用されている。芯材や天井等を被覆した土は、粗砂・小礫を含んだ黄褐色砂質土で粘性・固結力が弱く、燃焼部・前庭・南脇の土坑などに崩壊流出している。燃焼部は、袖部中心よりも手前側を幅52cm・奥行き45cmほどに掘りくぼめており、そのくぼみには土師器片・炭化材片を混じえた焼土が8～10cm堆積し、底面より下位は6～7cmほどが焼土化している。燃焼部および燃焼部に続く強変焼土の範囲は、最大幅52cm・奥行き105cmで煙導部にまで広がっているが、煙導部の焼土の厚さは3～1cmである。煙導は掘りにみ式で燃焼部奥から煙り出し口付近まで緩やかに立ちあがっており、煙り出し口の下端は小土坑状となっている。なお、煙導の底面は礫層中にあるため起伏が見られる。煙導部の規模は、上端幅30～37cm・下端幅24～27cm、長さ144cmである。煙り出し口の規模は、上端幅が37cm・下端の径が30cm、深さ22cmを確認している。煙導部の埋土中には、煙り出し口付近を除いて天井材として用いたと推定できる土器片や礫が見られず、天井部の構造材は不明である。

南カマド（図版12、写真図版11）……南カマドの遺存部は、燃焼部底面と考えられる焼土層を伴う浅いくぼみと煙り出し口を含む煙導部だけである。燃焼部は土坑によって破壊されていることから全体の形状・規模は不明である。燃焼部は浅く掘りこまれた上に厚さ2cm前後の粘土質土が貼りつけられ、この貼りつけ土も焼土化している。確認規模は、最大幅50cm・奥行28cm・深さ5cmの楕円を呈している。この掘りこみ北端から煙導口までの長さは115cmほどである。煙導は削貫き式で床面からわずかに高い位置に開口しており、その開口部から15～10度の傾斜で下り煙り出し下端の小穴に達する。煙導の断面形は、25×25cmから24×24cmの隅円方形～楕円形を呈し、壁際の開口部から煙り出し口南端までの長さは128cmである。煙導が形成された層

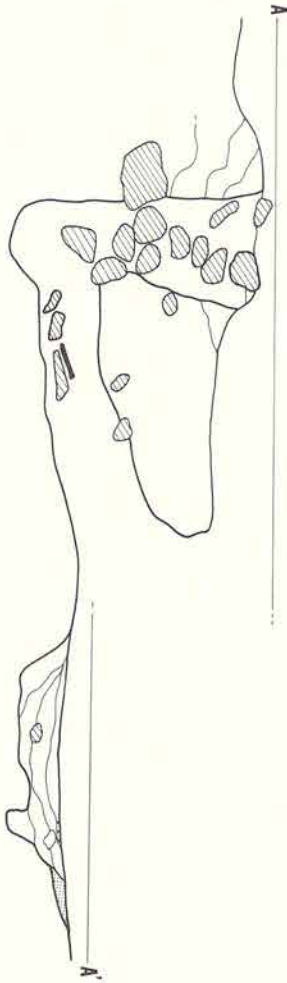


※縮尺率は全図S = 1 : 2.5

図版11 : H14-01住居址(2)

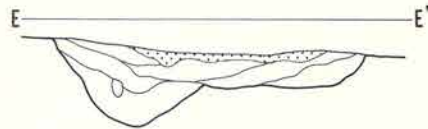
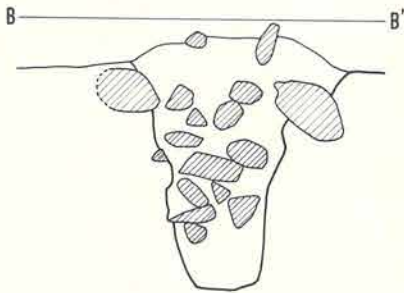
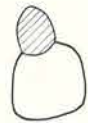
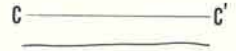
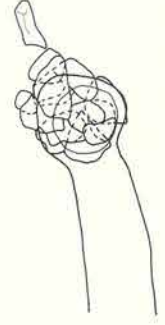
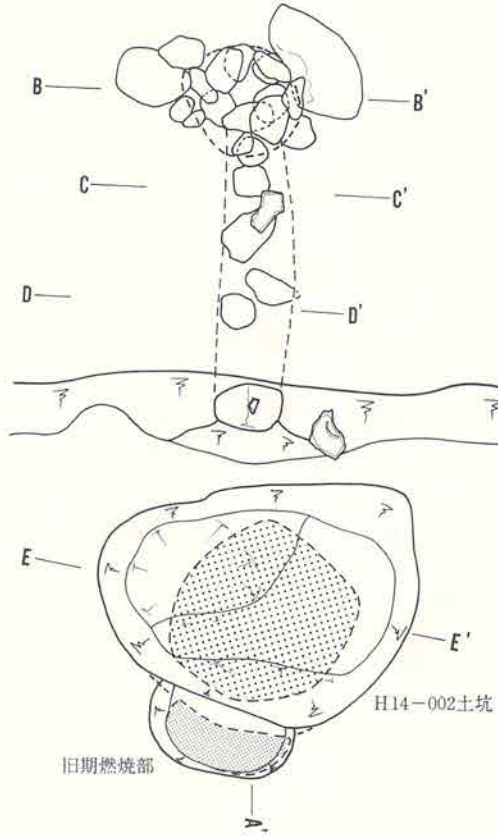
〈煙導・煙出部(1)〉

※煙導・煙出部(1)の図は、確認時の礫を除いた礫・土師器片を図化



〈煙導・煙出部(2)〉

※煙導・煙出部(2)の図は太実線等の下部を図化・線実線・破線は、煙出し部確認時の図化線である。



※縮尺率は全図S = 1 : 25

※旧期カマド(南カマド)実測図

図版12 : H14-01住居址(3)

は、巨礫～大礫の混じる小礫質砂層で掘削面には大礫の突出や抜き取り痕の凹部が見られる。煙り出し部の形成は、砂層中の巨礫～大礫を残しつつ口径38×40cm・深さ82cmの坑を穿った後、土坑壁に沿って礫郭状の積み石を行っている。しかし、この積石の多くは本来の位置からずれている。

土坑……床面で確認した土坑は、H14-002・003A・005・006・007の5土坑であるが、カマドや土坑の精査過程でC14-003B・003Cの2土坑が重複していることが判明した。しかしH14-003C土坑は不手際から平面図を作成していない。

H14-002土坑は、平面形・断面形および底面が不整な土坑で、埋土は最上位を除けば黒色～黒褐色土の大小ブロックが混在した砂質褐色土である。最上位の層には焼土小ブロック・炭化物が混在した黒褐色～暗褐色土である。規模は、西北西—東南東方向106cm、直交方向の最大94cm、深さは最深部が28cm、他は10cm前後である。出土遺物はない。

H14-003A土坑は、東カマド右脇に設けられ略円形の土坑で規模は上端径54×50cm・深さ17cmである。埋土は、カマド袖土等の崩土である粗砂質黄褐色土であるが、土坑の壁・底面には粘性の強いにぶい黄橙色砂質土を貼りつけて土坑を形成している。埋土中には図版13-15、14-28の一部などカマド形成材として用いられていた土師器カメと接合するものなどが含まれている。

H14-003B土坑は、003Aの下位に位置する不整楕円形の土坑で規模66×53cm・深さ25cmである。本土坑の形成は、003Aはもとよりカマド右袖を形成する前で、その後カマドと同じ土を用いて埋めもどしながら袖をつくっている。埋めもどし土には図版13-2～5（写真図版10-12、11-13・14・15）の土師器坏が含まれている。

H14-003C土坑は、上記の2土坑よりも古い段階のもので推定口径70～60cm・深さ20cmの円形土坑と推定されるが003B土坑に破壊されているため本来の形状・規模は不明である。出土遺物は特にないが、底面に炭化材小片が散在している。

H14-005土坑は、北東コーナーよりに設けられた不整楕円形の土坑で規模は上端径117×110cm・下端径83×75cm・深さ26cmである。埋土は、砂質の暗褐色土や黒褐色土などが不規則に混合したもので各層の上下には砂粒の分級が見られる。出土遺物はない。

H14-006土坑はH14-005土坑と同様に北東コーナーよりに設けられる土坑である。本土坑の北西側に前述したH14-005土坑が重複しているため全体形状・規模は不明である。遺存部からの推定ではほぼ円形の土坑と考えられる。確認規模は、上端最大径125cm・下端径75×75cm・深さ28cmである。埋土は砂～シルト質のにぶい黄橙色土・黄褐色土・暗褐色土の大小ブロックで構成され、その構成比で大別2層に区分した。ブロック土の混合状態から何れも人為層と考えられ、埋土の上部は特に固く締っている。遺物は見られないが、何れの層にも炭化材小粒・

焼土粒が不規則に混在する。

H14-007土坑は、北東コーナーに設けられた小形の円形土坑で、土坑の南西上端にH14-005土坑が重複している。規模は、上端経47×48cm・下端経28×30cm・深さ18cmである。埋土は、黒色土と砂質暗褐色土のブロック混合土である。遺物は見られない。

出土遺物としては、埋土・床・カマド・土坑内から土師器坏・カメ、須恵器の壺、石鍬・大小の剥片が出土しているものの土製品や鉄製品は出土していない。これらの出土層位・地点等は、投げこまれたと考えられる埋土中から石器・剥片が、坏はカマドとH14-003B土坑内から、カメはカマド内および周辺の床、そしてカマド構築材として用いられたものがある。須恵器は南カマドの煙導から出土している。図版13～15（写真図版10～13）に掲げた土師器・須恵器は、床・カマド内・カマド構築材・土坑内から出土したものである。

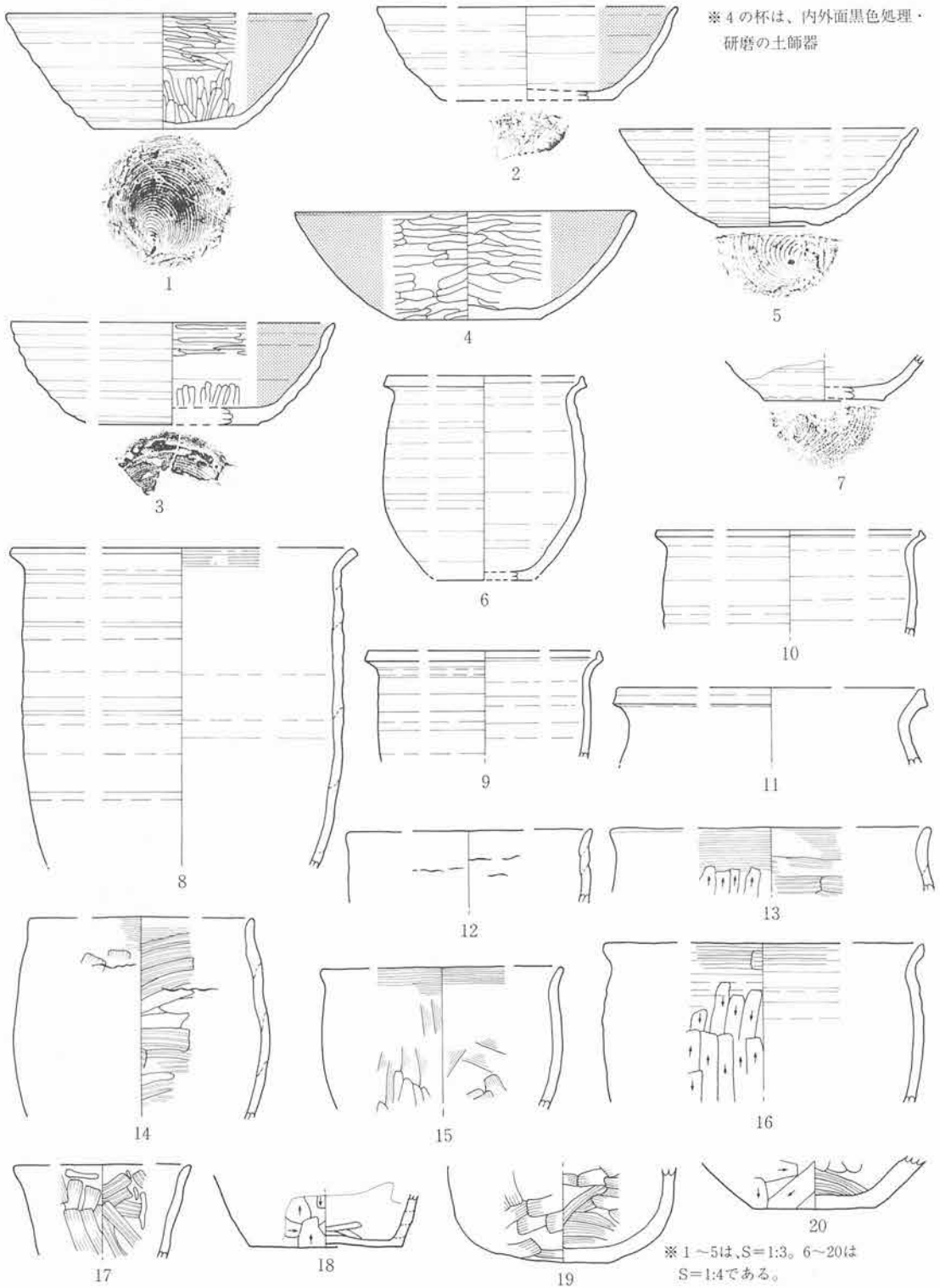
坏は6個体分の破片が出土しており、1個体は略完形に、他の5個体は2分1以下の復原状状態である。また、内外面にミガキ・黒化処理を施こしたものを除けば何れもロクロ成形・回転糸切りの手法が明らかで外面には何らの再調整も施こされていない。これらの坏は、成形・調整・再調整のあり方により、以下の4種に区別できる。

- ①ロクロ成形 → 手持ち内面ミガキ → 内面の黒化処理（図版13-1・3、写真図版10-11、11-14）
- ②ロクロ成形 —————→ 内面の黒化処理（図版13-2、写真図版10-12）
- ③（ロクロ成形）→ 手持ち内外面ミガキ → 内外面黒化処理（図版13-4、写真図版11-15）
- ④ロクロ成形（図版15-5・7、写真図版11-13・16）

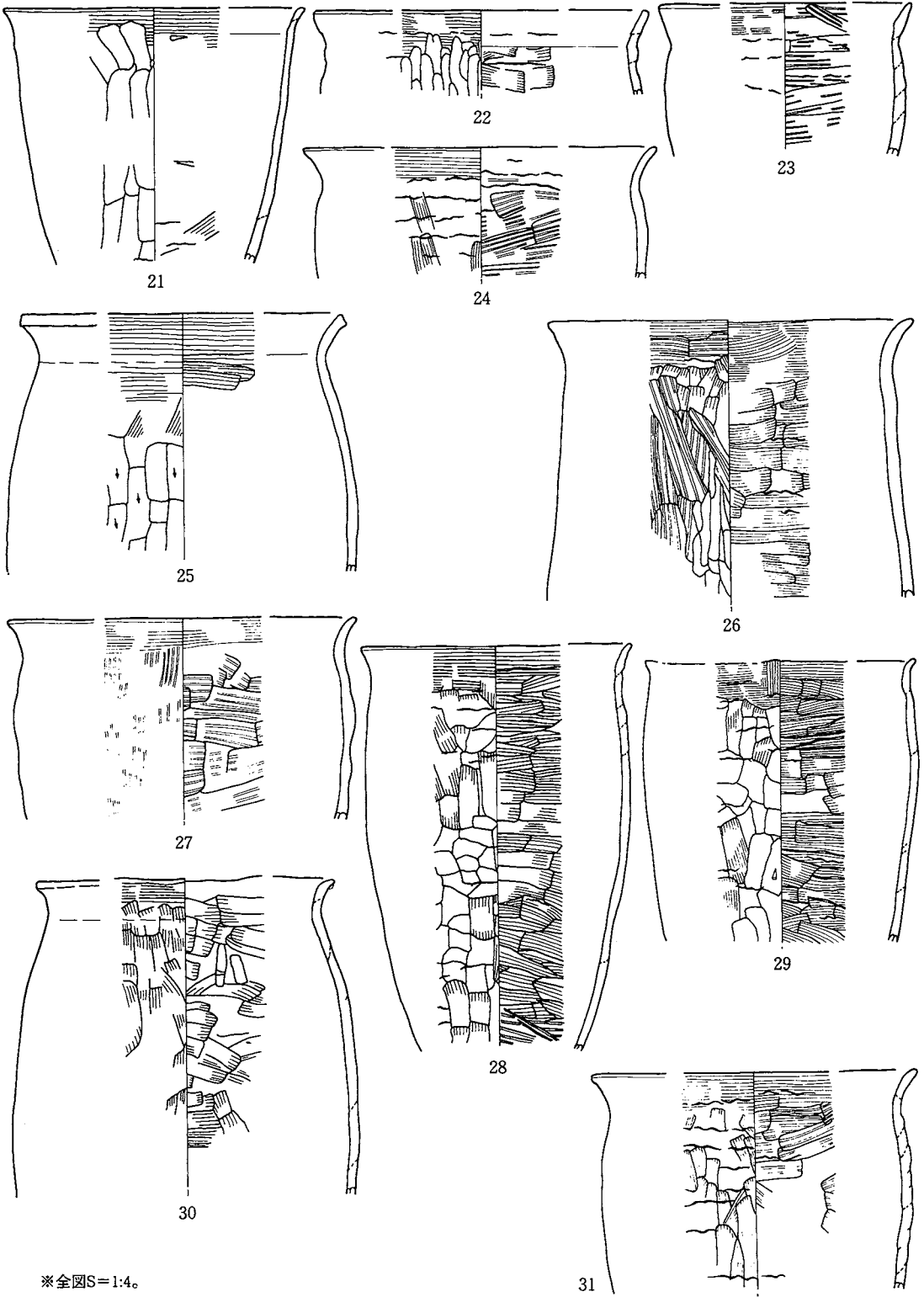
カメは30個体分ほどの破片が出土しているが風化等により調整痕が不明で個体関係識別が不可能なものを除外し24個体分を掲げたが、一部同一個体の図を掲載した（図版13-6・8～20、14-21～31、写真図版11-17～27、12-28～38）。これらのカメは、成形調整のあり方から大別3種に分けられ。

- ①ロクロ成形調整によるもの。②③に比べて小型の器種でロクロ成形調整の他に再調整等の形跡は認められない（図版13-6・9～11、写真図版11-18・21・9・22・23）
- ②器内外面にはロクロ目以外の調整痕は認められないが、破断面に輪積痕が認められることから輪積によって概略形をなした後ロクロによる整形調整を行ったと考えられるもの（図版13-8、写真図版11-17）
- ③ほとんどの個体に輪積痕が認められ、内外面の調整にハケメ・ヘラナデ・ヘラケズリ・横ナデの調整手法が用いられている。この種類のカメは、調整手法の組み合わせや胎土の性状・器形に多様性が認められる（図版13-12～20、14-13～31、写真図版11-20・23～27）。  
須恵器は図版15-32・33（写真図版13-39・40）の2個体分の破片が出土している。器種は明確でないがカメおよび壺と考えられる。図版15-32は、内外面の凹凸が強くヘラケズリ・ハ



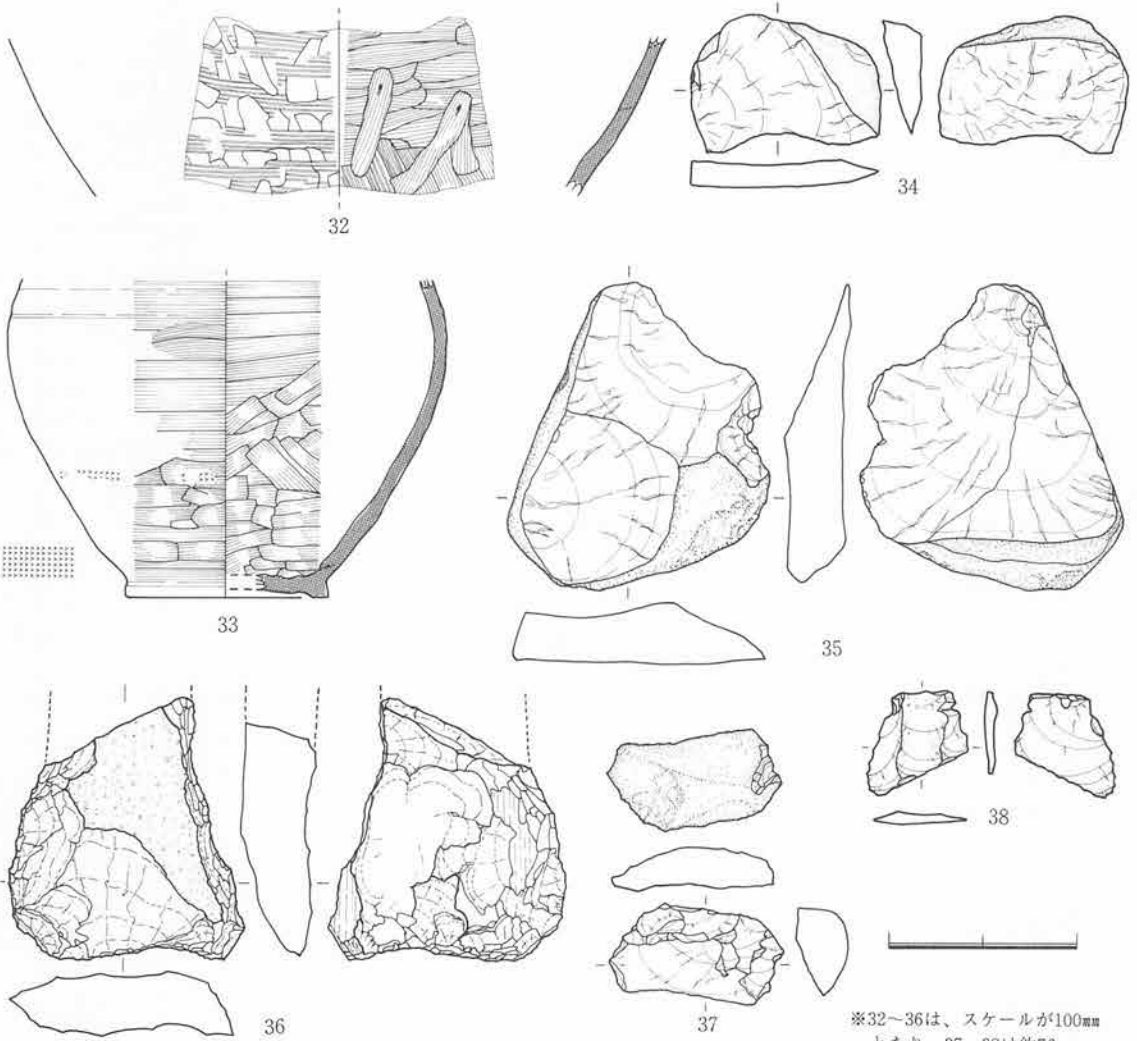


図版13：H14-01住居址出土遺物(1)



※全図S=1:4。

図版14：H14-01住居址出土遺物(2)



図版15：H14-01住居址出土遺物(3)

※32～36は、スケールが100mm  
となり、37～38は約76mm  
となる。

※※32・33は、須恵器壺の破片。

ケメ・ヘラナデの調整が見られる。図版15-33は、内外面下半にヘラナデ調整が用いられ、内外上半には横ナデが用いられている。しかし上半の横ナデには斉一性が認められることからクロ調整によるものと考えられ、外面の数個所に調整痕より古い段階の布目圧痕が認められる。また、底部と体部との境界部には接合痕跡が見られる。

その他の出土遺物としては図版15-34～37(写真図版13-41～47)他の大小の剥片と石鋏がある。石鋏および図版15-37・38、写真図版13-46を除いた大型の剥片は埋土2層の上部から近接して出土していることから、当該遺構の埋没過程中に投棄された可能性が高い。

<H 14-01住居址出土遺物観察表>

通算 番号	図版 番号	写真図 版番号	器種	出土地点	外 面 調 整				内 面 調 整			法 量 mm			備 考
					口縁部	体部上半	体部下半	底 部	口縁部	体部上半	体部下半	口 径	底 径	器 高	
1	13-1	10-11	坏	右袖崩土中	R	R	R	I	R	回転M	M	(158)	(68)	55	内面黒色処理
2	13-2	10-2	坏		R	R	R	I	R	R	R	(149~150)	(80)	44	内面黒色処理
3	13-3	11-14	坏		R	R	R	I	R	横位M	放射状M	(153)	(80)	49	内面黒色処理
4	13-4	11-15	坏	埋土	M	M	M	M	M	M	M	(152)	69	51	内面黒色処理
5	13-5	11-13	坏	右袖崩土中	R	R	R	I	R	R	R	(142)	(50)	46	
6	13-6	11-18	甕		R	R	R	I	R	R	R	(122)	(60)	128	黒斑あり 写真12-37も同一個体
7	13-7	11-16	坏		R	R	R	I	-	-	R	-	(56)	(22)	
8	13-8	11-17	甕		R	R	-	-	N	S・R	-	(215~220)	-	(20)	輪積痕
9	13-9	11-21	甕	3層	R	R	-	-	R	R	-	(148~150)	-	(66)	
10	13-10	11-19	甕	3層	R	R	-	-	R	R	-	(166)	-	(65)	
11	13-11	11-22	甕	3層	R	-	-	-	-	-	-	(154)	-	(48)	
12	13-12	11-23	甕		-	S	-	-	-	S	-	(140~150)	-	(45)	輪積痕
13	13-13	-	甕		Y	K	-	-	Y	H	-	-	-	(44)	
14	13-14	11-20	甕		Y	S・H	-	-	H	S・H	-	(138)	-	(125)	輪
15	13-15	11-26	甕		Y	N	-	-	Y	N	-	(150)	-	(90)	
16	13-16	11-24	甕		Y	R・K	-	-	Y	R	-	(195~202)	-	(10)	
17	13-17	11-25	甕			H	-	-	-	H	-	(110~112)	-	(60)	
18	13-18	-	甕			-	K	中央N 砂目底	-	-	N	-	96	(41)	
19	13-19	11-27	甕			-	N	-	-	-	N	-	-	(47)	
20	13-20	-	甕			-	K	-	-	-	N	(140)	78	(33)	
21	13-21	12-28	甕	右袖崩土中	Y	M	S	-	Y	-	S	(190)	-	(161)	
22	13-22	12-29	甕		Y	S・K	-	-	Y	S・N	-	(212)	-	(55)	
23	13-23	12-30	甕		Y	S	-	-	H	S・H	-	-	-	(98)	
24	13-24	12-31	甕		Y	S・N	-	-	-	S・H	-	(224)	-	(82)	
25	13-25	12-32	甕	右袖崩土中	Y	K	-	-	Y	N	-	(196)	-	(159)	内外面、煤付着
26	14-26	12-33	甕		Y	M・H	-	-	N	S・N	-	(232)	-	(175)	煤付着
27	14-27	12-34	甕		Y	H	-	-	Y	H	-	(220)	-	(125)	
28	14-28	12-35 a	甕		Y	S・N	-	-	Y	S・N	-	(156)	-	(257)	
29	14-28	12-35 b	甕		Y	S・N	-	-	Y	S・N	-	(172)	-	(185)	黒斑あり
30	14-30	12-36	甕		Y	N・M	-	-	-	S・M	-	(172)	-	(200)	煤付着、黒斑あり
31	14-31	12-38	甕		Y	S・N	-	-	Y	S・H	-	(208)	-	(139)	
32	15-32	13-39	壺	1層	-	H・M	-	-	-	H	-	(33~35) (23~25)	-	(97)	須恵器
33	15-33	13-40	壺	南カマド	-	R・Y	R・N	-	-	R・Y	N	-	(107)	(170)	布目痕、須恵器

通算 番号	図版	写真図版	器 種	出 土 区 層 位 等	法 量(mm, g)		岩 質	生 年 代・産 土 等	その他
					長さ×幅×厚さ	重量			
34	15-34	13-41	大形剝片	2層北ベルト中	73 × 100 × 20	14.5	粘板岩	古生界 夏油川一仙人	
35	15-35	13-42	大形剝片	QW-2 u	163 × 139 × 33	700	粘板岩	古生界 夏油川一仙人	
36	15-36	13-43	石剣	QN-2 u	(139) × 124 × 35	700	流紋岩質凝灰岩	新第三系中新統 奥羽山地	
37	15-37	13-44	剝片	3層カマド前庭	47 × 27 × 14	14.5	凝灰岩質硬質泥岩	新第三系中新統 奥羽山地	
38	15-38	13-45	剝片	QS-3 L	(28) × 26 × 3	2.1	凝灰岩質硬質泥岩	新第三系中新統 奥羽山地	
	-	13-46	大形剝片	QS-2 u	113 × 79 × 46	720	珪質泥岩	新第三系中新統 奥羽山地 (川尻以西)	
	-	13-47	大形剝片	2 u	118 × 98 × 36	360	凝灰岩質硬質泥岩	新第三系中新統 奥羽山地	

(3) I 14-02住居址

(図版16、写真図版14)

本遺構は、大部分がI 14-G区に位置しカマド周辺はI 14-H区に位置している。確認状況・層位は、抜根作業中のIII層下部で並列する偏平礫と焼土ブロック・炭化小片の混在した黒色～黒褐色土の分布を確認し、平面形を明確にとらえたのは礫層上面である。

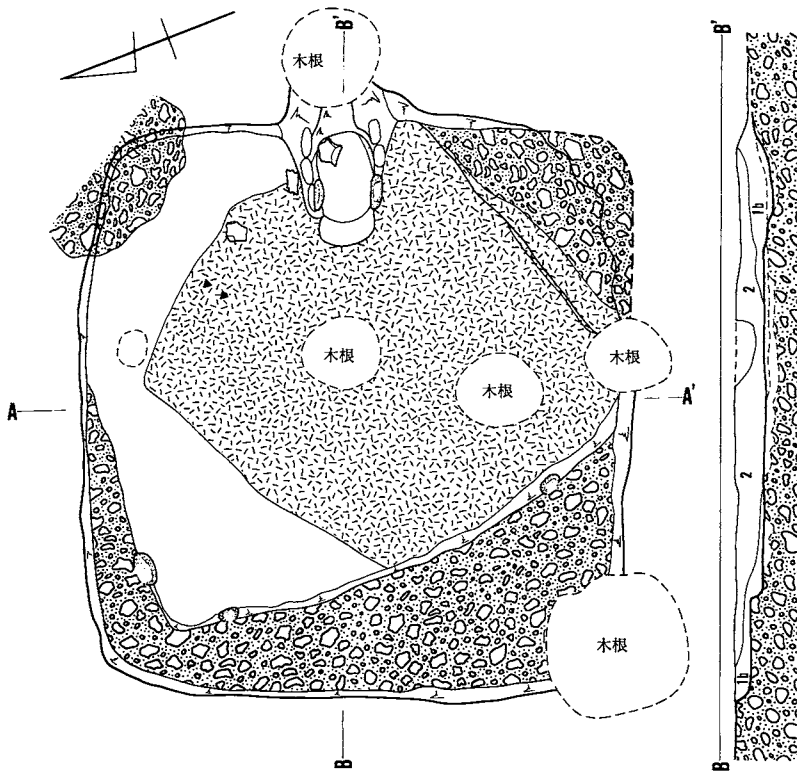
平面形は概ね正方形に近いが北東壁はわずかに張り出し、カマドは南東壁の中央付近に設けられている。カマド中心を堅穴部を通る主軸方向は、ほぼ南東―北西方向にある。カマドは、1基で造り替えの形跡は認められない。規模は、主軸方向上端が380～390cm・同下端360～370cm、直交する方向の上端は360～365cm・同下端350～355cmで、壁高は床面が2段になっており上位の床面から11～6cm、下位の床面と上位の床面との差は6～3cmである。壁の外傾度は礫の突出などで計測が困難であったが、概ね20～25度である。

埋土は、大別2層に区分した。下位層は南西壁よりで炭化材小片の線状分布が見られたが、上部・下部の性状には大差は認められなかった。上位層は、小礫～粗砂質の砂質黒色土(10YR 1.7)に焼土ブロック・炭化材小片が不規則に混じっている。締りは普通かやや軟かく、粘性はない。下位層は、中～大礫・黒色土ブロック(10Y R1.7/1)・炭化材小材・焼土ブロックを不規則に混じえた小礫質の黒色～黒褐色土(10YR2/1～2/2)で締りは普通で粘性はない。

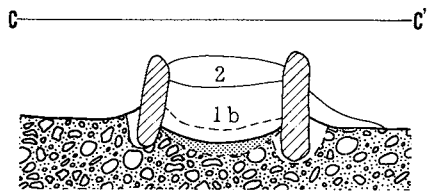
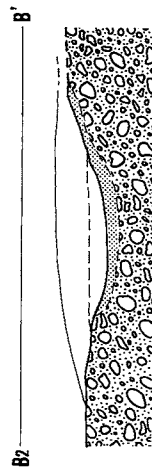
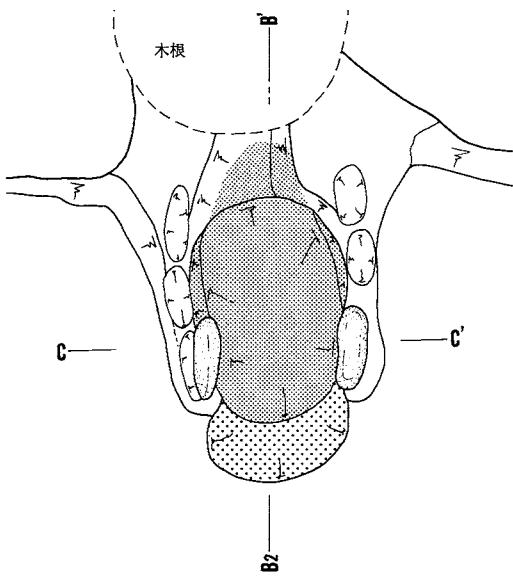
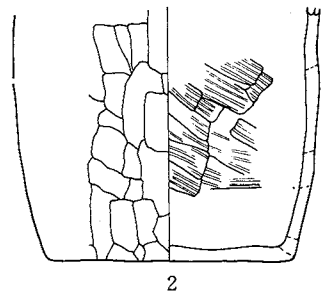
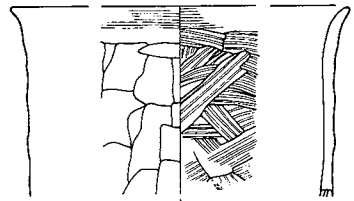
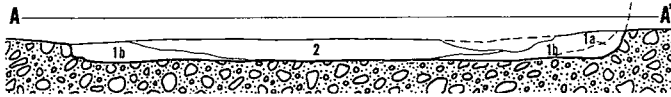
床は、前述したように基本土層のIV層の一部である礫層中に形成されているが高い面と低い面との2面から構成されている。低い面は北東コーナー部を除いてわずかに粘性のある砂質褐色土が貼り付けられており、この貼り付け土は実線を境いとして内側が非常に固く締っており、外側は軟かい。その範囲は東西250cm南北300cmで堅穴の方向とは45度前後偏っている。高い面は、南側の低い面との段差付近に貼り付け土が見られるものの礫層が床面となっている。床面他で確認した施設・構造としては、南東壁に設けられたカマドだけである。

カマドは、焚き口の袖芯材・袖の基底・燃焼部、そして煙導の一部を確認しただけで、遺存状態は良くない。カマドは幅58～66cm・左袖幅10cm・右袖幅12cm・奥行72cmで、両袖部には各々2つの礫抜きとり穴と各1個の偏平礫が残っているだけで他の芯材・天井石などは見られない。また芯材等を被覆した土は、カマドの内外に散乱・堆積している。燃焼部は、袖部と一致するように幅38cm・奥行58cm・最大深12cmの浅い土坑状に礫層を掘りくぼめ、そのくぼみには土師器カメの破片・炭化材小片を混じえた焼土が4～6cm堆積し、底面より下位の礫層は4～7cmが赤変している。燃焼部に続く焼土の範囲は、最大幅43cm・奥行76cmで煙導部にまで広がっている。また焚き口の前庭側には弱変焼土(礫)が幅38cm×18cmの範囲に見られる。煙導部の全体形状はもとより、形成方法・構造は不明である。

出土遺物としては、カマド埋土中およびカマド周辺に散在していた土師器カメがある。図示したカメは底部周辺と口縁部周辺とに復原されたが、これらは調整手法と胎土から同一個体と



※全体平面図と断面図は S = 1 : 50  
 カマド細部図は S = 1 : 20  
 ※遺物実測図は S = 1 : 4



図版16 : I 14-02住居址と出土遺物

考えられるが接合には至っていない。推定口径18cm・底径13cm、器高は不明である。

(4) I 14-01住居址 (図版17、写真図版15)

本遺構は、大部分がI 14-I区に位置している。確認状況は、粗掘・抜根作業中のIII層上部で倒木痕の周辺に方形に広がる落ちこみと倒木痕を切る小さい落ちこみを確認した。この落ちこみは大～巨礫を伴うものである。当初、これらは一体の遺構と思われたが平面確認・精査の進行につれて次に説明するI 14-03住居址が重複していることが判明した。

平面形は、南北方向に長い菱形様の長方形で北西壁がわずかに張り出し、カマドの位置は南東壁の南よりと考えられるが燃烧部・煙導は倒木痕・I 14-03住居址に破壊され、煙り出し部と考えられる石組は木根に喰いこんでいるため明確ではない。長軸方向はほぼ南西-北東方向にあり、その規模は上端460～470cm・同下端448～456cm、直交方向上端332～336cm・同下端318～326cm壁高は4～8cmを確認した。

埋土は、倒木による攪乱を受けているため明確ではないが各コーナーによってわずかに差が見られるものの単層である。全体的に中・大礫・黒色土ブロック(10YR1.7/1)、シルト質褐色土(10YR4/4)の小中ブロック、炭化材小片、焼土小ブロック、そして土師器や須恵器の破片を含む小礫質黒色～黒褐色土(10YR2/1～2/2)で、締りは普通で粘性はない。

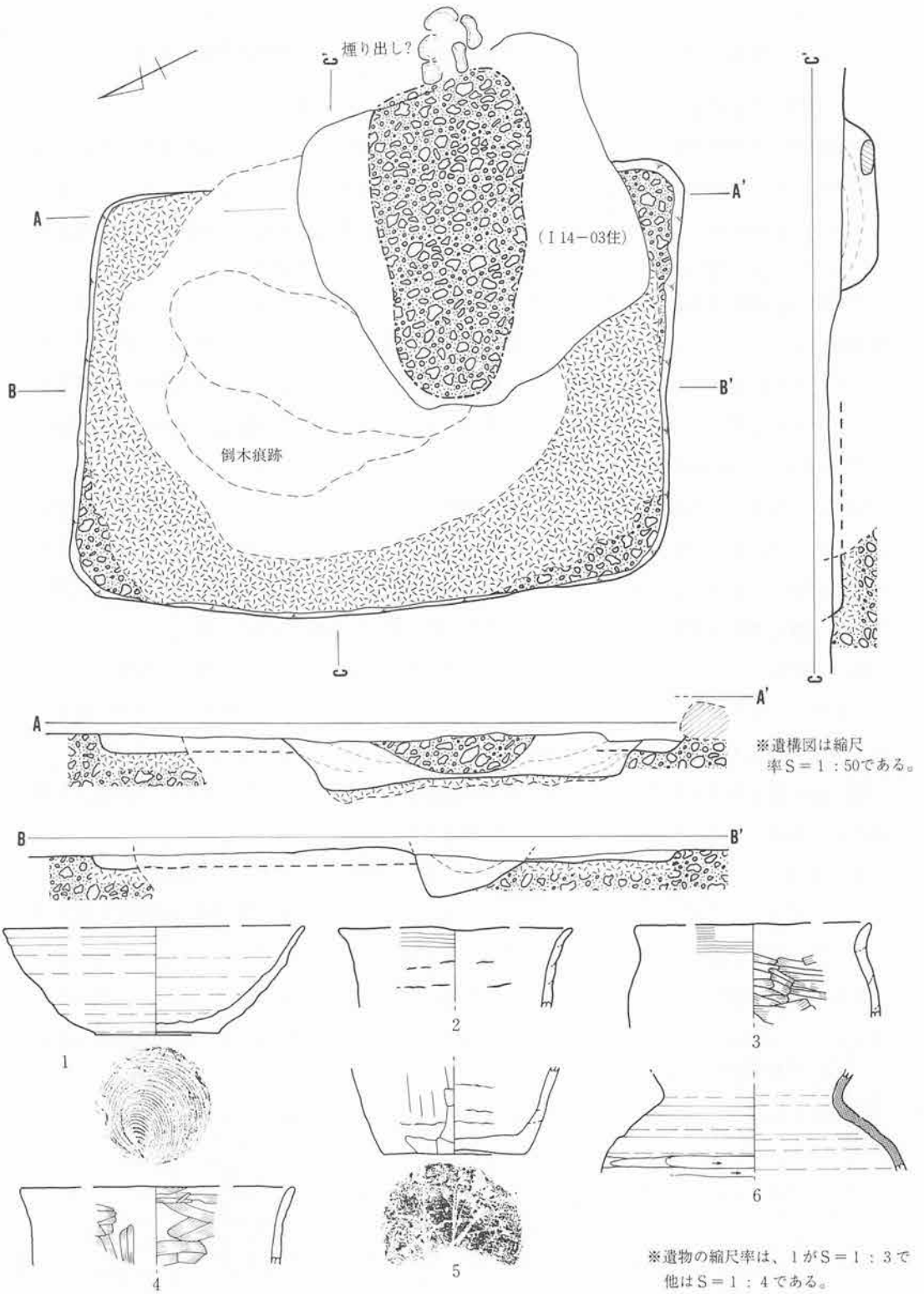
床は、礫層を10～3cm掘り下げた上ににぶい黄橙色(10YR4/4～4/6)の砂質土を貼り付けているが東コーナーを除いた3コーナーでは貼り付け土が見られず礫層が露出している。床面では、柱穴・焼土・カマド痕跡など何ら確認できなかった。

煙り出し部と考えられる石組は、偏平礫等を縦位に並べて形づくっているが、その真上に木根があり各礫は木根に喰いこんでいるため構造は不明である。

出土遺物は、埋土に含まれていた土師器の坏、カメ、須恵器の壺があるが何れも小破片である。床や埋土の大部分が攪乱されていたことから、これらの遺物が当該遺構の時期を示すか否かは不明である。坏はロクロ成形調整で底部は切り離しのままである。カメは3個体分の破片で何れも輪積成形でヘラナデ・横ナデによる器面調整を行い、底部周辺はヘラケズリ調整を施している。須恵器の壺は、肩～頸部周辺の破片でロクロ調整痕と回転ヘラケズリが見られる。

〈I 14-01住居址出土遺物観察表〉

通算 番号	図版 番号	写真図 版番号	器種	出土地点	外 面 調 整				内 面 調 整			法 量 mm			備 考
					口縁部	体部上半	体部下半	底 部	口縁部	体部上半	体部下半	口 径	底 径	器 高	
1	17-1	15-2	坏		R	R	—	I	R	R	—	(142)	58	51	
2	17-2	—	壺	—	Y	—	—	—	—	S	—	145～150	—	50～52	
3	17-3	15-3	甕		Y	—	—	—	—	S・N	—	(142)	—	(62)	
4	17-4	—	壺		N	—	—	—	N	N	—	170～190	—	(56)	
5	17-5	15-4	壺	—	—	—	S・M	S	—	—	S	—	( 88)	(55)	
6	17-6	15-5	壺	—	—	同転K ・R	—	—	—	R	—	頸部径 110～112	—	(48)	須恵器



図版17：I 14-01住居址と出土遺物



(5) I14-03住居址

(図版18・19、写真図版16・17)

本遺構は、全体がI14-I区に位置している。確認状況・層位は、I14-01住居址で述べたとおりである。

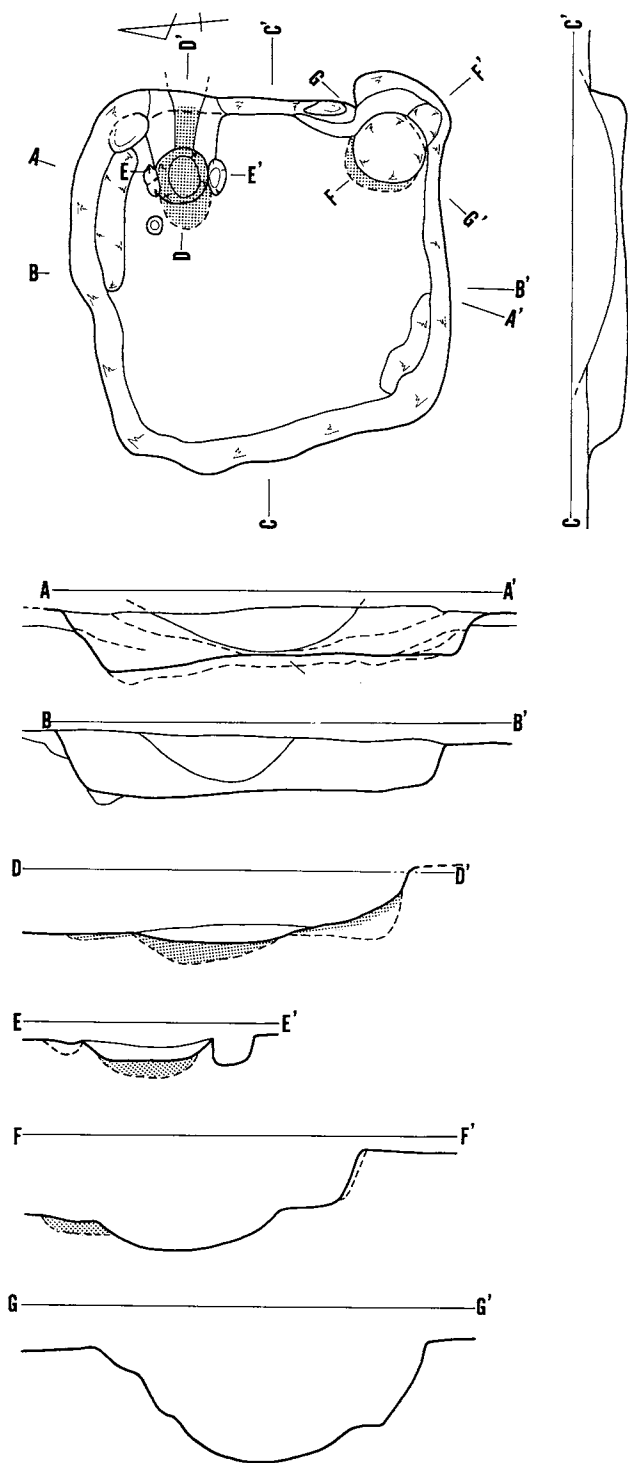
平面形は、各コーナーが円味をもち南東コーナーおよび北壁が張り出した不整形である。カマドは東壁の北よりに設けられ、カマド中心方向と同方向の主軸はほぼ東-西方向にある。規模は、主軸方向の上端は北壁よりで250cm・南壁側で210cm、同下端は220cmと190cmである。直交方向は250~240cm・同下端は220~210cm、壁の高さは最大33cm・最小23cmと変化が大きい。壁の外傾度も部分による変化が大きく30~60度の範囲にある。

埋土は、大~巨礫の投げこみ層を含めて大別2層に区分したが下位層はにぶい黄橙色~黄橙色の砂質土ブロックの混在状態や砂粒・炭化材小片の分級分布から3~4層に細分できるところも見られたが埋土全体を細分するには至らなかった。上位とした大~巨礫の投げこみ層は、礫間隙を小礫~粗砂質の黒色~黒褐色土(10YR2/1~2/2)が埋めており、下位層は全体的に炭化材小粒や黄橙色の砂質土ブロックを不規則に含んだ小礫~粗砂質の黒色~黒褐色土(10YR2/1~2/2)で大~巨礫が散在する。また、断面図の破線部にはその上下を区分するように炭化材小粒や砂粒が線状に分布しているが埋土全体に広がるものではない。北東コーナーやカマド周辺では床面に焼土小ブロックを含むにぶい褐色(7.5YR5/3~5/4)の砂質土が散在している。

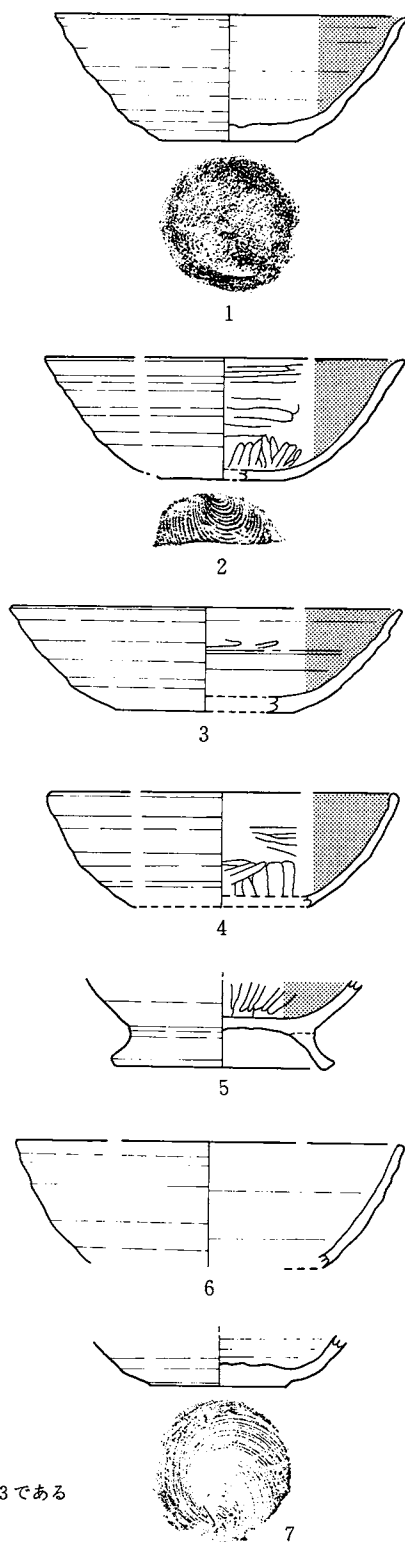
床は、IV層の一部である礫層中に形成され粗砂質黒褐色土(10YR2/2~2/3)が貼り付け、整地されている。床面は全体的に中央が高く、北壁よりでは極度に底くなっており、床土はカマド周辺と南東コーナーの土坑周辺では固く締っているが他の床土はあまり固くない。床面で確認した施設・構造としては、東壁に設けられたカマド、南東コーナーの張り出しと小型土坑、小型土坑周辺の強変焼土、そして北壁際の溝状の落ちこみである。

カマドは、新旧2基が存在したと考えられるが旧期のカマド跡は土坑形成によって破壊されている。新期のカマドは、北東コーナーに付近に設けられており燃焼部・煙導部の一部と袖芯材礫の抜きとり穴2つが残っているだけである。燃焼部は幅34cm・奥行き41cm・深さ5cmほどの浅い掘りこみで強く焼変・赤化し、その前庭もまた焼変している。煙導部はわずかに粘性のある砂質土を盛っており燃焼部奥から壁上端にかけて急に立ちあがっている。煙導の長さ33cmで燃焼部と煙導との長さは74cmである。また、2つの礫抜きとり穴部の最大幅は56cmである。

旧期のカマド跡と考えられるのは南東コーナーに設けられた小型土坑周辺と壁に見られる焼土、および煙導の一部と見られる壁直下の浅いくぼみである。土坑は明らかに焼土を切って形成しているため燃焼部の規模等は不明である。遺存する焼土の幅は47cm・厚さ3cm、焼土端から壁の上端までは86cmである。焼土と煙導と見られるくぼみの中心を通る線は概ね南東-北西方向にあり、新期カマドの中心線とは45度ほどの角度をなしている。



※平面図およびA～Cの断面図は、S = 1 : 50 ※遺物は縮尺S = 1 : 3である  
 断面図D～GはS = 1 : 20である。

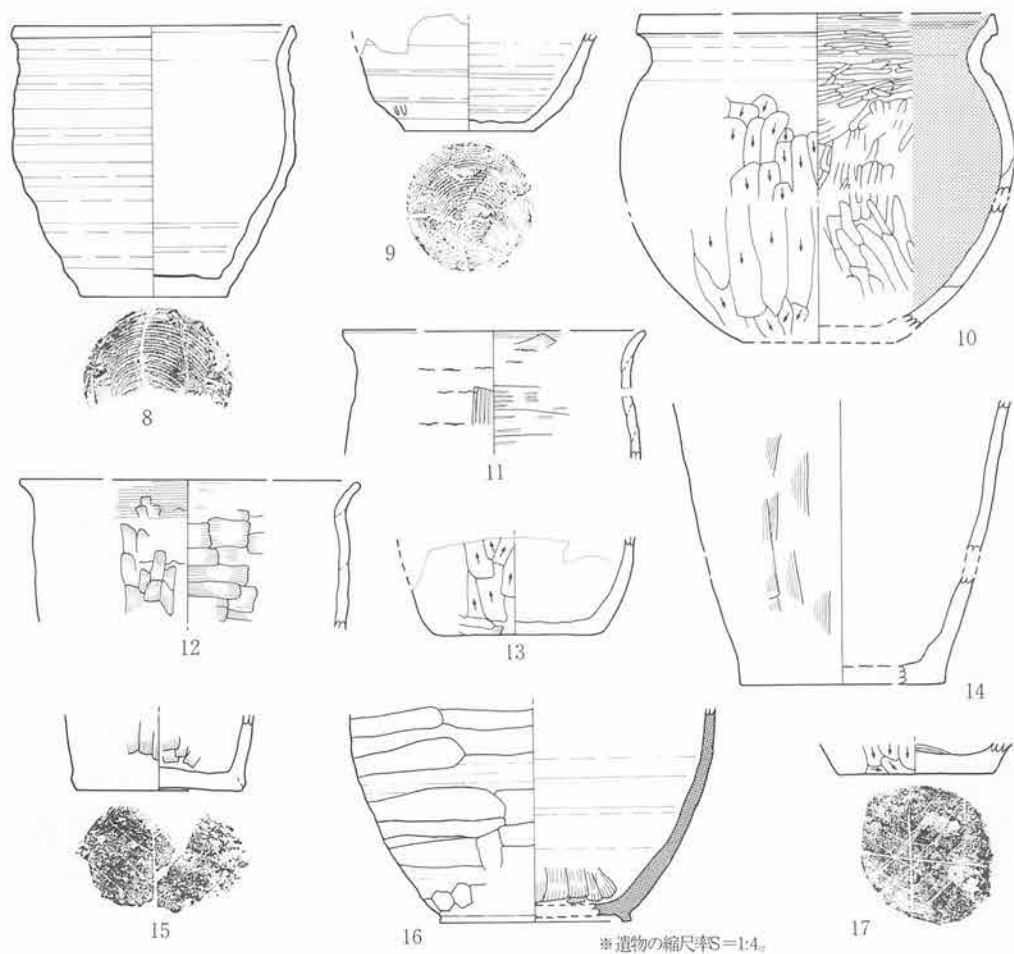


図版18： I 14-03住居址と出土遺物(1)

土坑は、口経が47×48cm・深さ10cmで底面は礫層中にあり凹面をなしている。埋土は炭化材小片とにぶい褐色土の小ブロックが多い点を除けば他の埋土と大差がなく、遺物も見られない。北壁下の溝は、長さ95cm・最大幅20cm・最大深12cm、埋土は土坑と同様に炭化材小片とにぶい褐色土の小ブロックがやや多い点を除けば他の埋土と差がなく、遺物も見られない。

その他、南西のコーナー周辺には2～5cmほど高い粘土質土の貼付が見られる。

出土遺物は、埋土の下部に包含されていたものがほとんどであるが図版18-1と図版19-16は床面出土の資料である。器種としては、土師器の坏・高台付の坏・カメ、須恵器の壺?で、17個体分の土器片が出土している。坏は、何れもロクロ成形で底部は回転糸切り無調整で、器面調整の有り方から次の3種に区分される。



図版19：I 14-03住居址出土遺物(2)

- ①ロクロ成形→内面の回転ヘラ磨→黒色処理 (図版18-1、写真図版16-3)  
 ②ロクロ成形→内面手持ちヘラ磨→黒色処理 (図版18-2~5、写真図版16-4~7)  
 ③ロクロ成形 (2次調整なし) (図版18-6・7、写真図版16-8・9)

カメは、何れも土師器で成形調整の有り方から次の3種に区分できる。須恵器の壺は、体部下半の資料で輪積成形・ロクロ整形調整の後にヘラケズリ調整を施こしている。また内面の底部周辺にはヘラナデ調整が見られる。

- ①ロクロ成形・回転糸切りで2次調整はない。(図版19-8・9、写真図版17-10・11)  
 ②輪積成形→ロクロ調成→内面手持ちヘラ磨→内面黒色処理 (外面はヘラケズリ調整)  
 (図版19-10、写真図版17-20)

- ③輪積成形の後、ヘラナデ・ヘラケズリ・ハケメなどの調整を行っており、底面は木葉底とヘラケズリ調整との2種類が見られる。 (図版19-11~15・17、写真図版17-12~17・19)

< I 14-03住居址出土遺物観察表 >

通算番号	図版番号	写真図版番号	器種	出土地点	外 面 調 整				内 面 調 整			法 量 mm			備 考
					口縁部	体部上半	体部下半	底 部	口縁部	体部上半	体部下半	口 径	底 径	器 高	
1	18-1	16-3	坏		R	R	ナデ再調整?	I	R	R	—	(142)	54	50	内面黒色処理
2	18-2	16-4	甕		R	R	K・N	I	回転M	回転M	Mは放射状	(144)	( 50)	46	内面黒色処理
3	18-3	16-5	甕		R	R	K	—	R、内黒	M	—	(158)	( 70)	43	内面黒色処理
4	18-4	16-6	坏		R	R	—	—	—	M	—	(144)	( 68~70)	( 45)	内面黒色処理
5	18-5	16-7	坏		—	—	R	—	—	—	Mは放射状	—	90	( 34)	内面黒色処理
6	18-6	16-8	坏		R	R	—	—	—	R	—	(156)	—	( 50)	
7	18-7	16-9	坏		—	—	R	I	—	R	—	—	56	( 20)	
8	19-8	17-10	甕		R	R	R	I	R	—	R	148	( 78)	144	
9	19-9	17-11	甕		—	—	R	I	—	—	R	—	68	( 62)	
10	19-10	17-20	甕		R	K	K	—	(回転M?)	縦位M	斜位M	(190)	—	( 95)	内面黒色処理
11	19-11	17-12	甕		Y	S・H	—	—	Y	(槽位)H	—	(162)	—	( 67)	
12	19-12	17-14	甕		Y	N・M	—	—	Y	N	—	(182)	—	( 77)	
13	19-13	17-15	甕		—	—	K	—	—	—	—	—	90	(152)	
14	19-14	17-16	甕		—	—	N	—	—	—	—	—	(108)	(150)	
15	19-15	17-17	甕		—	—	N	木葉痕	—	—	N	—	( 88)	( 41)	
16	19-16	17-18	壺		—	—	R・M	—	—	—	R・N	—	(102)	(114)	須恵器
17	19-17	17-19	壺		—	—	—	木葉痕	—	—	—	—	—	( 43)	
18	—	17-13	甕		Y	S・Y	—	—	Y	S・Y	—	—	—	—	

(6) E28-01住居址 (図版20・21・22、写真図版18・19)

本遺構は、大部分がE28-E区にあり各コーナーやカマド部はE28-B・F H・L区に位置している。確認状況は、基本土層のI層を10~15cm除去した段階に偏平巨礫・土師器片で作られた煙導を確認したが、竪穴部の確認はII層を除去した段階である。本遺構の立地する地形は扇状に分布する砂礫堤の1つで、微高地状の高まりとなっている。そのためか本遺構周辺のII・III層は薄く北東~北側に傾斜していることや木根および倒木痕が多数重複していることなどが

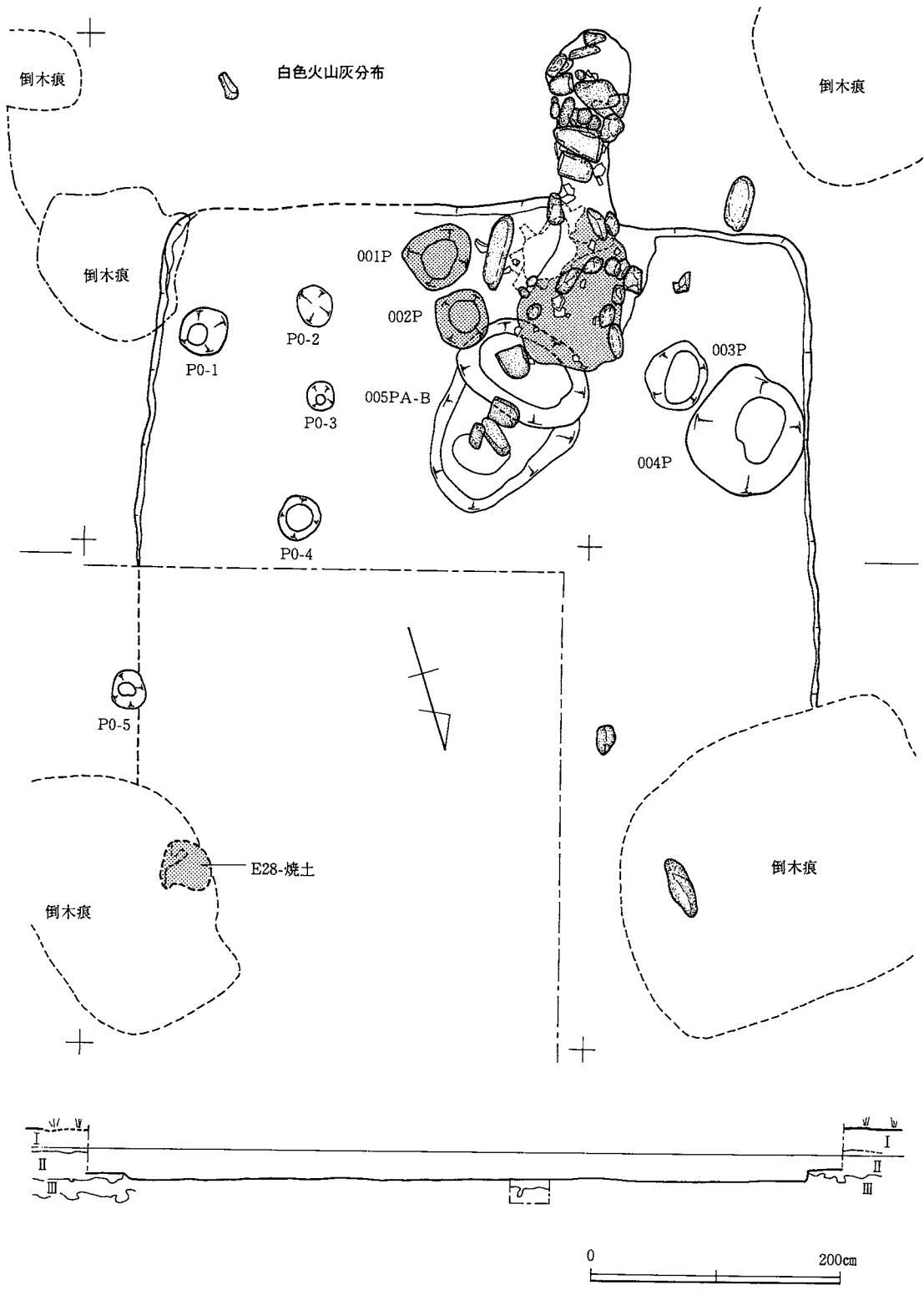
ら北東～北側の壁や床は確認できなかった。

**平面形** は、各コーナーがわずかに円味をもつ方形と考えられるが前述の事情から竪穴全体は確認できず、明確な平面形・規模は不明である。カマドは南南西壁の西よりに壁と直交する位置に設けられている。カマド中心線と磁南とがなす角度は西偏20度である。確認した規模は、東南東—西北西方向の上端が512～537cm・同下端は500～525cm、直交方向上端は375cm、壁の高さは最小8cm・最大35cmである。壁の外傾度は部分による差異が大きく30～50度である。

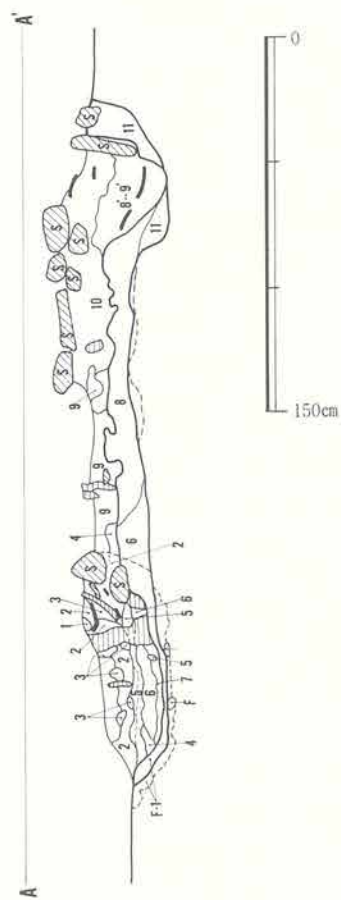
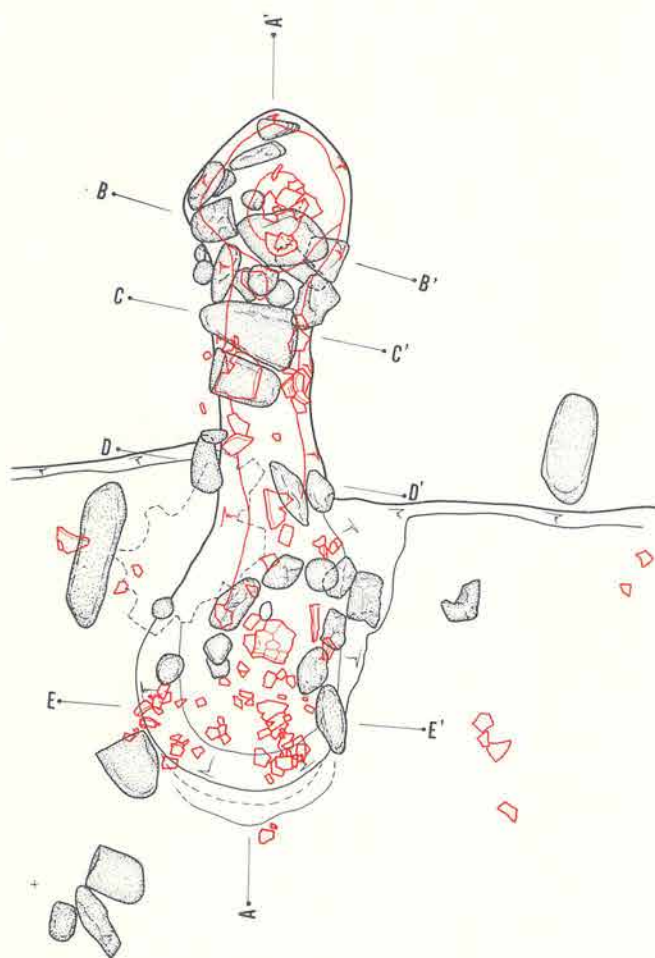
**埋土**は、炭化材片を含んだ砂質の黒色～黒褐色土(10YR2/1～2/2)を主体とするが南壁や北東側では倒木による攪乱のためにぶい黄橙色砂(10YR6/3～6/4)や浅黄橙色砂(10YR8/3～8/4)の大小ブロックが不規則に混在する。カマド周辺では、埋土下部から床面に炭化材片・焼土ブロックが多量に混在・分布する。

**床**は、南南西側がV層の一部である浅黄色砂層(10YR8/3～8/4)を床とし、北北東側に移行するにつれてIV層・III層を床にする。床面は全体的にカマド周辺が高く北北東側に移行するにつれて低くなり、床土はカマド周辺と南コーナーよりが非常に固く締っているものの他の範囲はあまり固くない。また、カマド前庭の2基の土坑上部には砂質～シルト質土が貼り付けられている。床面他で確認した施設・構造としては、カマドの他に大小の土坑6基、柱穴様小穴5つである。柱穴様小穴は、配列などから柱穴とは考えられない。その他、北東側の倒木痕部で土師器小片を伴う焼土(E28—焼土)を確認しているが本住居址に伴うものか否かは不明である。床面全体に炭化材片と焼土が散在し、強弱の差は見られるが床土も焼土化している。

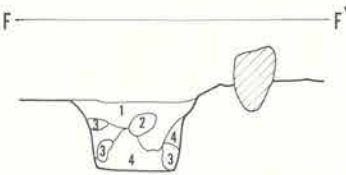
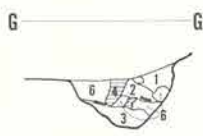
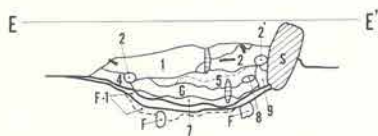
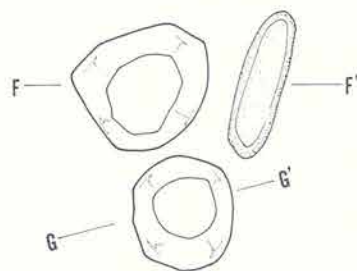
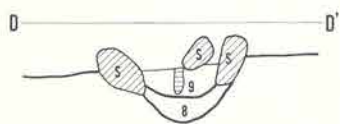
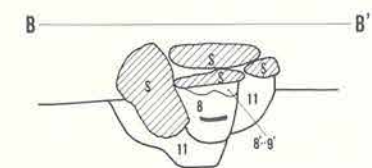
**カマド**は1基で、確認した部位は燃焼部・袖芯材礫・煙導・煙り出し部であり、天井石や袖などの被覆土は崩壊し全体的に遺存状態は良くない。燃焼部は幅85cm・奥行72cm・深さ13cm不整楕円形のくぼみで底面はシルト質土が貼り付けられている。この燃焼部は強く焼変し、その変化は煙導の一部に見られる。袖は左右とも崩壊し芯材や天井石と考えられる礫は土師器片須恵器片と共にカマドおよび周辺に散乱している。燃焼部の奥壁は、急に立ちあがり煙導に移行するが煙導は概ね水平で煙り出し部下端は煙導面より24cmほど掘り下げられている。煙り出しの構造は、小穴に沿って扁平礫を水直に並べているもの一部抜きとられている。煙導の構造は掘りこんだ溝の側壁・天井に土師器カメ等の大破片や扁平な巨礫を用い、底面は固められている。燃焼部・煙導部は、精査の過程で作り直していることが判明した。作り直しは同一地点で行われており、詳細な構造は不明であるが溝状に掘りこまれていたものが埋めもどされ、その上に新しい煙導を作っている。煙導部断面図の6・8・11層は旧煙導を埋めもどした層で6層は燃焼部底面の貼付土と同質土である。また、6層下の旧煙導面は一部が焼土化し炭化材小片・焼土ブロック・骨片が散在しており、燃焼部についても貼り付け土と下位の強変焼土との間に土師器片・炭化物小片・骨片が存在したことから煙導部と同時に作り直されたものと考え



図版20：E 28—01住居址と E 28焼土



※全図同一スケール



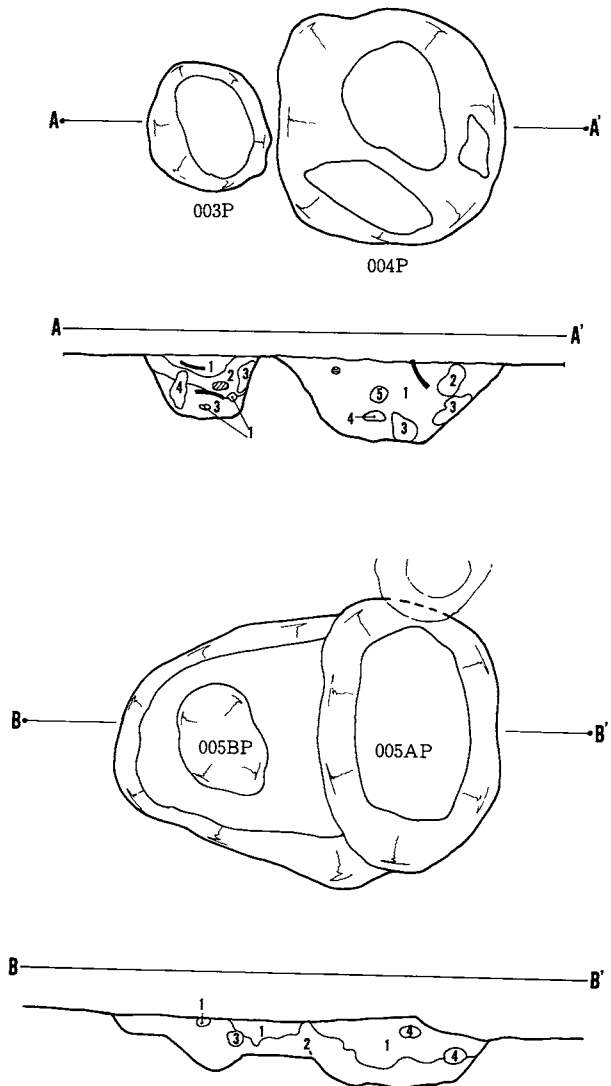
図版21 : E 28-01住居址カマドと小土坑

えられる。この旧期カマドの  
 燃焼部と煙導部との区分は困  
 難であるが、カマドの全体長  
 は273cmである。

土坑は6基確認している。  
 これらのうち001P・002Pは  
 特に小さいもので内壁等が焼  
 土化し、土師器・須恵器の破  
 片と焼土が埋土の中に入っ  
 ている。001Pは掘り方に特徴  
 があり、平面形が上端下端とも  
 多角形を呈する。003P・004  
 Pは埋土中に小中ブロックの  
 焼土と炭化材片・土師器片な  
 どが混在するものの内壁や周  
 辺の床面はわずかに焼変して  
 いる。005AP・005BPの2基  
 はカマド前庭の貼床の下で確  
 認したもので、埋土は砂質黒  
 褐色土ににおい黄橙色砂ブ  
 ロック、少量の炭化材小片が  
 混在しており土器片などの遺  
 物は見られない。埋土の特徴  
 からは明確に2基の重複とは  
 言いがたく、土坑の形状・底  
 面の状態から区分した。これ  
 らの土坑は何れも本住居址に

伴うものと考えられるが各々の用途・機能については明言できかねる。各土坑の規模は下表のとおりである。

P<sub>0</sub>-1からP<sub>0</sub>-5の柱穴様小穴は、P<sub>0</sub>-1とP<sub>0</sub>-2を除けば次のような確認状況から本住居址とは関係のない小穴と考えられる。P<sub>0</sub>-1とP<sub>0</sub>-2は、埋土中に焼土ブロック・炭化材小片が混在し、他の小穴は焼土化した床土を切っていたり、竪穴部推定範囲外に存在する。



図版22：E 28-01住居址内土坑 (S = 1 : 20)



E 28焼土は、倒木にもり移動した焼土層で焼土中からロクロ成形調整の坏の極小破片が出土している。分布形状は不整楕円形で規模は長径41cm・短径34cm・厚さ4cmである。

土坑番号	口 径cm	底 径cm	深 さcm	小穴番号	口 径cm	底 径cm	深 さcm
001P	53 × 48	40 × 40	30.0	P <sub>o</sub> -1	38 × 36	16 × 14	15.2
002P	42 × 44	32 × 32	16.7	P <sub>o</sub> -2	31 × 28	—	17.5
003P	56 × 48	44 × 26	26.0	P <sub>o</sub> -3	22 × 21	8 × 7	13.6
004P	94 × 92	54 × 38	39.0	P <sub>o</sub> -4	34 × 34	22 × 21	17.6
005A P	108 × 70	80 × 46	22.3	P <sub>o</sub> -5	30 × 26	8 × 14	22.3
005B P	(120) × 102	(86) × 75	15.0	—	—	—	—

**出土遺物** 遺物の出土状態・状況は図版21にカマドおよびカマド周辺の集中地点や大破片土器について図示したが、他の床面に散在する小破片については省略している。主な分布区域は、カマドの燃焼部・煙導部・煙り出し部で、燃焼部を中心とした範囲の出土土器は図版24・25に示したロクロ成形調整の土師器坏・カメ、須恵器の坏・壺・小形カメの破片である。煙導部・煙り出し部にかけて出土した土器は、図版23に示した土師器カメの大破片を中心とし数点の土師器坏の破片も混在する。これらの破片は、側壁および天井の材として用いられたものである。また、煙り出し部からは鉄製の刀子破片2点が出土しており、この2点は同一個体の破片と考えられるが接合しない。その他、前庭部から図版25-35の石製品が出土している。

本住居址の土器出土量は、接合復原を経て図化したもの37個体分であるが他に2次火熱などにより器面の荒が著しかったり極小破片のため個体識別が不能なものも多数出土しており、全個体数の把握は不可能である。各器種に見られる成形調整の有りかたは次の通りである。

土師器の坏……底部は何れも回転糸切りで無調整。

①ロクロ成形→内面手持ち研磨→黒色処理？（2次火熱により不明瞭である（図版24-1・2、写真図版18-3・4）

②ロクロ成形調整のまま。（図版23-6、24-13~18・21、写真図版18-7、18-14~17、19-20・21・24）

須恵器の坏は、何れもロクロ成形調整で底部は回転糸切りの後、底部縁辺をナデ調整している。（図版24-29・20・22・23、写真図版18-12、19-22・23・28）

カメは、土師器と須恵器とが存在するが須恵器は1個体分だけである。土師器のカメは、成形調整の有りかたから次の3種類に区分できる。

①輪積成形の後、ヘラナデ・ヘラケズリ・ハケメ・横ナデ調整のうち2~3種類、あるいは全ての調整方法を併用している。この種のカメは、粘土接合部を十分に調整していない個体も見られる。（図版23-1~5、24-28~30、25-31~33、写真図版18-3~8、19-27・31~35）

②輪積成形→ロクロ調整→体部のヘラケズリ調整。(図版23—5・7・8、25—34・36・37・39・40、  
写真図版18—8・9・10、19—36・38・40～42)

③ロクロ成形調整のままで2次調整は見られない。(図版25—38、写真図版19—39)

須恵器のカメはロクロ成形調整の小形のもので口縁から体部上半の3分の1程度の破片で、  
体部下半から底部周辺は不明である。口縁～頸部の内面には部分的に横ナデが見られる。壺は  
頸部～肩部を中心とした上半の破片で口縁形態や体部下半は不明である。外面肩部にはハケメ  
様の調整痕の上にロクロ調整が施こされている。

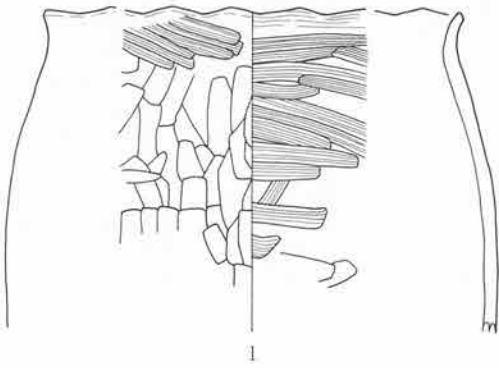
刀子は、前述のように同一個体と考えられるが接合しない。図版23—9 (写真図版18—18)  
は身部の破片で長さ69mm・最大幅10mm・最大厚6mmで平造りである。図版23—10 (写真図版18  
—19) は基部で長さ41mm・最大幅8mm・最大厚5mm、断面形は長方形を呈する。

石製品は図版25—35 (写真図版19—37) の扁平な磨製品が出土している。加工は縁辺を研磨  
し形を作っているが2平面は自然面である。欠損品のため全体形状は不明である。

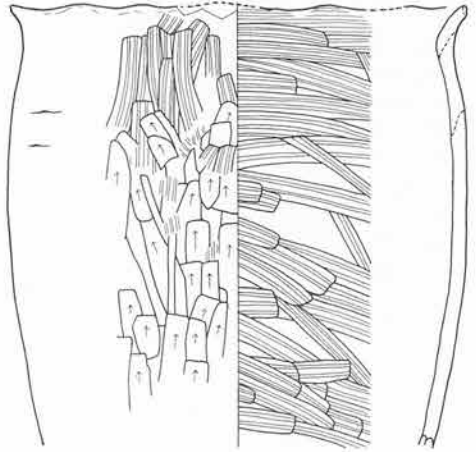
< E 28—01住居址出土遺物観察表 >

通算 番号	図版 番号	写真図 版番号	器種	出土地点	外 面 調 整				内 面 調 整			法 量 mm			備 考
					口縁部	体部上半	体部下半	底 部	口縁部	体部上半	体部下半	口 径	底 径	器 高	
1	23-1	18-3	壺	煙導	H・M	M	—	—	N	N→H	—	(220)	—	(122)	
2	23-2	18-4	壺	〃	縦のH	H・K	K	—	Y	N→H	N→H	242	—	(235)	
3	23-3	18-5	壺	〃	不明瞭	$\begin{matrix} S \\ H \rightarrow N \end{matrix}$	N→K	—	不明瞭	S・N	—	(197)	—	(187)	
4	23-4	18-6	壺	〃	—	—	K	—	—	—	H	—	102	(47)	
5	23-5	18-8	壺	〃	—	R・K	K	—	—	—	—	(200)	—	(172)	
6	23-6	18-7	坏	〃	—	—	—	I	—	—	—	(136)	54	39	
7	23-7	18-9	壺	〃	R	R	—	—	—	—	—	(284)	—	(88)	
8	23-8	18-10	壺	〃	R	R・K	—	—	R	—	—	(240)	—	(177)	
9	24-11	$\begin{matrix} 13^a \\ 18-13^b \end{matrix}$	坏	床・カマド	—	—	—	I	M	—	—	(73)	50	48	内面黒色処理
10	24-12	18-11	坏	床	R	—	—	—	—	M	—	$\begin{matrix} (134) \\ (136) \end{matrix}$	—	(51)	
11	24-13	$\begin{matrix} 14^a \\ 18-14^b \end{matrix}$	坏	床・カマド	—	—	—	I	—	—	—	144	52	43	
12	24-14	18-17	坏	カマド	R	R	—	—	R	R	—	(152)	(66)	49	
13	24-15	$\begin{matrix} 15^a \\ 18-15^b \end{matrix}$	坏	床・カマド	R	R	—	I	R	R	—	(74)	54	45	
14	24-16	$\begin{matrix} 16^a \\ 18-16^b \end{matrix}$	坏	〃	R	R	—	I	R	R	—	(150)	(70)	39	
15	24-17	19-24	坏	床	R	R	—	—	R	R	—	(154)	—	(31)	
16	24-18	19-20	坏	床	R	R	—	—	R	R	—	(160)	—	(38)	
17	24-19	18-12	坏	床	R	R	—	—	R	R	—	$\begin{matrix} (148) \\ (150) \end{matrix}$	—	(36)	須恵器
18	24-20	19-28	坏	床・煙導	R	R	—	—	R	R	—	(142)	—	(38)	須恵器
19	24-21	$\begin{matrix} 21^a \\ 19-21^b \end{matrix}$	坏	001 pit	—	—	—	I	—	—	—	—	56	(18)	
20	24-22	$\begin{matrix} 22^a \\ 19-22^b \end{matrix}$	坏	床直～床	—	—	—	I	—	—	—	$\begin{matrix} (142) \\ (145) \end{matrix}$	$\begin{matrix} (52) \\ (54) \end{matrix}$	41	須恵器
21	24-23	$\begin{matrix} 23^a \\ 19-23^b \end{matrix}$	坏	床上部№1	R	R	—	I	R	R	—	—	65	(17)	須恵器
22	24-24	19-25	坏	カマド東床	R	R	—	—	R	R	—	150	—	(30)	須恵器
23	24-25	19-29	壺	床直～床	R	R	—	—	R	R	—	104	—	(43)	須恵器
24	24-26	19-26	壺	カマド床	—	—	—	—	—	—	—	—	(100)	(41)	
25	24-27	19-30	壺	床直～床	タタキメ	—	—	—	—	—	—	—	—	(113)	須恵器 (頸部径168)
26	24-28	19-27	壺	床・カマド	—	—	K	—	—	—	磨耗H	—	95	(42)	
27	24-29	19-13	壺	〃	—	—	K	—	—	—	—	—	(92)	(27)	
28	24-30	19-34	壺	〃	—	—	K	—	—	—	N	—	78	(32)	

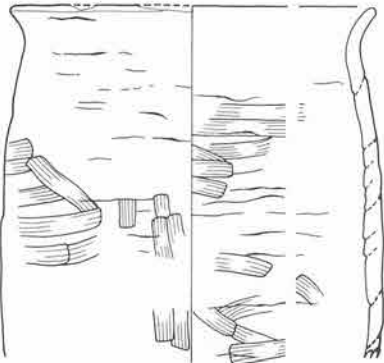
通算 番号	図版 番号	写真図 版番号	器種	出土地点	外 面 調 整				内 面 調 整			法 量 mm			備 考
					口縁部	体部上半	体部下半	底 部	口縁部	体部上半	体部下半	口 径	底 径	器 高	
29	25-31	19-32	甕		H	H・N	—	—	Y・H	H	—	242	—	(150)	
30	25-32	19-33	甕	床・カマド	—	S・N	—	—	—	—	—	(188)	—	(118)	
31	25-33	19-35	甕	〃	—	N	K	—	—	—	—	—	(104)	(224)	
32	25-34	19-36	甕	〃	Q	K	—	—	—	N	—	(214)	—	( 70)	
33	25-36	19-38	甕	〃	R	K	R	—	—	—	—	(216)	—	(144)	
34	25-37	19-40	甕	煙導・ 床カマド	R調整 後K	K	—	—	R	R	—	(200)	—	(126)	
35	25-38	19-39	甕	床カマド	R	R	—	—	R	R	—	(170)	—	( 80)	
36	25-39	19-41	甕	床・カマド西	R	R	—	—	—	—	—	(244)	—	( 76)	
37	25-40	19-42	甕	床・カマド ・煙導	—	R調整 後K	K	K	R・Y	—	K・Y	(266)	138	(331)	



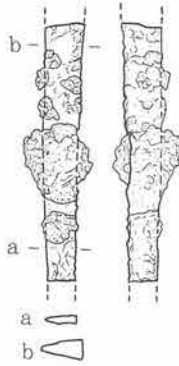
1



2



3

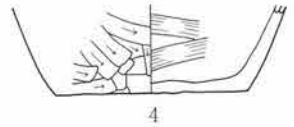


a

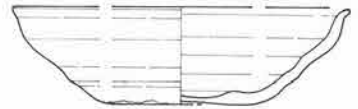
a

b

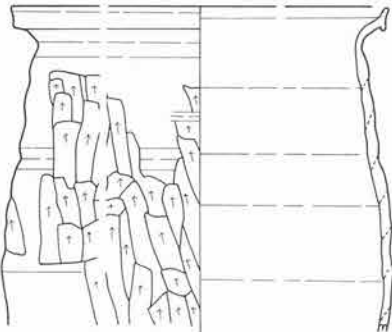
b



4



6



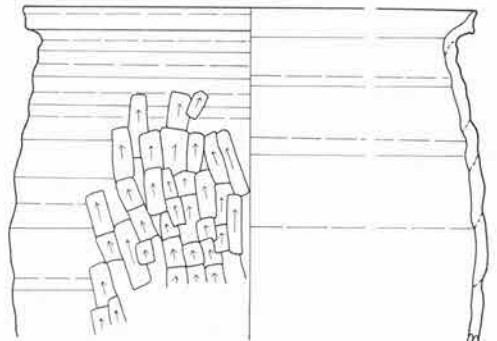
5



※ 1~5、7、8はS=1:4、6はS=1:3  
9:10はS=1:2

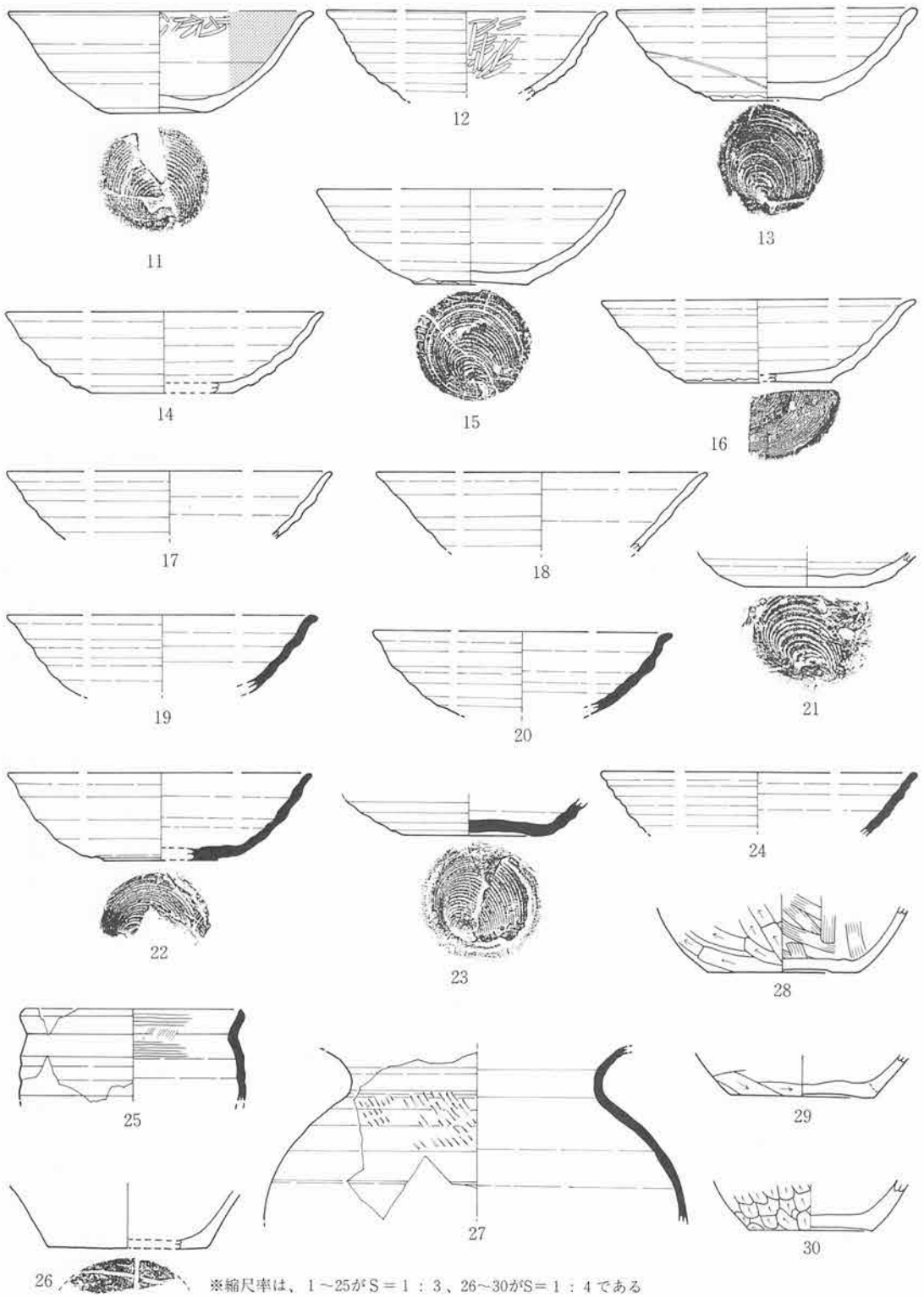


7



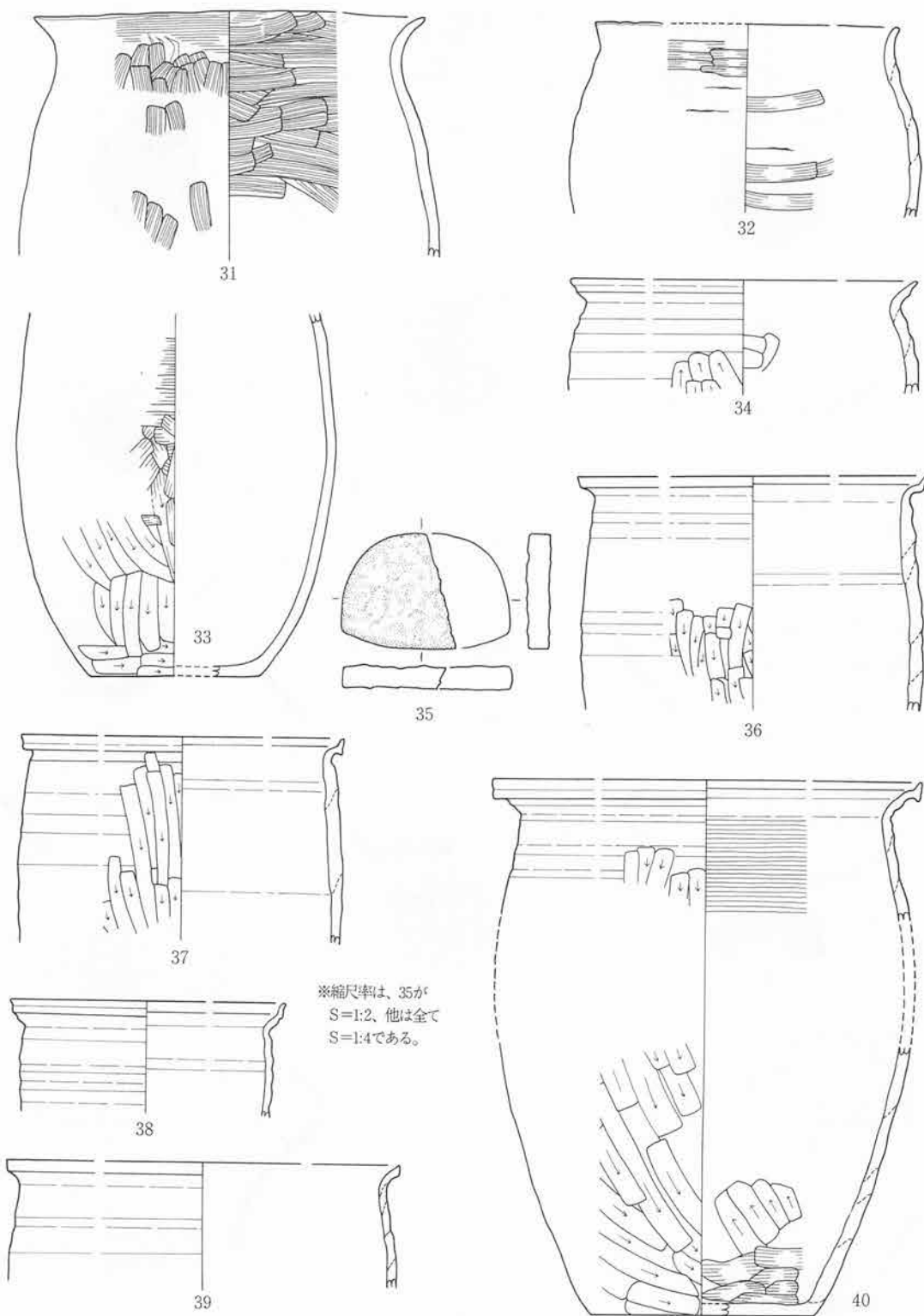
8

図版23：E 28-01住居址出土遺物(1)



26 ※縮尺率は、1～25がS=1:3、26～30がS=1:4である

図版24：E 28-01住居址出土遺物(2)



※縮尺率は、35が  
S=1:2、他は全て  
S=1:4である。

図版25：E 28-01住居址出土遺物(3)

本遺構は大部分がG28-X区にあり、北東壁およびカマドが設けられている東南東壁はG28-SとG28-Y区に位置している。本遺構の周辺は、地籍界・地目界が重複し老木の根や畑地造成時の抜根などにより攪乱を受けていたことや基本土層II・III層が薄く自然地形が南南西に傾斜していたことにより遺構の全体形状は把握できなかった。確認できた部位等は、東南東～北東側の壁とカマド跡を中心とした床、そして床面および貼床の下から小型土坑2基を確認した。なお、南南西から南西にかけての床は、貼床や踏みしめと自然層との区別が判然としないためその境界は不明である。

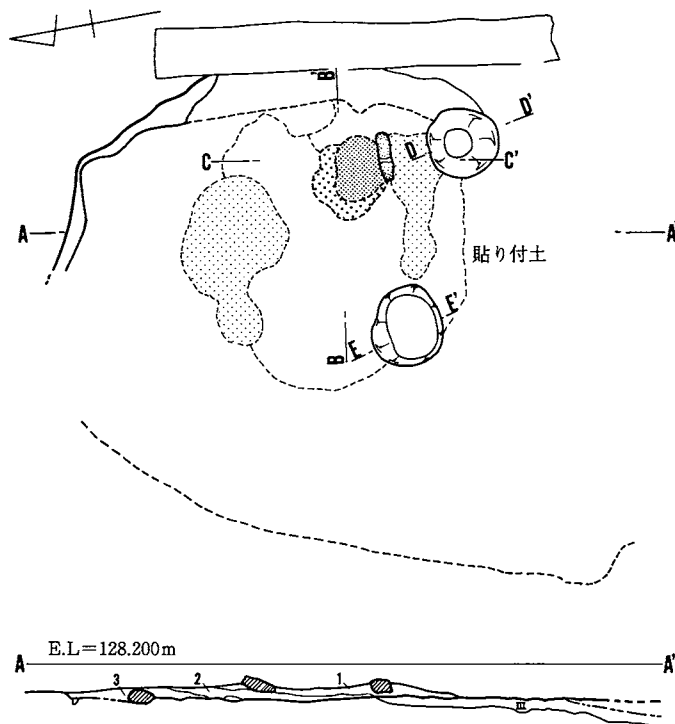
平面形は、前述したように不明と言わざるを得ないが確認形状から隅円の方形～不整形と推定される。確認範囲については、東南東-西北西325cm・北北東-南南西405cm・壁の高さ4～12cmである。カマドは東南東壁にほぼ直交するように設けられており、カマド中心線と磁南とがなす角度は東偏83度である。

埋土は、攪乱土層を除去した状態ではカマド周辺の東南東側が厚く、その周辺では薄い。カマド周辺の埋土も木根の貫入および攪乱によって大ブロック構成となっている。埋土の中心となっているのは小中礫を混じえた粗砂質黒色土(10YR2/1)とカマド被覆土の崩壊ブロックが混在した黒褐色土(10YR2/2～2/3)で、カマド北側の床には細砂～シルト質のにぶい黄橙色土(10YR7/3～7/4)が堆積している。カマド崩壊土を除けば全体的に炭化材片および火山灰と考えられる灰白色シルト質土(5 YR8/1～8/2)の大小ブロックが不規則に混在しており、これらの混在物は床面に近いほど混入率が高くなる。また、埋土下部から床面にかけてはカマドの袖や天井に用いられたと考えられる焼礫および礫碎片が散在している。

床は、南～南南西側がIII層中にあり北側はIII層下部～IV層上部を床としているが、カマド周辺の貼付け土範囲を除くと炭材小片を混じえ粗砂質の黒色～黒褐色土(10YR2/2～2/2や10YR1.2/1)が薄く貼固められている。カマド部周辺には灰白色～浅黄橙色砂(10YR8/2～8/3)のブロックを混じえたにぶい黄橙色シルト(10YR2/2～7/3)が貼り付けられている。なお、この貼り床の上などには火山灰様の灰白色シルト質土と炭化材小片、そして焼土ブロックとが混在したものが2カ所に堆積している。床面で確認した施設・構造としては、カマド跡と小型土坑2基である。

カマドは1基で、確認した部位等は右袖の芯材礫1個と燃烧部底の浅い掘りこみだけで、遺存状態は非常に悪い。燃烧部底の規模は、奥行き40cm・幅35cm・深さ4cmで全面が強く焼土化し、埋土は天井等の被覆土と考えられる砂～シルト質の黄橙色土(10YR7/3～7/4)礫碎片で、この埋土と同じものはカマドの北側にも分布している。カマドの北側では、黄橙色土中に土師器のカメ破片等が散在している(図版27)。煙導部の構造・形態は不明である。

小型土坑のうち、001Pは床面で確認した長径56cm・短径47cm・深さ14cmの楕円形土坑で、底面は木根痕等により起伏がある。埋土は炭化材片と火山灰様灰白色シルトブロックを混じえた粗砂質黒色土(10YR2/1~2/1.5)で、埋土中から図版27-2(写真図版20-2)の須恵器カメ、図版28-5(写真図版20-9)の土師器カメの底部破片を出土している。002Pは、貼り床の下で確認した土坑で径48×47cm・深さ12cmである。埋土は、粗砂質黒色土(10YR2/1)に少量の明褐色土小ブロックが混在した層で、埋土中からは図版28-10・11(写真図版20-6・10)の土師器カメの破片が出土している。



図版26 : G28-01住居址(1) (S=1:50)

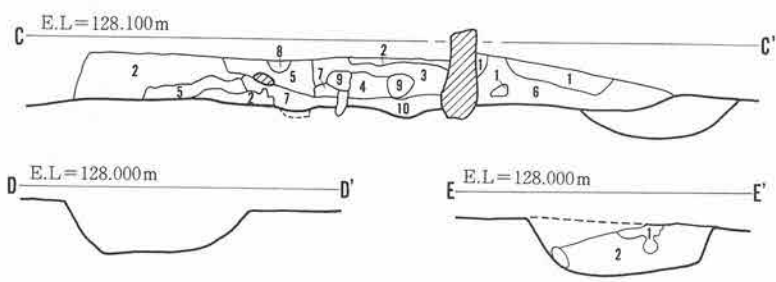
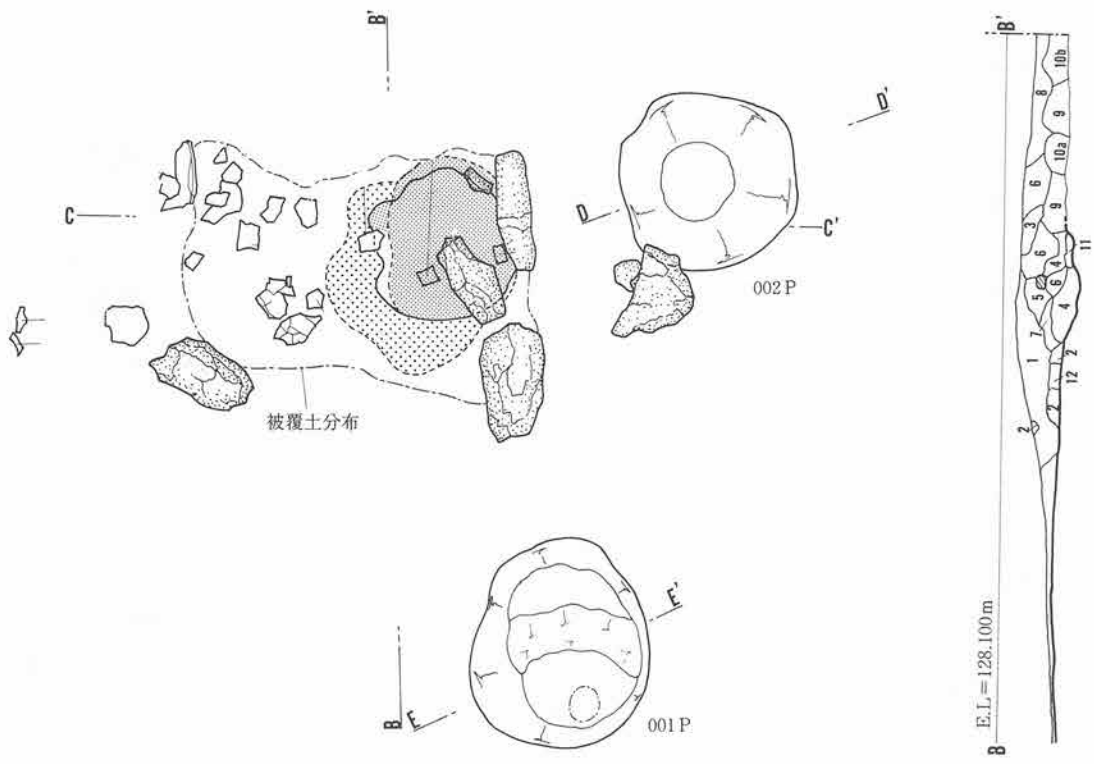
**出土遺物** 遺物の出土状態・状況は図版27のカマドおよびカマド周辺の集中地点を図示したが、他の床面に散在する破片については省略している。器種としては、土師器の坏・カメ、須恵器壺?の破片などで、完形状態に復原できたものはない。しかし、G28-02住居址出土のものと接合した破片もあり両住居址出土遺物の観察表にはそれらを混在表記している。坏は、底部周辺の破片5点1個体分が出土している(図版27-1)。成形調整は、ロクロ回転糸切りで無調整の外器面、内面はヘラミガキ黒色処理で所謂内黒土師器である。

土師器のカメは、成形調整の有り方から次の3種類に区分できる。しかし、底部から口縁部まで接合した破片がないため器体全体の調整の有り方は不明である。

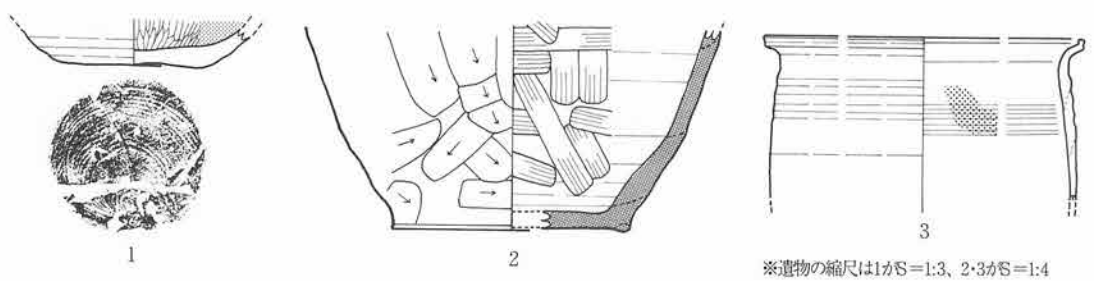
①輪積成形の後、ヘラナデ・ヘラケズリ・ハケメ・横ナデ調整のうち2~3種類の調整方法を併用しているもの。この種のカメは、粘土接合部を十分に調整していない個体が見られる。

(図版28-5~11、写真図版20-4~10)





※遺構図の平面・断面の縮尺はS = 1 : 20

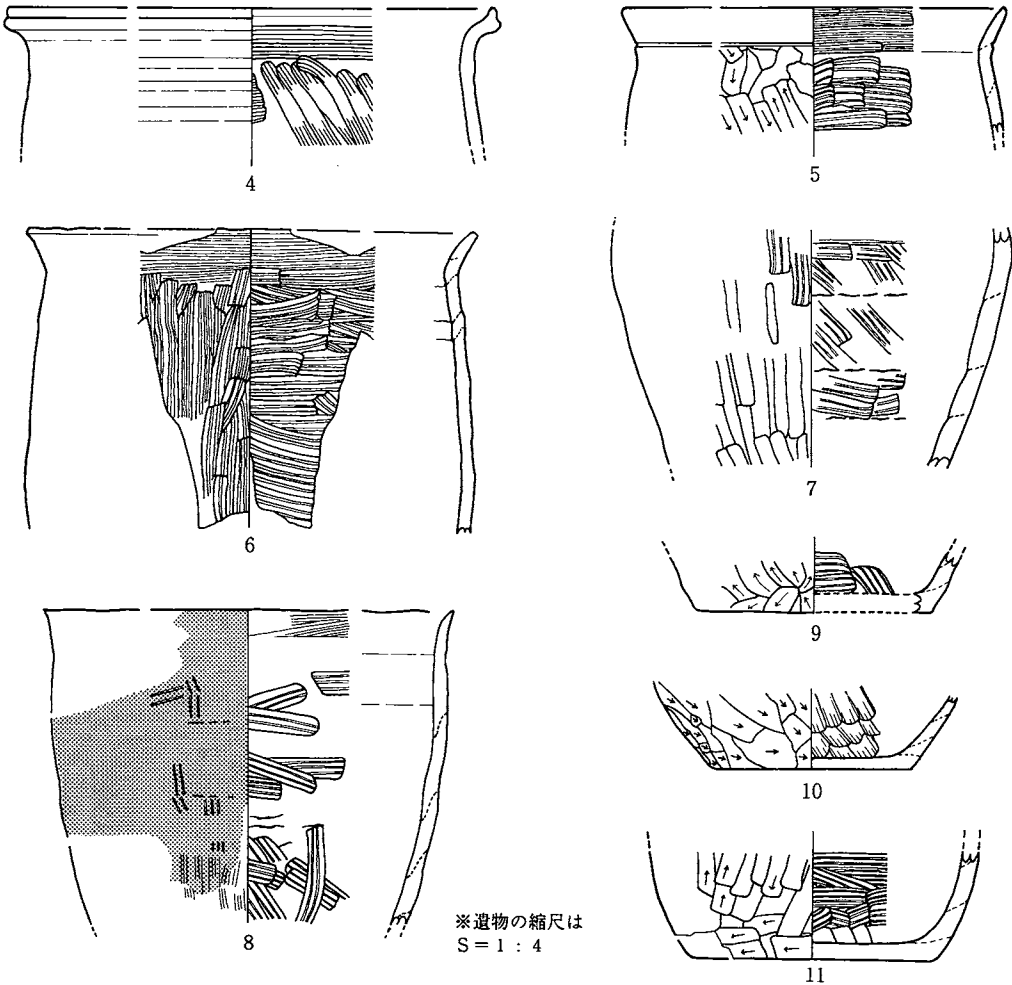


図版27 : G28-01住居址 (2) と出土遺物 (1)

②輪積成形・ロクロ調整の後、わずかに横ナデ様の調整を加えているもの。体部下半から底部にかけては不明。(図版27-3、写真図版20-3)

③輪積成形・ロクロ調整の後、内面に横ナデ・ヘラナデの調整を加えているもの。②と同様に体部下半から底部にかけては不明。(図版28-4、写真図版20-4)

須恵器の壺は、底部周辺の破片で外面はケズリ、内面はヘラナデ調整が見られるが、各々の調整間隙にロクロ調整痕が見られる。また、外面の一部に溶融変化が見られる。(図版27-2、写真図版20-2)



図版28：G28-01住居址出土遺物（2）

〈G28-01住居址出土遺物観察表〉

通算 番号	図版 番号	写真図 版番号	器種	出土地点	外 面 調 整				内 面 調 整			法 量 mm			備 考
					口縁部	体部上半	体部下半	底 部	口縁部	体部上半	体部下半	口 径	底 径	器 高	
1	27-1	—	坏	カマド	—	—	R	I	—	—	M	—	50~56	( 12)	
2	27-2	20-2	甕	001P・ カマド	—	—	K	N	—	—	R・N	—	94~95	( 81)	須恵器
3	27-3	20-3	甕	カマド	R	R	—	—	R	S・N	—	(164~ 174)	—	( 86)	炭化物膜
4	28-4	20-4	甕	床・カマド	R	R	—	—	Y	N	—	(260~ 270)	—	( 79~ 75)	
5	28-5	20- <sup>a</sup> / <sub>9</sub> <sup>b</sup>	甕	床・001P	Y	K	—	—	N	H	—	(155)	—	( 49)	ハケ目の未端に注意
6	28-6	20-7	甕	床	Y	H	—	—	Y	H	—	(230~ 245)	—	(161)	
7	28-7	22-19	甕	G28-02 住と床	—	H	疎いM N	—	—	S・H	H	—	—	(125)	G28-02住埋3層、接 G28-02住埋4層、 G28-M区IIu合
8	28-8	20-8	甕	カマド	—	H	S・H	—	Y	H	—	(380~ 400)	—	(160)	
9	28-9	20-5	甕	埋	—	—	K	—	—	S・H	—	(124~ 130)	—		
10	28-10	20-10	甕	床・002P	—	—	K	N	—	—	S・N	—	102	( 38)	
11	28-11	20-5	甕	002P	—	—	K	—	—	—	N・H	—	( 98)	( 45)	

(8) G28-02住居址

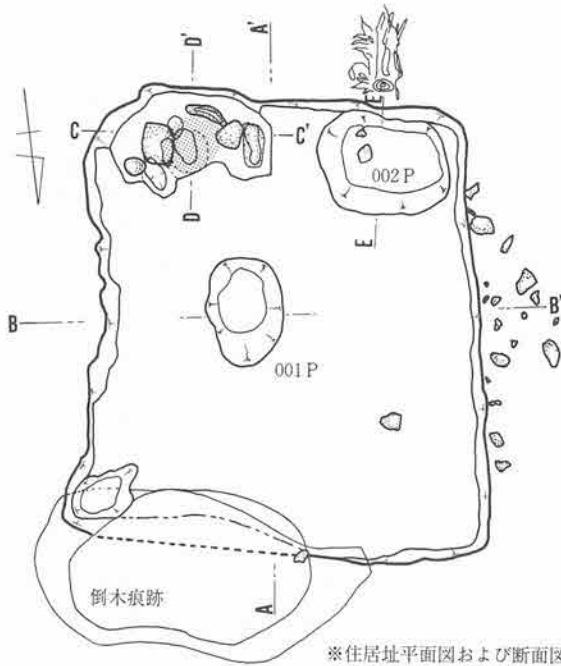
(図版29・30、写真図版21・22)

本遺構は、G28-N・O・S・Tの4小調査区にわたって位置している。確認状況は、G28-O・T区の試掘粗掘中にI層を10~15cmほど除去した段階に円礫と灰白色火山灰の分布を確認し、更に数cm下げたところ円礫の周辺に分布する土師器と焼土・褐色土を確認した。そのため隣接するN・S区を拡張したところII~III層中で、概ね南北に長い長方形を呈する竪穴平面とこれに重複する倒木痕跡を確認した。なお、本遺構周辺のI~III層は全体的に薄いことや、昭和30年代初頭まで畑地として利用されていたことからII層とIII層との区別が半然としない。

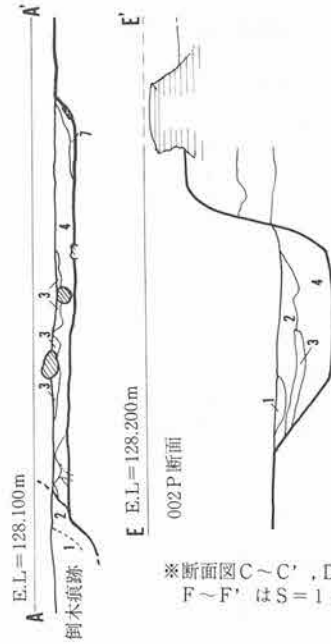
平面形は、東壁が内湾しカマドの設けられている南東コーナーは円味をもつ不整な長方形で、北壁の大部分は倒木痕によって破壊されている。カマドは南東コーナーに設けられており、カマドの中心線と竪穴長軸線とは39度の角度を有する。また竪穴長軸線と磁北とがなす角度は東偏8度で、長軸方向は概ね真北方向にある。竪穴の規模は、長軸方向上端300~306cm・同下端290~294cm、短軸方向上端254~282cm・同下端232~254cm、壁高は6~13cmと地点によって差が見られる。壁の外傾度も地点による差異が大きく30~55度である。

埋土は7層に区分しているが、5・6・7層は同時異層の可能性が考えられる。1・2層は倒木による攪乱を受けた層、3層は基本土層I層の下部で砂~シルト質の黒色~黒褐色土(10YR2/1、2/2)、4層は灰白色火山灰ブロックを含む砂質の暗褐色~黒褐色土(10YR3/2~3/2)である。灰白色火山灰は、大部分が大~中ブロックであるが小規模なレンズ状層も見られる。その他、径5~20cm・長さ10~60mmや板状で幅50~120mmの炭化片が4層下部から床にかけ多く含まれる。4層の分布状態は、壁から50~70cm離れた竪穴中心よりの床面を直接に覆い、遺物の大部分は下部に包含されている。

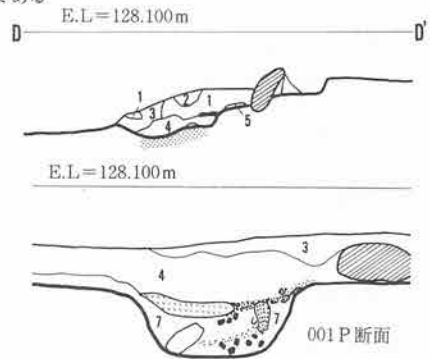
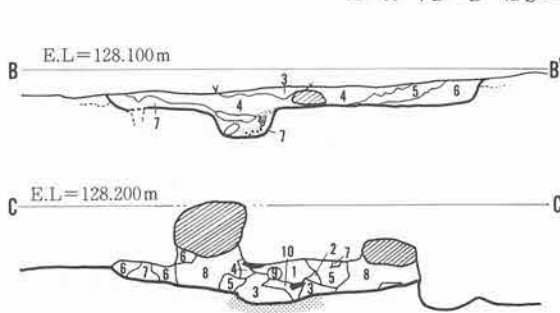
床は全体的にIV層中に形成されており、床面は掘り方痕跡や礫抜きとり痕と思われる小起伏が見られるものの貼り床の形跡は認められず、カマド前庭や周辺では踏み締めが見られる。ま



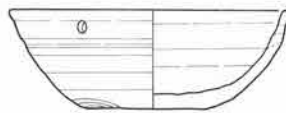
※住居址平面図および断面図の  
A~A', B~B' は S = 1 : 50 である



※断面図 C~C', D~D', E~E',  
F~F' は S = 1 : 20 である

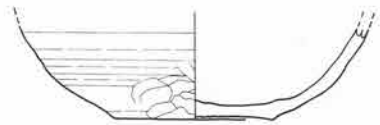


1

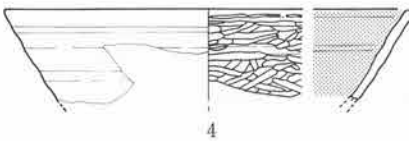


2

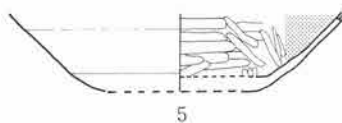
※遺物の縮尺は  
S = 1 : 3



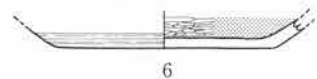
3



4



5

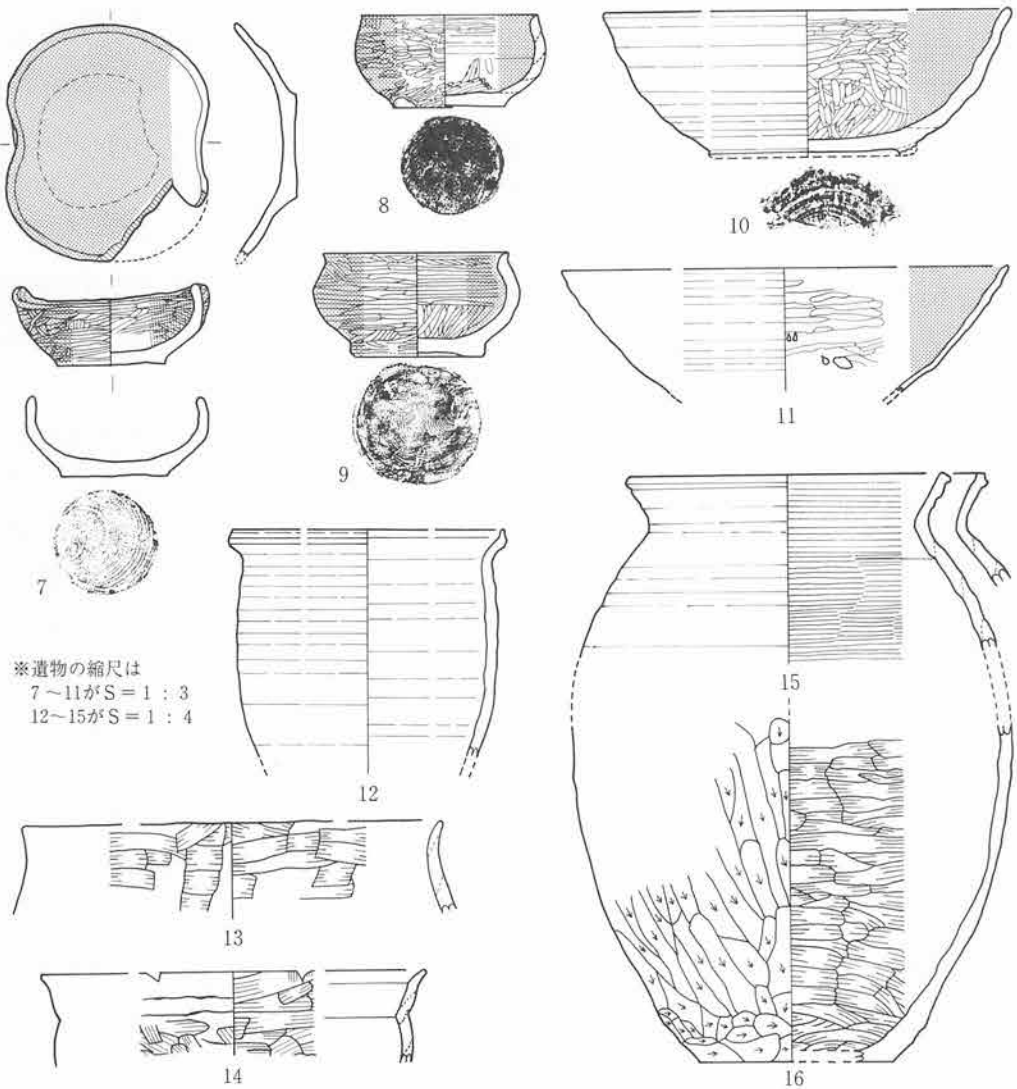


6

図版29 : G28-02住居址と出土遺物 (1)

た、西側の床や壁であるIII～IV層には大～小の円礫が散在している。床面で確認した施設・構造としては、カマド跡1基、小型土坑2基である。

カマドは1基で全体的に残りは良くない。確認した部位等は右袖の芯材礫1個、左袖の礫抜きとり穴1つ、燃烧部の浅い掘りこみ、そして両袖の基底である。両袖の基底は、地山のIV層を削り残したものであるが、被覆土は砂質～シルト質の褐色土(10YR4/4～4/6)を用いておりその大部分は燃烧部内に堆積している。また、カマド上部や周辺の崩壊土からは火熱を受けた5個の巨礫や礫碎片が多数出土している。燃烧部の浅い掘りこみは奥行38cm・幅35cm・深さ7cmで、ほぼ全面が強く赤化している。両袖基底の最大幅は102cm、左袖の幅30cm・長さ55cm、右



図版30：G28-02住居址と出土遺物（2）

袖の幅35cm・長さ70cmである。煙導・煙り出しの構造・規模は不明である。

土坑のうち、001Pは床中央付近で確認した上端径71×50cm・下端径42×32cm・深さ19cmの楕円形土坑で、底面はわずかに凹面をなしている。埋土は上部と下部で差が見られ、下部は少量の炭化材片を含む黒褐色(10YR2/2~2/3)で堅穴埋土の7層と連続しているが上部は同様の黒褐色土中にシルト質黄褐色土の小ブロックが混在し堅穴埋土の5層土に酷似し炭化材片が集積している。また、本層と4層との間には炭化材小片を混じえた灰白色火山灰のレンズ状層(2次層が堆積している。遺物は炭化材片以外には何ら出土していない。002Pは、西コーナーに接して設けられた土坑で上端径88×68cm・下端径65×40cm・深さ16cmの不整隅円方形を呈する。底面は露出礫や木根痕による小起伏が見られるが概ね平坦である。埋土は、下部の4層は堅穴埋土4層に酷似するが焼土粒が多く、全体的に団粒構造土である。埋土上部は、堅穴の3~2層に近似する層相を呈している。出土遺物は、図版29-4(写真図版21-4)の坏の一部が出土している。この坏は床面から出土した小破片と接合している。

遺物は、大部分がカマド崩土中か前庭の床~床に接する4層下部から出土しているが、図版29-1は北西コーナーに近い床から出土している。図版30-7~9の内外研磨・黒色処理の土器はカマド崩土の上部および4層から出土しており、7の一部は2次火熱により黒色処理が消失している。また同土器の欠損部は2次火熱のため崩壊している。図版30-16はG28-01住居址の埋土中から出土した口縁部破片(図版30~15)と同一個体と考えられる。

坏は何れも土師器で、小鉢と呼んでもよい器形のもの2個体を含めて10個体分が出土している。成形調整の有り方から次の4種に区分した。

- ①ロクロ成形調整・回転糸切り無調整のもの(図版29-1・2、写真図版21-3・2)。この2個体は焼成前に口縁に3つの穴が付けられており、その平面観位置はほぼ正三角形を構成する。また、2次熱によるものか他の要因によるものかは不明であるが内底面に炭化物膜の付着が見られる。
- ②ロクロ成形調整の後、外器面の底部周辺にヘラケズリ調整を施こしている。内面は荒れが著しく再調整の状態は不明である(図版29-3、写真図版21-5)。
- ③ロクロ成形調整→内面研磨→黒色処理(図版29-4~6、30-10・11、写真図版21-4・11・10、21-9・6)。これらの外底面は図版29-6と30-10が回転糸切り無調整で、他は不明である。
- ④輪積成形……ロクロ調整→内外面研磨→内外面黒色処理(図版30-8・9、写真図版21-7・8)。輪積痕は図版30-8の破断面に見られるが完形の30-9では確認できない。なお、図版30-8では研磨調整が底面にまで及んでおり、糸切り痕跡は極一部に見られるだけである。

耳皿は、坏の成形調整過程④と同様の過程を経ていると考えられる内外面研磨・黒色処理の土器である。しかし、破断面の観察では輪積成形の段階が存在するのかどうかは確認できない。なお、内底面の破線範囲は使用によると考えられる摩耗が見られる。

カメも全て土師器であるが、G28-01住居址出土の破片を含めた図版30-15・16（写真図版22-14・15・16）は高温焼成を受けており、器面の一部に溶融が見られる。カメは成形調整の有り方から次の3種類に区分できる。

- ①ロクロ成形調整のもので1個体分の破片12点が接合しているが底部周辺については不明である（図版30-12、写真図版22-7）。
- ②輪積成形→ロクロ調整の過程を経ているが、輪積成形調整の段階に内面にはヘラナデ調整が施こされ、ロクロ調整の後に外面下半にヘラケズリ調整が施こされている（図版30-15・16、写真図版22-14・15・16）。
- ③輪積成形でヘラナデ・ハケメ調整によるカメ（図版30-13・14、写真図版22-13・18・19）。何れも小破片が部分復原のため器形全体については不明である。

その他の遺物としては、敲打痕・敲打破砕面をもつ礫5点が出土している（写真図版22-20・21・22・23・24）。これら礫の形状・作用痕跡の位置は一定しないが敲打作業に用いられたものと考えられる。

〈G28-02住居址出土遺物観察表〉

通算番号	図版番号	写真図版番号	器種	出土地点	外面調整				内面調整			法量 mm			備考
					口縁部	体部上半	体部下半	底部	口縁部	体部上半	体部下半	口径	底径	器高	
1	29-1	21- $\frac{2}{5}$ $\frac{a}{b}$	坏	—	R	R	R	I	R	R	R	110~114	55~58	37~45	
2	29-2	21- $\frac{3}{3}$ $\frac{a}{b}$	坏	3層	R	R	R	I	R	R	R 剥物 膜付着	110~113	44~47	40	
3	29-3	21-5	坏	床	—	—	M・R	I	—	—	—	—	60~64	(30~37)	
4	29-4	21-4	坏	P2・床	R	R	—	—	M	M	—	(160~164)	—	(38)	内面黒色処理
5	29-5	21-11	坏	床	—	R	—	I	—	M	—	—	(56~60)	(28~30)	内面黒色処理
6	29-6	21-10	坏	4層	—	—	R	I	—	—	M	—	87	8	内面黒色処理
7	30-7	22-12	耳皿	カマド内	M	M	M	I	M	M	M	71~94	41~42	23~32	内外面黒色処理
8	30-8	21- $\frac{7}{7}$ $\frac{a}{b}$	(坏)	4層	R・M	M	M	I・M	M	R・M	M	70~72	44~46	35~37	内外面黒色処理
9	30-9	21- $\frac{8}{8}$ $\frac{a}{b}$	(坏)	カマド上部	R・M	M	M	I・M	R 痕 M	M	M	72~74	52~54	39~42	内外面黒色処理
10	30-10	21-9	坏	カマド 柄土 (4u)	R	R	R	I	M	M	M	(156~158)	(80)	57~62	内面黒色処理
11	30-11	21-6	坏	床・カマド	R	R	R	—	M	S・M	M	(178~180)	—	(48~50)	子実痕・内面黒色処理
12	30-12	22-12	壺	4~7層 カマド前	R	R	R	—	R	R	R	(120~125)	—	(91)	
13	30-13	22-13	壺		N	—	—	—	S・N	—	—	(220~226)	—	(47)	
14	30-14	22-18	壺		S・N	—	—	—	N	—	—	(200~240)	—	(50~52)	
15	30-15	22-14	壺	2層	R	R	—	—	R・N	S・N	N	(170~172)	—	(120)	
16	30-16	22-16	壺	床・カマド周辺	—	K	K	K	—	N	N	—	(50~55)	(180)	G28-01住・床と接合
17	—	22-15	壺	カマド	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
18	28-17	22-19	壺	3層・4層	—	H	M・N	—	—	S・H	H	—	—	(125)	

通算番号	図版	写真図版	器種	出土区層位等	法量 (mm, g)		岩質	生成年代・産地等	その他
					長さ×幅×厚さ	重量			
19	—	22-20	敲石		41×52×19	512	緑色凝灰岩	新第三系中新統、奥羽山地	
20	—	22-21	敲石		107×97×37	470	輝石安山岩	新第三系鮮新統、夏油川	
21	—	22-22	敲石		81×105×57	510	デイサイト	新第三系中新統、鈴鴨川～夏油川	
22	—	22-23	敲石		56×51×43	110	デイサイト	新第三系中新統、鈴鴨川～夏油川	
23	—	22-24	敲石		103×98×81	930	輝石安山岩	新第三系鮮新統、夏油川（流域）	

(9) G29-01住居址

(図版31・32・33、写真図版23・24)

本遺構は、G29-L・M・Q・Rの4小調査区にまたがって位置している。確認状況は、表土（I層）を10cmほど除去したところG29-M・Rで灰白色火山灰のブロックや炭化材片、そして土師器の小破片が散在しているのを確認。更に周辺を広げクリーニングをしたところ概ね長方形に広がる多湿部とそれを取りまく帯状の褐色～黄褐色土を確認した。帯状の褐色～黄褐色土は、倒木根・木根・耕地造成などによる攪乱のため全周してはいない。本住居址周辺の土層堆積状態・人為作用の状況は、G28-01住居址・G28-02住居址周辺と同様である。

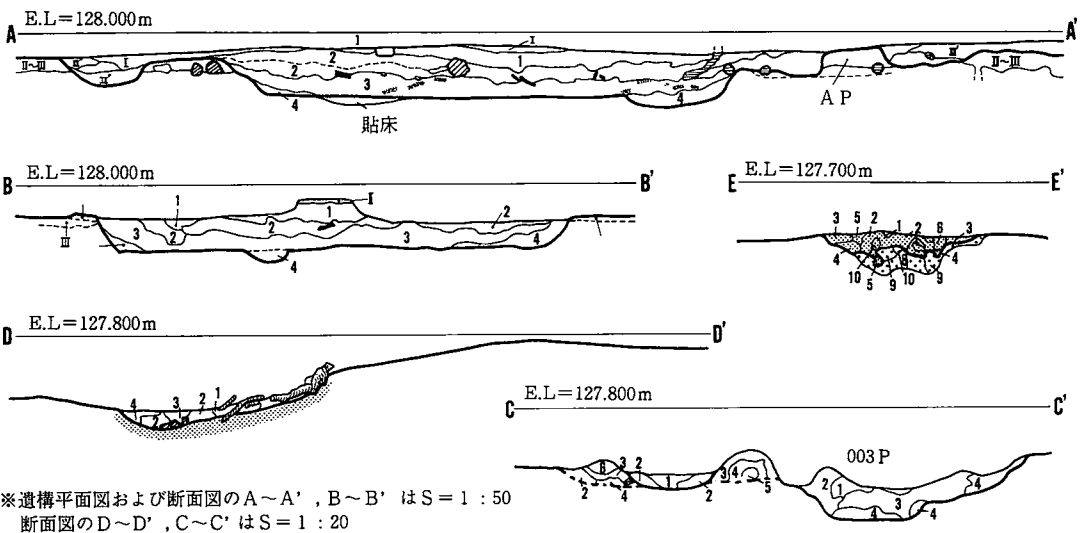
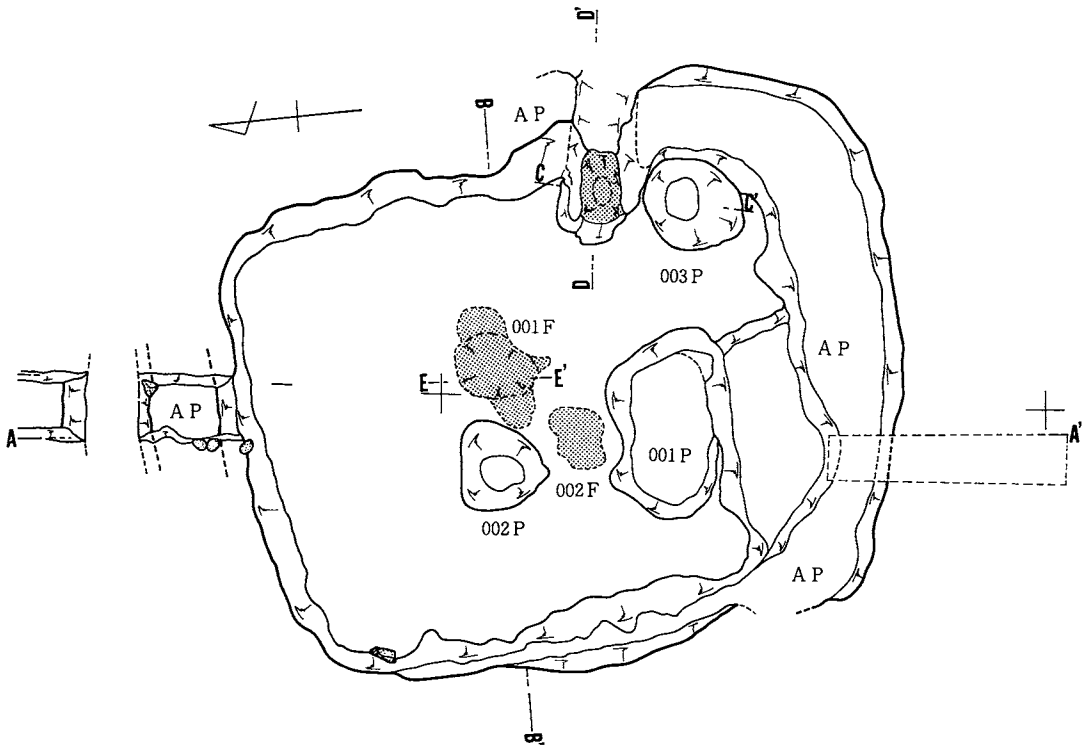
平面形は、竪穴の各コーナーが円味をおびたやや不整の長方形で竪穴外周には周堤と周溝と考えられるくぼみをもっているが、それらの全体は不明である。特に周溝については不注意からほとんどを削平し、部分的に確認しただけである。カマドは東壁の南よりに設けられており、カマドの中心線と竪穴長軸線とは南偏71度の角度を有し、また竪穴長軸線と磁北とがなす角度は西偏8度である。竪穴部の規模は、長軸方向上端382～374cm・同下端365～350cm、短軸方向上端324～308cm・同下端284～260cm、壁高は最大31cmであるが概ね18～26cmと部分による差が大である。壁の外傾度は30～60度で部分による差異が大きい。周堤の幅は30～60cm、周溝の幅は50～64cm・深さ12～20cmである。また、南壁の西側よりには一段高い床面があり周堤上面との差10～12cm、低い床面との差13～14cmである。

埋土は4層に区分している。1層は極小粒の炭化材小片（1～3mm）と砂シルト質黄褐色土小ブロック（10YR5/6～5/8）を混じえた砂質黒褐色土（10YR2/2～2/3）であるが、黄褐色小ブロックの混在率によって色調に多少の差異が見られる。2層は、砂質褐色土（10YR3/3～3/4）と砂質の灰白色火山灰（10YR8/2）との不規則な混合層で全体としては両者の混合比によって一定しない。炭化材小片（10～15mm）を不規則に含み、下部ほど多くなる。3層は、砂質の黒褐色土（10YR2/2～2/2.5）を主体とするが10YR2/3やYR3/2などが部分的に見られ、榿材や柱材の断片と考えられ炭化材、および炭化材片、焼土ブロックが多量に含まれる。壁よりでは砂～シルト質黄褐色や褐色土（10YR4/4～4/6）の小中ブロックを15～25%含む。4層は竪穴全体には認められず、壁に近い範囲に分布・堆積し所によっては3層との層界が判然としない部分も見られる。本層の性状等は、砂質黒褐色土（10YR2/2～2/3）に砂質黄褐色土（10YR5/6～5/8）や焼土ブロックが30～40%混在し、上部と下部には炭化材小片が含まれカマド周では多量の遺物を被覆～包含している。

遺物包含層は2層下部から4層であるが、全体的には3層が中心であり、カマド周辺では4層となる。なお同一個体の破片でも2層下部から床面にまで分布するものも見られる。

床は、一面ではなく南側には13～14cmの段差をもって一段高い面が見られるが全体的にIV層中に形成されている。床面には掘り方痕や礫抜きとり痕と思われる凹凸が見られ、全体的に緩





※遺構平面図および断面図のA~A', B~B' はS = 1 : 50  
 断面図のD~D', C~C' はS = 1 : 20

図版31 : G29-01住居址

やかな起伏が見られる。北側には部分的に貼り床が見られ、カマド周辺や床中央付近、そして高い床面は踏み締めによる固い面が見られる。床面等で確認した施設・構としては、カマド跡1期、土坑3基、炉跡様の焼土2基である。

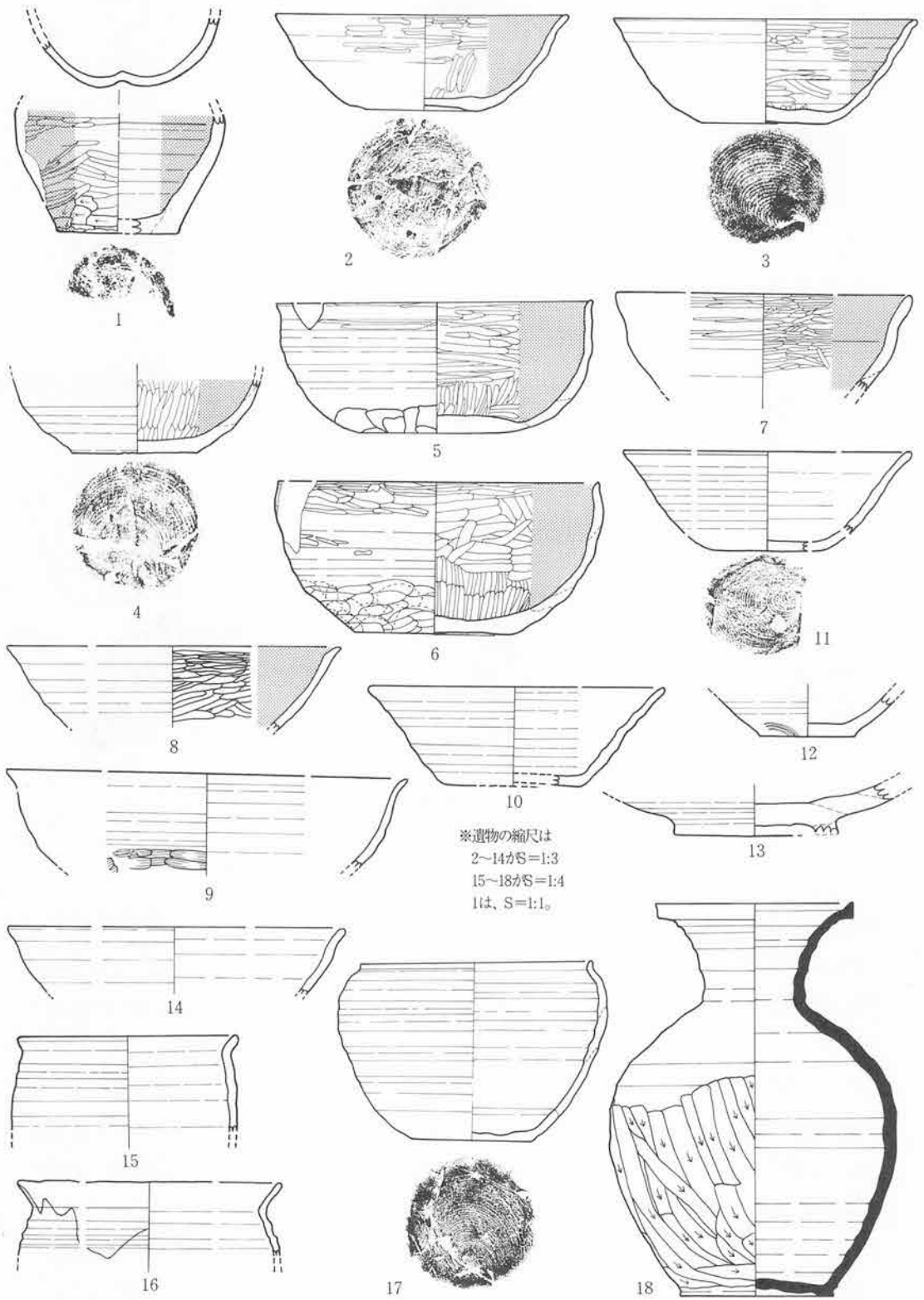
カマドの遺存状態は非常に悪く、確認した部位等は左右の袖の基底、燃焼部底面とこれにつづく煙導部底面である。袖の基底の前庭側は床を掘りこんだ上に砂～シルト質の褐色土や黄褐色土(10YR4/4～4/6、5/6～5/8)を盛土し、燃焼部底面と袖を形成している芯材礫や埋設痕は認められない。両袖の最大幅は56cm、左袖の幅19～17cm、右袖の幅20～12cmである。燃焼部は前庭から下り浅い掘りこみとなったのみ、煙導口に向ってゆるやかに立ちあがる。その底面は強変した焼土を形成し、焼土の範囲・規模は燃焼部底面のくぼみと一致し奥行き46cm・最大幅27cm・厚さ5cmである。煙導底面は、燃焼部奥端から緩やかに立ちあがってI層中に達するため幅20～38cm・長さ52cmを確認しただけで、煙り出し部はもとより煙導の構造も不明である。カマド形成土は、カマド内・周辺の土坑内や床に堆積しているが礫碎片はほとんど見られない。

焼土は001Fと002Fの2基を確認している。001Fは径50×48cm・深さ6～10cmの不整形な掘りこみに形成された焼土で、掘りこみ底面や周辺も強く赤化している。002Fは、掘りこみは認められず床土が2～3cmの厚さで焼土化しているもので、その範囲は43×33cmである。

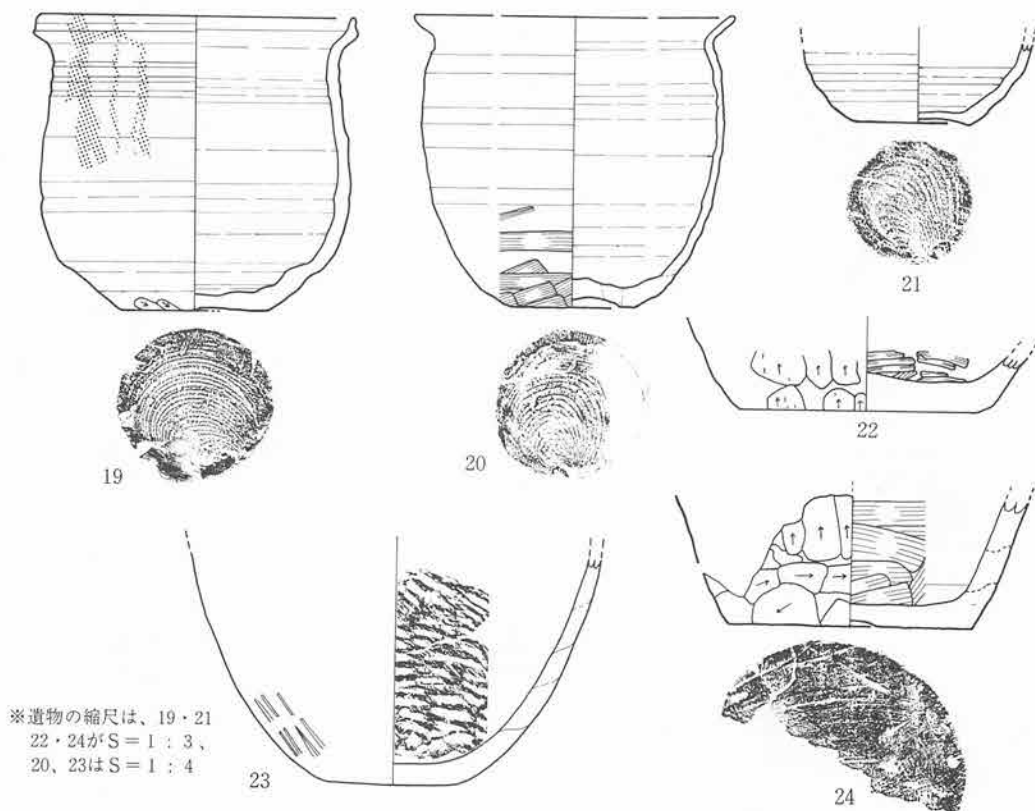
土坑のうち001Pは、一段高い床面の北側に接する土坑で長径上端125cm・同下端97cm、短径上端93cm・同下端60cm、深さ12～15cmで底面はわずかに起伏が見られる。埋土は、竪穴埋土の4層土の単層であるが底面には多量の炭化材片と焼土ブロックが見られ、遺物は含まない。002Pは、001Fの西側に形成された土坑で口径60×58cm・底径28×22cm・深さ10cmで、埋土は竪穴埋土の3層土である。003Pは、カマド右側に設けられた不整形の土坑で口径73×58cm・底径24×20cm・深さ13cmで、埋土はカマド等の崩壊土を中心とした4層土である。遺物は底面近くと埋土上部から図版32-16(写真図24-20)の鉢形土師器の一部と図版32-8(写真図版24-13)の坏破片などが出土している。

遺物は、平面的にはほぼ全体から出土しているが床面～床に近い3層中のものは中央からカマド周辺に集中している。これらの遺物は、投げこみと考えられるものも含まれるが炭化材の下から出土するものと上位層から出土するものとが接合したりで、投げこみと遺棄との区別は判断しかねる。遺物の種類としては、外面研磨黒色処理の器種不明品、坏・カメ・壺が出土しているが、壺は須恵器で他はすべて土師器である。坏・カメは、成形・調整の有り方から各々に数種類に区分される。

器種不明の外面研磨・黒色処理の土師器は、極小形の土器であるが器形全体は不明である。成形・調整は、輪積成形・ロクロ調整の後に外面に研磨調整と黒色処理を施している。なお、未乾燥時に外からの押圧によって縦位のくぼみを形成しており、内面にはロクロ目だけが見ら



図版32：G29-01住居址出土遺物（1）



図版33：G29-01住居址出土遺物（2）

れる（32-1、写真図版23-4）。

坏は何れも土師器で、器形および成形調整等が多様である。これらは2次火熱により器面が荒れて再調整の痕跡が不明瞭なものも見られるが、成形調整の有り方から次の4種類に区分できる。

- ①ロクロ成形調整の後、内面の研磨・黒色処理を施こしているもの（図版32-2・3・4、写真図版23-5・6、24-8）。この種類の坏は、外面の口縁付近にも研磨が施こされるものがあり、底面は回転糸切りで底面縁辺にわずかな調整が見られるだけである。図版32-4は、輪積痕に酷似する特徴が見られることから④に入る可能性がある。
- ②ロクロ成形調整・回転糸切りで、底面縁辺にわずかな調整が見られるだけのもの（図版32-10~12・14、写真図版23-7、24-11・14・15）。図版32-9は、外面の底部付近にヘラナデ調整が見られるが本種に含まれるものとする。

③輪積成形の後、ロクロによる器面調整を行っているが他の2次調整は何も見られないもの。

1点だけで勾台付の坏である（図版32-13、写真図版24-17）。

④輪積成形の後、ロクロによる器形・器面調整を行い内外面に研磨・ヘラナデ・ヘラケズリなどの再調整を施し、内面には黒色処理を行うもの。底面にもヘラナデ、ヘラケズリ・研磨などの再調整が施こされている（図版32-5・6、写真図版24-12・9）。

カメも土師器だけで、器形および成形調整は坏と同様に多様である。これらは成形調整の有り方から次の5種類に区分できるが、大部分は破片である。

①ロクロ成形調整で、底部周辺や底面縁辺にヘラケズリ・ヘラナデの再調整がわずかに見られるもの（図版33-19、写真図版24-21）。

②ロクロ成形調整で、再調整の形跡が認められないもの（図版32-15・16、33-21、写真図版24-18・19・25）。

③輪積成形・ロクロ調整の後、底部周辺や底面縁辺にヘラナデ調整を施こしているもの（図版32-17、33-20、写真図版24-20・24）

④輪積成形で叩き調整痕をもつもの。内面には平行沈線状の叩き目が無調整のままで見られ、外面では同様の叩き目痕跡が見られるがナデ調整のため不明瞭である（図版33-23、写真図版24-23）。

⑤輪積成形で内面にはヘラナデ調整、外面は底面を含めてヘラケズリ・ヘラナデによる調整が施こされている（図版33-22・24、写真図版24-26・27）。

壺は須恵器で、口縁の一部と体部の一部を欠失しているが器形は判明する状態にある。内外面にはロクロ調整痕、外面下半にはヘラケズリ調整が見られる。頸部断面には接合痕らしき形跡も見られるが判然としない（図版32-18、写真図版24-22）。

〈G29-01住居址遺物観察表〉

通算 番号	図版 番号	写真図 版番号	器種	出土地点	外 面 調 整				内 面 調 整			法 量			備 考
					口縁部	体部上半	体部下半	底 部	口縁部	体部上半	体部下半	口 径	底 径	器 高	
1	32-1	23-4	?	2 u・3 l	—	M	S・K	—	—	R	—	—	(39)	(37)	外面黒色
2	32-2	23-5	坏	3 u	R・M	R・M	—	l	M	M	M	140~ 143	53~56	45~47	内面黒色処理
3	32-3	23-6	坏	3 u	R	—	—	l	R・M	R・M	R・M	146~ 148	59~60	50	内面黒色処理
4	32-4	24-8	坏	床・カマド	—	—	S・R	l	—	—	M	—	57~60	(35)	内面黒色処理
5	32-5	24-12	坏	床	R・M	R	K・N	—	M	M	M	153~ 160	83~87	63~65	内面黒色処理
6	32-6	24-9	坏	床	—	S・R	K・N R	—	回転M	—	M・ 放射状	153~ 156	70~75	71~76	内面黒色処理
7	32-7	24-10	坏	3 u	R 回転M	R	S	—	M	M	—	(142)	—	(50)	内面黒色処理
8	32-8	24-13	坏	床・P3	R	R	—	—	M	M	—	(160~ 164)	—	(40)	内面黒色処理
9	32-9	24-16	坏		R	N・M	—	—	R	R	—	(205~ 215)	—	(45~ 53)	
10	32-10	24-14	坏	3 u	R	R	R	—	R	R	R	(143)	(73)	48	
11	32-11	23-7	坏	1~2	R	R	—	l	R	R	—	(140)	(55)	48	
12	32-12	24-11	坏	—	—	R	—	—	—	—	—	—	46	(19)	

通算 番号	図版 番号	写真図 版番号	器種	出土地点	外 面 調 整				内 面 調 整			法 量 mm			備 考
					口縁部	体部上半	体部下半	底 部	口縁部	体部上半	体部下半	口 径	底 径	器 高	
13	32-13	24-17	坏	3 u	—	—	S・R	—	—	—	—	( 80)	( 24)		
14	32-14	24-15	坏		R	R	—	—	R	R	—	(164~ 164)	—	( 38)	
15	32-15	24-18	甕	E13 u	R	R	—	—	R	R	—	(107)	—	( 45)	
16	32-16	24-19	甕	E 2	R	R	—	—	R	R	—	(166)	—	( 46)	
17	32-17	24-20	鉢		R	S・R	—	I	R	R	—	(145~ 148)	70~73	111~ 115	
18	32-18	24-22	壺	3層	R	R	K	—	R	R	R	(124~ 126)	96~98	250~ 254	須恵器
19	33-19	24-21	甕	カマド	壺の流 れた跡 R	壺の流 れた跡 R	K	I	R	R	R	(124~ 127)	( 60~ 63)	(116~ 119)	
20	33-20	24-24	甕		R	R	S・N	I	R	R	R	(172)	68	155	
21	33-21	24-25	甕		—	R	R	I	—	R	R	—	46	( 32)	
22	33-22	24-26	甕	カマド	—	—	S・K	N・K	—	N	—	—	93~ 100	( 35~ 37)	
23	33-23	24- <sup>23 a</sup> 23 b	壺	床・2	—	—	S・K	K	—	—	N	—	( 80)	(121)	
24	33-24	24-27	甕	3 u	—	—	磨き目 S・K	—	—	—	磨き・H	—	( 98~ 100)	( 50)	

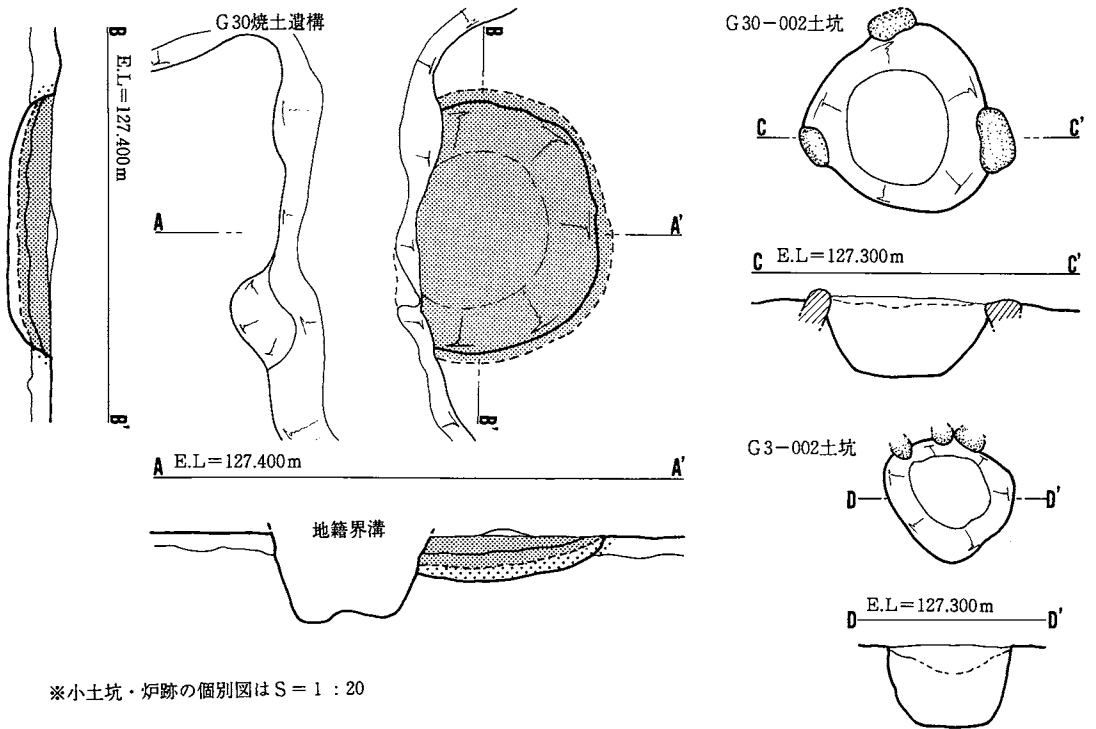
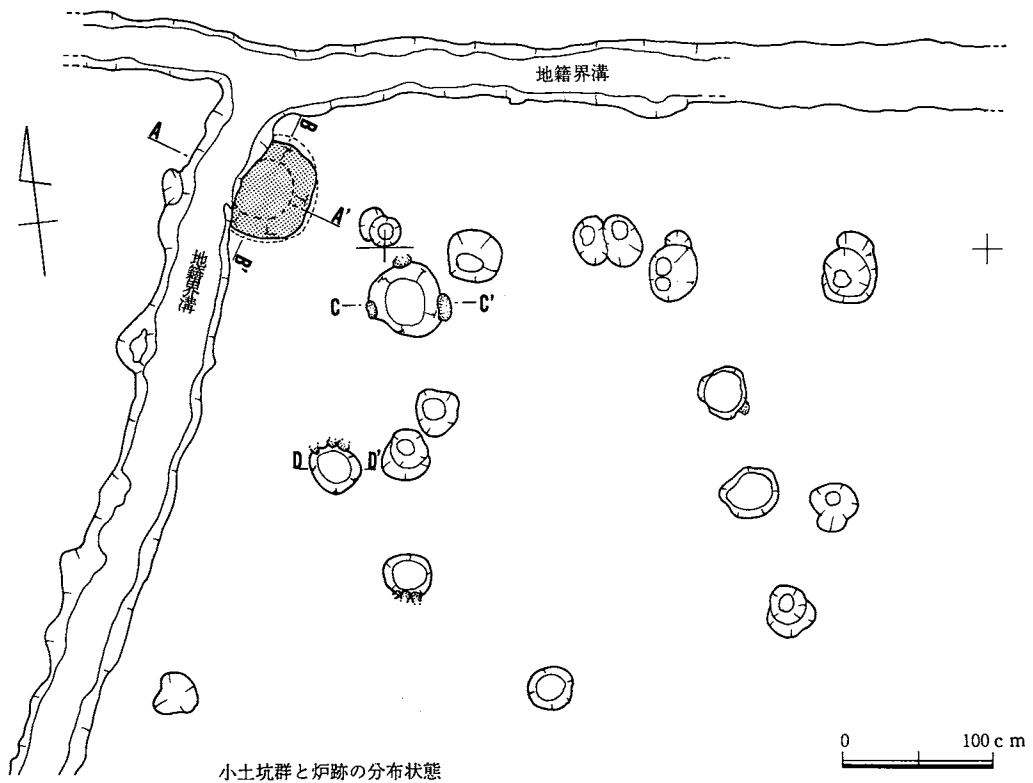
(10) G30区小土坑群と炉跡

(図版34・35、写真図版25)

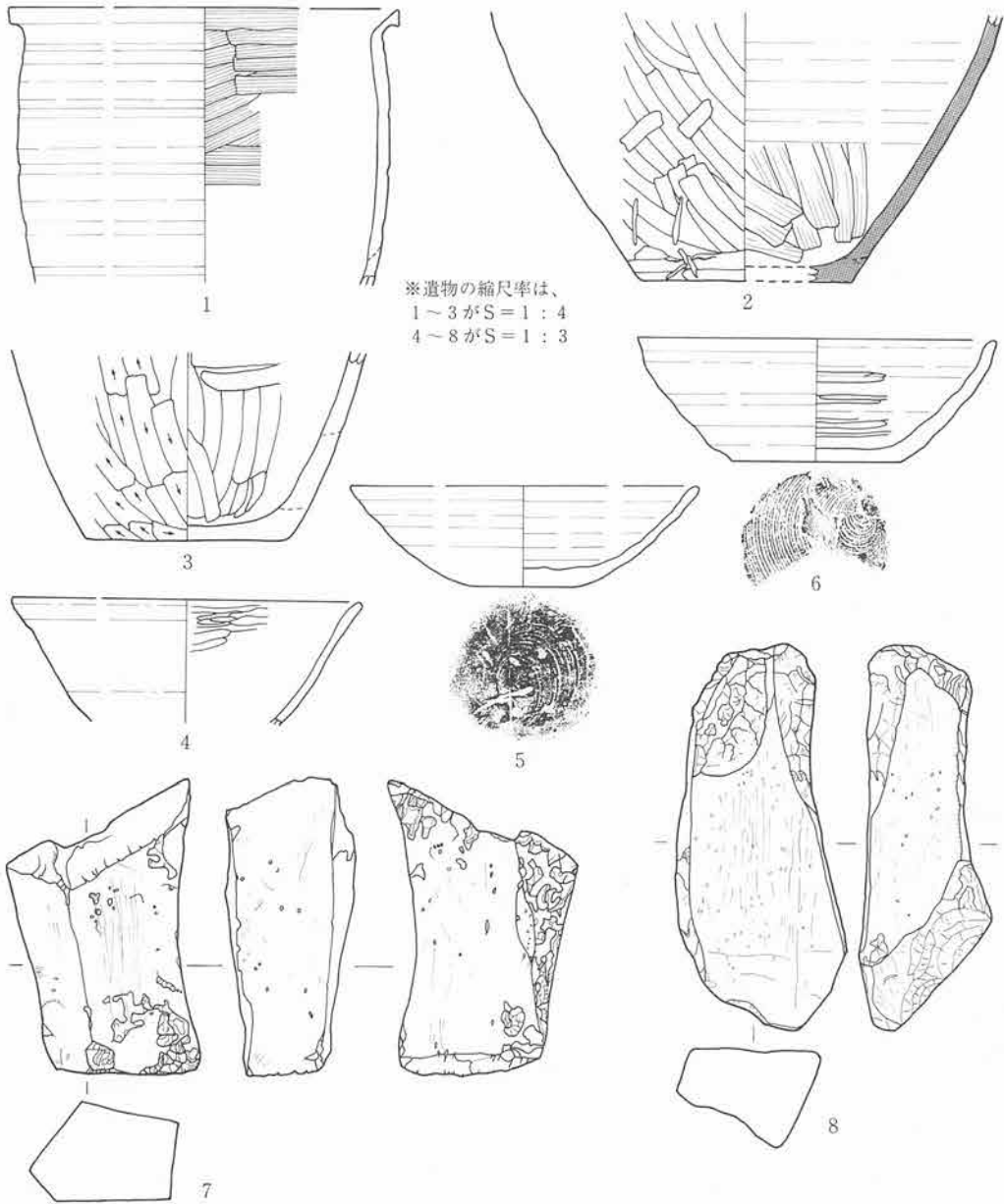
本遺構群は、G30-Y区を中心とした6×4mほどの範囲に、炉跡1基と柱穴様の小穴を含めた19の小土坑が不規則に分布しているものである。これは、I層(旧耕作土)を除去したII~III層中で確認したもので各小土坑の掘り方・規模は一樣ではなく、開口部あるいは底部に重複様の段差をもつものも見られる。周辺には近代以降に形成された地籍界および地目界を示す溝が存在し、炉跡はこの溝によって一部が破壊されている。

炉跡は、一部が破壊されているため全体の形状・規模は不明であるが、遺存部の形状からほぼ円形と推定できる。確認規模はA~A'方向50cm、B~B'方向72cm、炉床までの深さ6cmである。しかし炉床はIV層まで掘りこんだ径53×76cm、深さ13cmの土坑に厚さ4~8cmのシルト質土を貼り付けて凹面に作っており、貼り付け土の上部は強変・赤化下部は弱変し、炉床形成部の周辺3~4cmも強変赤化している。埋土は単層で、炭化物小粒・焼土小粒を含んだ砂質黒色土(10YR1.7/1)で遺物は出土していない。

G30-002土坑は、不整円形の土坑で口径50×50cm・底径30×26cm・深さ20cmである。埋土は小中礫・炭化材小片を混じえた砂質黒色土(10YR1.7/1)で、上部には土師器カメの底部破片と須恵器壺の底部破片(図版35-2・3、写真図版25-3・4)と多量の焼土小粒が見られる。なお、土坑縁辺に見られる礫はIV層中の露出礫である。G30-003土坑も不整円形の土坑で口径33×30cm・深さ23cmである。埋土下部は小中礫と少量の炭化材小片・焼土小ブロックを含んだ砂質黒色土(10YR1.7/1~2/1)で、上部は下部よりも多くの炭化材小片を含んだ砂質黒色土(10YR1.7/1)であるが、上部と下部との層界は判然としない。遺物は、図版35-1(写真図版25-2)のカメ破片が出土している。



図版34 : G30区小土坑群と焼土遺構



図版35:G30区小土坑群周辺の出土遺物

その他の小土坑は、口径が20～38cm、深さ10～25cmの範囲にあり、埋土は炭化材小片を含んだ砂質黒色土(10YR1.7/1～2/1)で、何れの土坑からも遺物は出土していない。これらからは小規模な建物跡が考えられるが、配列・埋土等からは不明である。

遺構群周辺からは前述の遺物の化に、それらと接合する坏・カメ・壺の破片や砥石が出土し



ている。土師器の坏・カメ破片は2次火熱を受けていたり風化が著るしかつたりで、器形を推定できる程度に復原できたものは図版35（写真図版25）に示した土師器のカメ破片2点、同坏3点、須恵器の壺破片1点である。土師器の坏は、細部の相違を除けば①ロクロ成形調整内面研磨の群と②ロクロ成形調整と底部縁辺のヘラナデ調整の群に区分できる。しかし①については2次火熱を受けているため内面の黒色処理については不明である。カメは、輪積成形・ロクロ調整の後、内面は横ナデおよびヘラナデ調整を、外面はヘラケズリ・ヘラナデ調整を施こしたものとが見られる。須恵器の壺は、輪積痕については不明で内面はヘラナデ調整の後にロクロ調整を、外面はロクロ調整の後にヘラケズリ調整を行っている。砥石は2点出土しており、岩質・産地は何れも斜長石流紋岩で雫石川支流の志戸前川流域である。図版35-7（写真図版25-8）は3面を使用しており、図版35-8（写真図版25-9）は2面を使用している。

〈G30区小土坑群周辺遺物観察表〉

通算 番号	図版 番号	写真図 版番号	器種	出土地点	外 面 調 整				内 面 調 整			法 量 mm			備 考
					口縁部	体部上半	体部下半	底 部	口縁部	体部上半	体部下半	口 径	底 径	器 高	
1	35-1	25-2	壺	033pit	R	S・R	—	—	Y	N	—	210	—	(150)	
2	35-2	25-3	壺	002pit	—	—	K	—	—	—	N・R	—	(113)	(144)	須恵器
3	35-3	25-4	壺	002pit	—	—	K・M	—	—	—	S・N	104	—	(101)	
4	35-4	25-5	坏	N-II h	R	R	—	—	—	M	—	(140~ 144)	—	( 50)	
5	35-5	25-6	坏	N-II u	R	R	N・M	I	R	R	R	(144)	38~42	( 40~ 42)	
6	35-6	25-7	坏	N-II u	R	R	R	I	R・M	R・M	R・M	(147)	70	50	内面に黒斑あり

通算 番号	図版	写真図版	器 種	出 土 区 層 位 等	法 量 (mm, g)		岩 質	生 成 年 代・産 地 等	そ の 他
					長さ×幅×厚さ	重量			
7	35-7	25-8	砥石	N-II u	122×73×42	495	斜長石流紋岩	新第三系中新統、雫石志戸前川	
8	35-8	25-9	砥石	N-II u	156×67×52	440	斜長石流紋岩	新第三系新統、雫石志戸前川	

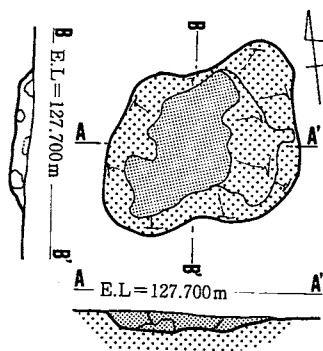
2. 焼土遺構と土坑

本項では、住居址に直接伴わない大小の土坑をとりあつかう。これらには土坑底面や埋土中に焼土を伴うもの、規模・形態から住居址状穴・竪穴遺構として区分してもよいもの、単独の柱穴などが含まれるが多くの土坑は用途・機能を示す遺物等は出土していない。

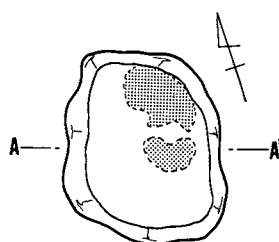
(1) E29—焼土遺構

(図版36、写真なし)

両焼土ともⅢ層中に形成された浅い土坑に伴う焼土で、所属時期を示す遺物は何ら出土していない。No.1は、E29—I区に位置する土坑の埋土として焼土が堆積し、土坑底面も焼土化していたものである。土坑は平面形・掘り方ともに不整形で最大径96cm・直交方向75cm・深さ9cmである。No.2は、E29—F区に位置する土坑の埋土として焼土(2層)が堆積していたものである。土坑は不整形楕円の平面形を呈し、その規模は長径73cm・短径66cm・深さ7cmで、底面は概ね平坦であるがNo.1のように焼土化はしていない。



E 29-N o. 1 焼土 (S = 1 : 30)



A E.L. = 127.700m A'



E 29-N o. 2 焼土 (S = 1 : 30)

図版36 : E 29焼土 (N o. 1, N o. 2)

(3) F 25-001土坑 (図版38、写真図版27-2)

本遺構は、F 25-U区に位置している。確認状況は、重機により I~II層を除去した後に木根除去とクリーニングをしたところ概ね掘りあげ平面図と同様に分布するにぶい黄褐色や黄橙色 (10YR5/3、5/4、6/3~6/4) の粗砂質砂を確認した。

平面形は、東側に張り出しをもつ不整形で張り出し部を除いた規模は南北上端235cm・同下端196cm、東西上端251cm・同下端222cm、張り出し部の長さ40cm・幅90cm、壁の高さは15~22cmである。

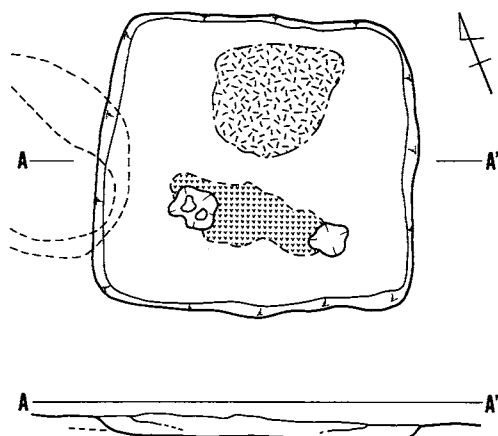
(2) I 13-001土坑 (図版37、写真図版27-1)

本土坑は、I 13-M区に位置しており、その確認状況は木根除去の後にIII層上部で遺構の存在が判明したが、木根等による攪乱のため平面形が判然とせず更にIII層上部を除去して把握した。

平面形はやや不整の隅円方形で、規模は南東~北西の上端215cm・同下端195cm、直交方向上端200cm・同下端185cm、深さ12cmである。

床はIV層上部に形成されており、床面は木根による凹凸が見られるものの概ね平坦で北東側には踏み締めによると考えられる固い部分があり、南西側には灰白色火山灰の薄い堆積とこれを破壊攪乱した木根痕が見られる。柱穴・焼土・溝は認められない。

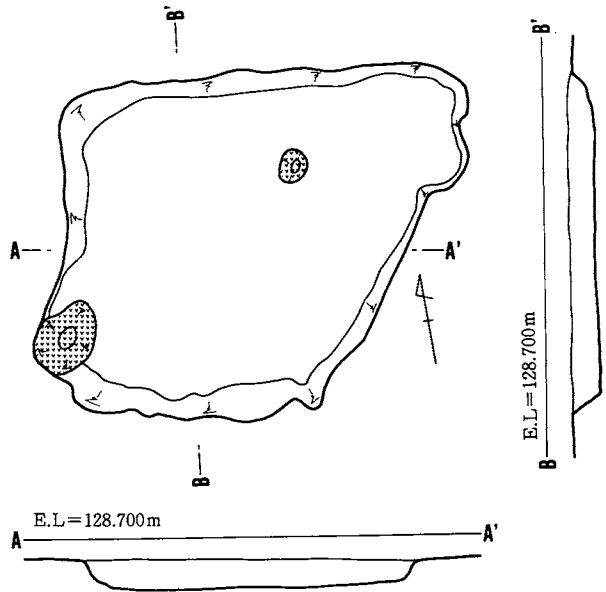
埋土は、壁よりでは2層に細分できるが中央付近では色調・構成物粒子が漸変するため区分界は判然としない。遺物は、土師器カメの小破片が出土している。



図版37 : I 13-001土坑 (S = 1 : 50)

床はIV層中に形成されており、床面は全体的に南西側に傾斜し多少の凹凸が見られるものの全体的に固く締っている。床面で確認した施設・構造としては小土坑2つで、これらの埋土は何れも灰白色火山灰である。南西コーナー付近の土坑は口径50×40cm・深さ24cmの不整楕円形の土坑である。北東より床面の小土坑は口径24×20cm・深さ16cmの柱穴様土坑である。

遺物は、埋土・小土坑・床の何れからも出土していない。



図版38： F25-001土坑 (S = 1 : 50)

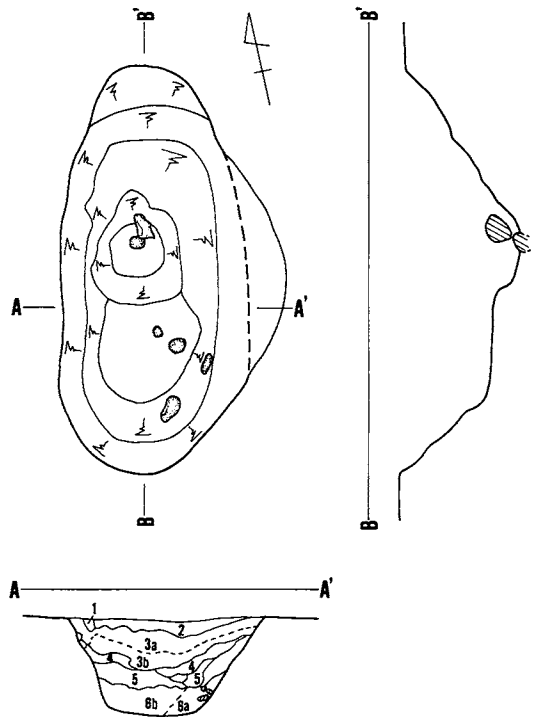
(4) H13-001土坑

(図版39、写真図版27-4)

本遺構はH13-P・u区にまたがって位置している。確認状況は、I13-001土坑と同様であるが、III層土が薄いため平面形を把握したのはIV層上面である。

平面は、北北東-南南西方向に長軸をもつ小判形の土坑で、底面は小土坑状に一段低くなる北北東側と平坦な南南西側とに分れる。断面形は、長軸・短軸ともに逆台形を呈する。規模は長軸上端216cm・同下端146cm、短軸上端100cm・同下端40~56cm、深さは底面が2段になっていることから62cmと46cmとなる。

埋土は6層に区分したが、全体的に黒色~黒褐色土(10YR1.7/1



図版39： H13-001土坑 (S = 1 : 40)

～2/2)を主体とし、これに明黄褐色砂やにぶい黄褐色砂のブロックの混在率や、同一黒色土でもラミナ様篩い分け部を基準にして区分している。

遺物は、縄文土器片・土師器のカメ破片が各々数点ずつ出土しているが何れも小片である。

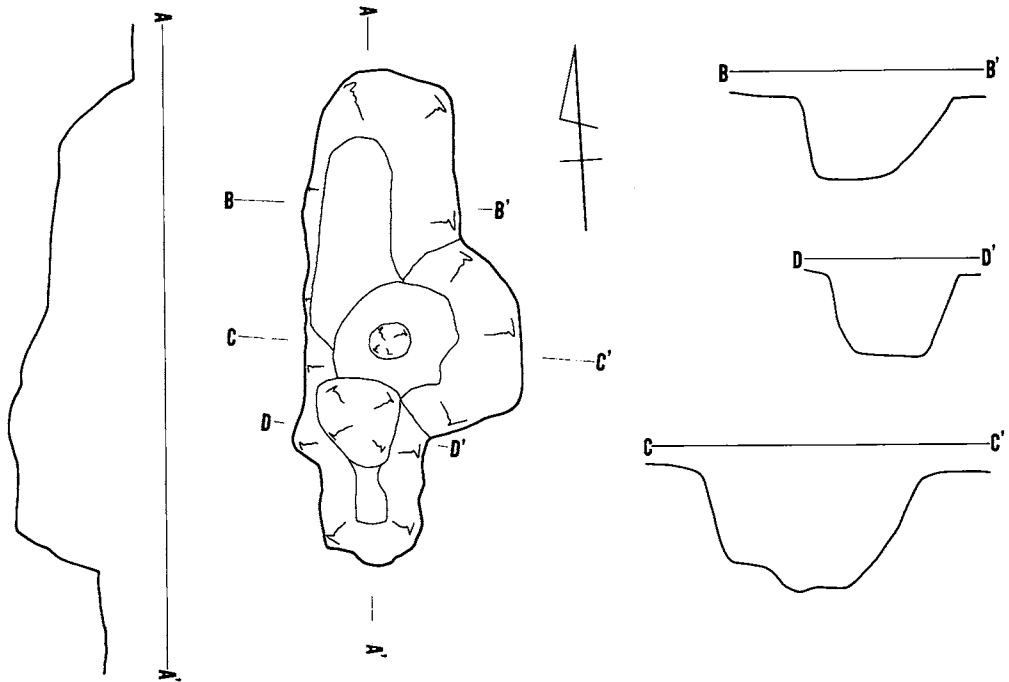
(5) H13-002土坑

(図版40、7-A～A'、写真図版27-3)

本遺構はH13-S区に位置し、その上位にはH13-01住居址が重複している。確認状況は、H13-01住居址の平面形を明確に把握した段階のIII層下部で住居址北壁の外側に接している本土坑を確認した。

平面形は、ほぼ南北に長軸方向をもち小判形土坑と円形土坑とが重複したような形状であり、表現しがたい形状である。底面は3段に分れ、全体的に南側が低く、断面形は図化地点によって異っている。規模は、長軸上端262cm・同下端202cmであるが短軸方向は断面形と同様に各層によって異っている。B～B'上端84cm・同下端32cm、C～C'上端116cm・同下端116cm・同下端60cm、D～D'上端70cm・同下端34cmである。深さはBライン40cm、Cライン64cm、Dライン65cm、南側の平坦面60cmである。

埋土は、大別4層にまとめることができるが各層とも大小ブロックの構成であり、一部は埋めもどし様の堆積状態を示す。全体的に下部はにぶい黄橙色や黄褐色土ブロックと黒色土ブ



図版40：H13-002土坑 (S=1:40)

ロックの不均一な混合構成で、中部は黒色～黒褐色土 (10YR2/1~2/2) を主としたものに暗褐色土・黄褐色土等のブロックが混在し、上部は黒色土 (10YR1.7/1~2/1) で他のブロックは非常に少ない (図版7-A~A' 参照)。

遺物は出土していない。

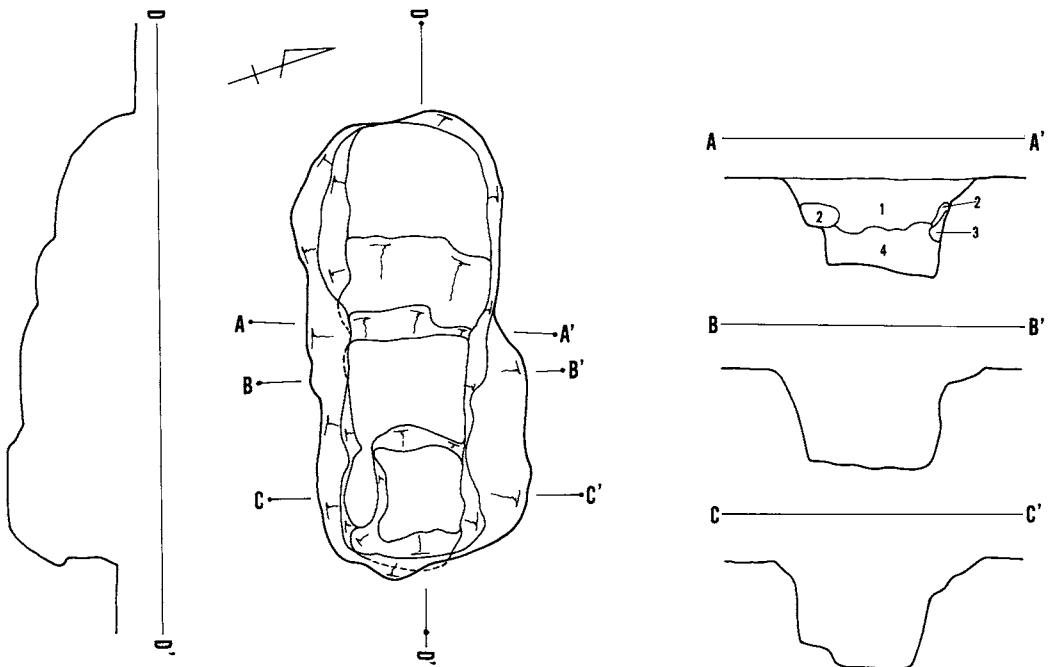
(6) E28-001土坑

(図版41、写真図版28-5a・5b)

本遺構は、E28-01住居址の南々西側であるE28-P区に位置しており、確認層位はIII層下部である。

平面形は、ほぼ北西-南東方向に長軸をもつ隅円方形の土坑で土坑長軸と磁北とがなす角度は西偏72度である。底面は4段に分れ北西側から南東側へと階段状に下っているが、北西側の1段目と2段目は曲面状態である。規模は、長軸上端188cm、同下端165cm、直交方向は部分による差異が見られ75~85cmの範囲にある。深さは各々の底面の最も深い所4点を示す。1段目19cm、2段目32cm、3段目39cm、4段目46cmである。

埋土は4層に区分しているが2層と3層は壁上部の崩壊土によるブロック構成層で壁際に堆積している。1層は上部の黒褐色から下部の



図版41：E28-001土坑 (S=1:30)

黒色土 (10YR2/2~2/1) へと漸変し、全体的に炭化材小片が散在する。2・3層は、壁の崩壊土で砂質~シルト質の暗褐色土・黄褐色土などの中小ブロック構成層である。4層は、砂質黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土のブロック構成で中央よりほど暗褐色土・黄褐色土の小中粒ブロックが多い。

遺物は何ら出土していない。

(7) F27-001土坑

(図版42、写真なし)

本遺構はF27-E区に位置している。本遺構周辺は、立木の伐採・搬出時の重機軌道痕と抜根による攪乱が見られ遺構の確認層位はIV層上面である。

平面形は、北西-北東方向に長径をもつ不整形円形であるが北東側に柱穴と考えられる深い部分が見られる。開口部の規模は長径110cm・短径86cm、柱穴部口径は50×48cm、柱痕跡部は32×28cmで深さ76cmである。

埋土は、柱穴部の下部を細分できなかったことから根固めとして埋められた3層土を含めて全3層に区分した。1層は黒色土ブロックが不規に混在した砂質黒褐色土 (10YR2/2~2/3) で柱穴上部を除いて非常に固く締っている。2層は、炭化材小片・にぶい黄褐色土小ブロックが混在した砂質の黒色~黒褐色土 (10YR2/1~2/2) で非常にやわらかい。3層は、炭化材小片が少量混在したにぶい黄橙色 (10YR7/2~7/3) のシルト質粘性土で非常に固く締っている。

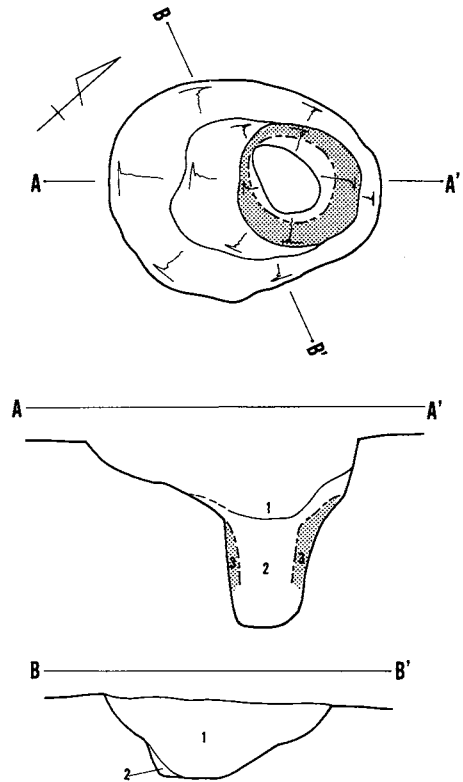
遺物は山土していない。

(8) E27-001土坑

(図版43、写真なし)

本遺構は、E27-X区に位置している。本遺構周辺にもF27-001土坑周辺から続く重機軌道痕跡による攪乱が見られ、遺構の確認層位はIII層下部である。

平面形は、北東-南西方向にわずかに長い隅円方形の土坑で底面には5cmほどの高まりをも



図版42：F27-001土坑 (S=1:30)

つ。開口部上端の規模は100×92cm・下端66×50cm、深さ14～16cmである。底面には凹凸が見られ図のスクリーントーンの範囲が弱く焼土化しており、破線範囲には焼土粒と炭化材小片の混合層が5～10mmの厚さで堆積している。

埋土は3層に区分したが、3層は木根痕か小型動物の活動痕跡である。1層は砂質の黒色土(10YR2/2)、2層は焼土粒と炭化材小片を混じえ砂質の黒褐色土(10YR3/1)である。何れの層も締りが無い。

遺物は出土していない。

(9) E27-002土坑 (図版44、写真なし)

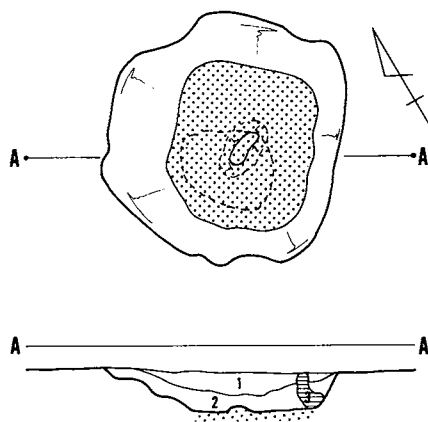
本遺構は、E27-001土坑の北北東2mほどのところでE27-T区に位置している。確認層位は、III層下部である。

平面形は、南東側に不規則な張りだしをもつ不整楕円形である。底面はわずかに起伏しており、全体的に曲面をなし、その中央は弱く焼土している。土坑の規模は、長径105cm、短径80cm、深さ16～17cmである。焼土化の範囲は、ほぼ60×32cmの楕円形であるが境界は不明瞭である。

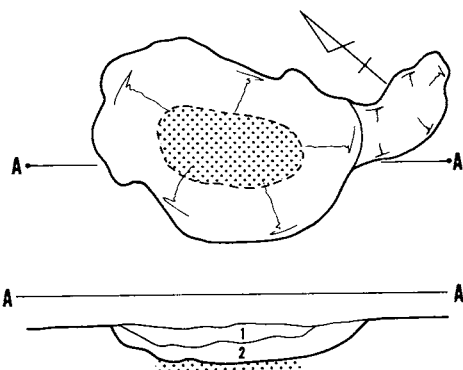
埋土は、E27-001土坑の同一番号と同じであり、遺物は出土していない。

(10) E27-005土坑 (図版45、写真なし)

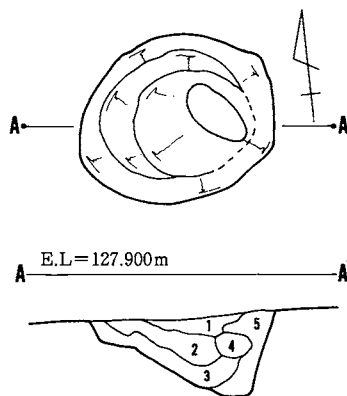
本遺構は、前述のE27-002土坑の東南東2.5mほどの所でE27-T区に位置している。確認層位は、E27-002土坑と同様にIII層下部である。



図版43 : E27-001土坑 (S=1:30)



図版44 : E27-002土坑 (S=1:30)



図版45 : E27-005土坑 (S=1:30)

平面形は、北東—南西に長軸をもつ楕円形で底面は小さく北東側に偏っている。土坑の規模は、長径82cm・短径66cm、底面の規模は28×14cmで深さは34cmである。

埋土は、全5層に区分した。1層は少量の褐色土小ブロックを含む黒褐色土(10YR2/2~2/3)、2層は炭化物粒・褐色土小ブロックを含む黒褐色土(10YR2/1~2/2)、3a層は焼土小ブロック・黒褐色土小ブロック15%前後を含む黒色~黒褐色土(10YR2/1~2/2)、3b層は層は焼土・褐色土の小中ブロック・黒褐色土ブロックの不規則な混合土層、4層は褐色土の大ブロック、5層は褐色土の小中ブロックを主体に黒褐色土ブロック・焼土粒・炭化物小粒が混在する。全体的に砂質土で、締りはなく、粘性は3・5層土にわずかにあるだけである。

(II) F28—001土坑

(図版46・47、写真図版26)

本遺構は、E28—W区とF28—C区とにまたがっているが大部分はF28—C区に位置している。確認状況は、1層を掘り下げている途中で炭化材片の散在と須恵器の破片が出土したが、土坑の形状はもとより、どのような遺構が存在するのかも不明であったが。更に基本土層のII層相当層である2層を掘り下げたところ写真図版26—2の状態です師器の坏や砥石、そして多量の炭化材片が出土し、炭化材片の分布状態から遺構の平面形状が判明した。

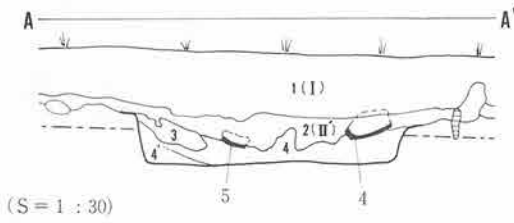
平面形は、概ね北北東—南南西方向に長軸をもつ隅円長方形で、西北西壁を除いて外方へ張り出している。規模は、長軸上端150cm・同下端142cm、短軸上端108cm・同下端102cm、深さは土層断面で確認した部分が15~20cm、平面形把握後の深さは7~12cmである。

床はIV層上部にあり、貼床や特別に固い踏み締めは認められず、床面は緩やかに起伏している。床面で確認した施設・構造としては、長径上端43cm・同下端31cm、短径上端32・同下端16cm・深さ9cmの掘りこみが北側で確認できた。

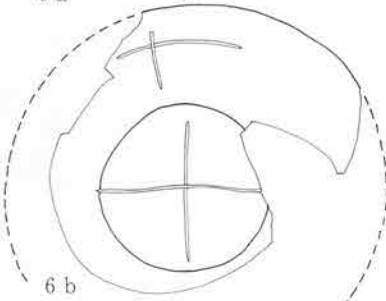
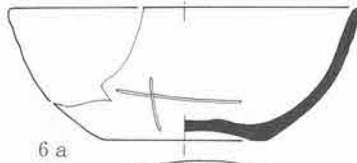
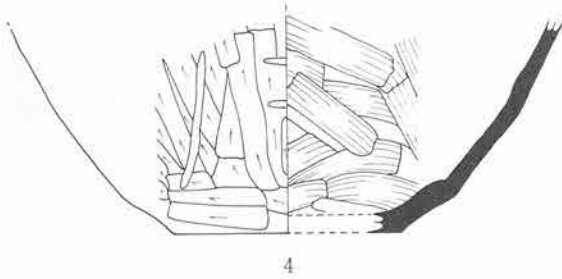
埋土は全4層に区分したが、1層は基本土層のII層、2層(II')は基本土層II層の2次堆積層である。2層は、炭化材片を含んだ砂質黒色土(10YR2/1)を主体とするが下部では4層から続く炭化材や炭化材小片が多量となり10YR1.7/1を呈する部分や黒褐色土(10YR3/2)が含まれる。本層中から土師器坏・須恵器壺の破片などが出土している(写真図版26—2)。3層は、砂~シルト質黒褐色土(10YR2/2)・暗褐色土(10YR3/2~3/3)のブロック混合土層で焼土小ブロック・炭化材片を含む。4層は、2層同様の砂質黒色(10YR2/1)であるが底面付近には炭化材・炭化材小片が多く含まれる。また、本層中には暗褐色・褐色土の小ブロックが不規則に散在し、4層と4a層との境には炭化材小片とともに線状に分布し4層を2分するが上部では不明瞭となる。

遺物は、1層下部から4層、そして床面にまで分布しており、完形復原品の多くは4層から2層に含まれる。炭化材は床から1層下部にまで伸びるものが見られ、炭化材に喰いこんだ釘

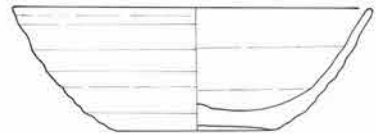
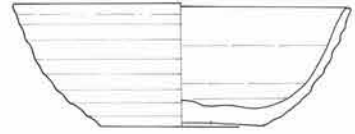
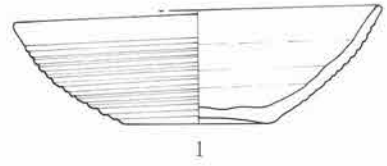




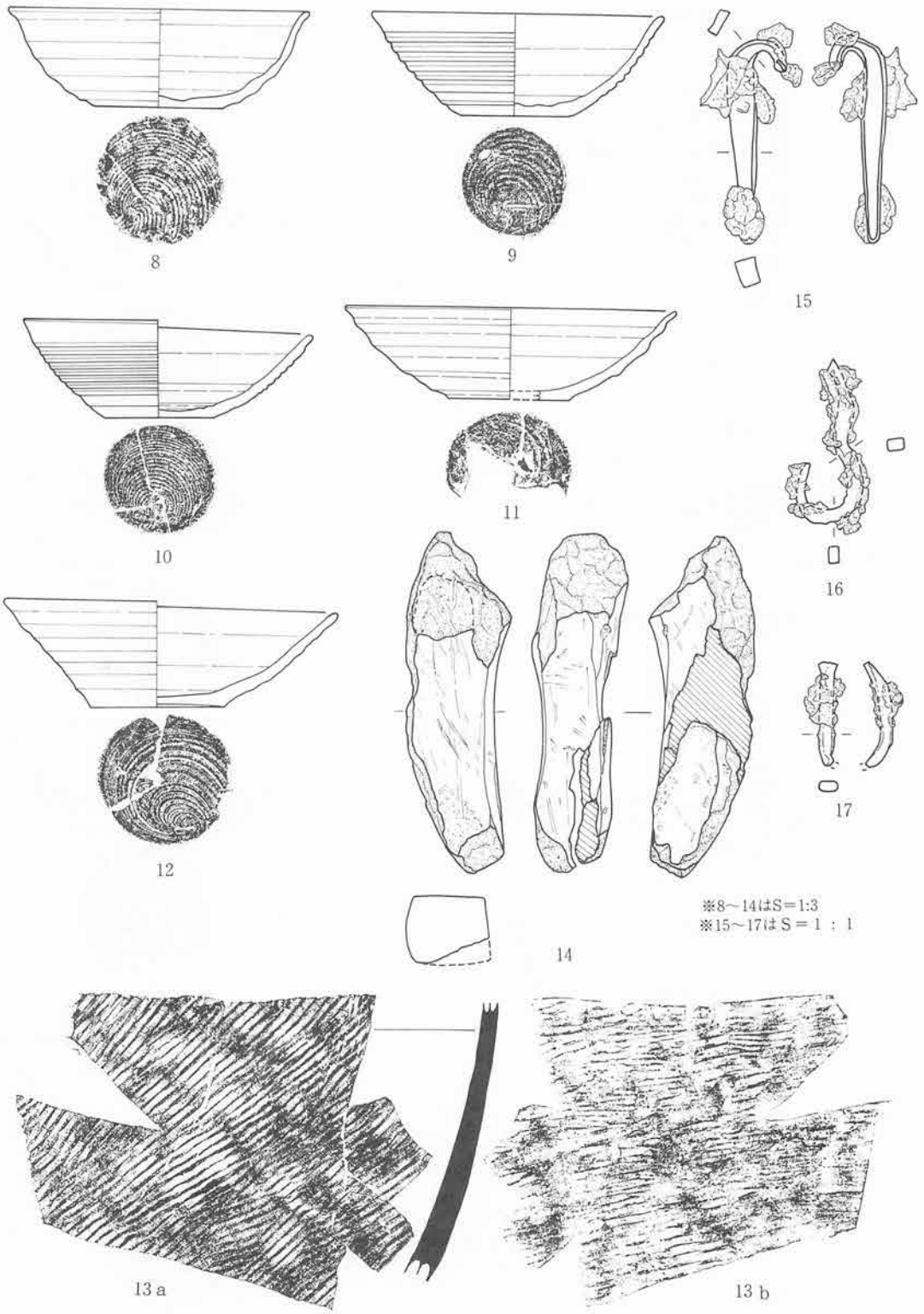
F28-001土坑と遺物出土状態



※遺物実測図の縮尺は  
1～3、5～7はS=1:3  
4はS=1:4である



図版46 : F 28-001土坑



图版47：F 28-001土坑（2）

等の鉄製品が出土している。この釘は、層位が異っても一連の部材片の可能性が高い。また、平面図中の7～12の遺物は重なって出土しており、これらは床から2層上部にまで分布する。遺物の種類・数量は、土師器坏14個体分の破片等、須恵器壺・カメ破片各1個体、鉄釘等6点、砥石1個体分、が出土している。しかし、坏は11個体を復原、釘は3本の形状を確認した。

坏は、成形調整の有り方から以下の3種類に区分したが、何れの個体も2次火熱を受けていることから内面の研磨調整・黒色処理については明確でない。

- ①ロクロ成形調整の後、ロクロ回転により外器面に7～12段(条)の沈線あるいは階段状のケズリ調整を施こしたもの。内面には、ロクロ調整痕と研磨様の、そして黒色処理の形跡が見られるが明瞭ではない。底面は回転糸切りのままで、僅かに縁辺を調整している(図版46-1・3、47-9・10、写真図版26-4・6・12・13)。
- ②ロクロ成形調整、回転糸切りのままで僅かに底面縁辺を調整している。内外面ともに2次火熱による器面の荒れや炭化物膜の形成が見られ、調整痕は不明瞭である(図版46-2・7、47-8・11・12、写真図版26-5・10・11・14・15)。
- ③内外面ともに研磨・ヘラナゲ調整痕跡が見られ、ロクロ成形調整の痕跡は不明である。器面全体が2次火熱を受けていることから2次調整痕は不明瞭である。身と底面に“十”の字状の沈刻が見られる(図版46-6、写真図版26-9)。なお、本資料は焼成温度の低い須恵器の可能性はある。

須恵器の壺破片は、底部周辺の破片で外面はヘラケズの調整、内面および底面縁辺はヘラナゲ調整が施こされている(図版46-4、写真図版26-7)。カメの破片は、内外面とも平行線状の叩き目、あて具痕が見られる。

釘は、断片を含めて6点が出土しているが形状を確認できたものは図版47-15・16・17、写真図版26-16・17・18)の3点である。錆膨れのない部分は炭化材に喰いこんでいた部分か炭化材片が付着していた部分である。

砥石は1個体が3点の破片と、極小の破碎片とに分割していたもので、極小破片は接合できず欠損部が生じている(図中のハッチング)。使用面は3面で、産地・岩質等は奥羽山地・中新統の流紋岩である(図版47-14、写真図版26-19)。

〈F 28-001土坑出土遺物観察表〉

通算 番号	図版 番号	写真図 版番号	器種	出土地点	外 面 調 整			内 面 調 整			法 量 mm			備 考	
					口縁部	体部上半	体部下半	底 部	口縁部	体部上半	体部下半	口 径	底 径		器 高
1	46-1	26-4	坏		-	R	R	I	-	R	R	148	60	47	
2	46-2	26-5	坏		-	R	R	I	-	R	R	135	35	49	
3	46-3	26-6	坏		-	R	R	I	-	-	-	135	55	315	
4	46-4	26-7	坏		-	-	K	-	-	-	N	-	(120)	-	須恵器
5	46-5	26-8	坏		-	R	R	I	-	黒斑有	R	144	36	50	

通算 番号	図版 番号	写真図 版番号	器種	出土地点	外 面 調 整				内 面 調 整			法 量 mm			備 考
					口縁部	体部上半	体部下半	底 部	口縁部	体部上半	体部下半	口 径	底 径	器 高	
6	46-6a 6b	26-9a 9b	坏		—	R	刻線	十字刻	—	—	—	(143)	66	53	
7	46-7	26-10	坏		—	R	R	I	—	R	—	162	70	57	
8	47-8	26-11	坏		—	R	R	I	—	R	—	142	60	45	
9	47-9	26-12	坏		—	R	R	I	—	—	黒斑有	137	50	48	
10	47-10	26-13	坏		—	R	R	I	—	—	黒斑有	132	50	47	
11	47-11	26-15	坏		—	R	R	I	—	—	—	156	58	43	
12	47-12	26-14	坏		—	R	R	I	—	—	黒斑有	158	64	50	
13	47-13	—			—	敲き目	—	—	—	—	敲き目 N	—	—	—	須恵器体部片

通算 番号	図版	写真図版	器 種	出 土 区 層 位 等	法 量 (mm, g)		岩 質	生 成 年 代・産 地 等	そ の 他
					長 径 × 幅 × 厚 径	重 量			
14	47-14	26-19	磁石	001土坑	159×48×46	280	流紋岩	中新統 奥羽山地	
15	47-15	26-16	タギ	◇	32×5×3	2.25			
16	47-16	26-17	タギ	◇	25×3×2	0.75			
17	47-17	26-18	タギ	◇	16×3×2	0.25			

(12) H29-002土坑

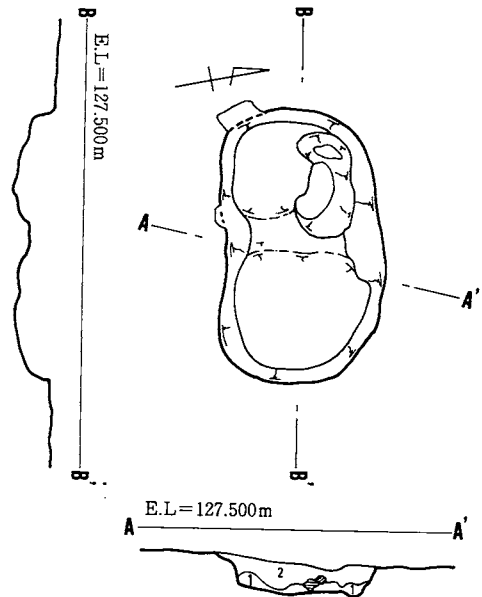
(図版48、写真図版なし)

本遺構は、H29-H区およびH29-I区にわたって位置しているが大部分はH29-H区に位置しており、確認層位はIII層下部である。

平面形は、ほぼ西北西-東南東に長軸をもつ隈円長方形で底面は中央付近の高まりを境に大きく2つに分かれている。規模は、長軸上端98cm・同下端88cm、短軸上端58cm・同下端50cmで、西北西側の深さ14cm、東南東側の深さ16cmである。西北西側の底面は、更に4～5cm低い部分をもつ。

埋土は、木根痕と考えられる空隙をのぞいて2層に区分した。1層は多量の炭化材片・焼土小ブロックを含んだ緻密な黒色土(N2/0)で、2層は炭化材小片が散在する緻密な砂質黒色土(10YR1.7/1)である。両層とも湿潤でベタつきはあるが、粘性は見られない。

遺物は出土していない。



図版48：H29-002土坑 (S=1:30)

(13) K35-002土坑

(図版49、写真図版28-6 a・b)

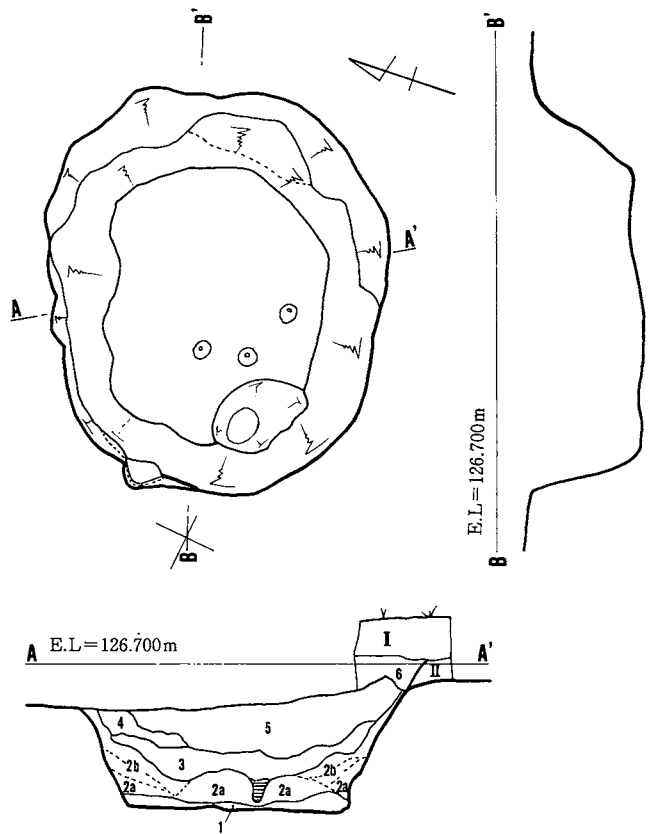
本遺構は、K35-V区とL35-B区とにまたがっているが、大部分はK35-V区に位置しており、確認層位はIII層上面である。本遺構周辺のII層は深耕による攪乱のため部分的にしか残っていない。

平面形は、ほぼ東北東-西南西方向に長軸をもつ不整楕円形で、底面は緩やかに起伏し全体的に南側が低くなっている。規模は、長軸上端220cm・同下端146cm、短軸上端180cm・同下端110cm、深さは最小50cm・最大67cmである。壁の外傾度は、部分的による差が見られるが30~35度の範囲にある。底面には深さ7~10cmの小穴と口径54×32cm・深さ10cmのくぼみがある。

埋土は、木根痕を除いて6層に大別したが2層はブロック構

成層の互層のため更に細分した。1層は砂質およびシルトの黄橙色土・明黄褐色土(10YR8/6~8/8、10YR7/8)の大小ブロック構成土層で、ブロック間隙をシルト質暗褐色~褐色土(10YR3/4~4/4)が埋めている。2層は、1層土と同様のブロック・黒褐色~暗褐色土の大小ブロックの混合層で、a・b層は各々の混合比で細別した。3層は、黒色~黒褐色土(10YR2/1~2/2)に暗褐色土(10YR3/3~3/4)の斑文状分布が見られ、この暗褐色土中にはにぶい黄橙色(10YR7/3~7/4)を呈する砂質火山灰の中小ブロックが点在する。4番は、やや粘性のあるシルト質褐色土(10YR4/4~4/6)でにぶい黄橙色土の小ブロックが散在。5層は、黒色~黒褐色土(10YR2/1~2/1.5)で、下部と上部には10YR1.7/1のブロックが散在。6層は、黒色土(10YR1.7/1~1.85/1)で、部分的にラミナ様のガラス質シルト層が見られる。

遺物は特に見られないが、5層中から大円礫し点が出土している。この礫には加工痕・使用



図版49：K35-002土坑 (S=1:40)

痕は認められない。

### 3. 陥し穴状遺構

本遺跡で“陥し穴状遺構”とした遺構は、「溝状土坑」「溝状ピット」「棒状遺構」あるいは「V字形遺構」「Tピット」「陥し穴」などと呼ばれ、若干の異説はあるものの“陥し穴”と考えられている土坑である。本遺跡で確認した形態は、細長くかつ深く掘りこまれ溝状を呈するもの12基、平面形の上端・下端が小判形および隅円長方形を呈し断面形が台形状や長方形を呈するもの9基、そして平面形上端・下端とも円形～楕円形を呈するもの1基、の計22基である。前者は、県内でも最も多くの遺跡で確認されており、その数も多い。後の2者は、土坑の底面に1～3の、あるいはそれ以上の棒杭状のものを埋設固定したり突き刺して固定した痕跡と考えられる小穴をもっている。

これらの土坑群は、各々に形態が異なるものの配置・占地の状況から多くの報告書等でも“陥し穴”遺構と考えられている。しかし、積極的にそれを証明する根拠・資料を見いだせない遺構である。なお、長方形～隅円長方形のL30-001は、底面に逆茂木埋設穴をもたず埋土上部には灰白色火山灰が堆積していることなどから本種遺構ではなく、所属時期も異なる可能性がある。また、遺物が出土した遺構はJ34-001とK32-001の2遺構だけである。

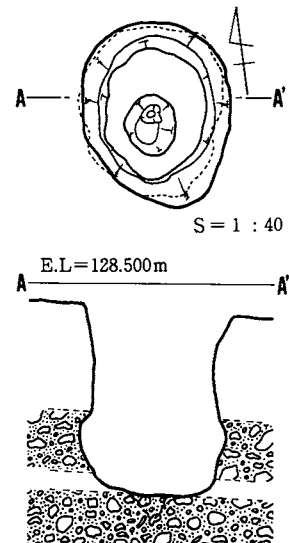
後述する22基のうち(1)から(10)までは土坑の形成層位・埋土についての概略を説明するが、(11)から(22)についてはそれを省略する。また、(11)から(22)の長軸の断面図作成は、遺構の平面形が湾曲～屈曲していることから透影法で図化した遺構も存在する。

#### (1) H26-001陥し穴状遺構（図版50、写真図版28-7）

本遺構はH26-E区に位置しており、その確認層位はIV層上面である。形成層は、上半分が砂～シルト質層で、下半分は礫層と砂層との互層中で底面は礫層中にある。

平面形は、上端から下端まで楕円形を呈するが下半は開口部よりも広がっており、断面形は僅かにフラスコ状を呈する。底面では、径38×28cm・深さ14cmの掘り方と径7cm・深さ14cmの逆茂木痕と考えられる2重の小穴を確認した。この穴の上部には、大礫と粘質砂とが盛りあがっており、その部分でも逆茂木痕と考えられる痕跡が見られた。規模は、上端100×79cm、下端径68×53cm、張りだし部最大90×76cm、深さ103cmである。

埋土は、下部が大礫と小礫質暗褐色～褐色砂の混合層で、中



図版50：H26-001陥し穴状遺構

部は小礫質明黄褐色砂にシルト質暗褐色土ブロックが混在、上部は砂質の黒色～黒褐色土である。なお、埋土断面は図化記録前に崩壊し、土層註記だけである。

(2) G30-001陥し穴状遺構

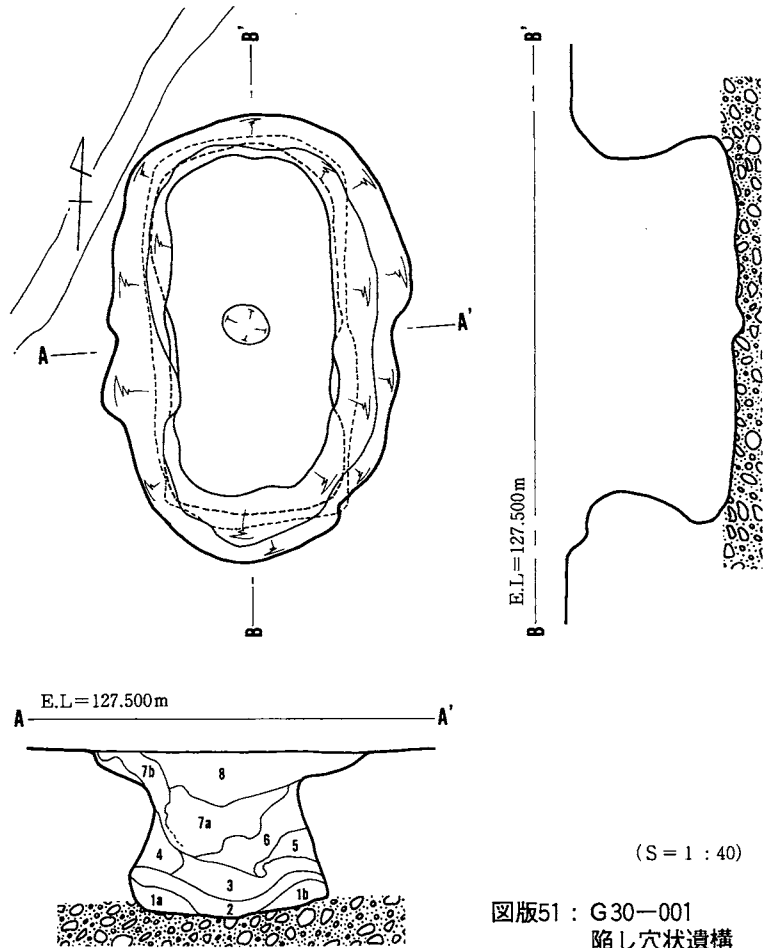
(図版51、写真図版28-8)

本遺構は、G30-C・H区にまたがって位置しており、確認層位はH26-001陥し穴状遺構と同様のIV層上面である。形成層は、砂質～シルト質層と粘土質砂層との互層中で底面は礫層上部にある。

平面形は、上端・下端ともに隅円長方形を呈し、その長軸はほぼ南北にある。断面形は、長軸短軸ともフラスコ形を呈する。底面は小起伏が見られ、中央付近に25×20cm・深さ5cmの小穴が形成されており周辺には数個の巨礫～大礫が存在したが逆茂木痕は見られな

い。規模は、長軸上端236cm・中端183cm・下端202cm、短軸上端160cm・中端78cm・下端98cm、深さ94～86cmである。

埋土は8層に大別した。1・4・5層は、内壁崩壊土の細砂質明黄褐色土と暗褐色土との中小ブロック混合土で、5層には褐色土ブロックが散在し、何れの層も緻密で締りは良好。2層は緻密でやや粘性のあるシルト質黒色土(10YR1.7/1)に黄褐色土-暗褐色土のブロックが散在。3・6・7層は、シルト～細砂質の黒色～黒褐色土(10YR2/1～2/3)で暗褐色砂・黒色土



図版51 : G30-001  
陥し穴状遺構

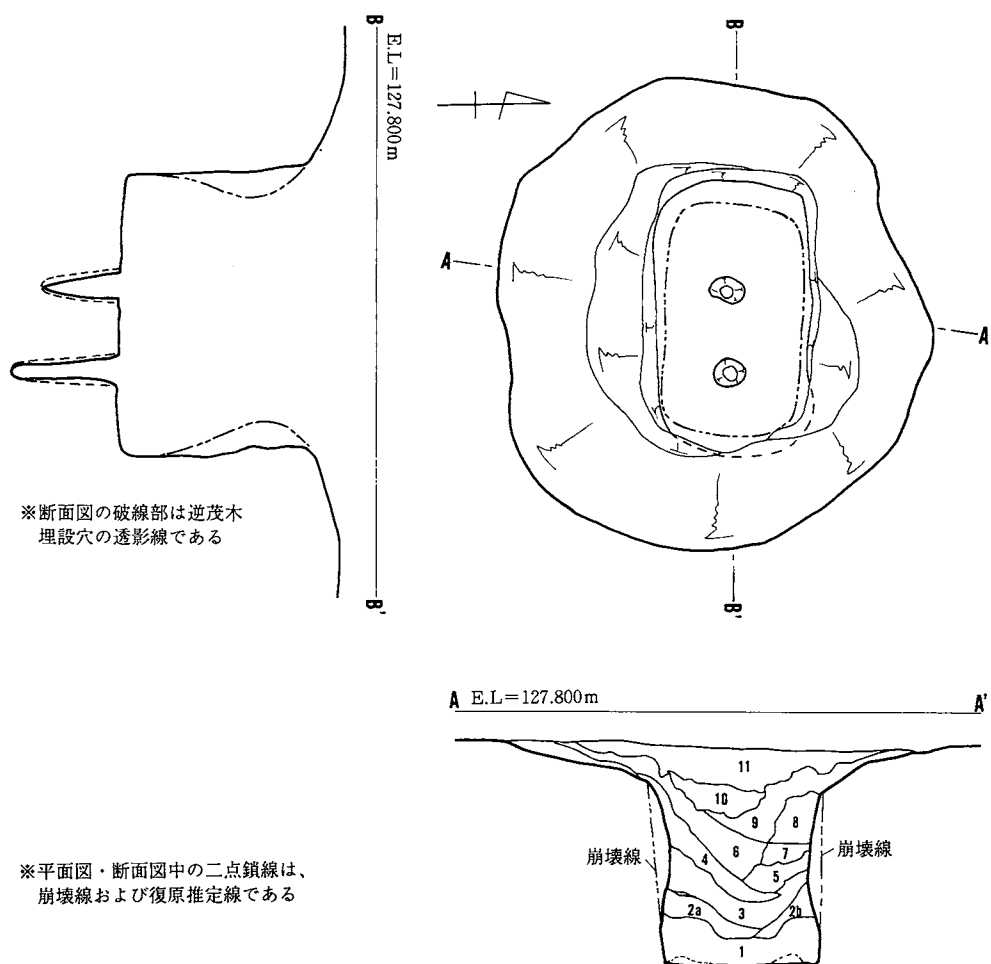
ブロックの混在率で区分。8層は上部中心が黒色（10YR2/1）で周辺および下部に移行するにつれて10YR1.7/1とする。8層を除いた1～7層は、何れも緻密で光沢をもっている。

(3) K30-002陥し穴状遺構

(図版52、写真図版28-9)

本遺構はK30-Q区に位置し、確認層位はIV層上面である。形成層は、砂質～シルト質層と粘土質砂層などの互層中で、底面は小中礫質粘土層である。逆茂木埋設穴は、小中礫質粘土層に形成されているが各々の下端は礫層で止まっている。なお、本遺構は調査中の雷雨・冠水により、壁等が崩落し本来の形状・規模を記録できなかった。

平面形は、上端が不整な円形で中端・下端は隅円方形を呈し、長軸方向はほぼ東西方向にある。崩落前の形状は、平面図および断面図B～B'の二点鎖線付近に中端が存在し、A～A'方



※断面図の破線部は逆茂木埋設穴の透影線である

※平面図・断面図中の二点鎖線は、崩壊線および復原推定線である

図版52：K30-002陥し穴状遺構 (S = 1 : 40)



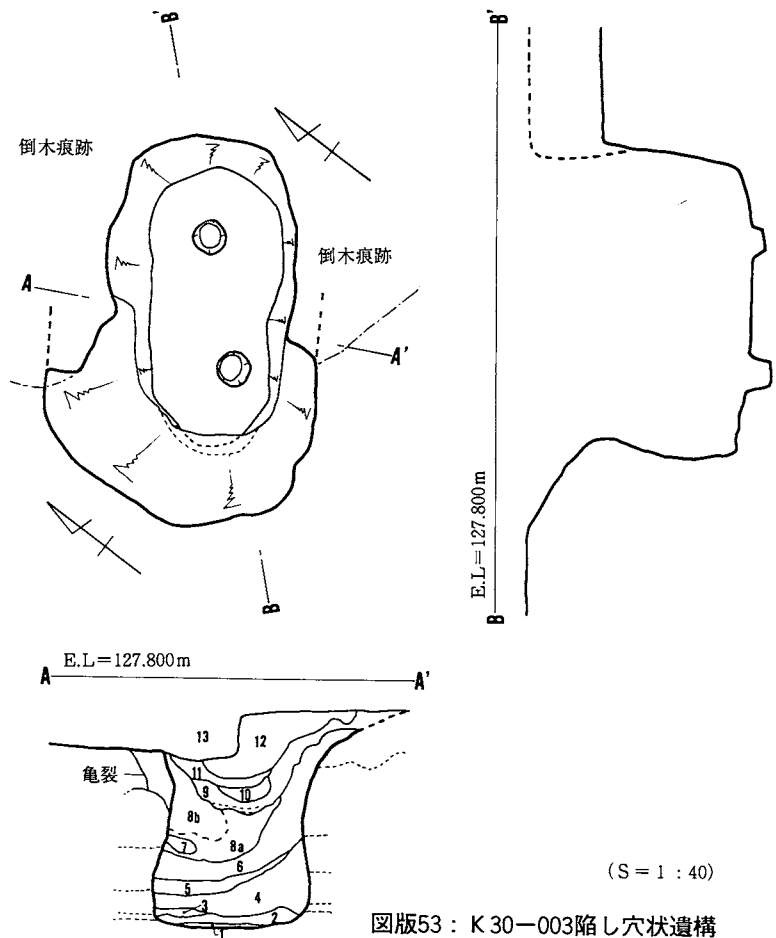
向では二点鎖線の位置で崩落している。崩落前の断面形は、長軸・短軸ともフラスコ形を呈し、崩落後は図の通りである。底面は僅かに起伏し、2つの逆茂木穴が形成されている。規模は、上端径248×240cm、中端152×94cm、下端146×80cm、深さは118～124cmである。逆茂木埋設穴の規模は、西側の上端径15×18cm・深さ40cm、東側が上端径16×18cm・深さ57cmである。

埋土は11層に区分した。1～4層は、壁等の崩落土である砂質～シルト質のにおい黄褐色～黄褐色土・暗褐色土などの小中ブロックが主体で、これらの混合率やブロックの粒径で区分。5～7層は、小中礫を含む暗褐色～黒褐色土で、これらのブロックや他土の混在率で区分。8層は、におい黄褐色に暗褐色土小ブロックが散在。9層は、小礫質黒褐色土中に砂質暗褐色土や砂のブロックが点在する。10・11層は黒色土および黒褐色土である。何れの層も緻密で固く締り、砂質の層を除いて光沢が見られる。

(4) K30-003陥し穴状遺構

(図版53、写真図版28-10)

本遺構はK30-K区に位置し、確認層位はIV層上部である。形成層は、K30-002と同様で底面は礫層上部にある。逆茂木埋設穴は、礫層中に形成されているが何れも浅い。なお、本遺構の北東側は倒木痕によって破壊され上端形状は不明である。



平面形は、前述の事情により不明な点が多いが、上端形状は小判形～楕円形と推定され、中端・下端は小判形を呈し、その長軸方向はおよそ北東―南西方向にある。断面形は、長軸方向の北東側が不明であるがフラスコ形を呈するものと考えられ、短軸方向はフラスコ形である。底面は小起伏が見られ、全体的に凹面をなし2つの逆茂木埋設穴が形成されている。規模は、上端の最大幅143cm・最大長208cm、中端160×96cm、下端150×70cm、深さは117～121cmである。逆茂木埋設穴の大きさは、北東側が上端16×18cm、下端10×14cm・深さ6cmで、南西側は上端18×18cm・下端11×13cm・深さ11cmである。

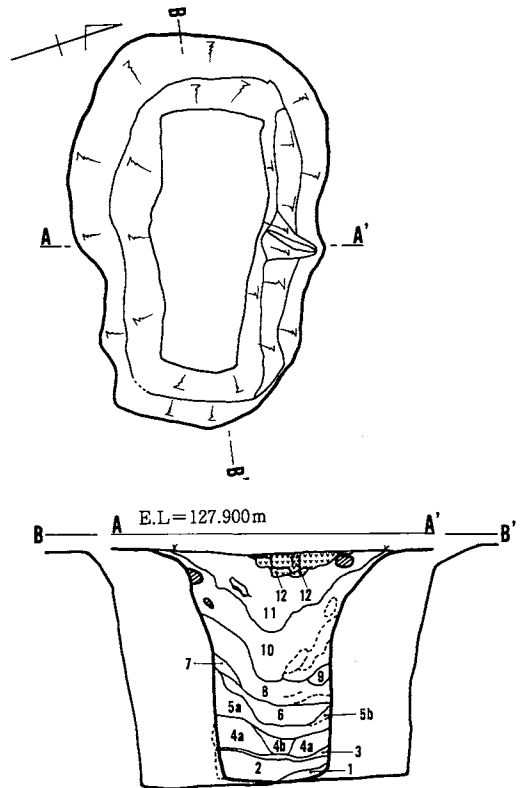
埋土は、倒木痕部（13層）を除いて12層に区分した。1層は、粗砂質砂層。2・3層は、粗砂・小礫を含むシルト質黄褐色土および褐色土で粘性はない。4～8層は、黄褐色土・明黄褐色土・にぶい黄褐色土などの小ブロックを主体とするもので、これらの混合率と他土のブロックの混在率で区分。9層は、小礫・粗砂を含む暗褐色土。10・12層は、やや粘性のある黒色～黒褐色土で、11層は褐色のシルト質粘性土である。埋土は全体的に緻密で、1～3層を除けば粘性が見られ、光沢も強い。

(5) L30-001陥し穴状遺構

(図版54、写真図版29-11)

本遺構はL30-E・A区にまたがって位置しており、確認層位は遺構周辺に抜根痕があったことからIV層上部である。形成層は、砂質～シルト質の粘性土や砂層、あるいは小礫質粘性土などの互層中で、底面は小中礫質粘土層にある。

平面形は、上端が不整な楕円形で中端は不整な隅円方形、下端は不整な長方形を呈し、長軸方向はほぼ南東―北西方向にある。断面形は、長軸・短軸方向とも中端から上端にかけて急に開くものの逆台形に近い形である。規模は、長軸上端205cm・中端154cm・下端136cm、短軸方向は差があることから最大部を計ると上端132cm・中端100cm・



図版54：L30-001陥し穴状遺構 (S=1:40)

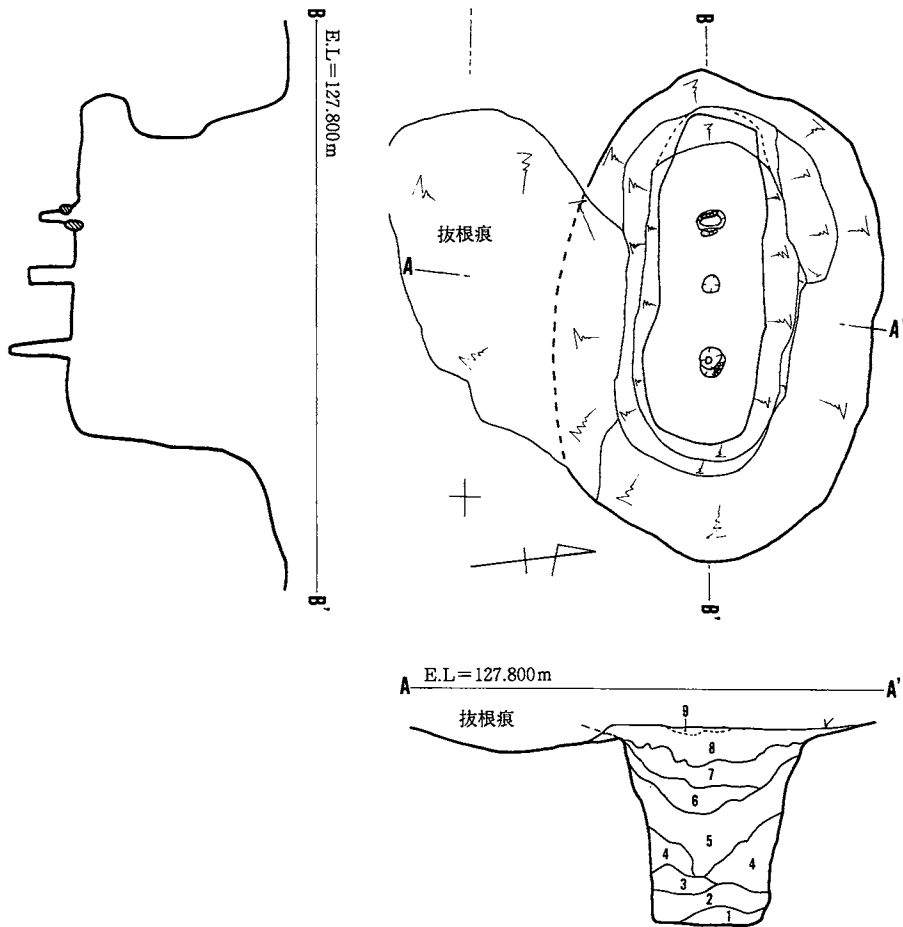
下端60cmで、深さは121~124cmである。

埋土は13層に区分したが、12層を除けばにぶい黄褐色・明黄褐色土・暗褐色土・黒色土の互層、あるいはそれらの中小ブロックの混合土層で締りも良くない。12層は、10YR7/1~7/2の灰白色砂層と10YR8/1~8/2のシルト状灰白色土の混合土層である。

(6) L30-002陥し穴状遺構

(図版55、写真図版29-12)

本遺構は、L30-B・C区にまたがっているが大部分はL30-B区に位置している。確認層位はIV層上面であり、遺構の南南西側を抜根によって破壊されている。形成層は、K30-002などと同様で、底面は小中礫質の粘土層中にある。底面に見られる逆茂木埋設穴は、小中礫質粘土層中に形成されている。



図版55 : L30-002陥し穴状遺構 (S = 1 : 40)

平面形は、上端が楕円形を呈し、中端・下端は小判形を呈するが北北西側の底部付近は外方へ張りだしている。長軸方向はほぼ北北西—南南東方向にあり、長軸方向の断面形は北北西端が張り出している以外は逆台形を呈し、短軸方向は台形を呈する。規模は、長軸上端260cm・中端190cm・下端180cm、短軸上端160cm・中端90cm・下端45—60cmで、深さは109—114cmである。逆茂木埋設穴は、北北西側が16×14cm・深さ20cm、中央が10×9cm・深さ25cm、南南東側が18×14cm・深さ29cmの穴である。両端の埋設穴内には扁平な大礫が入っている。

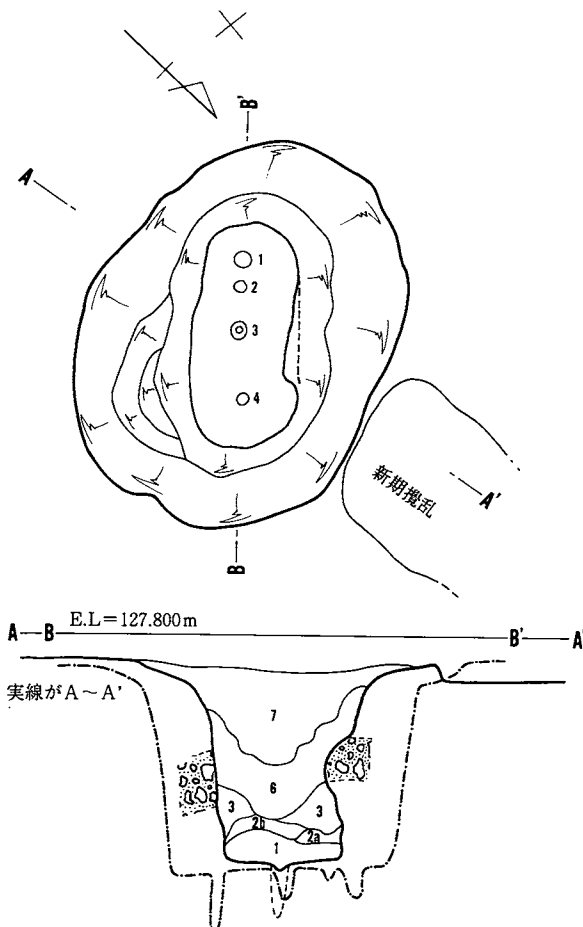
埋土は9層に区分したが、8層と9層の層界は判然としない。1～7層は、砂質の褐色粘性土・黄褐色土・明黄褐色の小ブロック構成層の互層、あるいはそれらの混合土層であり、全体的に粘性・縮り・光沢がある。8層は黒褐色～暗褐色土で黒色土のブロックが不規則に散在し、9層はシルト質黒色土である。

(7) L30-003陥し穴状遺構

(図版56、写真図版29-13)

本遺構は、L30-002の南側2.5mほどのL30-H区に位置している。確認層位は、IV層上面であり、形成は小礫質粘土層・中礫層・砂層・小中礫質粘土層を掘りこみ、底面は粘性のある砂層上部にある。逆茂木埋設穴は、砂層から下位の小中礫質粘土層に形成されている。

平面形は、上端が不整な楕円形で中端・下端は小判形を呈するが、上端の長軸方向と中・下端の長軸方向とは約30度のずれが見られる。下端の長軸方向はおよそ南西—北東方向にある。長軸断面形は逆台形で、短軸断面形は北側がフラスコ形様に屈曲し南側は外傾して直線的に立ちあがっている。規模は、上端長軸210cm・同短軸160



図版56：L30-003陥し穴状遺構 (S=1:40)

cm、中・下端の長軸は155cmと120cm、中・下端の短軸は74cmと59cmで、深さは108～110cmである。逆茂木痕あるいは逆茂木埋設穴と考えられる小穴は4つで、各々の確認規模は以下のとおりである。1…口径10×8cm・深さ41cm、2…口径6×7cm・深さ9cm、3…8×11cm・深さ32cm、4…口径6×6cm、深さ30cmである。

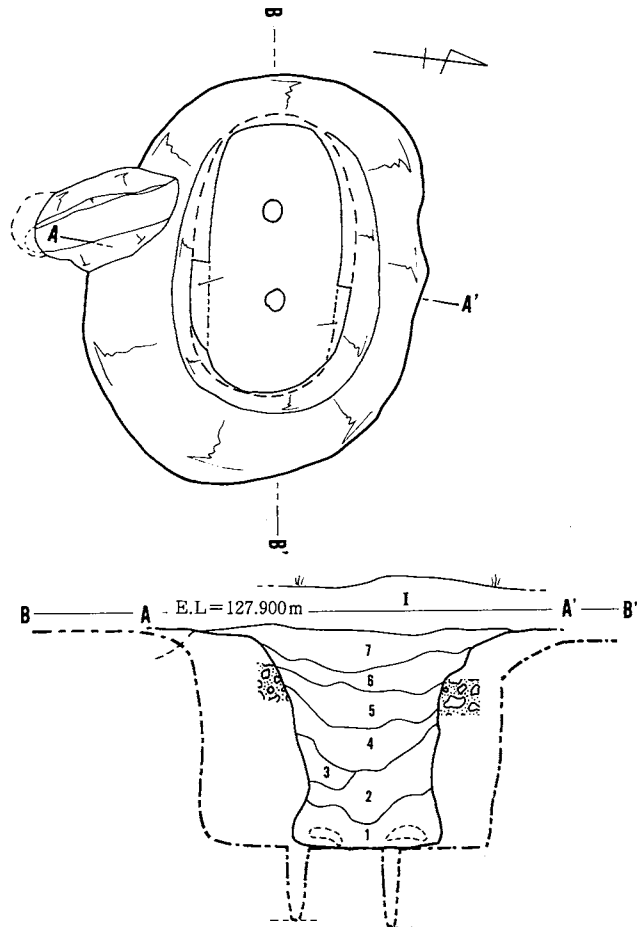
埋土は5層に区分したが、1～3層は壁等の崩壊土ブロックで形成された層で砂質の黄褐色土・明黄褐色土・暗褐色土が中心で小中礫や砂のブロックを含む。6層は暗褐色～にぶい黄褐色土へ変化するシルト質粘性土で上部には中礫が散在する。7層は、黒褐色～暗褐色土中に黒色土や褐色土の大小ブロックが散在し下部には中大礫が散在する。7層を除いて何れの層も締りが良く、光沢が見られる。

(8) L30-004陥し穴状遺構

(図版57、写真図版29-14)

本遺構はL30-R・S・W・Xの4小調査区にまたがっているが大部分はL30-Rに位置している。遺構周辺は深耕による攪乱が見られ、確認層位はIV層上部である。形成層は、シルト層・小中礫質粘土層・砂層・粘土質小礫層を掘りこみ、底面は非常に締りのあるシルト層上部にある。逆茂木痕はシルト層に形成されている。

平面形は、上端が楕円形を呈し、中端・下端は小判形を呈するが南北の下端と西の下端は外方へ張りだしている。長軸方向はほぼ東西にあり、長軸方向の断面形は西側下端が若干張りだしているものの方形に近い形で、短軸方向は下端が張りだし上端が開く。規模は、長軸方向



図版57：L30-004陥し穴状遺構 (S=1:40)

の上端220cm・中端144cm・下端152cm、短軸方向上端175cm・中端70cm・下端86cmで、深さは109～115cmである。逆茂木埋設穴の口径値は実計測値であるが深さは検土杖による計測である。西側は口径11×11cm・深さ34cm、東側は口径11×12cm・深さ42cmである。

埋土は7層に区分したが、1～4層は壁等の崩壊土ブロックで形成された層で1層には中大礫が不規則に混在する。主体となる土色等にはぶい黄褐色・黄橙色の砂質～粘土質土である。6層も1～4層と同様である。5層は粘性のある暗褐色～褐色土である。7層は、下部が黒褐色土で漸変しながら上部は黒色土となる。1・2・4層は締りが良く光沢も見られるが、他は締りが良いものの光沢はない。

(9) K32-001陥し穴状遺構

(図版58、写真図版29-15)

本遺構はK32-H区に位置し、確認層位はIV層上面である。形成層は、粘性のあるシルト質黄褐色土および褐色土(10YR5/6～5/8、4/6)と砂質粘性土(10YR7/3～7/4)を掘りこみ、底面にはぶい橙色～橙色(7.5YR7/4～7/6)の細砂質シルト層上部にある。逆茂木埋設穴は、にぶい橙色～橙色を掘りこみ、礫層上面で止まっている。

平面形は、上端が楕円形を呈し、中端・下端はやや不整の隅円長方形を呈する。下端は中端よりも外方へ張りだしており、長軸断面・短軸断面ともプラスチック形の断面形を呈する。長軸方向は、上端から下端までほぼ同一方向であり、その方位は北西-南東方向である。規模は、長軸方向の上端360cm・中端206cm・下端250cm、短軸方向の上端325cm・中端110cm・下端124cm、深さは底面が緩やかな凹面をなしていることから104～110cmである。逆茂木埋設穴の規模は、1の上端径26×28cm・下端径8×10cm・深さ49cm、2の上端径12×13cm・深さ26cm、3の上端径22×24cm、下端径8×10cm・深さ49.5cmである。

埋土は11層に区分したが、1～3層は壁等の崩壊土であるにぶい黄褐色・黄褐色土・褐色土のブロックを主体としたものに黒色・黒褐色土が混在。4～11層は、数種の黒色土～暗褐色土のブロック構成層の互層であり、グライ化を生じている層も見られる。全体的に緻密で締りが良く、8層以下では粘性・光沢が見られる。遺物としては、剥片1点が11層から出土している。

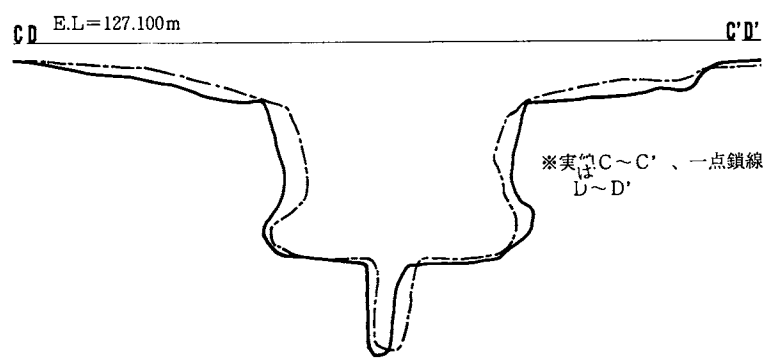
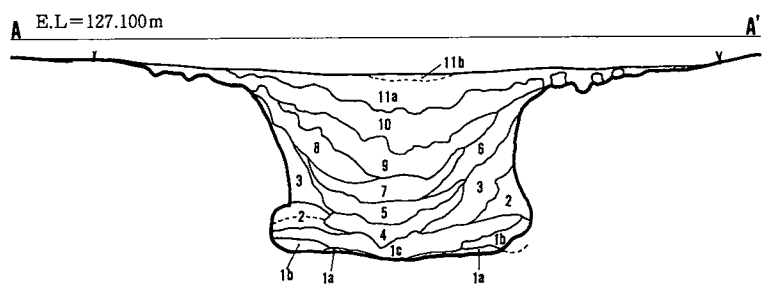
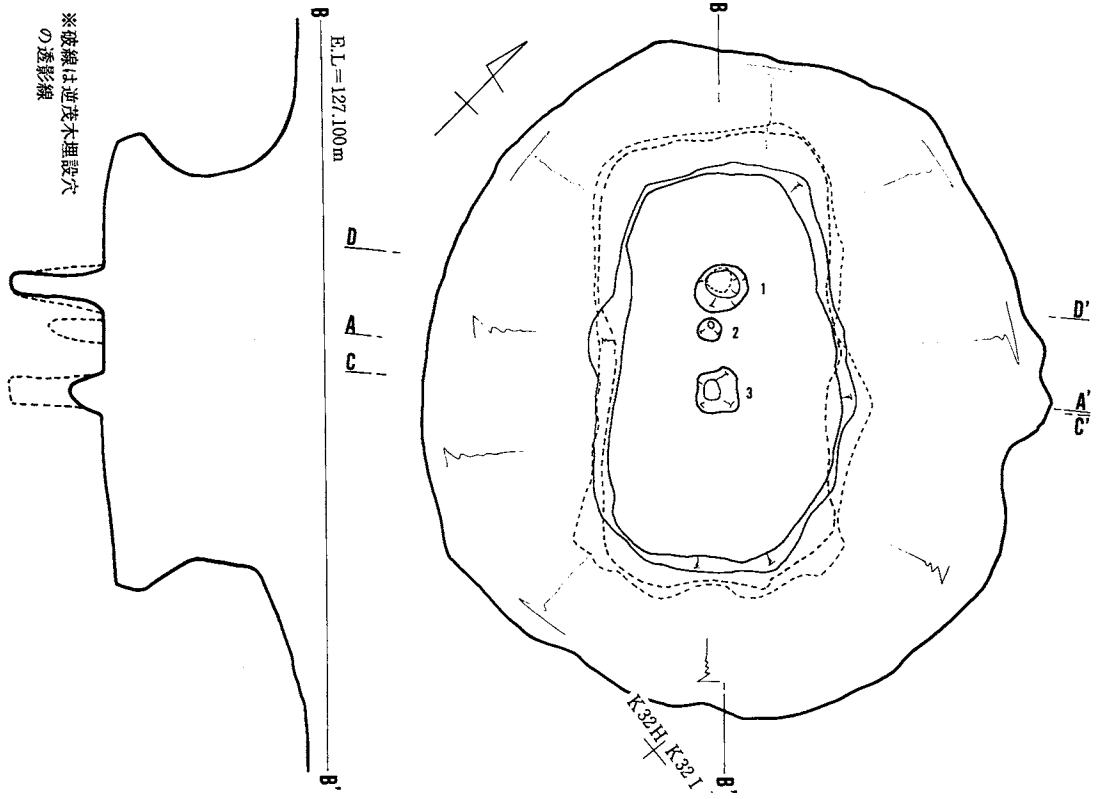
(10) L32-002陥し穴状遺構

(図版59、写真図版29-16)

本遺構はL32-S区に位置し、確認層位はIV層上部である。本遺構周辺は、耕地整備によりII～IV層上部までの自然土層が改変を受けている。形成層は粘土質シルト層・砂層の互層で、底面は小中礫質の明黄褐色土層にある。逆茂木埋設穴は、前述の明黄褐色土を掘りこみ礫層上部で止まっている。

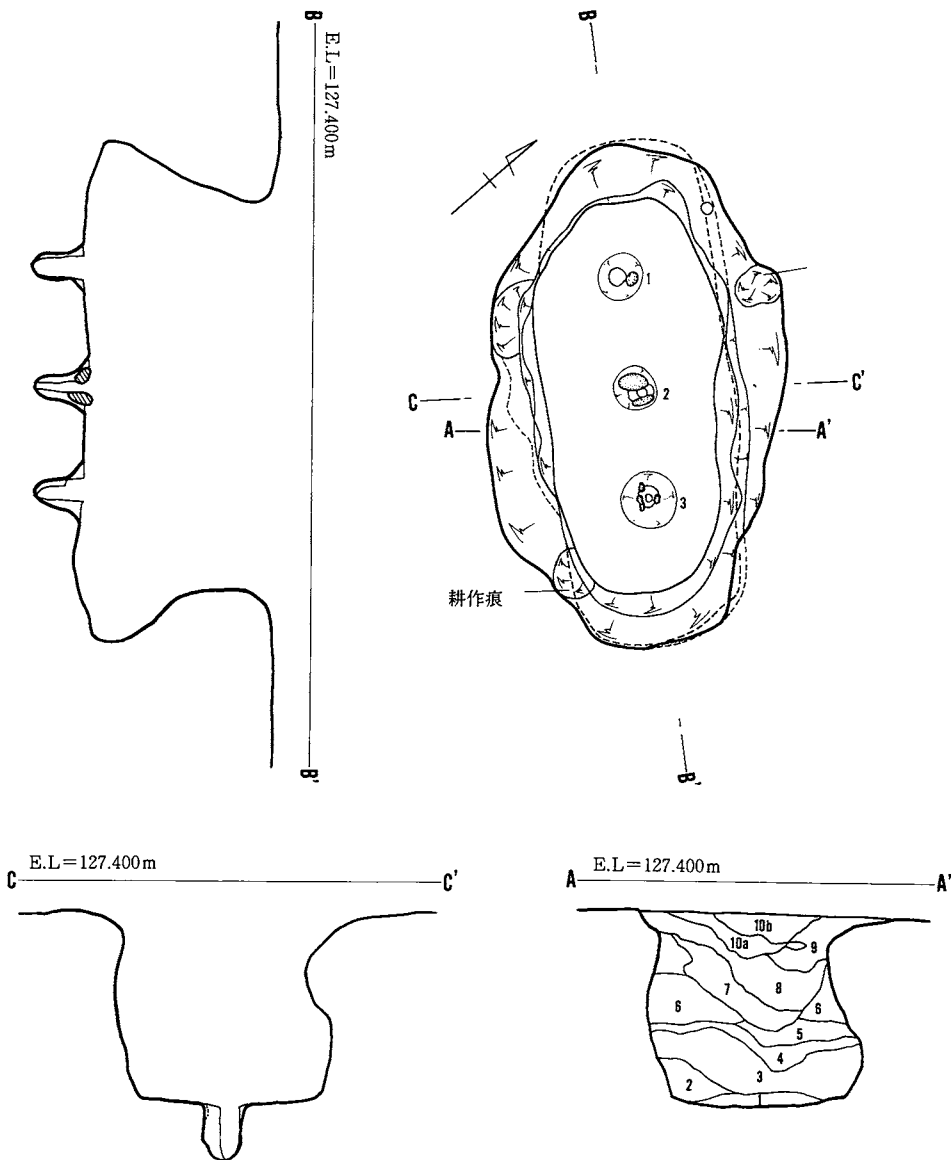
平面形は、上端・中端が不整な楕円形を呈し、下端は小判形を呈する。断面形は、長軸・短

※破線は逆茂木埋設穴の透影線



図版58 : K32-001陥し穴状遺構 (S=1:40)

軸ともに不整なフラスコ形断面を呈する。長軸方向は、上端から下端までほぼ同一方向で、その方位は北に対して西偏55°である。規模は、長軸上端266・中端204cm・下端268cm、短軸上端160cm・中端100cm・下端98cm、深さ99~103cmである。逆茂木埋設穴および逆茂木痕跡は、1が掘り方上端径26×24cm・逆茂木痕10×8cm・深さ27cm、2の掘り方上端径24×22cm・逆茂木痕11



図版59 : L 32-002陥し穴状遺構 (S = 1 : 40)



× 8 cm・深さ28cm、3の掘り方上端径30×28cm・逆茂木痕10×12cm・深さ26cmである。各埋設穴には逆茂木を固定したと考えられる大礫が見られる。

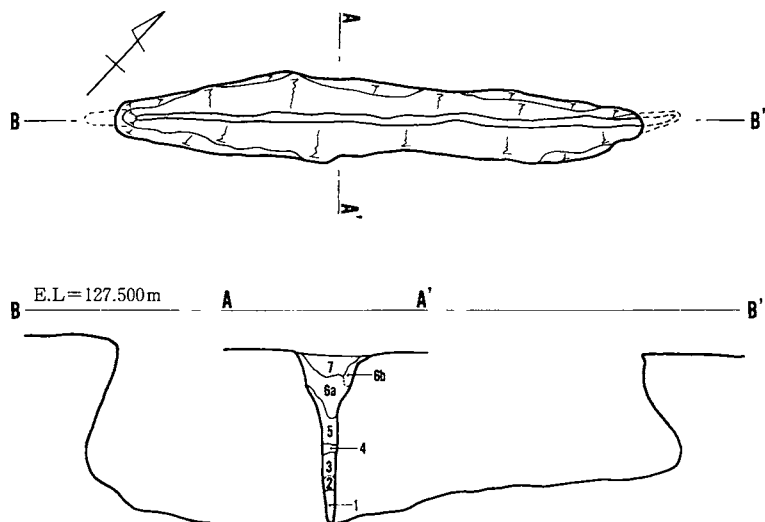
埋土は10層に細分したが、1～6層は砂質～粘土質の明黄褐色・黄橙色・にぶい黄褐色のブロック構成層およびこれらの互層で、他に暗褐色土のブロックが混在する。7～10は、数量の黒色土、黒褐色土・暗褐色土の互層で各々他の土のブロックが不規則に混在する。全体的に緻密で締りが良く、砂質層を除いて光沢が見られる。

(11) H29-003陥し穴状遺構

(図版60、写真図版30-17)

本遺構の大部分はH29-D区に位置している。部分確認は、III層上部であるが倒木痕・抜根痕等による攪乱があり、全景を把握したのはIV層上面である。

平面形は、長軸  
両端が狭く中ほど  
が広い溝状で、底  
部～底部付近の壁  
が外方に張りだ  
し、下端は上端に  
比べて極度に狭く  
かつ大きく起伏し  
ている。長軸方向  
は、ほぼ北東-南  
西方向にある。横  
断面形はV字～Y  
字を呈する。規模  
は、長軸上端280  
cm・中端268cm・下



図版60：H29-003陥し穴状遺構 (S=1:40)

端316cm、短軸上端20～46cm・下端4～6cm、深さは96～66cmである。

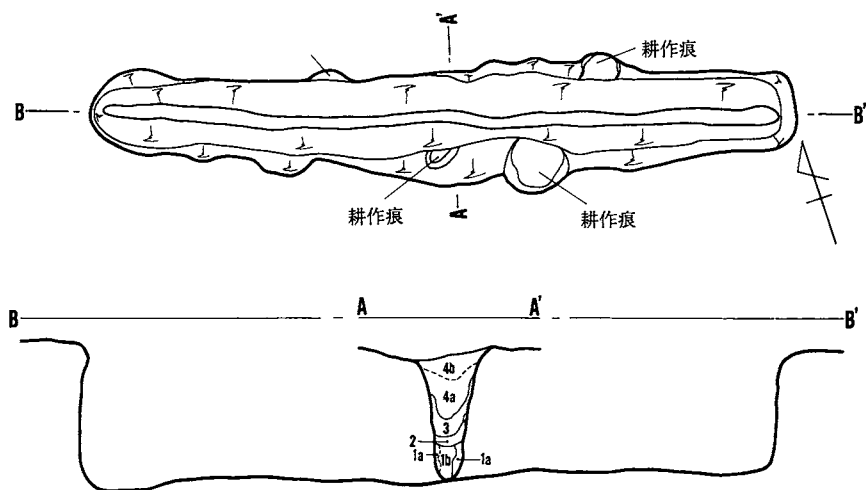
(12) I29-001陥し穴状遺構

(図版61、写真図版30-18)

本遺構の大部分はI29-D区に位置しており、耕作痕や耕地造成等による抜根痕などの攪乱のため全景を確認したのはIII層下部からIV層上面である。

平面形は、上端の中ほどが若干膨み、下端は上端に比べて極度に狭く屈曲しており底面は起伏している。短軸断面形は、V字～U字状を呈する。長軸方向は、ほぼ西北西-東南東の方向

にある。規模は、長軸上端376cm・下端360cm、短軸上端40～60cm・下端5～8cm、深さ65～80cmである。



図版61：I 29-001陥し穴状遺構 (S=1:40)

(13) K31-001陥し穴状遺構

(図版62、写真図版30-19)

本遺構はK31-S区に位置しており、本遺構の周辺は深耕による攪乱のためII～III層を欠失している。確認層位はIV層上部である。

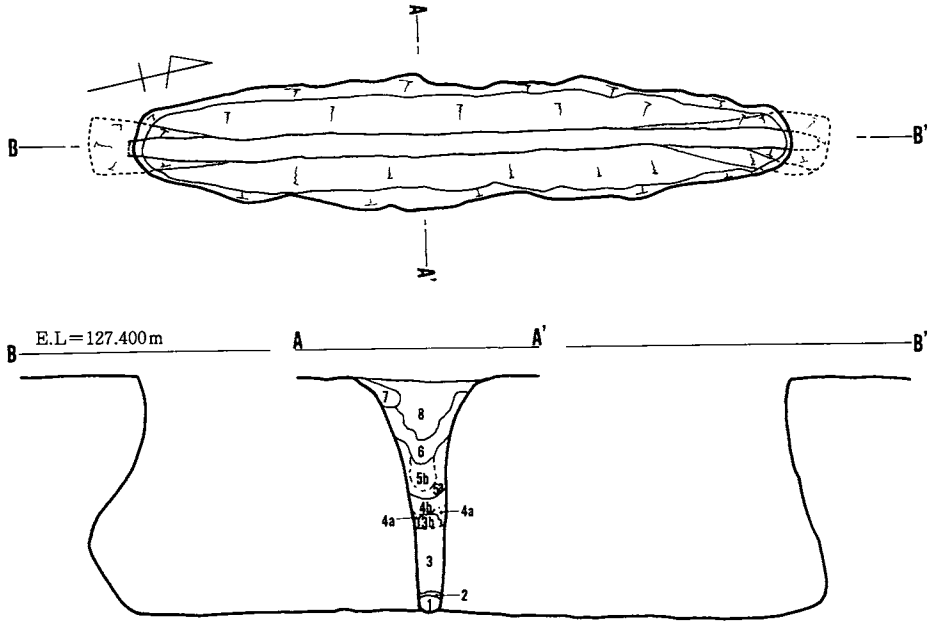
平面形は、上端の両端から中ほどにかけ次第に膨み中ほどが最大幅をもちハマキ状を呈する。下端は上端に比べて狭いが、両端の底部付近は広がっている。底面は、小起伏が見られるものの概ね水平である。横断面形は、上端が若干開くV字状をなす。長軸方向は、北に対して東偏8度ほどの方向にある。規模は、長軸上端348cm・下端368cm、最大突出部394cm、短軸上端は38～74cm・下端は8～12cm、深さは120～126cmである。

(14) L32-001陥し穴遺構

(図版63、写真図版31-20)

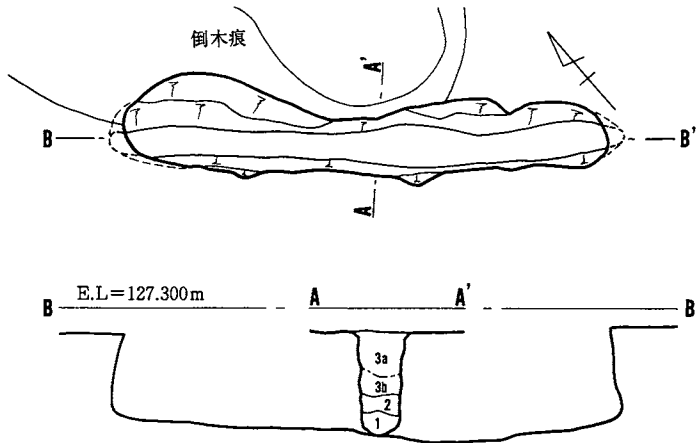
本遺構はL32-I区に位置しており、本遺構の周辺はL32-002と同様に耕地造成等による改変を受けていることや倒木痕による攪乱を受けていたことから、確認層位はIV層中である。

平面形は、上端・下端ともに不整な溝状で上端幅と下端には極度の差は見られないが、下端面(底面)の短軸方向は曲面をなし、長軸方向は起伏が大きく深さに差が見られる。横断面形は、底面が円味をもち側壁が垂直に近いU字状を呈する。長軸方向は、ほぼ北西-南東の方向



図版62 : K 31-001 陥し穴状遺構 (S=1:40)

にある。規模は、長軸上端260cm・下端268cm、短軸上端28~50cm・下端14~23cm、深さは46~60cmである。



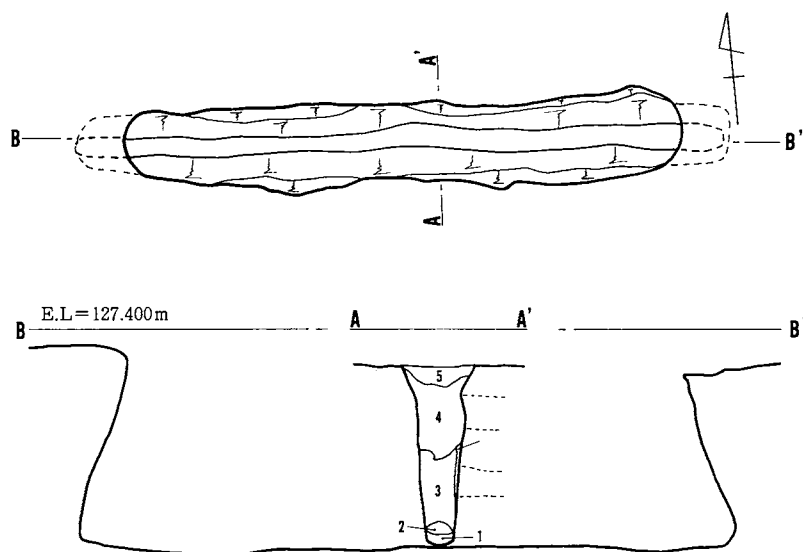
図版63 : L 32-001 陥し穴状遺構 (S=1:40)

(15) L 32-003 陥し穴状遺構 (図版64、写真図版31-21)

本遺構はL 32-Q・R区にまたがっているが、大部分はL 32-R区に位置している。本遺構の周辺は、L 32-001・002と同様の改変を受けていることから確認層位はIV層上部である。

平面形は、上端・下端とも曲折が見られる溝状で、

下端の両端は上端のそれよりも外方に突出している。上端幅と下端幅とは極度の差は見られないが、下端面の短軸方向は曲面をなし長軸方向には起伏が見られる。横断面形は、底面が円形をもち側壁は屈曲しながら垂直ぎみに立ちあ



図版64：L32—003陥し穴状遺構 (S=1:40)

がるU字状を呈する。長軸方向は、概ね東西方向にある。規模は、長軸上端296cm・下端344cm、短軸上端34~48cm・下端8~16cm、深さは93~106cmである。

(16) M32—001陥し穴状遺構

(図版65、写真図版31—22)

本遺構はM32—F・G区にわたって位置している。本遺構の周辺は、L32区の3遺構周辺と同様の改変を受けており、確認層位はIV層上部である。

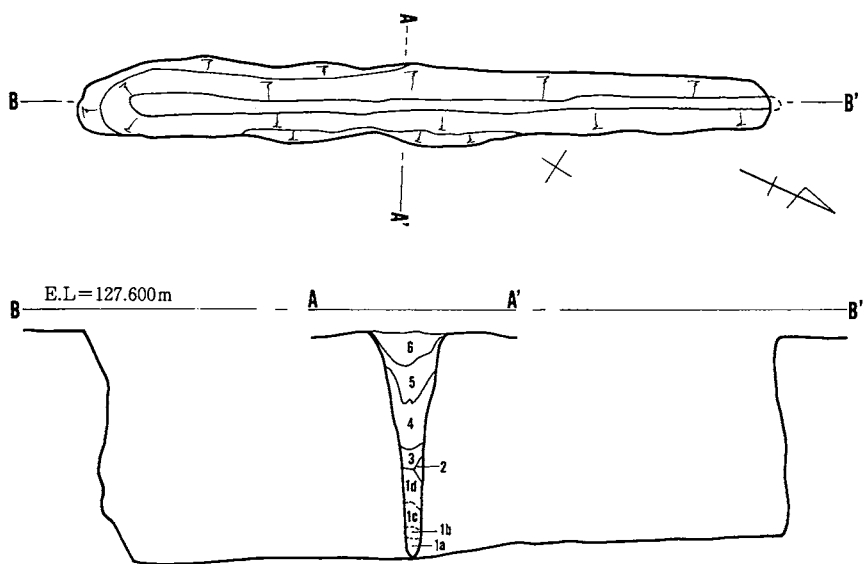
平面形は、上端・下端ともに屈曲が見られる溝状で下端の一方と他方の壁が上端よりも突出している。下端幅は上端幅に比べて極度に狭く、底面は起伏し、短軸断面形はV字状を呈する。長軸方向は、ほぼ北北西—南南東の方向にある。規模は、長軸上端370cm・中端354cm・下端344cm、短軸上端28~42cm・中端26~28cm・下端5~10cm、深さは106~122cmである。

(17) L33—001陥し穴状遺構

(図版66、写真図版32—23)

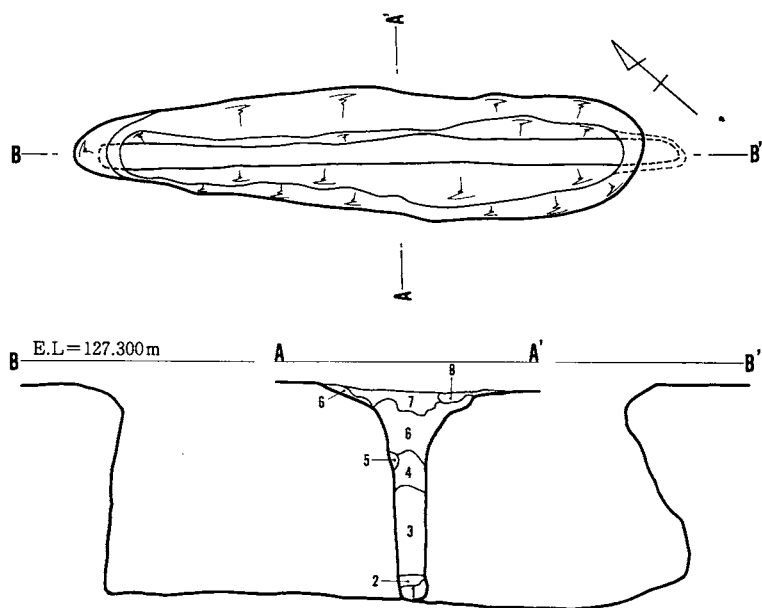
本遺構はL33—M・R区に位置している。本遺構の周辺は、L32区・M32区の遺構周辺と同様の改変を受けているが部分的にIII層下部が残っており、確認層位はIV層上面である。

平面形は、上端の一方が狭く他方が広い溝状で、下端は若干曲折しているものの直線的で中端よりも下端が張りだし、特に南東側は上端よりも突出している。短軸上端幅と下端幅とは極度に開きがあるが、中端と下端とではそれほどでもない。底面の短軸方向は僅かに円味をも



図版65 : M32-001 陥し穴状遺構 (S = 1 : 40)

ち、南東側の底面は急に高くなっている。短軸断面形はY字状を呈する。長軸方向は、概ね北西—南東の方向にある。規模は、長軸上端284cm・中端268cm・下端312cm、短軸上端66~42cm・中端22~42cm・下端9~16cm、深さは112~120cmである。



図版66 : L33-001 陥し穴状遺構 (S = 1 : 40)

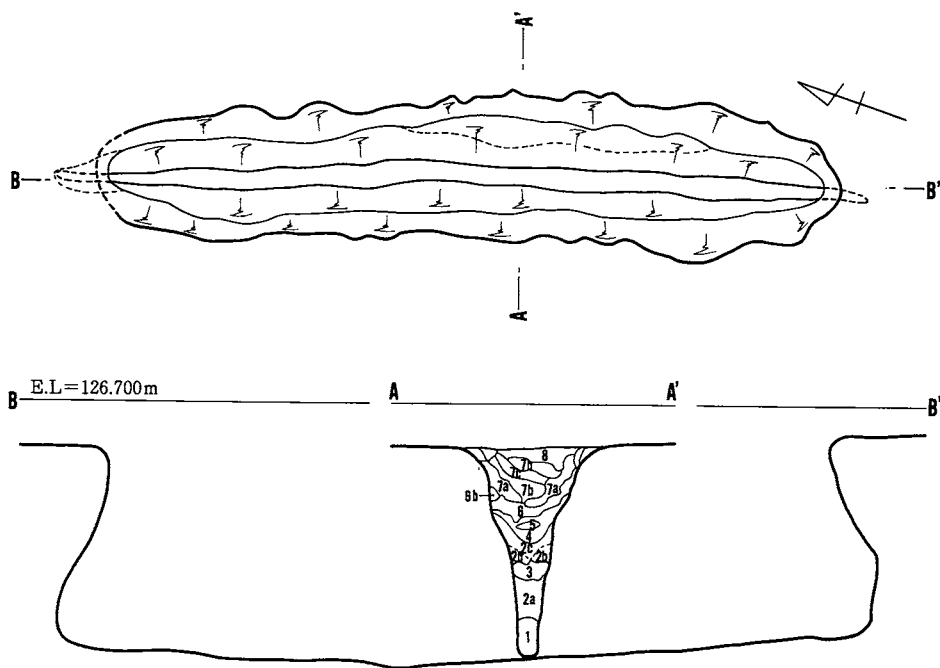
(18) J 34—001陥し穴状遺構

(図版67、写真図版32—24)

本遺構はJ 34—Q・W区にわたって位置しており、確認層位はIV層上面である。

平面形は、上端線・下端線とも屈曲が著しく滑らかさに欠ける溝状で、長軸方向は湾曲している。上端幅と下端幅との差が大きく短軸断面形はV字を呈し、長軸方向の下端は上端よりも外方への突出が著しく長軸断面はフラスコ形を呈する。底面は、短軸方向が平坦で長軸方向は小規模に起伏しながら両端が高くなる凹面状をなしている。長軸方向は、概ね北北西—南南東の方向にある。規模は、長軸上端398cm・中端380cm・下端426cm、短軸上端56~86cm・中端30~50cm・下端5~12cm、深さは106~120cmである。

埋土の上部からくぼみ石1点が出土している(図版84—80、写真図版43—78)。



図版67：J 34—001陥し穴状遺構 (S=1:40)

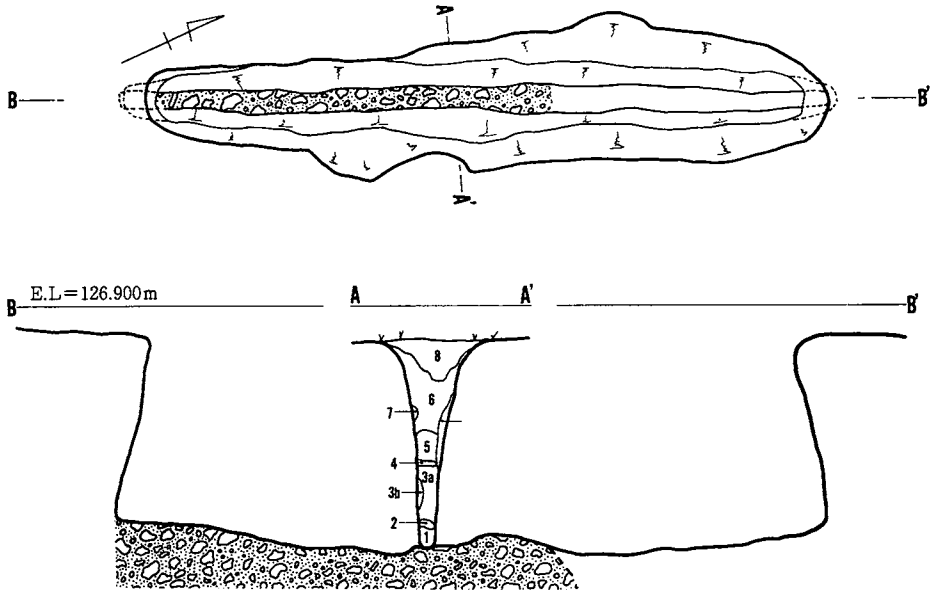
(19) K 34—001陥し穴状遺構

(図版68、写真図版32—25)

本遺構は大部分がK 34—R区に位置しており、確認層位はIV層上面である。

平面形は、上端線・下端線とも屈曲が著しい溝状で、下端の両端は上端よりも外方に突出し

ている。短軸断面形は、上端幅と下端幅との差は大きくないがV字状を呈する。底面の短軸方向・長軸方向とも起伏が著しく、深さも変化に富む。なお、底面の半分以上は礫層上面にあり、他は小礫質粘土～シルト層である。長軸方向は、概ね北北東-南南西の方向にある。規模は、長軸上端340cm・中端345cm・下端380cm、短軸上端40～76cm・中端28～45cm・下端8～10cm、深さは最大116cm・最小98cmである。



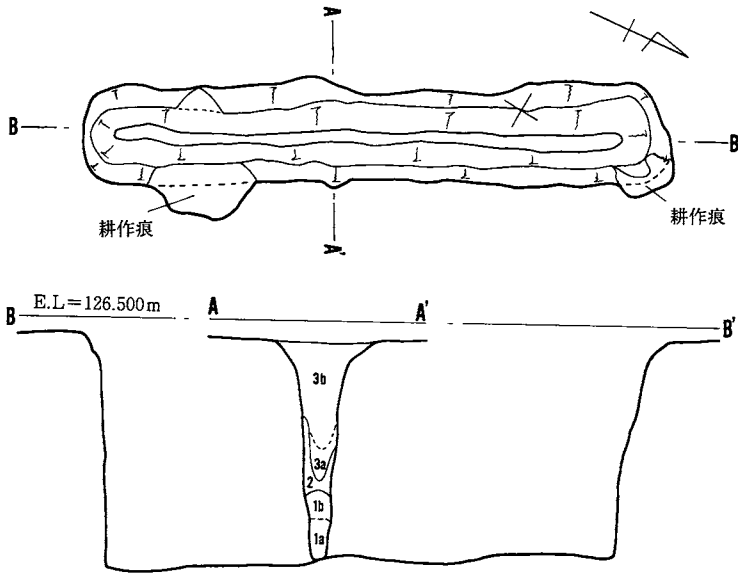
図版68：K34-001陥し穴状遺構 (S=1:40)

(20) K35-001陥し穴状遺構

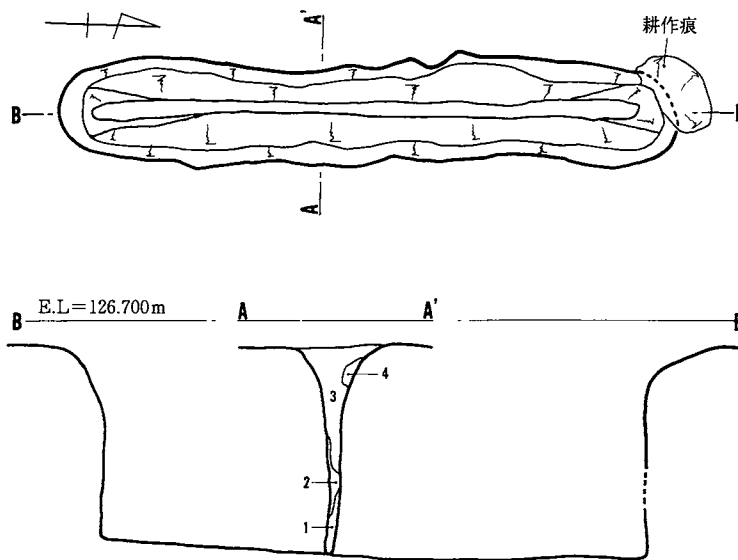
(図版69、写真図版33-26)

本遺構はK35-A区に位置している。遺構の存在はIII層中で認識したが、遺構周辺には深耕による攪乱が多く見られ平面形を把握したのはIV層上面である。

平面形は、上端線・下端線とも屈曲が見られ、長軸両端では中端付近が広がっており、そこから下端にかけて急に狭くなる。全体的に中端から下端にかけて東側に湾曲し、下端は非常に狭くなっている。短軸断面形は、上端幅と下端幅との差が大きく、また部分による差も大きい。上端が急に開いたV字状～Y字状を呈する。長軸方向底面は小起伏が見られ、全体的に南が高く北側が低くなっている。長軸方向は、概ね南北の方向にある。規模は、長軸上端328cm、中端308cm・下端289cm、短軸上端48～56cm・中端32～43cm・下端5～10cm、深さは102～110cmである。



図版69：K 35-001陥し穴状遺構 (S=1:40)



図版70：K 36-001陥し穴状遺構 (S=1:40)

(2) K36-001

陥し穴状遺構

(図版70、写真図版33-27)

本遺構の大部分はK36-U区に位置しているが、北北西側はK35-T区に位置している。確認状況・確認層位は、K35-001と同じである。

平面形は、耕作による破壊部分を除けば上端形・中端形は長方形～隅円長方形を呈し、下端は細長く屈曲している。短軸断面形は、上端幅と下端幅との差が小さく部分による差異も少ないV字状を呈する。底面の長軸方向は起伏が見られ、全体的に南南東側が低く北北西側が高い。長軸方向は、概ね北北西-南南東の方向にある。規模は、長軸上端314cm・中端296cm・下端268cm、短軸上端48～52cm・



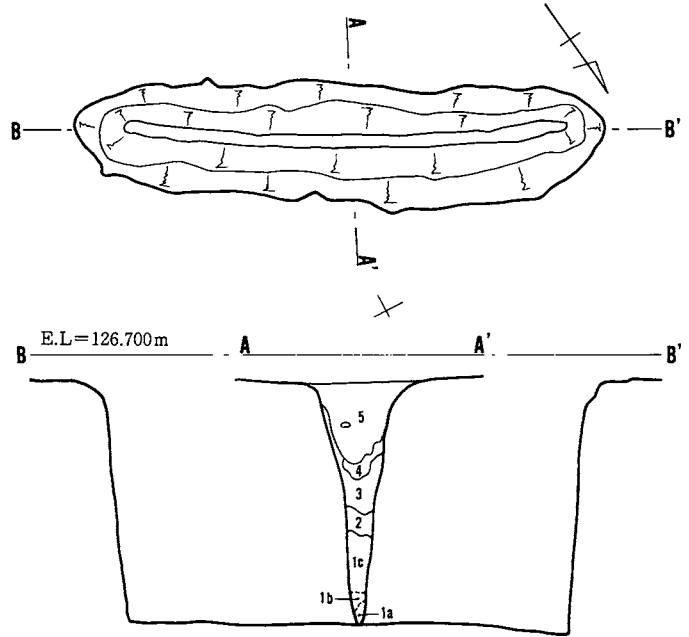
中端26～34cm・下端4～8cm、深さは114～126cmである。

(22) L35-001陥し穴状遺構

(図版71、写真図版33-28)

本遺構はL35-O区とL36-K区とにまたがって位置し、確認状況・確認層位はK35-001・K36-001と同じである。

平面形は、上端の両端が狭く中ほどが膨むハマキ状を呈するが、耕作等による破壊が見られ上端線・中端線とも屈曲が著しい。また、長軸方向は全体的に南西側に湾曲している。下端はK35-001等と同様に細長く、北西側は極度に曲っている。短軸断面形は、上端幅と下端幅との差が大きいV字状を呈する。底面の長軸方向は小起伏が見られ、全体的に北西側が低くなっている。長軸方向は、概ね北西-南東方向にある。規模は、



図版71 : L35-001陥し穴状遺構 (S = 1 : 40)

長軸上端282cm・中端257cm・下端235cm、短軸上端44～68cm・中端26～42cm・下端6～8cm、深さは128～134cmである。

#### 4. 近代の工房址

工房址と考えられる遺構は、1990年の調査と1991年の調査で各々1棟ずつ確認・調査している。調査当初は、周辺や床付近の埋土中からナラ類の堅炭細片が出土したことから何れも製炭窯跡と考えていたが、床面・壁等の精査で製炭窯跡ではなく他の製造址か特別な用途の保管管理の建物跡と考えるに至った。しかし、調査中および調査終了後の聞きとり調査でH09-01工房址は“麴室”であったことを確認した。

概略構造は、半地下式(堅穴式)で前室と主室とに分れている。前室は不整な台形および正方形で、地表から階段で降るようになっている。主室は、平面形が長方形で床面に炉をもつものと、もたないものがあり、壁際には柱穴が並んでいる。

(1) H09-01工房址

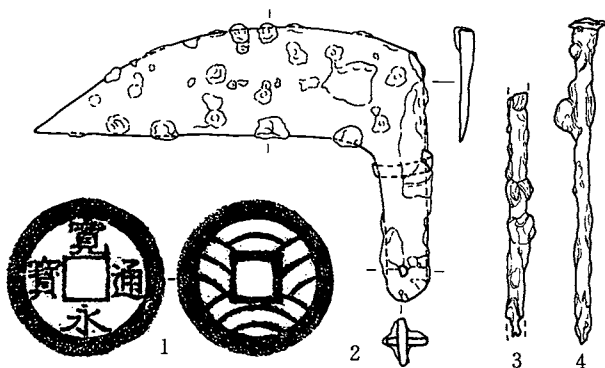
(図版72~74、写真図版34)

本遺構は、主室がH09-O区に位置し、前室はH10-K区に位置している。確認状況は、雑物除去時に深さ80~100cmほどの大きなくぼ地を確認したが、その埋没状況から比較的新期の製炭窯跡か土取跡と考えていた。構築方法は、主室・前室とも堅穴を掘りその排土を堅穴の周囲に土堤状に盛りあげている。

前室は、東側に階段状の出入口をもつ不整形で、出入口から主室へ通じる主軸方向上端290cm・下端166cm、直交方向上端340cm・下端220cmで、床は出入口側から主室へ向って15cmほどの比高で傾斜している。床面までの深さは、現地表面から95~80cm・旧地表面から75~60cmである。床面で確認した施設・構造としては、小柱穴5、主室との境で床面より20cmほど低いステップや貼付・踏み締め部である。小柱穴の規模は、口径12×12cm~16×12cm・深さ19~28cmでバラツキが見られる。ステップは、幅85cm・奥行き50cmで黒色土・炭粉まじりの粘性土を貼りつけており、その前の床にも同様の貼り付けがなされている。

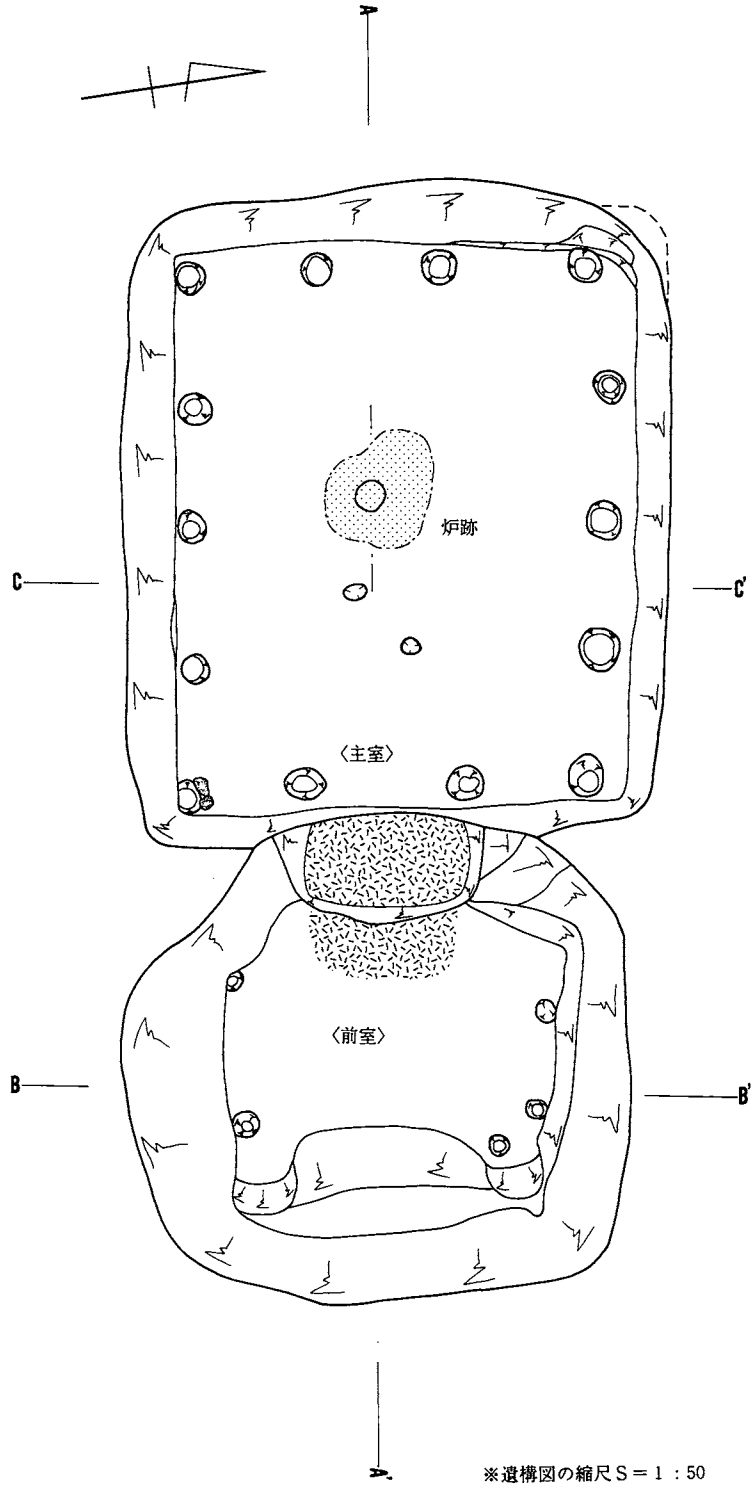
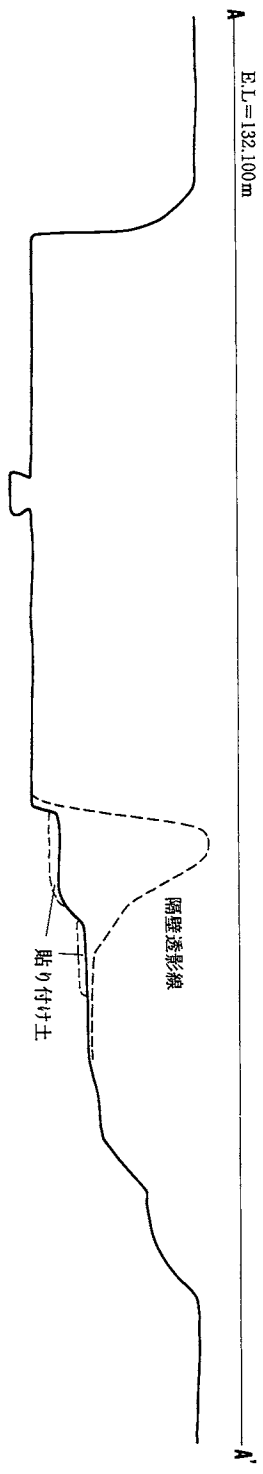
主室は、主軸長上端436cm・下端376cm、直交軸上端366cm・下端308cmの長方形で、深さは現地表面から140~150cm・旧地表面から115~120cmである。床は砂層中にあり、床面には粉炭(ナラ類の堅炭細片)が敷き詰められている。床面で確認した施設・構造は、フラスコ状を呈する炉穴1基、壁際に沿って並ぶ柱穴16、その他の小穴2である。炉穴は、上端径20×19cm・下端径28×26cm・深さ14cmのフラスコ状を呈するもので、埋土の下半は堅炭細片と木灰の混合層、上部は堅炭細片と黒色土ブロック・暗褐色土ブロックの混合層である。炉穴の形成は、一度口径45×43cm・深さ18cmほどの穴を掘った後、粘性のあるシルト質土を貼り付けてフラスコ状に作りあげている。この貼付土の大部分と周囲の床面は、焼土化している。柱穴は、柱根を残すものも見られたが大部分は掘り方規模しか判明していない。口径20×20cmから22×28cm、深さは8~22cmと掘り方にバラツキが見られる。特に、深さは下位の礫層との関係がある。

遺物は、図版71・74に示した片口付の播鉢、頭部が歪な鉄丸釘(洋釘：完形品の長さ129mm)2点、目釘・口金の残っている柴刈鎌、寛永通宝、剝片石器・石核3点、が出土している。床面から出土した遺物は、播鉢・釘2点・柴刈鎌である。柱根として残っていた木材の樹種はイタヤカエデである。床に敷かれていた堅炭細片の樹種はコナラである。



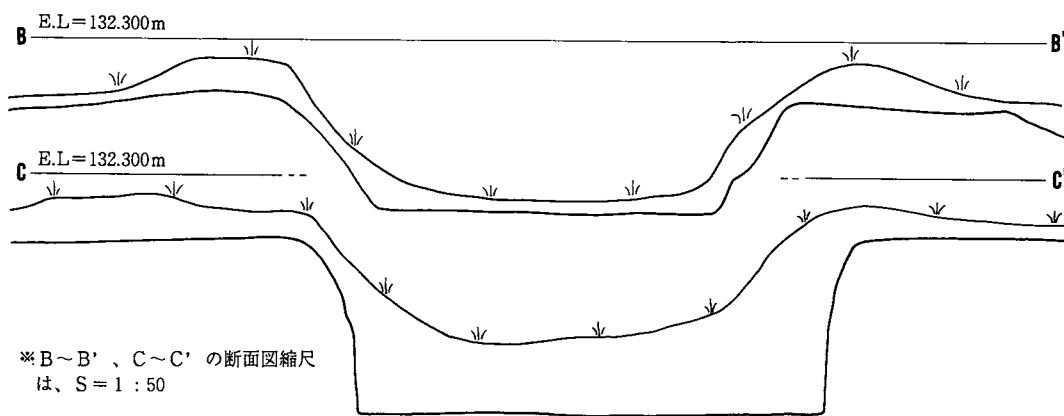
※遺物の縮尺率は、1が実大、2がS=1:4、3・4はS=1:3である

図版72:H09-01工房址出土遺物(1)

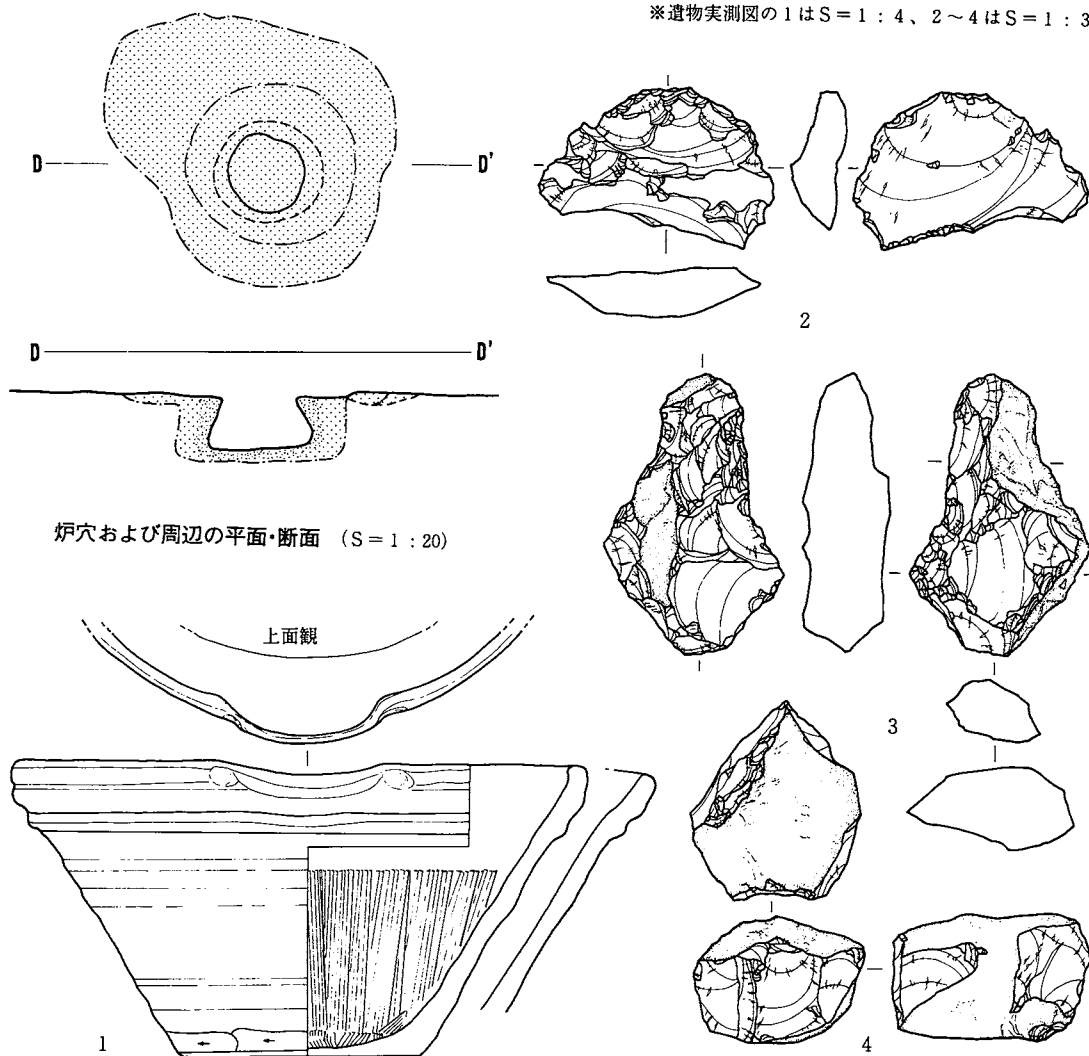


※遺構図の縮尺 S = 1 : 50

図版73:H09-01工房址(1)



\*遺物実測図の1はS=1:4、2~4はS=1:3



図版74: H09-01工房址(2)と出土遺物(2)

(2) E30—01工房址

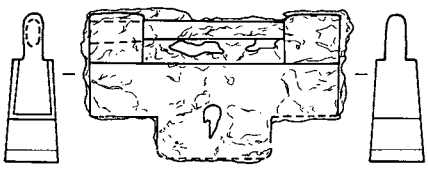
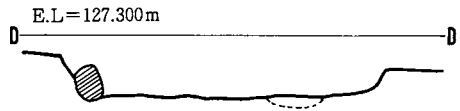
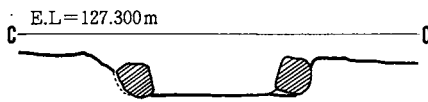
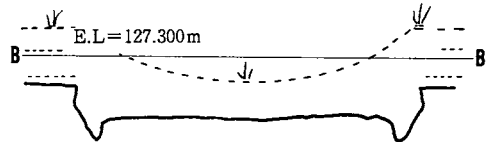
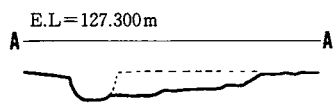
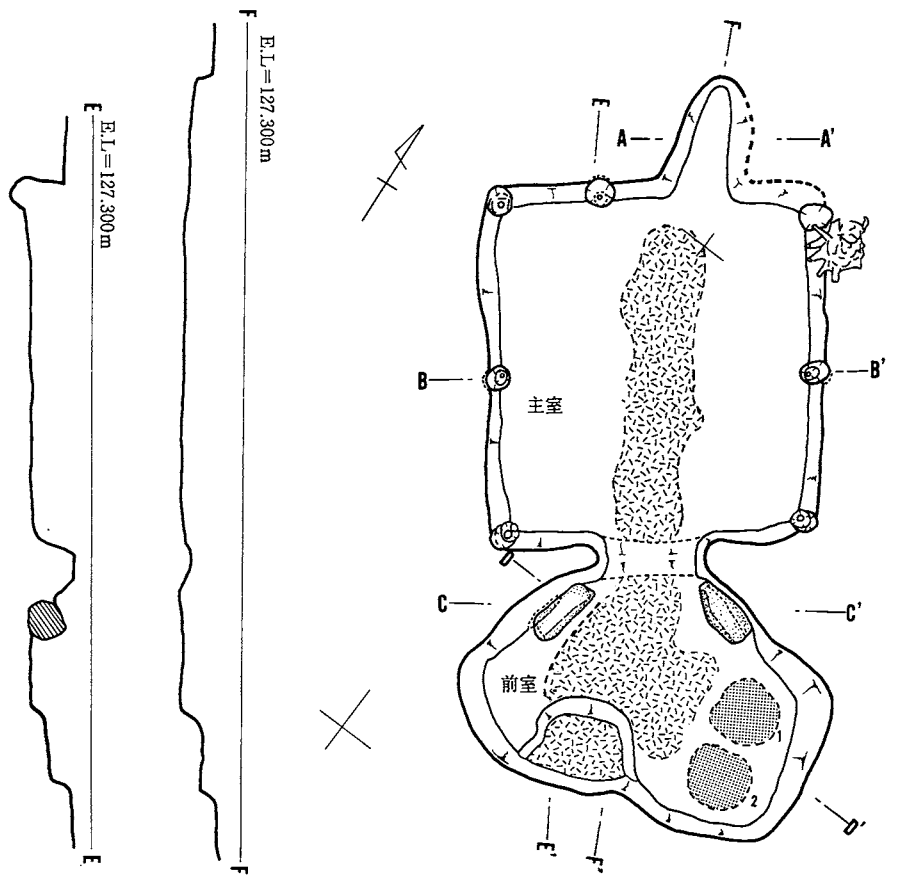
(図版75、写真図版35)

本遺構の大部分はE30—W・X区に位置している。確認状況はH09—01工房址と同様であるが、くぼ地の規模は小さいものである。構築方法は、主室・前室とも竪穴式で排土は竪穴周辺に盛土しているが、H09—01工房址ほど顕著ではない。

前室は、南側に階段作りの出入口をも不整形で、D～D'方向に並行する最大値は上端246cm・下端207cm、直交方向最大値は上端168・下端150cm、深さは18～23cmで床面は小起伏が見られる。床で確認した施設・構造等は、出入口のステップ、南東側の焼土2基、主室への出入口両脇に巨礫各1個、そして床面の広い範囲に貼り付土が見られ固く締っている。出入口のステップは、幅46～56cm・奥行40cmの造りだしで上面には黒褐色土ブロックが混在する暗褐色の砂質粘性土を貼っている。このステップ面と前室床面との比高は、6～11cmである。焼土2基は、何れも強変赤化しており焼土周辺には他の施設・構造の形跡は認められない。焼土の規模は、1が40×42cm・最大厚8cm、2は38×40cm・最大厚7cmである。主室への出入口脇にある巨礫の大きさは、左側が長さ48cm・幅19cm・厚24cm、右側は長さ47cm・幅21cm・厚25cmである。前室から主室へ通じる出入口部は、上端幅70cm・下端幅58cmで、境界部の床面は5～6cm高くなっている。

主室は、主軸長上端243cm・下端217cm、直交軸上端226cm・下端205cmの長方形で、深さは、現地表面から58～61cm、確認面から18～24cmである。床は前室と同様に砂～シルト層で、主軸線に沿って幅36～56cm・長さ206cmの範囲にシルト質粘性土が2～3cmの厚さで貼り付けられている。その上部には、堅炭細片が混在する。堅炭細片は、他の床面にも散在するがそれほど多くはない。主室奥壁の中央よりやや右側には、最大幅60cm・長さ86cmの張りだし部が見られ、その底面は主室の床面と同様である。一部、木根による破壊のため詳細は不明である。床面や壁等で確認した施設・構造としては、前述の貼り床の他に柱穴7本がある。これらの規模は、口径16×16cm～16×22cm、床面からの深さ6～12cmである。

出土遺物は、図版75、写真図版35—3～6に示した南京錠・針金を折り曲げた留金具・洋丸釘2本(完形品43mm)、の他に皆折釘の頭部?3点が出土している。南京錠・留め金具は、前室左側の巨礫近くの床面から出土し、洋丸釘・皆折釘の頭部は主室への出入口部床から出土している。南京錠の大きさは、長さ107mm・最大幅59mm、最大厚21mmである。鍵穴は8mmである。



※遺構実測図の縮尺 S = 1 : 50  
 遺物実測図の縮尺 S = 1 : 3

図版75 : E 30-01 工房址と出土遺物

## V. 遺構外の遺物

本章でとりあげる遺物は、遺構外出土で基本土層のⅠ層からⅣu層にかけて出土したもの、および遺構内出土の遺物でも当該遺構のなかで説明しなかったものである。遺物が所属する時代、種類としては、縄文時代の土器・剥片石器・礫石器・石製品、奈良・平安時代の土師器・須恵器・砥石、中世・近世の貨幣、近現代の陶器片や金属製品などである。これらの遺物は、石器を除けば非常に少なく、中近世のものは1～2点ずつである。

縄文時代、奈良・平安時代の遺物は、出土区域に偏りは見られるものの特に集中する、と云うような出土状態は見られない。また、出土状況から縄文時代に所属するとは考えにくい剥片も見られる。

### 1. 縄文式土器

縄文式土器は、器種・文様・施文手法・胎土等から以下のように区分した。これらの土器は、1種が1～2点と言うような点数のものもあり、群・類などの分類は行わない。また、下記の区分は、1区分が1型式とは限らない。

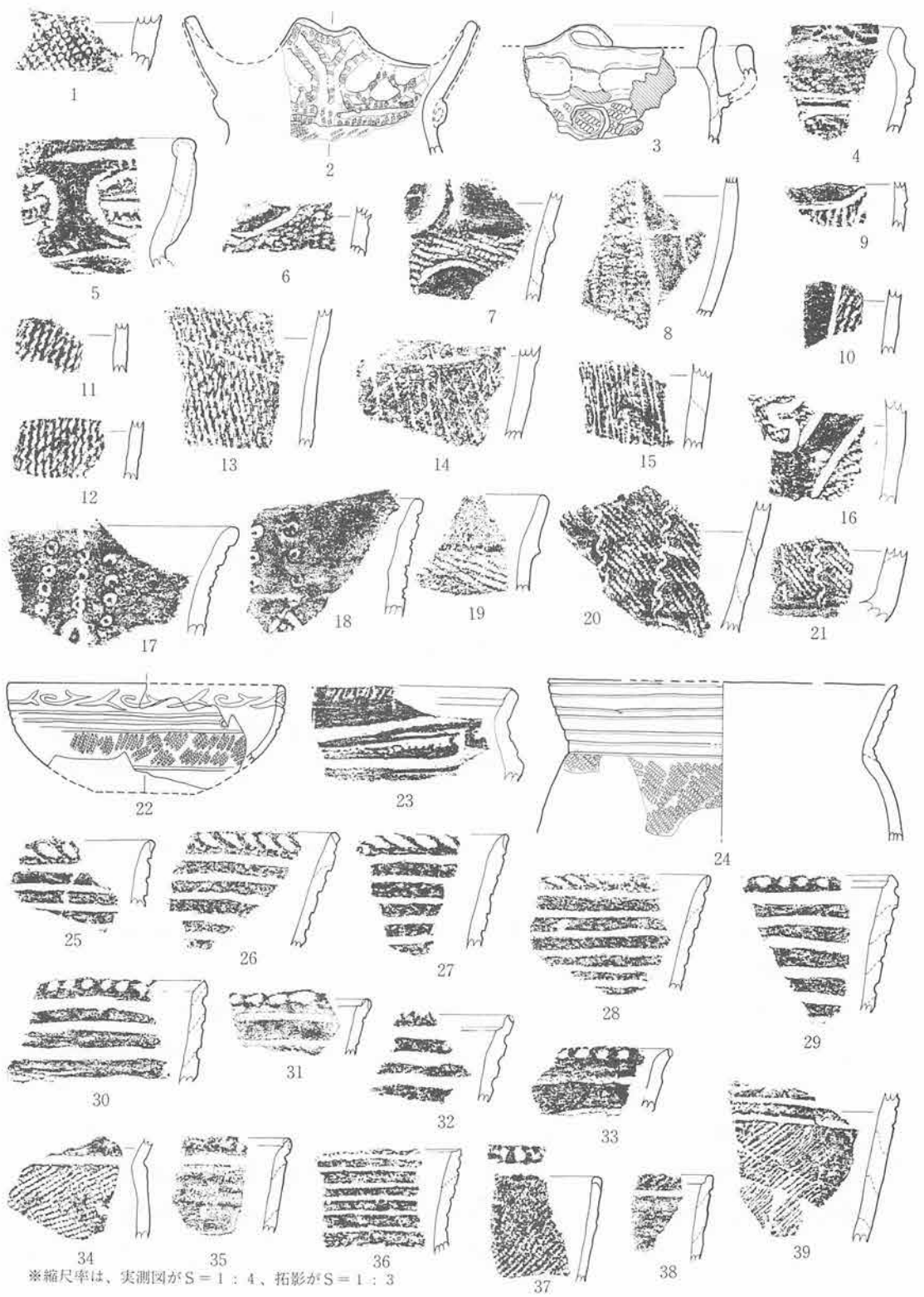
(1)胎土中に繊維を含む破片1点。文様は斜行縄文 *RLr* である。器形は深鉢と考えられるが小破片のため不明（図版76—1、写真図版36—1）。

(2)深鉢形土器の口縁部破片で、粘土紐貼付けと粘土紐への押圧縄文によって文様を構成するものである。口頸部と体部との区分は横位の粘土紐によってなされ、体部文様は斜行縄文の *LRI* である（図版76—2、写真図版36—2）。

(3)隆帯・沈線・磨消縄文で文様が構成される1群と、この群の体部破片と考えられるものを一括。地文として斜行縄文の *LRI* と *RLr* の2種が見られ、体部破片には綾線文も見られる。器形はキャリパー形の深鉢形土器と考えられるが、全体器形は不明である（図版76—3～8、20・21、写真図版36—4～8、20、21）。

(4)沈線文および沈線区画文によって文様を構成する1群と、これと同質胎土を有するもの。沈線文の中には、S字状や連鎖状文を形成するものも見られ、地文としては斜行縄文の他、数種の撚糸文が見られる（図版76—9～19、写真図版36—9～19）。

(5)晩期の土器群と考えられるもので、三又状文・沈線文・縄文によって文様帯が区画構成される浅鉢3点を除けば、何れも深鉢形土器の破片である。深鉢形土器は、口縁部文様帯が平行沈線文で口唇部上端や側縁に刻みや押圧文が加えられるものと、口縁部文様帯が無文のものとのに分れる。しかし無文のものは、口唇部に刻みや押圧があるか否かでも細分できる。体部文様は、単節の斜行縄文2種であるが条が平行するもの、縦走するものなどがある（図版76—22～



※縮尺率は、実測図がS=1:4、拓影がS=1:3

図版76：遺構外出土の遺物…土器（1）

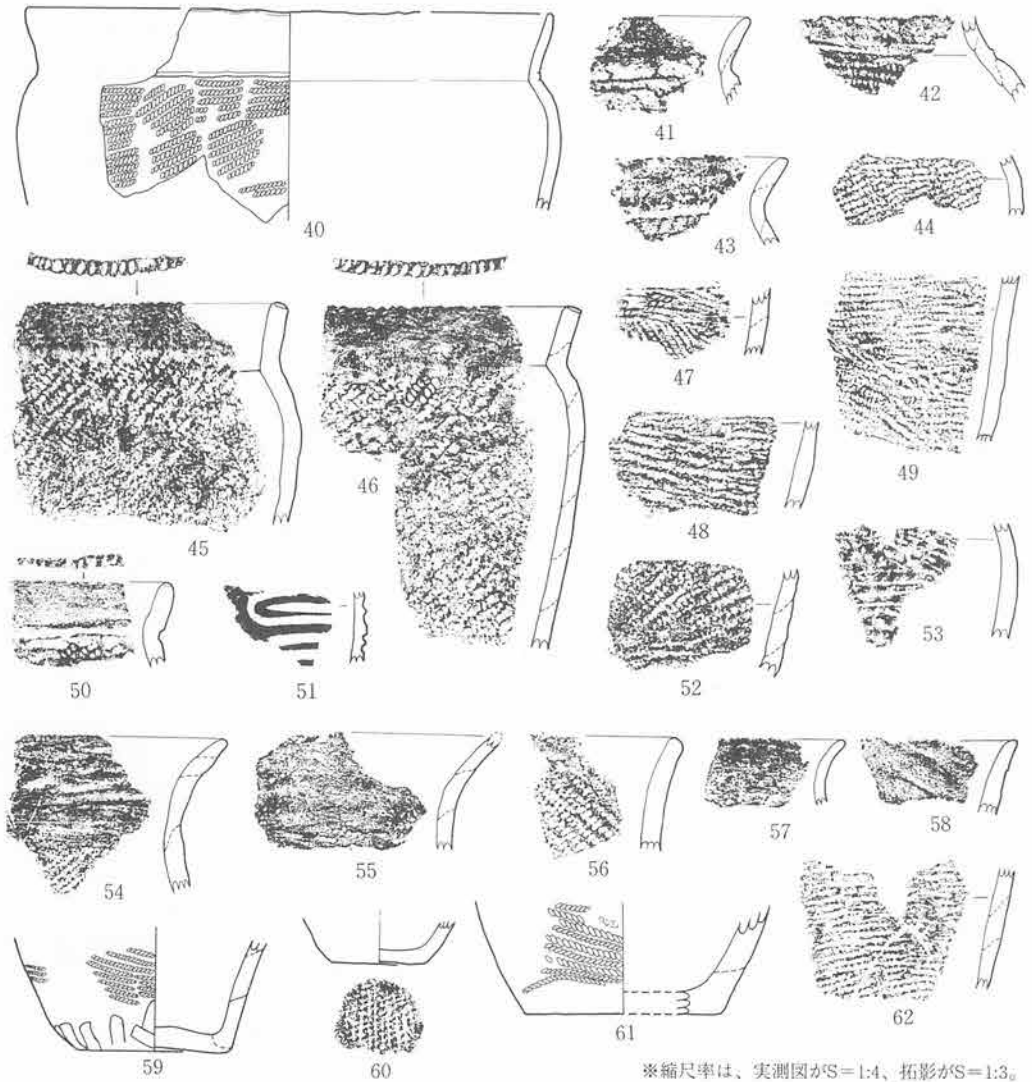


39、77-40~53、写真図版36-22~39、37-40~53)。

(6)口縁部が外反し、口縁部文様帯として無文帯が存在するが文様帯を区画する沈線・隆帯は見られないものと、縄文だけの底部周辺の破片を一括した。これらは、必ずしも同一時期とは考えられないものである(図版77-54~62、写真図版37-54~64)。

## 2. 土師器・須恵器

土師器は、成形調整の方法と器形とで大別2種に区分できる。1つは、輪積成形でハケメ・ヘラケズリ・ヘラナデなどの調整手法を多用するカメ・坏、他方はロクロ成形調整によるカメ坏である。須恵器は、坏・壺・カメの3器種の破片が出土しているが器形全体が判明するもの



※縮尺率は、実測図がS=1:4、拓影がS=1:3。

図版77：遺構外出土の遺物…土器(2)

は見られない。

(1)輪積成形による坏は、器外面にハケメ・ヘラケズリ・ミガキの調整手法がとられ、内面はミガキ調整・黒色処理が施こされる(図版78—63~65、写真図版38—67・68・82・83)。

(2)輪積成形によるカメは、器内外面にハケメ・ヘラナデ・ヘラケズリなどの調整手法が多用されている。口縁部・頸部に沈線、あるいは沈線状の段が数条施こされたものと、頸部に口縁部と体部とを区画する段や沈線が見られるものとの2種に大別できる。器形は長胴形の体部で口縁部は外傾~外反する。全体的に口縁部径は、胴部径より大きい。底部周辺は、外方へ張り出すものが多く、底面には木葉痕・砂目が見られる(図版78—66~89、写真図版38—69~77)。

(3)ロクロ成形調整による坏は、器形の差異はあるが底面は全て回転糸切りである。図版79—92~95は、内面にミガキ・黒色処理が施こされている。図版79—96~100・103・104は、内面への2次調整は施こされていないか不明のもので、底部周辺にケズリ調整が見られるものもある。

(4)ロクロ成形調整によるカメも回転糸切りで、底部周辺にヘラケズリの調整を施こしたものと、無調整のものがある。何れも小形のカメである(図版79—101・102、写真図版38—80)。

(5)須恵器は、坏・壺・カメの3器種が見られるが器形全体が判明する資料はない。坏は、ロクロ成形調整で回転糸切りの底面である。底部縁辺が僅かに調整されているものも見られるが無調整に近い。壺は、細口形と広口形との2形態3個体分の破片が見られる。カメは、何れも破片で調整として平行叩き目等が見られるが器形全体は不明である(図版79—105~110、写真図版38—81・84~87)。

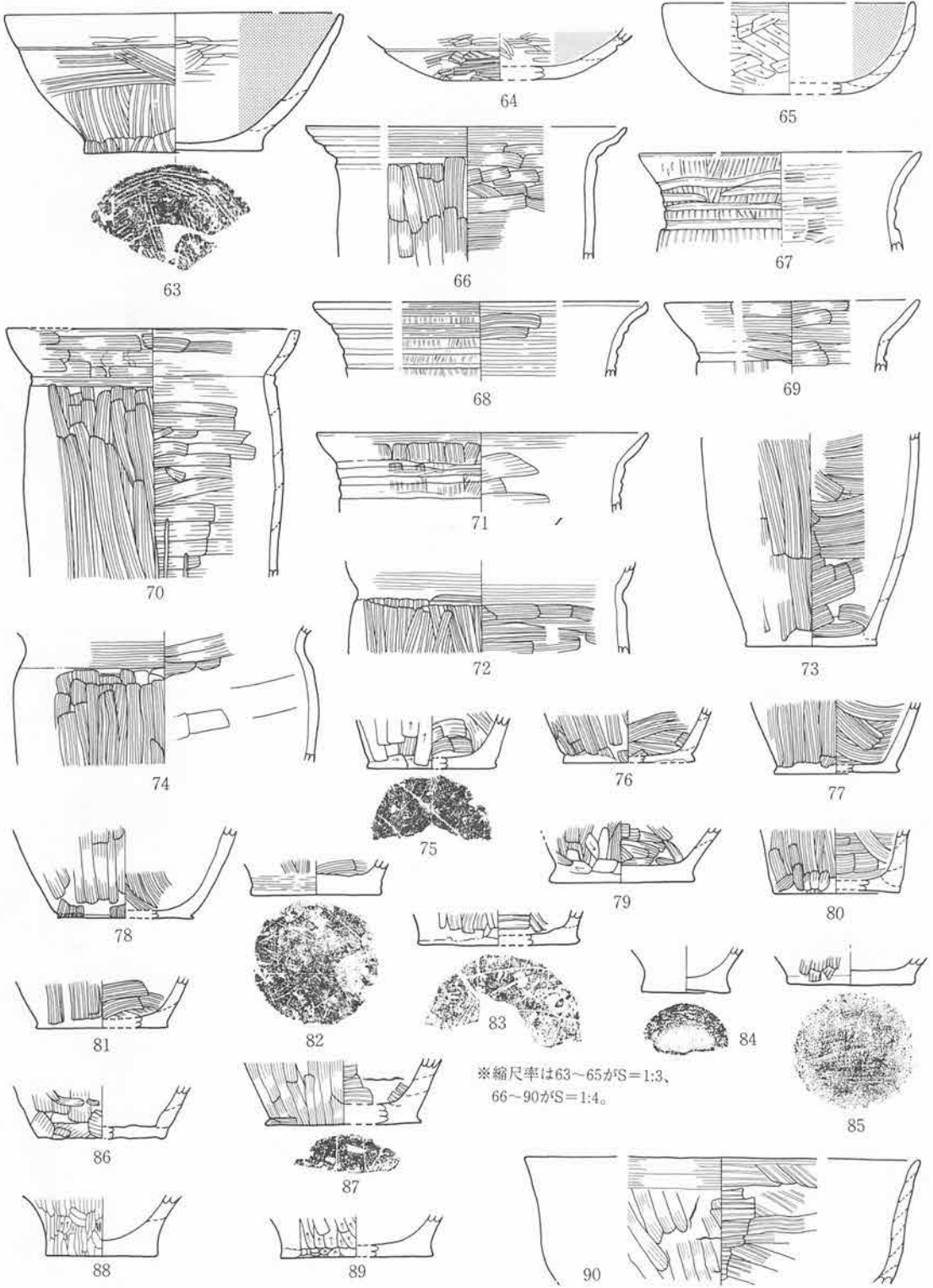
### 3. 石器・石製品

定形的な石器種は、石鏃・石槍・石匙・搔器・打製石斧、そして打製石斧の一種としてあつかわれることもある石鋏があげられる。出土点数が多いのは、僅かな調整加工や使用による微小剝離をもつ剝片である。石器・石製品の出土点数は、108点であるが図・写真・表に掲載したものは82点である。

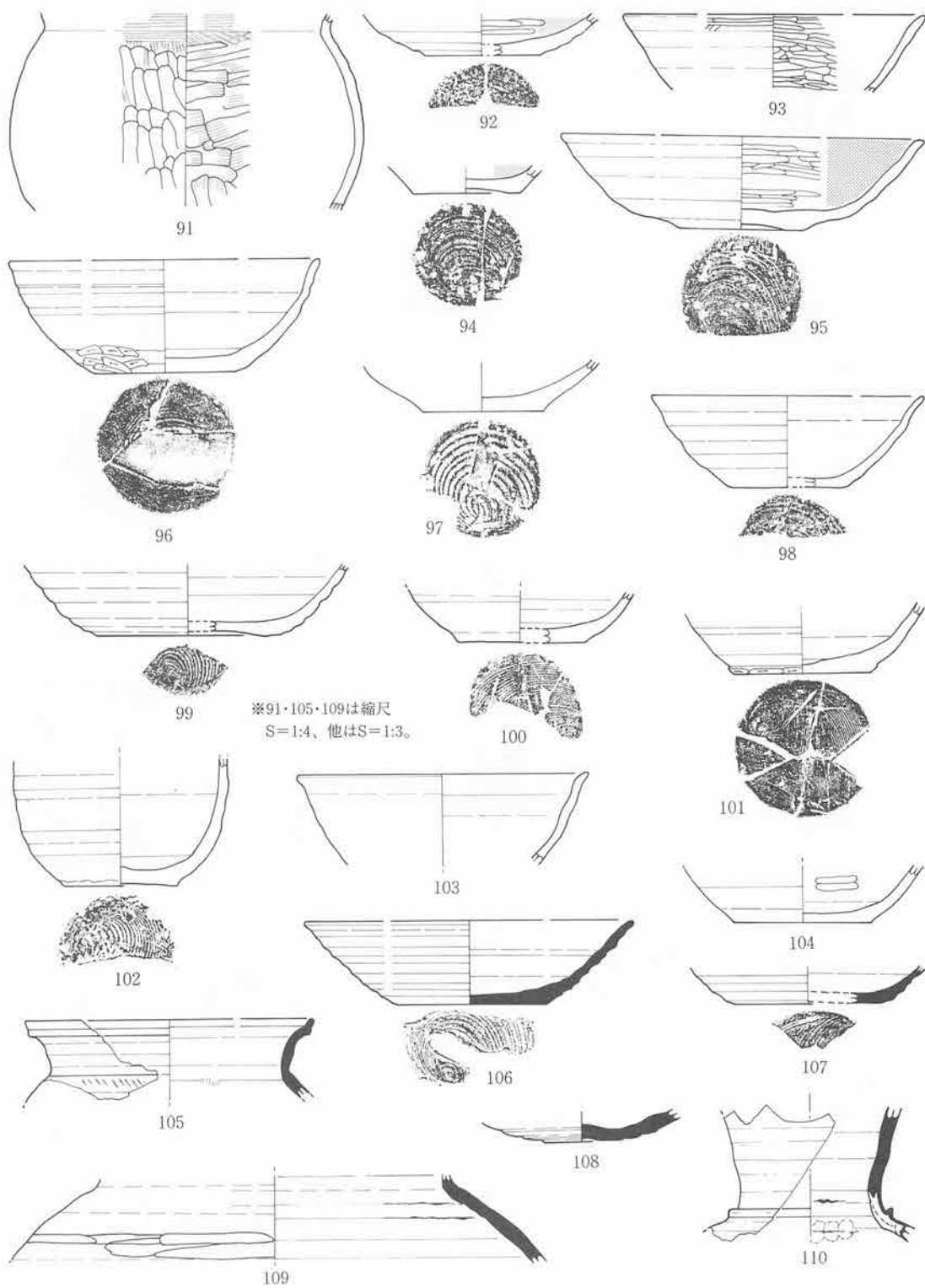
(1)石 鏃：石鏃は、有茎鏃1点、凹基無茎鏃2点の計3点が出土している。3点とも基部あるいは先端を欠損している。調整加工は、両面加工であるが図版80—3(写真図版39—3)は片面に1次剝離面を残している。

(2)石 槍：横長剝片を素材として作られた薄身の柳葉形を呈する。素材剝片の背面側は、両側縁からの深い並行剝離によって全面調整がなされ、腹面側は器体中央付近に1次剝離面を残し並行剝離によって加工調整がなされている。先端・基部とも欠損は見られない(図版80—4、写真図版39—4)。

(3)搔器・削器：縦長剝片の側縁、あるいは先端に急角度の刃部調整剝離を加えたものである



図版78：遺構外出土の遺物…土器（3）



図版79：遺構外出土の遺物…土器（4）

(図版80—5～7・13・14、写真図版39—5～7・13・14)。80—5は剥片端が折損し、80—6は剥片端および両側縁に調整加工が施こされている。80—7は不定形ぎみであるが僅かに湾曲する側縁と剥片端に調整加工がなされている。その他、剥片の一部に同様の加工調整を行ったもの数点が見られるが、それらは“不定形石器・調整痕のある剥片”の項で略記する。

(4)石 匙：縦長剥片を素材とし、基部の打瘤を除去調整してツマミを形成した縦長石匙2点が出土している。刃部の作りだしは、何れも押圧剥離によるが片面あるいは両面に1次剥離面を残している。なお80—8では、腹面の右縁にも荒い調整が施こされている(図版80—8・9、写真図版39—8・9)。

(5)打製石斧：ヘラ状石器、あるいは石篋と呼ばれる場合がある石器種で4点出土している。これらは加工調整の有り方から2大別される(図版80—10～12・15、写真図版39—10～12・15) 80—10・11は、両面に敲打剥離による調整加工が施こされ素材形態は不明である。80—12・15は、部厚い横長剥片を素材とし背面と腹面の基部より、および打瘤除去のための調整加工がなされている。復面の刃部面は何れも1次剥離面である。なお、80—15のスクリーン・トーンはポリシュの範囲を示す。

(6)不定形石器：剥片の一部、あるいは一側縁などに連続した浅い調整剥離が施こされているものを一括した。剥離角等から搔器・削器と考えられるものも含まれるが、加工調整の部位・剥片形状が一定しない石器である(図版81—16～32、82—33～36、写真図版40—16—36)。

これらの中には、折断か折損かは不明であるが剥片の一部を欠損しているものが多い。

(7)その他の剥片：剥片の一端あるいは一側縁に使用によると考えられる微小剥離をもつものと、そうでないものがある。また、極一部に不規則な調整加工が見られるものの前例の不定形石器群のような連続した調整剥離ではない(図版82—37～55、84—67・68・70・71・73、写真図版40—37～53、42—66・67・69・70・72)。

(8)石 核：図版84—77～79(写真図版43—75・76・81)の3点が出土している。何れも十分に剥片剥離を行ったものとは言い難く、また石核石器を製作しようとした形跡も認められない。

(9)石 鋏：打製石斧として分類呼称される場もあるが(5)と区別するため石鋏として区分した。素材・形状に差異は見られるが図版82—56～59、83—60～66(写真図版41—54～60、42—61～65)の11点が出土している。これらの素材は、分割磔を用いたもの、部厚い大形剥片を用いたもの、偏平磔を用いたもの、の3種類があり、片面あるいは両面に広く自然面を残しているものが多い。加工調整の方法は、何れも敲打剥離である。

(10)磨製石斧：磨製石斧は1点出土している。これは、刃部縁側からの破碎剥離が見られ、身の中ほどで折損している。折損後に他の用途に転用したか否かは不明であるが、破碎剥離面稜の摩耗が見られることから土掘具として利用されていたものと思われる(図版84—82、写真図

版43-85)。

(1)石製円盤：形状・加工状態が一定していないが2点出土している。何れも自然礫を板状に分割し周辺等を敲打整形している(図版84-75・76、写真図版43-74・77)。

(2)擦石・凹石：図版84-80・81(写真図版43-78・80)の2点が出土している。84-80は、2平坦面に連続する敲打痕と敲打による凹が形成され、1側縁には擦・敲くの痕跡が見られる。84-81は、2平坦面に不規則に集中する敲打痕が見られるが、凹みを形成するには至っていない。

(3)砥石：分割面・自然面が全く見られないものである。使用摩耗が極度に進んでいる(図版84-72、写真図版43-73)。

(4)碁石：石製研磨製品で1点出土している。岩質は不明である(図版84-69、写真図版43-73)。

#### 4. 金属製品

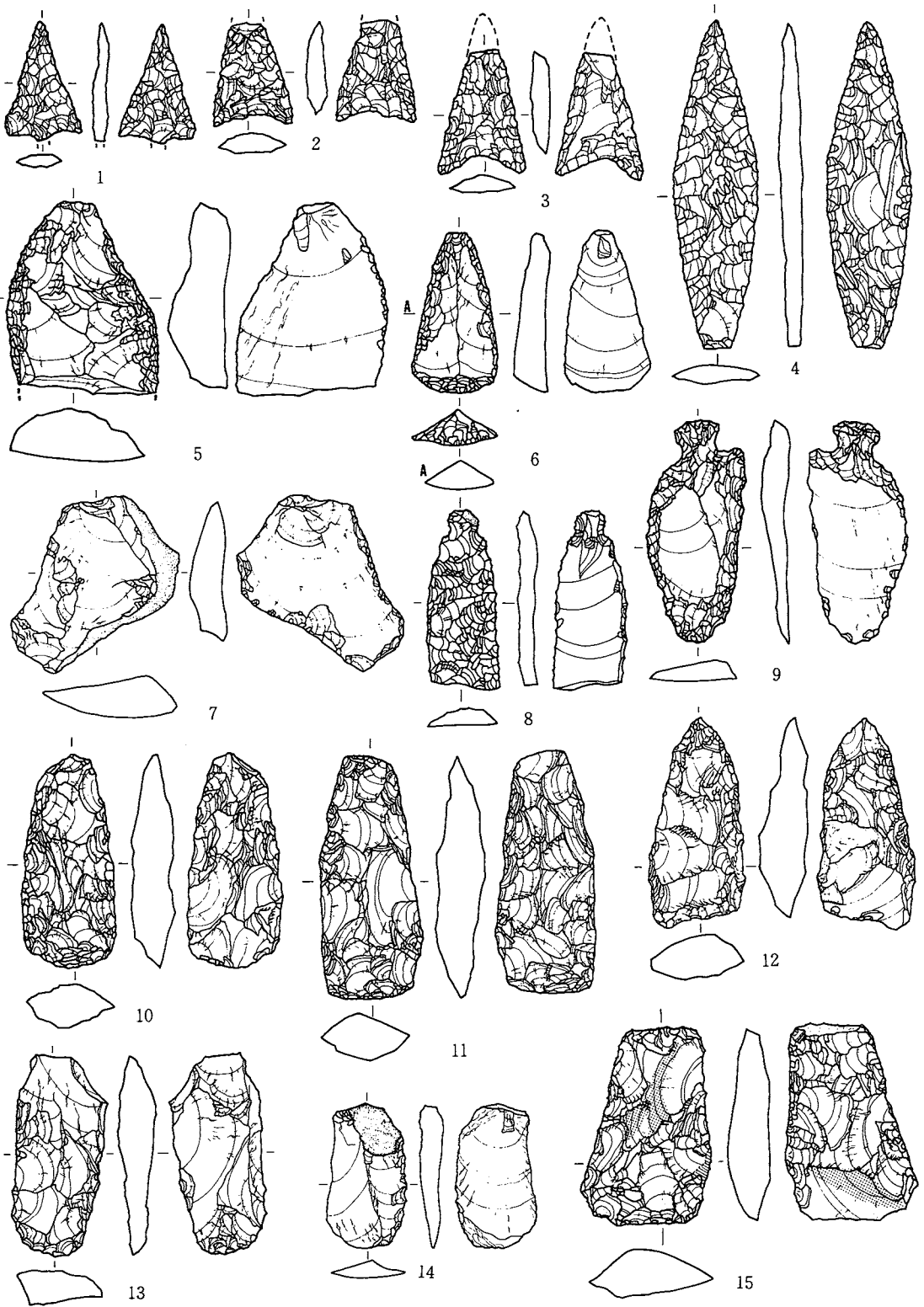
(1)貨幣：洪武通寶1点、錢文不明1点の計2点が出土している。洪武通寶は銅製、錢文不明品は鉄製である(写真図版43-82・83)。

(2)鉄製品断片：農器等の楔に類似する点もあるが、錆化が著しく形状が不明瞭である(写真図版43-79・84)。

(3)鉄製環：楕円形を呈し、一端に別のものを装着、あるいは組み合わせるための穴をもつ。このことから何らかの器具の一部と思われる。錆化の程度と出土層位から近現代の遺物の可能性が高い(写真図版43-88)。

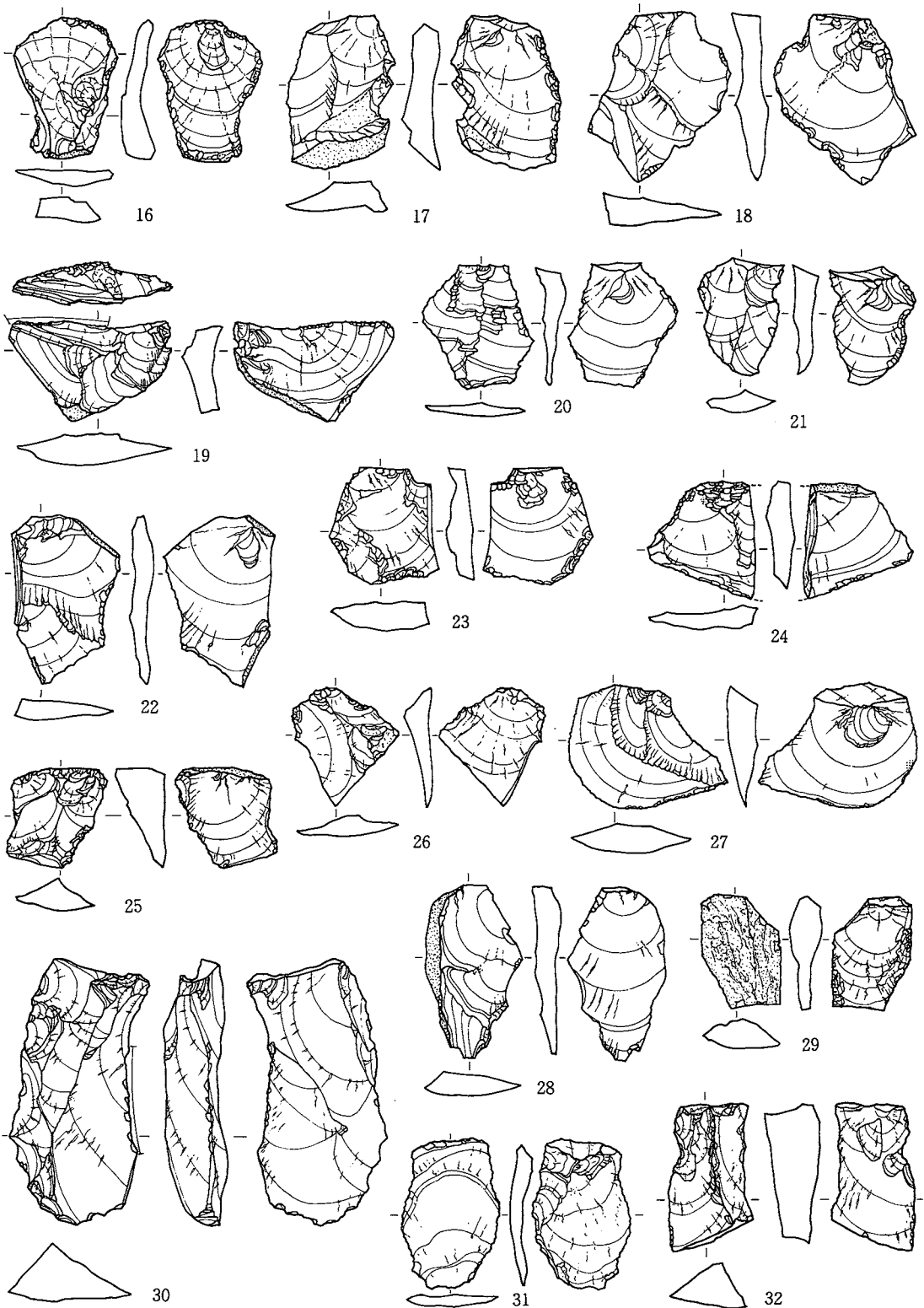
#### 5. その他の遺物

その他の遺物としては、写真図版43-86・87・89~91の陶器破片の他に数種陶器片や“大日本ビール”の銘をもつビール瓶の破片、木材搬出用の環付楔、稲刈鎌、眼鏡レンズ、眼鏡フレームなどが出土しているが、何れも近代・現代のものである。



※縮尺率は、1~4がS=2:3、5・6・8・9・13・がS=1:2、他はS=1:3。

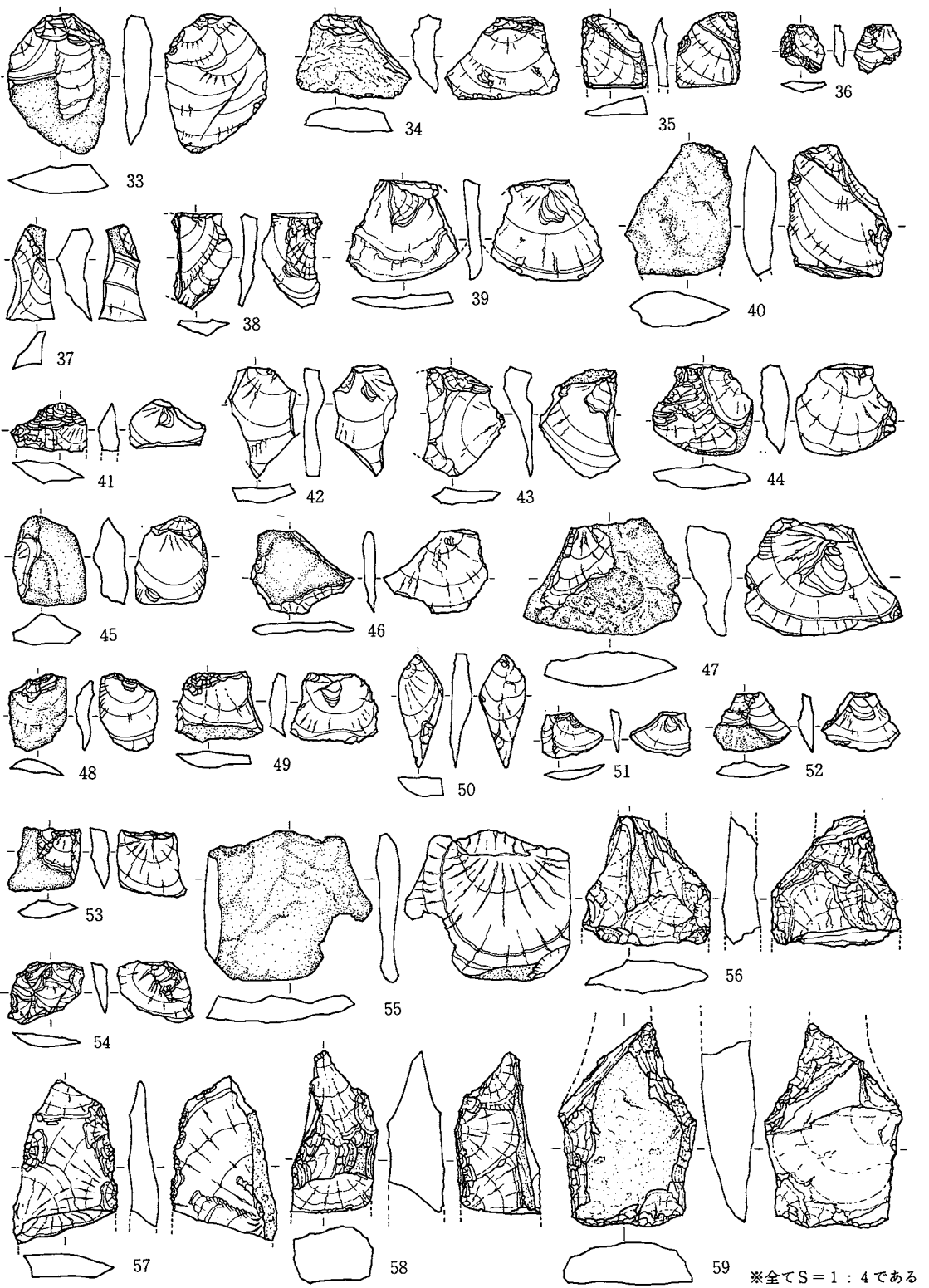
図版80：遺構外出土の遺物…石器（1）



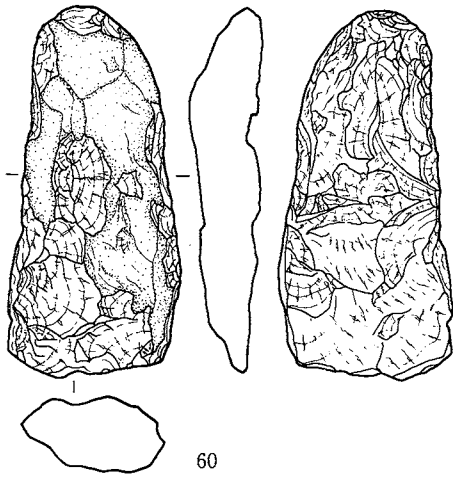
※20~23、26・31・32はS=1:2、  
 他はS=1:3。

図版81：遺構外出土の遺物…石器（2）

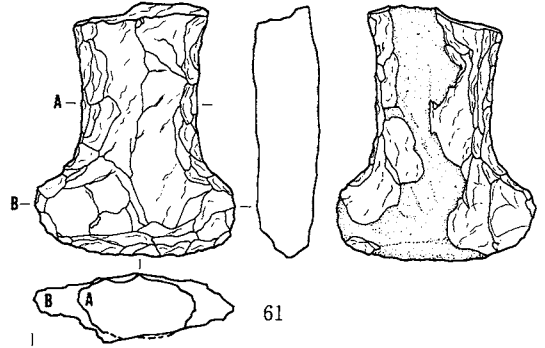




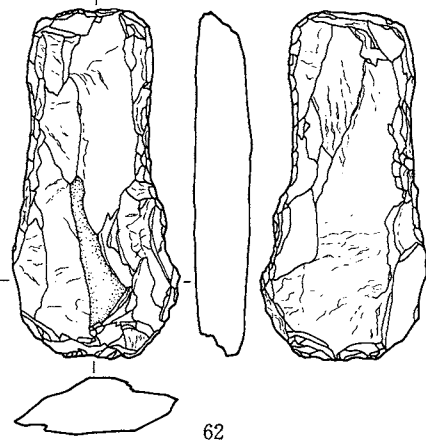
図版82：遺構外出土の遺物…石器（3）



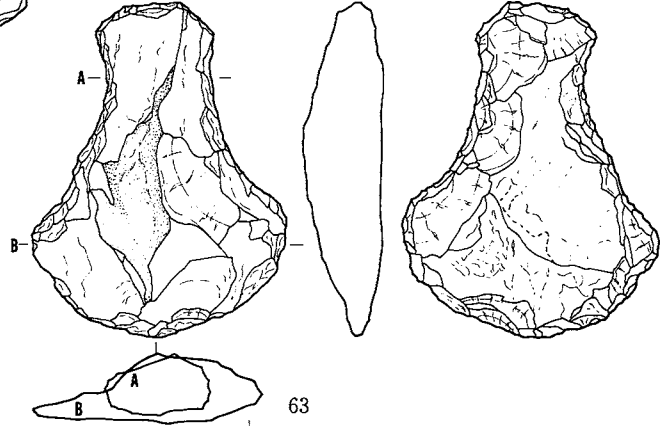
60



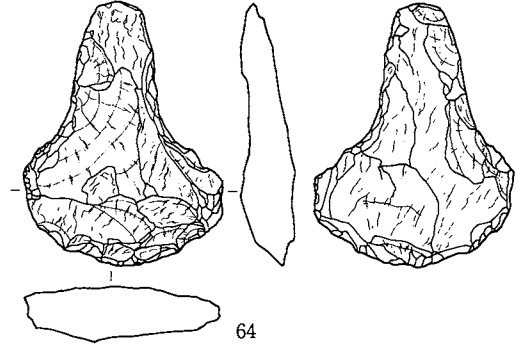
61



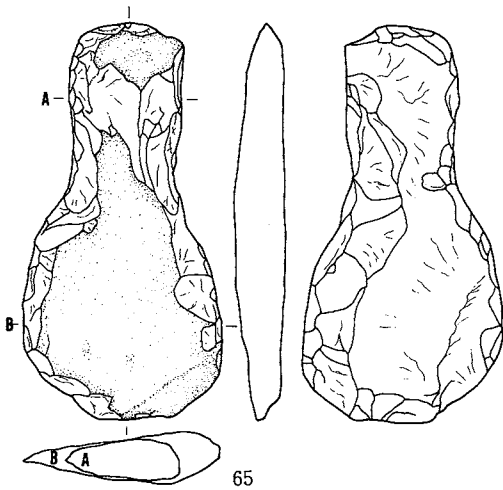
62



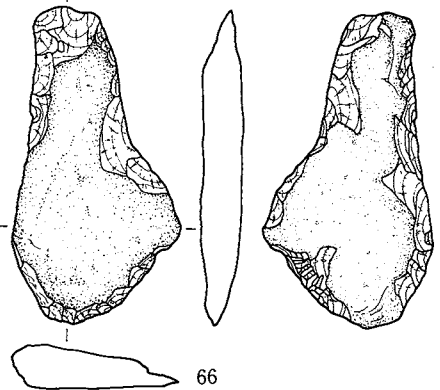
63



64



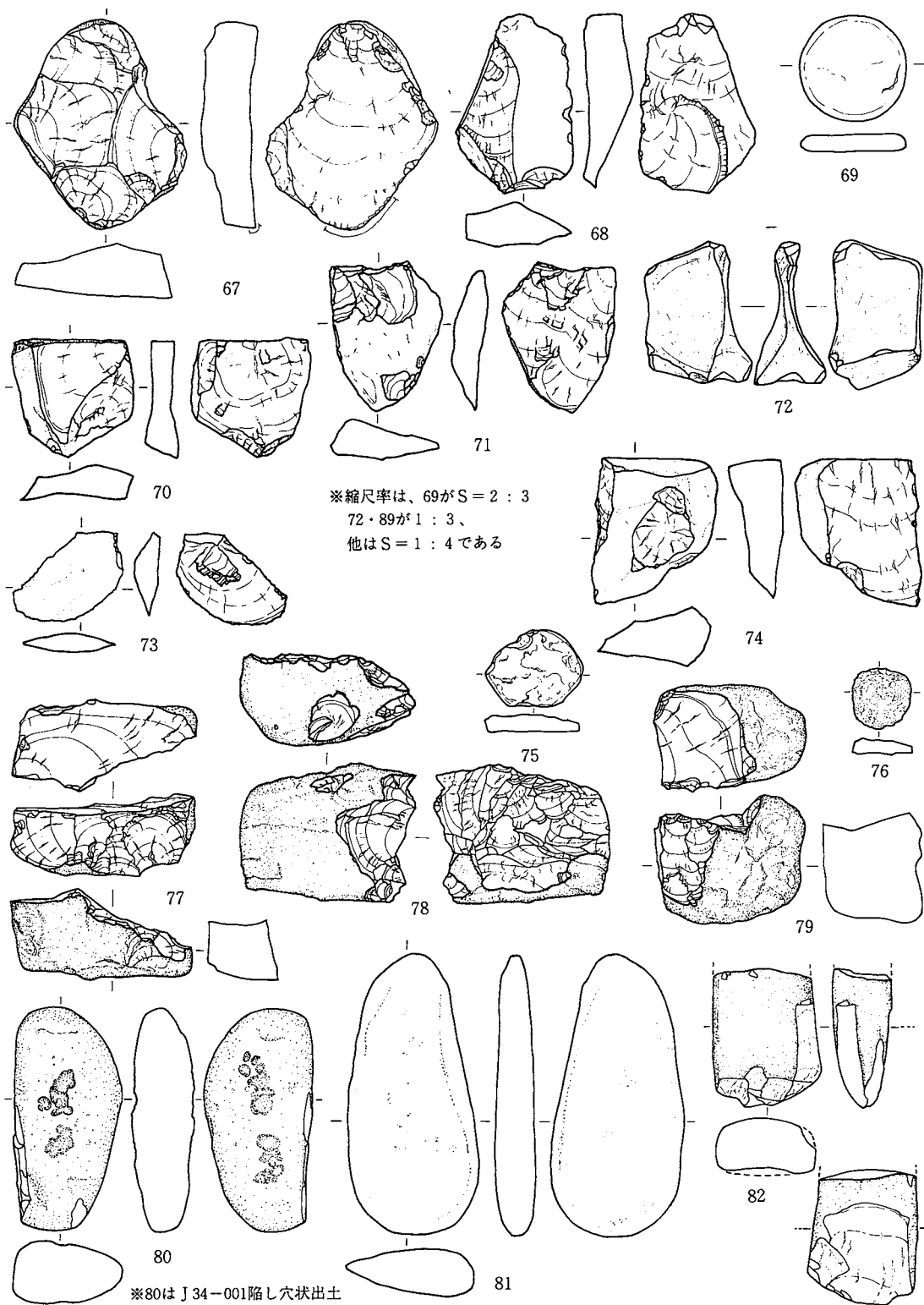
65



66

※縮尺率は、何れも S = 1 : 4

図版83：遺構外出土の遺物…石器（4）



図版84：遺構外出土の遺物…石器（5）

〈遺構外出土の土師器・須恵器観察表〉

通算 番号	図版 番号	写真図 版番号	器種	出土地点	外 面 調 整			内 面 調 整			法 量 mm			備 考	
					口縁部	体部上半	体部下半	底 部	口縁部	体部上半	体部下半	口 径	底 径		器 高
1	78-63	38-66 68	坏	E24-II	—	M	S・H	H	内黒	M	S	161	(84)	66	内面黒色処理・ 爆付着
2	78-64	—	坏	E27・Y-I~IIu	—	—	M・H	—	—	—	M	—	(52)	(25)	輪痕・ 内面黒色処理
3	78-65	—	坏	E270・O-II	X	K	N	—	黒斑	—	—	(122)	(60)	(44)	内面不規則なミ ガキ、黒色処理
4	78-66	38-69	壺	B22・Y-II	Y	N・H	—	—	X	N・H	—	(200~ 205)	—	(83)	内外面爆付着
5	78-67	38-70	壺	B24・D-II L	Y	Y・N 後沈線	—	—	Y	N後 Y H	—	(178)	—	(61)	外面爆付着
6	78-68	38-71	壺	E28F-I~IIu E27・O-II	Y	N沈線	—	—	Y	N・H	—	(210)	—	(45)	
7	78-69	—	壺		N→ 横指N	N・ 沈線	—	—	N	S・N	—	(162)	—	(44)	
8	78-70	38-74	壺	F27A~F-II	N	H	—	—	Y・N	S・N	—	(184)	—	(155)	
9	78-71	—	壺	E27Y-I~IIu	Y	N・ 沈線	—	—	Y	N	—	(210± 5)	—	(48)	
10	78-72	38-75	壺	E27Y-I~IIu	—	Y・H	—	—	Y	H	—	—	—	(58)	
11	78-73	—	壺	E27Y-I~IIu	—	H	H	木葉痕	—	H	S・H	82	—	(134)	
12	78-74	—	壺	C19E-II	—	Y・H	—	—	N・H	—	—	—	—	(86)	
13	78-75	—	壺	B21・I-Iu~II	—	—	H・K	木葉痕	—	—	H・N	—	(78)	(32)	
14	78-76	—	壺	C19・E-II	—	—	H	剝落	—	—	S・H	—	(82)	(34)	
15	78-77	38-72	壺	E27Y-I~IIu	—	—	H	—	—	—	H	—	(78)	(44)	内黒爆付着
16	78-78	—	壺	E26C-I~IIu E26D-II	—	—	N・H	—	—	—	H	—	(82)	(58)	
17	78-79	—	壺	F27・B-II	—	—	H・K	—	—	—	S・N	—	92	(34)	
18	78-80	—	壺	E27E-II	—	—	H	—	—	—	S・H	—	(80)	(40)	
19	78-81	—	壺	F25・BC-II	—	—	H	—	—	—	S・H	—	(82)	(32)	
20	78-82	—	壺	B22L-Q-IIu	—	—	H・Y	木葉痕	—	—	H	—	82	(23)	内底面はヘラナデ
21	78-83	38-73	壺	F30-I~IIu	—	—	H・M	木葉痕	—	—	N	—	(98)	(20)	
22	78-84	—	壺	C24-I~II	—	—	N?	N砂目	—	—	—	—	(56)	(29)	
23	78-85	—	壺	E28・O-I~II	—	—	H	—	—	—	—	—	(75~ 80)	(18)	底部内面 ヘラナデ調整
24	78-86	—	壺	C17-II L	—	—	N	—	—	—	S	—	(82)	(33)	底部内面にハケメ
25	78-87	—	壺	F27・F28・粗	—	—	N	木葉痕	—	—	H→N S	—	(98)	(40)	
26	78-88	—	壺	C24B-I l	—	—	H→M	—	—	—	S・N	—	70	(38)	
27	78-79	—	壺	C20-II u	—	—	K→N	—	—	—	M	—	(96)	(25)	内面爆付着
28	78-90	38-78	坏	G28M-II u	Y	N	—	—	H	S横方 向のH	—	(190± 10)	—	(61)	
29	—	38-82	坏?	E28P-II	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	同一個体片 内黒処理
30	—	38-83	坏?	B24D-II L	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
31	—	38-86	壺	I14・D・E・J・IIu	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	須恵器
32	—	38-87	壺	I14・D・E・J・IIu	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	須恵器
33	79-91	38-77	壺	A30-I~IIu	—	S・ M	—	—	—	S・ Y・N	—	—	(125)	—	頸部径180~190
34	79-92	—	坏	E28-L-I~IIu	—	—	R	I痕	内黒	—	M	—	(56)	(20)	爆付着
35	79-93	38-76	坏	G28M-II u	M	R	—	—	M	M	—	(144)	—	(36)	
36	79-94	—	坏	E28M-II u	—	—	—	I痕	内黒	—	—	—	(50)	(13)	爆付着
37	79-95	—	坏	E28B-II	R	R	R	I痕	内黒	M	M	—	60	43	爆付着
38	79-96	—	坏	E28W-II	R	R	K・ R・N	I痕	内黒	M・R	M・R	148	64	54	
39	79-97	—	坏	E28P-II u	—	—	—	I痕	—	—	—	—	58	(23)	
40	79-98	—	坏	E28F-I~IIu	R	R	—	I痕	R	R	—	132	(54)	43	
41	79-99	—	坏	E28W-II	—	R	R	I痕	—	R	—	—	(80)	(34)	赤焼?
42	79-110	—	坏	E28R-II	—	—	R	I痕	—	—	R	—	(61)	(25)	
43	99-101	—	壺	E28Q-II	—	R	K	N	—	—	R	—	67	(33)	
44	79-102	38-80	壺	E28Q-II	—	—	R	I痕	—	—	R	—	(52)	(60)	
45	79-103	—	坏	H14E-II u	R	R	—	—	R	R	—	(140)	—	(47)	
46	79-104	—	坏	D28V-II	—	—	R	—	—	—	N・M	—	(66)	(27)	
47	79-105	38-84	壺	E28Q-II	R	—	—	—	—	R	—	(182)	—	(51)	須恵器、頸部径 152、壁厚5~7
48	79-106	—	坏	E28-II	R	R	R	I痕	R	R	—	(160~ 150)	(64)	39~40	須恵器
49	79-107	—	坏	E28F-I~IIu	—	—	R	I痕	—	—	R	—	(70)	(18)	須恵器

通算 番号	図版 番号	写真図 版番号	器種	出土地点	外 面 調 整				内 面 調 整			法 量 mm			備 考	
					口縁部	体部上半	体部下半	底 部	口縁部	体部上半	体部下半	口 径	底 径	器 高		
50	79-108	—	壺	F27A~F-II	—	—	R	—	—	—	—	—	(38)	(19)	須恵器	
51	79-109	38-81	壺	H14F・G-II u	—	R <sub>N?</sub> K	—	—	—	R	—	—	—	(55)	須恵器 頸部外径220	
52	79-110	38-85	壺	D24-II	—	R	—	—	—	S・R	—	—	—	(63)	須恵器・頸部径 39~40・指頭痕	
53	—	38-79	壺	E28R-II												

<遺構外出土の石器・石製品他計測表>

通算 番号	図 版	写真図版	石 器 種	出土区層位等	法 量 (mm, g)		岩 質	生成年代・産地等	その他
					長さ×幅×厚さ	重量			
1	80-1	39-1	石鏃(折)	H10E-II	(25)×16×3	0.8	チャート	古生界・北上山地	
2	80-2	39-2	石鏃(折)	I14-021住 マナド	(21)×17×4	1.35	凝灰質硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地	
3	80-3	39-3	石鏃(折)	G29-01住、3 u	(23)×17×4	1.35	凝灰質硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地	
4	80-4	39-4	石槍	E29P-IV u	69×18×5	5.1	珪質細粒凝灰岩	新第三系中新統・奥羽山地	
5	80-5	39-5	撻器(折)	H16C-III u	61×41×16	40.95	凝灰質硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地	
6	80-6	39-6	撻器	H28E-III u	50×27×11	11.9	珪質細粒凝灰岩	新第三系中新統・奥羽山地	
7	80-7	39-7	撻器	F28O-II u	77×68×20	98.0	珪質細粒凝灰岩	新第三系中新統・奥羽山地	
8	80-8	39-8	石匙(折)	B19E-II	54×22×6	8.7	凝灰質硬質泥岩	中新統・奥羽山地	
9	80-9	39-9	石匙	H11K-II~III u	70×31×8	16.4	凝灰質硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地	
10	80-10	39-10	打製石斧	K31Y-IV u	102×45×21	90	凝灰質硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地	
11	80-11	39-11	打製石斧	F29K-III	116×48×22	130	粘板岩	古生界・夏油川	
12	80-12	39-12	打製石斧	K30R-IV u	95×46×23	90	凝灰質硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地	
13	80-13	39-13	不定形石器	H14S-II	64×29×11	24	凝灰質硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地	
14	80-14	39-14	不定形石器	C16N-II	68×36×11	26.2	凝灰質硬質泥岩	中新統・奥羽山地	
15	80-15	39-15	打製石斧	H27A-IV u	62×39×15	34.05	珪質細粒凝灰岩	新第三系中新統・奥羽山地	
16	81-16	40-16	不定形石器	K32V-III u	66×48×14	32.95	珪質細粒凝灰岩	新第三系中新統・奥羽山地	
17	81-17	40-17	フレイク	C16P-II u	69×50×15	54.4	流紋岩質細粒凝灰岩	中新統・奥羽山地	
18	81-18	40-18	不定形石器	F27K-出土	78×56×15	57.3	流紋岩質細粒凝灰岩	中新統・奥羽山地	
19	81-19	40-19	撻器	J29V-II	46×75×15	49.25	珪質細粒凝灰岩	新第三系中新統・奥羽山地	
20	81-20	40-20	u、フレイク	C18D-II u	38×30×10	4.8	硬質泥岩	中新統・奥羽山地	
21	81-21	40-21	u、フレイク	B18S-II u	35×25×7	4.2	凝灰質硬質泥岩	中新統・奥羽山地	
22	81-22	40-22	u、フレイク	C15K-II u	53×33×6.5	10.7	凝灰質硬質泥岩	中新統・奥羽山地	
23	81-23	40-23	撻器	E28F-II u	36×32×9	13.4	硬質泥岩	中新統・奥羽山地	
24	81-24	40-24	u、フレイク(折)	E28M-II u	54×51×14	29.3	流紋岩質細粒凝灰岩	中新統・奥羽山地	
25	81-25	40-25	u、フレイク	G13J-II u	48×46×24	31.8	凝灰質硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地	
26	81-26	40-26	u、フレイク(折)	H12E-II u	37×32×8	6.65	鉄・石英	新第三系中新統・駒岳山麓(?)	
27	81-27	40-27	u、フレイク	G30S-II	58×69×14	50.2	凝灰質硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地	
28	81-28	40-28	u、フレイク	K24F-III u	81×46×12	40.9	流紋岩質細粒凝灰岩	中新統・奥羽山地	
29	81-29	40-29	不定形石器(折)	F30B-II	54×37×15	29.35	珪質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地	
30	81-30	40-30	u、フレイク	I2C-II u	126×59×27	200	凝灰質硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地	
31	81-31	40-31	u、フレイク	I14-021住 カマド周辺 焼土上	47×31×6	7.23	粘板岩	古生界・夏油川・仙人	
32	81-32	40-32	u、フレイク(折)	H09-01M	46×27×17	17.8	凝灰質硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地	
33	82-33	40-33	u、フレイク	G20X-II	8×59×17	80	珪質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地 (川尻以西)	
34	82-34	40-34	u、フレイク	H12E-I u	40×55×11	29.3	粘板岩	古生界・夏油川-仙人	
35	82-35	40-35	u、フレイク(折)	H14-II u層	47×41×11	22.4	粘板岩	古生界・夏油川-仙人	
36	82-36	40-36	フレイク	B21J-II u	30×29×6.5	6.1	流紋岩質細粒凝灰岩	中新統・奥羽山地	
37	82-37	40-37	折斷フレイク	D25B-II	45×14×18	11.5	ホルンフェルス	古生界・仙人附近	
38	82-38	40-38	フレイク	C17区-II u	60×33×11	19.5	硬質泥岩	中新統・奥羽山地	
39	82-39	40-39	フレイク (折)	C18E-II	49×(53)×7	18.7	凝灰質硬質泥岩	中新統・奥羽山地	
40	82-40	40-40	u、フレイク(折)	H09-E・I	77×61×21	100	粘板岩	古生界・夏油川-仙人	
41	82-41	41-41	フレイク (折)	D24F-II u	(2.3)×35×7	7.2	凝灰質硬質泥岩	中新統・奥羽山地	
42	82-42	41-42	フレイク (折)	F23-溝内	52×32×8	141	凝灰質硬質泥岩	中新統・奥羽山地	
43	82-43	41-43	フレイク (折)	B21I-I u~II	52×(36)×12	16.3	硬質泥岩	中新統・奥羽山地	

通算 番号	図 版	写真図版	石 器 種	出土区層位等	法 量 (mm, g)		岩 質	生成年代・産地等	その他
					長さ×幅×厚さ	重量			
44	82-44	41-44	フレイク	C18E-II	56 × 62 × 16	59.4	流紋岩	中新統・奥羽山地	
45	82-45	41-45	フレイク	C18E-II <sub>L</sub>	55 × 45 × 18	56.2	ホルンフェルス	古生界・仙人附近	
46	82-46	41-46	フレイク	E26O-II <sub>L</sub>	50 × 76 × 70	21.8	硬質泥岩	中新統・奥羽山地	
47	82-47	41-47	フレイク	B18S-II <sub>L</sub>	64 × 89 × 23	120	凝灰質硬質泥岩	中新統・奥羽山地	
48	82-48	41-48	フレイク	B22Y-II	43 × 36 × 9	13.8	流紋岩質細粒凝灰岩	中新統・奥羽山地	
49	82-49	41-49	フレイク	C18E-II <sub>L</sub>	33 × 40 × 8	11.9	凝灰質硬質泥岩	中新統・奥羽山地	
50	82-50	—	フレイク	D26F-II	72 × 28 × 12	23.1	ホルンフェルス	古生界・仙人附近	
51	82-51	41-50	フレイク	C24区・I~II u	27 × 39 × 55	5.3	凝灰質硬質泥岩	中新統・奥羽山地	
52	82-52	41-51	フレイク	B18Y-II u	36 × 48 × 10	10.9	硬質泥岩	中新統・奥羽山地	
53	82-53	41-52	フレイク	D26F-II	40 × 39 × 11	18.7	ホルンフェルス	古生界・仙人附近	
54	82-54	41-55	フレイク	G28-02住	37 × 44 × 9	14.4	珪質細粒凝灰岩	新第三系中新統・奥羽山地	
55	82-55	41-53	フレイク	D25A-II u	86 × 86 × 22	140	古生界・仙人附近		
56	82-56	41-54	石鉄(折)	H17E-II	83 × 81 × 23	140	流紋岩質凝灰岩	新第三系中新統・奥羽山地	
57	82-57	41-56	不明	C24F-I <sub>L</sub> ~II u	89 × 60 × 17	80	凝灰質硬質泥岩	中新統・奥羽山地	
58	82-58	41-57	不明	H09-01L	93 × 53 × 33	150	凝灰質硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地	
59	82-59	41-58	石鉄	H09J-II <sub>L</sub>	131 × 88 × 28	370	流紋岩質凝灰岩	新第三系中新統・奥羽山地	
60	83-60	41-59	石鉄	F30A-II u	195 × 90 × 35	770	凝灰質硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地	
61	83-61	41-60	石鉄	C21J-II	133 × 105 × 33	460	流紋岩	中新統・奥羽山地	
62	83-62	42-61	石鉄	H21-表採	184 × 87 × 31	660	凝灰質粘板岩	古生界・仙人附近(?)	
63	83-63	41-62	石鉄	C15K-II u	178 × 133 × 38	800	凝灰質粘板岩	古生界・仙人附近(?)	
64	83-64	42-64	石鉄	G180-II u	140 × 102 × 27	310	緑色凝灰岩	新第三系中新統・奥羽山地	
65	83-65	42-63	石鉄	G180-II u	210 × 105 × 28	670	流紋岩質凝灰岩	新第三系中新統・奥羽山地	
66	83-66	42-65	石鉄	K35・MR-II	166 × 90 × 23	365	輝石安山岩	新第三系鮮新統・夏油川 (流域)	
67	84-67	42-66	u、フレイク	G13・O-II u	141 × 100 × 31	485	粘板岩	古生界・夏油川・仙人	
68	84-68	42-67	フレイク	H14-S-II	110 × 72 × 32	210	粘板岩	古生界・夏油川・仙人	
69	84-69	42-68	基石	J32V-I	21 × 22 × 3	3.2	?—	?—	
70	84-70	42-69	フレイク	H15E-II u	74 × 75 × 28	135	凝灰質硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地	
71	84-71	42-70	フレイク	H15E-II u	92 × 71 × 24	150	凝灰質硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地	
72	84-72	43-73	砥石	H11C-II u	66 × 40 × 33	58.1	凝灰質硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地	
73	84-73	43-72	フレイク	G09O-II u	58 × 70 × 11	40.8	凝灰質硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地	
74	84-74	42-71	フレイク	I15L-II u	92 × 79 × 38	310	粘板岩	古生界・夏油川・仙人	
75	84-75	43-74	石製円盤	H14A-II	47 × 61 × 11	34.1	流紋岩質凝灰岩	新第三系中新統・奥羽山地	
76	84-76	43-77	石製円盤	F25F-II <sub>L</sub>	38 × 37 × 10	14.6	流紋岩	中新統・奥羽山地	
77	84-77	43-75	石核	G15P-II	106 × 53 × 41	230	凝灰質硬質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地	
78	84-78	43-76	石核	E26F-II u	86 × 105 × 57	680	流紋岩質細粒凝灰岩	中新統・奥羽山地	
79	84-79	43-81	石核	H14I-II	78 × 87 × 58	450	珪質泥岩	新第三系中新統・奥羽山地	(川尻以西)
80	84-80	43-78	くぼみ石	J34-001陥し穴	128 × 63 × 37	395	緑色凝灰岩	新第三系中新統・奥羽山地	
81	84-81	43-80	(敲打痕)	G18Q-II	177 × 83 × 29	510	緑色凝灰岩	新第三系中新統・奥羽山地	
82	84-82	43-85	磨製石斧	F28P 倒木痕内	65 × 51 × 28	140	ホルンフェルス	古生界・仙人附近	
83	—	43-79	鉄片	G18M-I	30 × 24 × 15	16.9			
84	—	43-82	洪武通寶	C21I-I	23 × 23 × 1	2.6			銅合金
85	—	43-83	? (銭)	D28I-(粗)	23 × 23 × 1	2.8			
86	—	43-84	鉄片?	E25C-II u	49 × 15 × 17	16.5			
87	—	43-86	陶器片	F30-溝他(I)					
88	—	43-87	陶器片	F30-溝他(I)					
89	—	43-88	鉄製環	H22E-I	89 × 70 × 6	43.4			
90	—	43-89	陶器片	F30-溝他(I)					
91	—	43-90	陶器片	F30-(I)					
92	—	43-91	陶器片	F30-(I)					

## VI. まとめ

### 1. 竪穴式住居址について

(1)住居址の分布は、西側のH13-01、H14-01、I14-01・02・03の5棟と、東側のE28-01、G28-01・02、G29-01の4棟との大別2群に分かれている。何れの群も礫堤上の微高地に立地している。各住居址群は、埋土その他に堆積する灰白色火山灰<sup>(註)</sup>との関係から、更に区分ができる。それは、埋土中に火山灰が堆積する住居址と、埋土中に火山灰が見られない住居址とにである。埋土中に火山灰をもたない場合、火山灰降下前に廃棄された竪穴が埋没平坦化している場合と降下後に竪穴が形成された場合とが考えられる。

火山灰をもたない住居址のうちE28-01住居址は、他の凹地に堆積した火山灰層を破壊して形成されていることから、明らかに火山灰降下以後に形成された住居址である。他のI14-01・02・03住居址のうちI14-02と03は、器種形態、構成としてカマドの位置・構築方法からG28-02、G29-01の住居址に近くH14-01住居址より古いとは考えにくい。また、住居廃棄後の埋没速度を考えた場合、人為層の介在を考慮しても火山灰降下時期までに竪穴が埋没し平坦化していたとは考えにくい。このことからI14-02・03住居址も火山灰降下以降の住居構築と考えたい。

(2)住居址・伴出遺物の所属時期については、大略10世紀を中心として一部が9世末葉と11世紀初頭にわたる可能性が考えられる。また、F28-001土坑から出土した沈線状の多段調整をもつ土師器、G28-02住居址出土の穿孔土師器・内外黒色処理の土師器などは、器種の特徴から時期が限定される可能性が強い。しかし現段階の知識では判断し兼ねる。

### 2. 陥し穴状遺構について

本遺構は22基確認しており形態からは以下の4種に大別できるが1形態1基のものもある。L30-001は形態・埋土の性状から別種遺構の可能性が考えられる。分布区域は、基本土層のIV層が深い区域に限られている。

I. 平面形が楕円～円形を呈し、断面形が丸底フラスコ形を呈するもの。本種は、後述するIII種と同様に1形態1基である。底部には逆茂木埋設穴1つをもつ。

II. 平面形が上端・下端形とも長方形、小判形を呈し、底部に2～3の逆茂木埋設穴をもつ一群で8基確認している。これら8基の平面形は、更に小判形のタイプと長方形のタイプとに細別できる。しかしK30-002・003、L30-002・003は、各々が対の関係にあるように見受けられ、更にこれらとL30-004を合わせると個別の形態に差異はあるものの同一群の可能性が高い。

III. 平面形が上端・下端形とも長方形であるが、逆茂木痕を確認できなかったもの。埋土の性状・特性がⅠ・Ⅱと異なり、灰白色火山灰の堆積が見られるものである。

IV. 短軸断面形がU字状～V字状を呈する溝状のものである。本種は12基と最も多い形態である。底部形状を含めた断面形態からは細分が可能であるが、規模的には大差がない。これらは、2～3基が概ね並行かつ等間隔にある群、あるいは同一方向に長軸方向をもつが非常に離れているもの、非常に近接しているが方向の異なるものなどが見られる。

Ⅰ～Ⅳのうち、Ⅰ・Ⅱの形能とⅣの形態とは、確認層位および埋土の種類・性状から明らかに形成時期が異なる。Ⅳ層土の土壌化土層およびそれ以降の黒色土層との関係からⅠ・Ⅱの形態が古く、Ⅳの形態が新しい。各々の具体的な所属時期については、時期を判断できるような遺物、他遺構との切りあい関係が見られないことから不明と言わざるを得ない。

### 3. 近代の工房址について

本種遺構は、現在までのところ北上川中上流域および和賀川流域では報告されていない。用途および構築・使用時期については、旧地権者関係者からの聞きとり調査、および出土遺物である鉄釘の種類から明治時代以降で大正時代までの間に構築・使用された“麴室”である。

本遺構に近似する遺構として、時代、時期が異なるものの宮城県以南、特に関東以南で多数確認報告されている“地下式遺構”“半地下式遺構”などと呼ばれる遺構種が存在する。それらの遺構の用途機能については諸説があり、その1つとして麴室説も見られる。それらの遺構種と本遺跡の遺構とに直接的な関連は見いだせないが、今後研究の余地を残している。

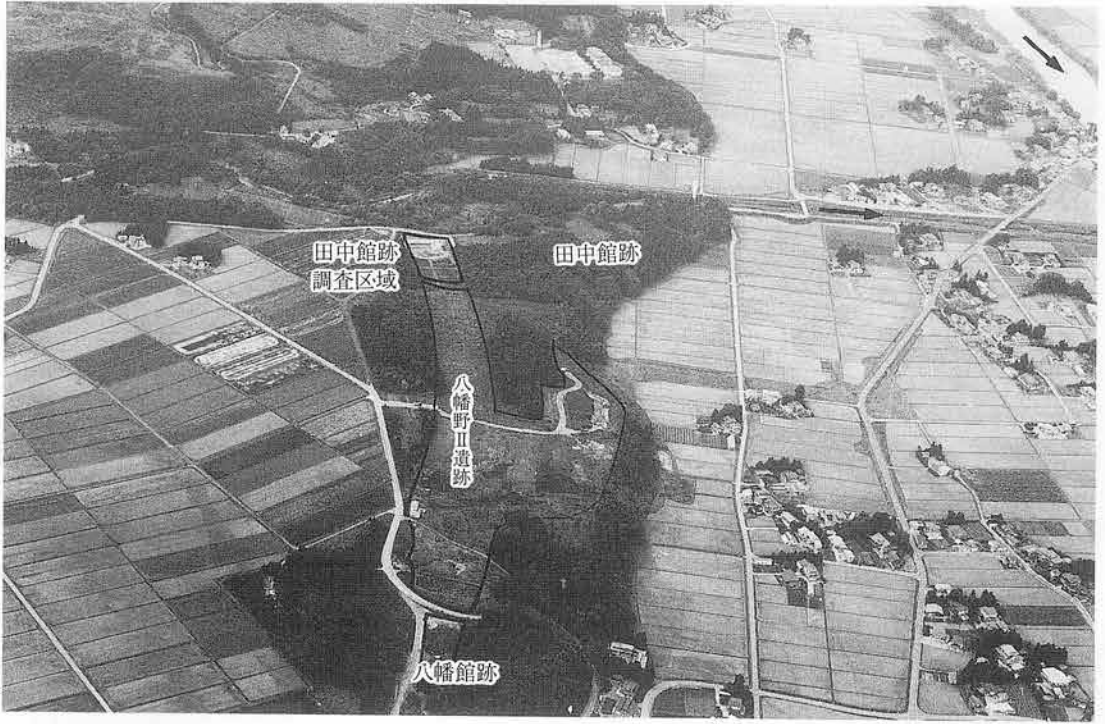
#### おわりに

八幡野Ⅱ遺跡は、西側の田中館跡と東側の八幡館跡とに挟まれた遺跡であるが、地形的には一連の遺跡である。遺跡の性格は、縄文時代の狩場跡、平安時代の散村的集落跡と言える。その他、近代の工房址や現代に続く林地・畑地としての活動・利用の形跡が多数見られる。

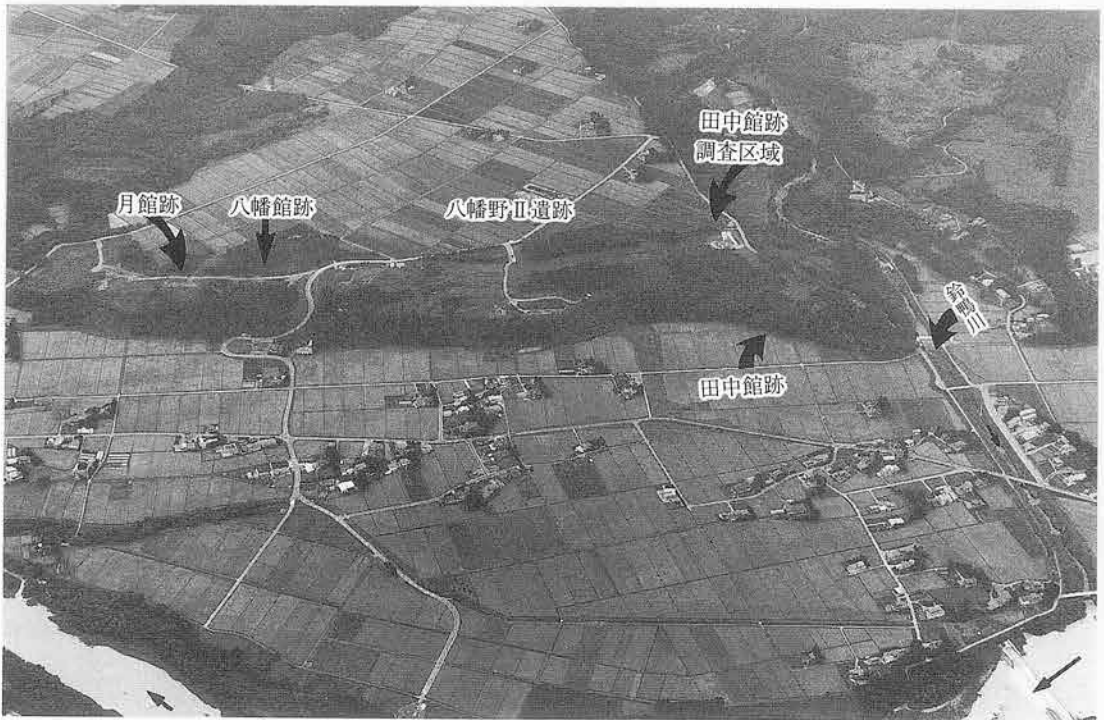
(註) 灰白色火山灰については、奈良教育大学三辻利一氏に分析を依頼し、本遺跡で検出した火山灰は全て十和田a火山灰であるという結果を得ている。この火山灰の実年代観については「扶桑略記」に見られる“延喜15年7月13日条”を降灰期とするむきもあるが、隣接県の須恵器等の研究者の中にはこれを否定する方もいる。今後も続く大きな課題である。



# 写 真 图 版



1. 東南東から撮影



2. 北々東から撮影

写真図版1：遺跡の位置と周辺地形



※垂直写真（下がほぼ東側）

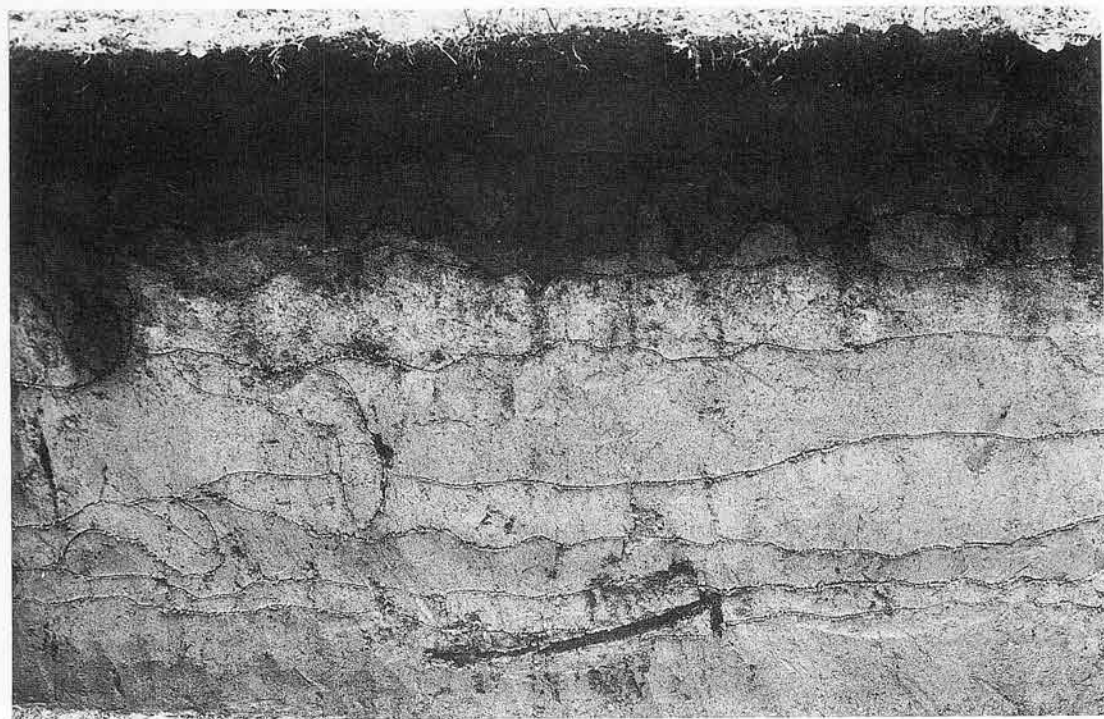
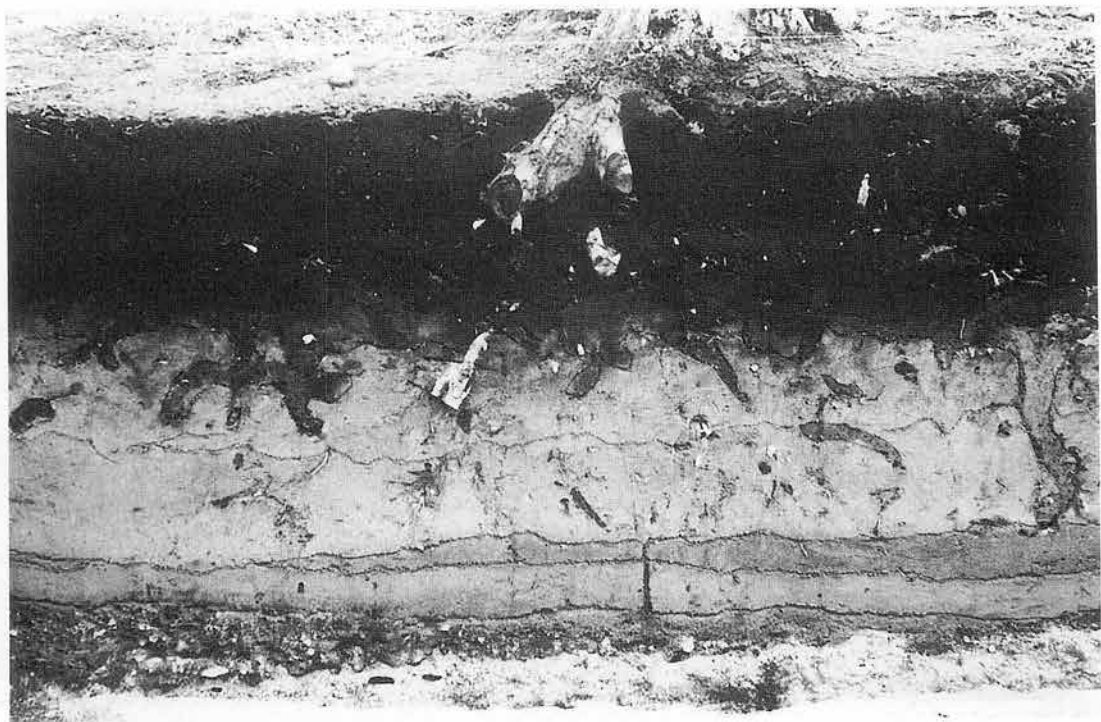
写真図版 2：平成 2 年度調査区域全景



写真図版 3 : 平成 3 年度調査区域全景



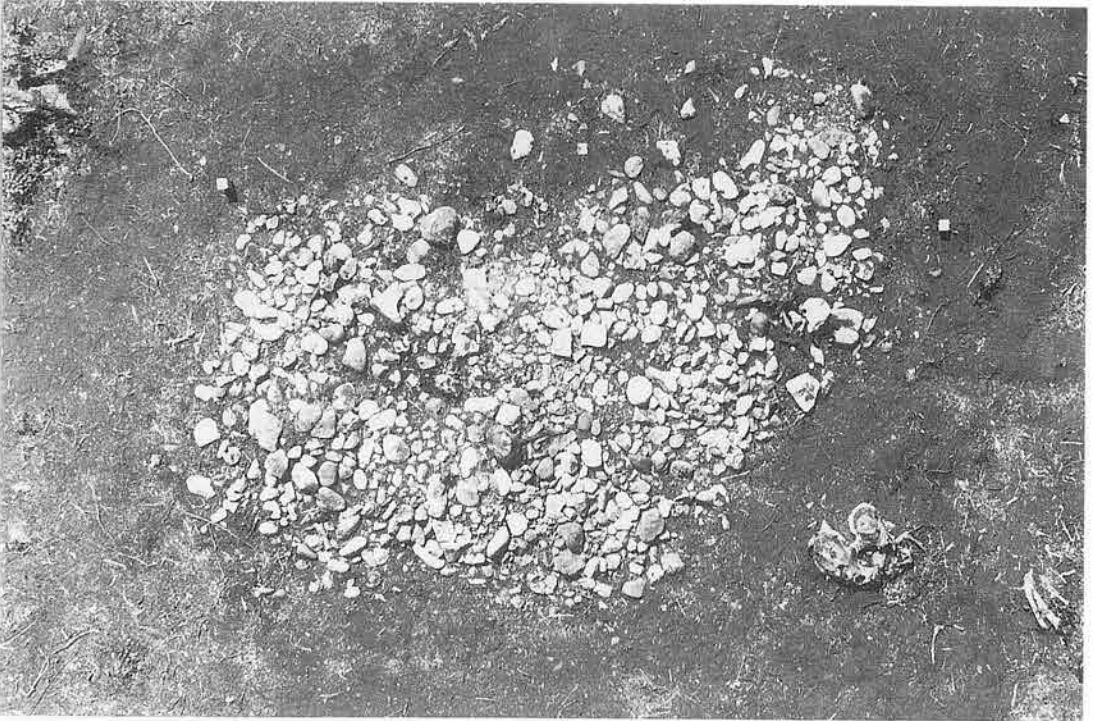
写真図版4：土層断面（1）



写真図版5：土層断面（2）

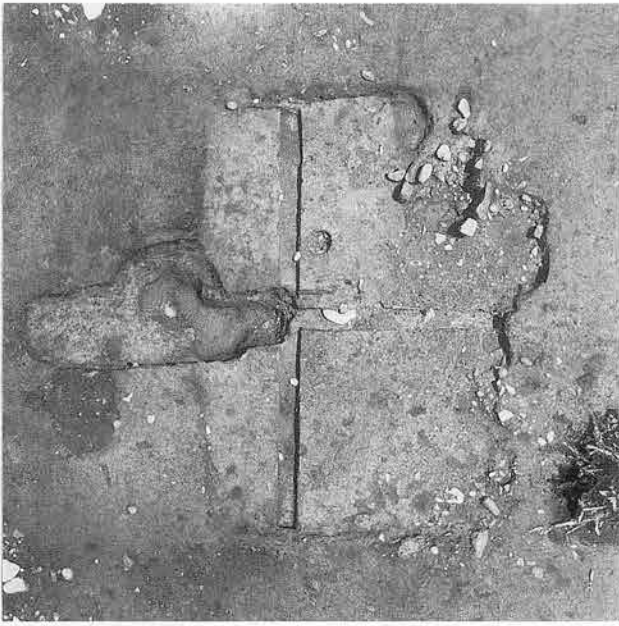


1. 倒木痕跡の分布状態



2. 旧耕作地周辺に見られた集石

写真図版6：倒木痕跡と集石



1. 住居址全景（完掘）とH13-002土坑



2. カマド部検出状態



3. カマド右脇の小土坑と遺物出土状態



4



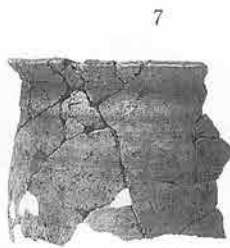
5



7



6



10



11



12



13



8



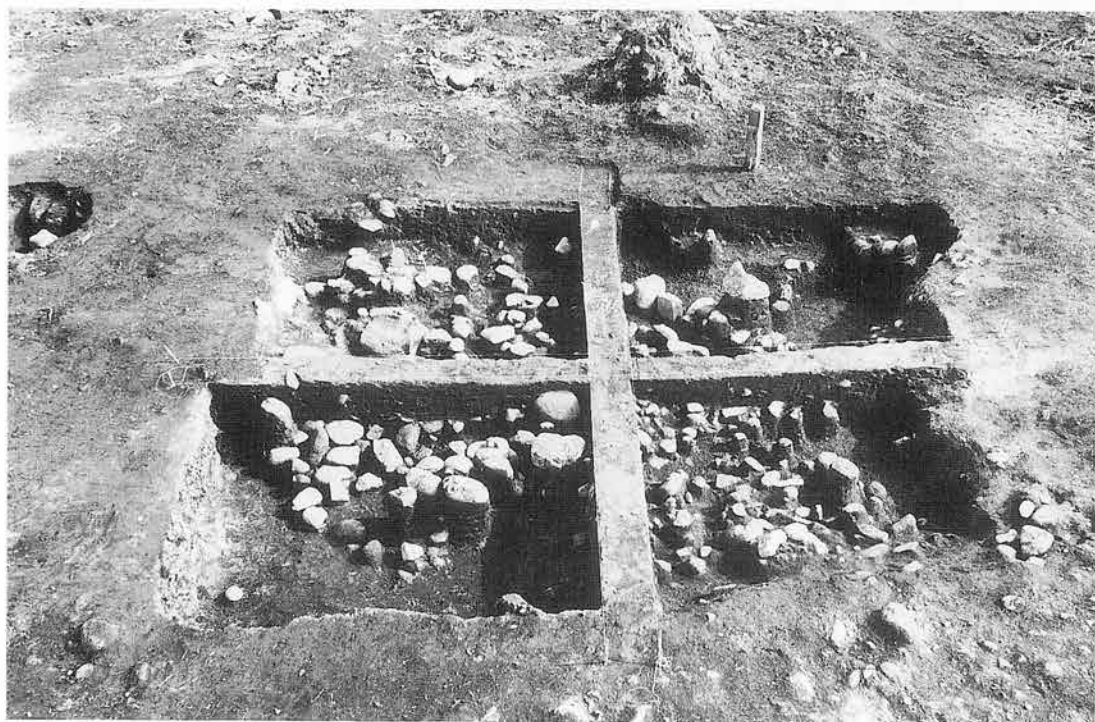
9

写真図版7：H13-01住居址と出土遺物H13-002土坑





1. 住居址全景 (カマド・土坑未精査段階)

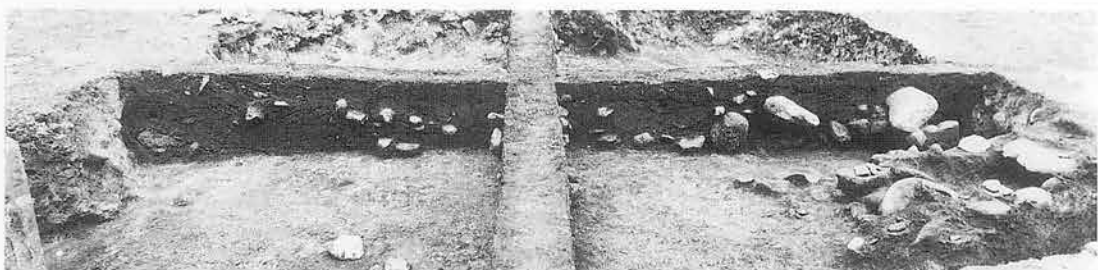


2. 住居跡を埋める投げこみ礫検出状態

写真図版 8 : H14-01住居址 (1)



3. 埋土断面（南北断面を西から）

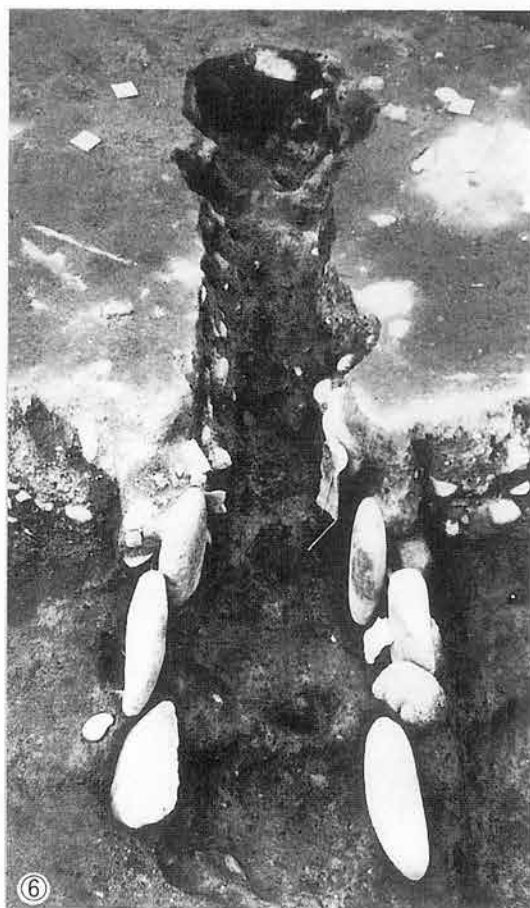


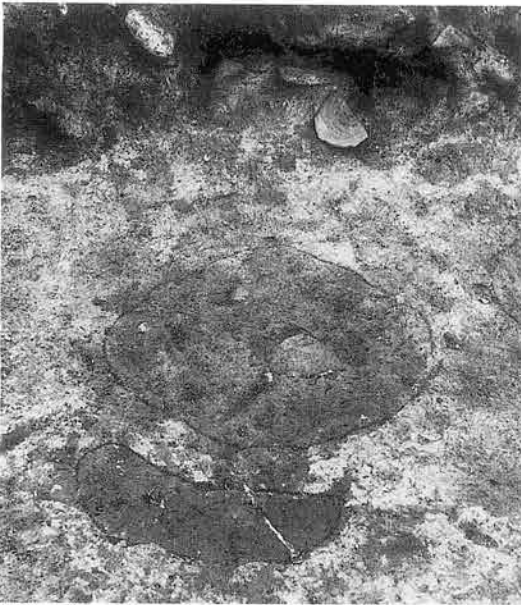
4. 埋土断面（東西断面を南から）と東カマド周辺の状態



5. 東カマド燃焼部検出状態

6. 東カマド完掘状態





7.南カマド燃焼部跡



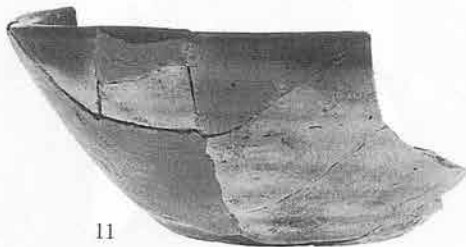
8.東カマド煙導・煙り出し部断面



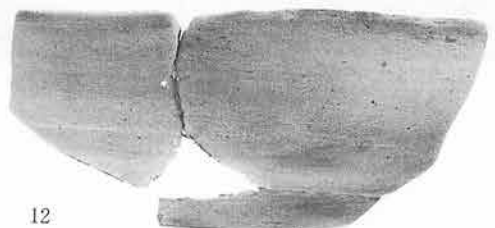
9.東カマド脇小土坑の遺物出土状態



10.同小土坑の断面と遺物出土状態

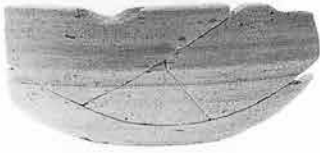


11



12

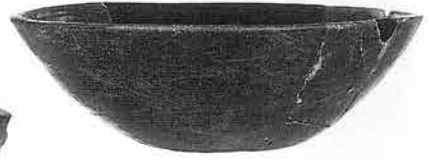
写真図版10：H14-01住居址（3）と出土遺物（1）



13



14



15



17



18



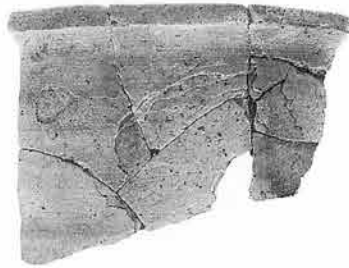
16



19



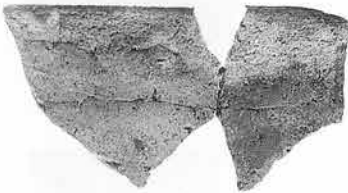
20



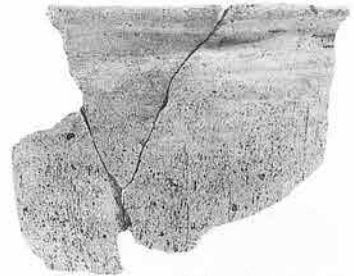
21



22



23



24



25



26

※15は内外黒色研磨土器



27

写真図版11：H14-01住居址出土遺物（2）



28



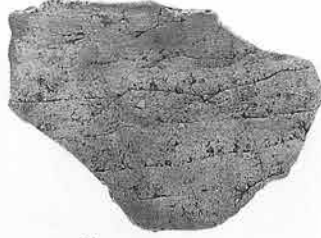
29



30



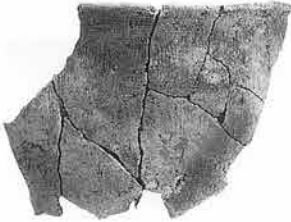
32



31



33



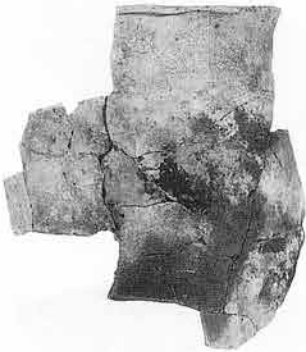
34



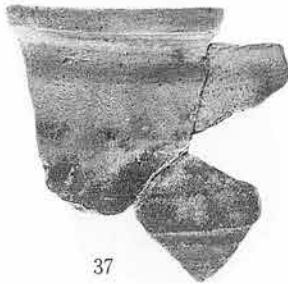
35 a



35 b



36

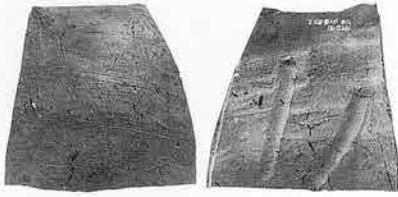


37



38

写真図版12：H14-01住居址出土遺物（3）



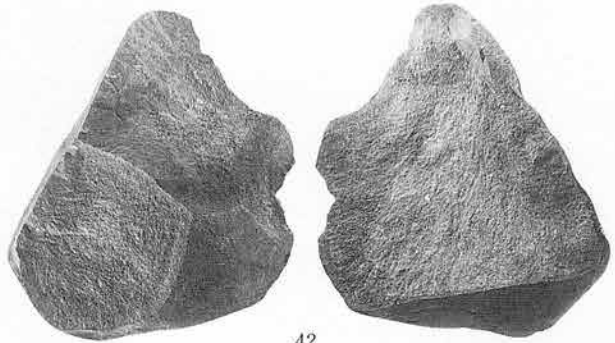
39



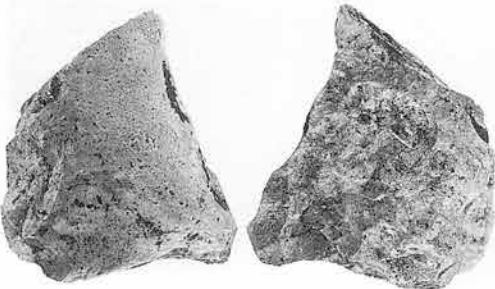
41



40



42



43



44



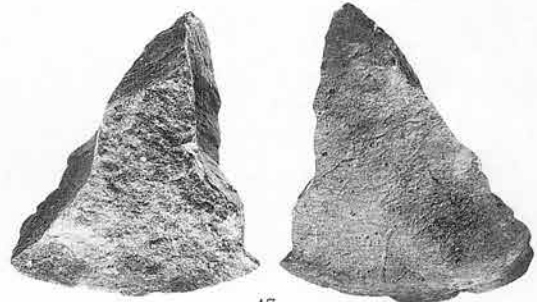
45 a



45 b



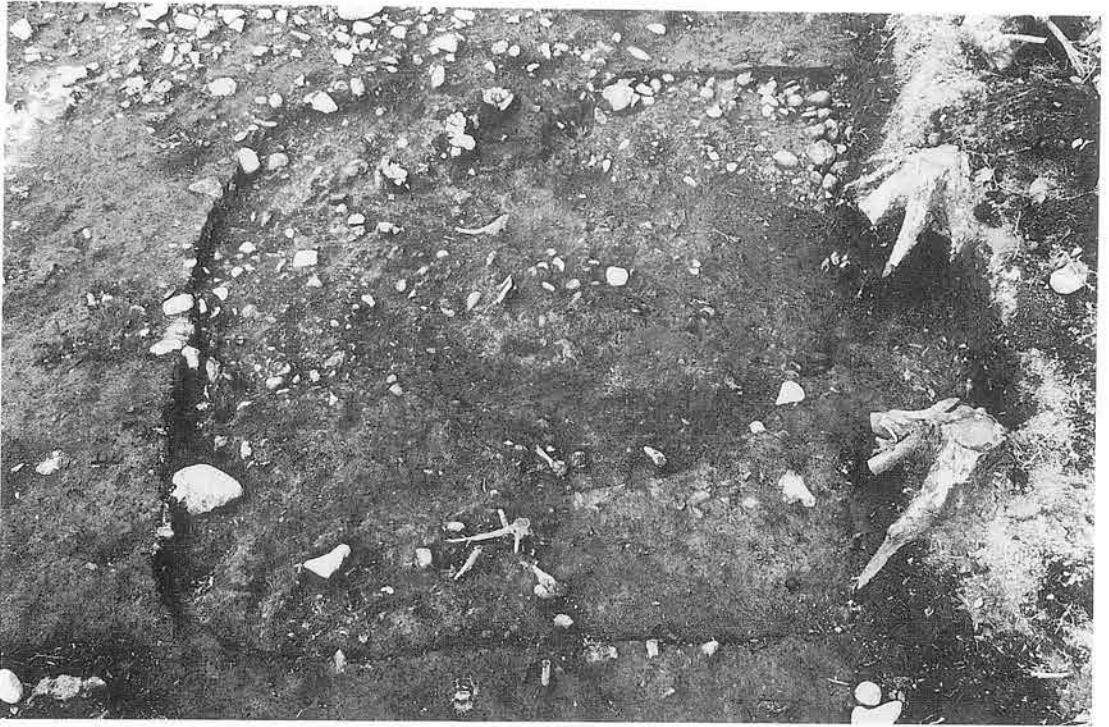
46



47

※39・40は須恵器壺の破版  
45a・b、同一剥片の表裏

写真図版13：H14-01住居址出土遺物（4）



1. 完掘全景



2. カマド周辺の遺物出土状態



3



4

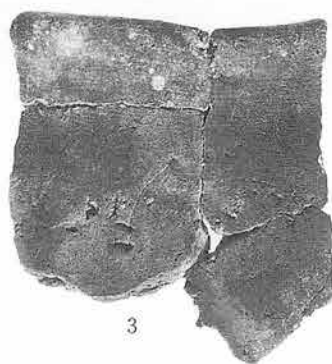
写真図版14：114-02住居址と出土遺物



1. 住居址全景 (右上に I 14-03 住居址が重複)



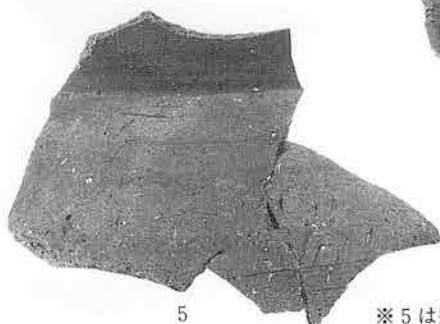
2



3



4



5

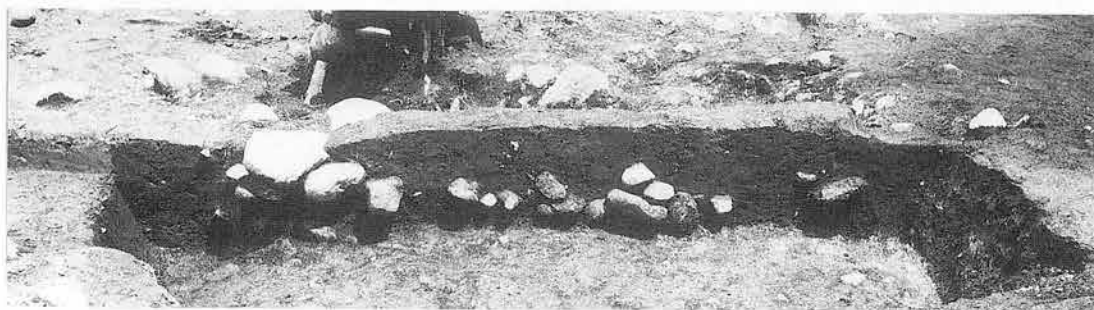
※ 5 は須恵器壺の破片

写真図版15：I 14-01 住居址と出土遺物





1. 住居址全景



2. 埋土断面 (南北を西から)



3



4



5



6



7

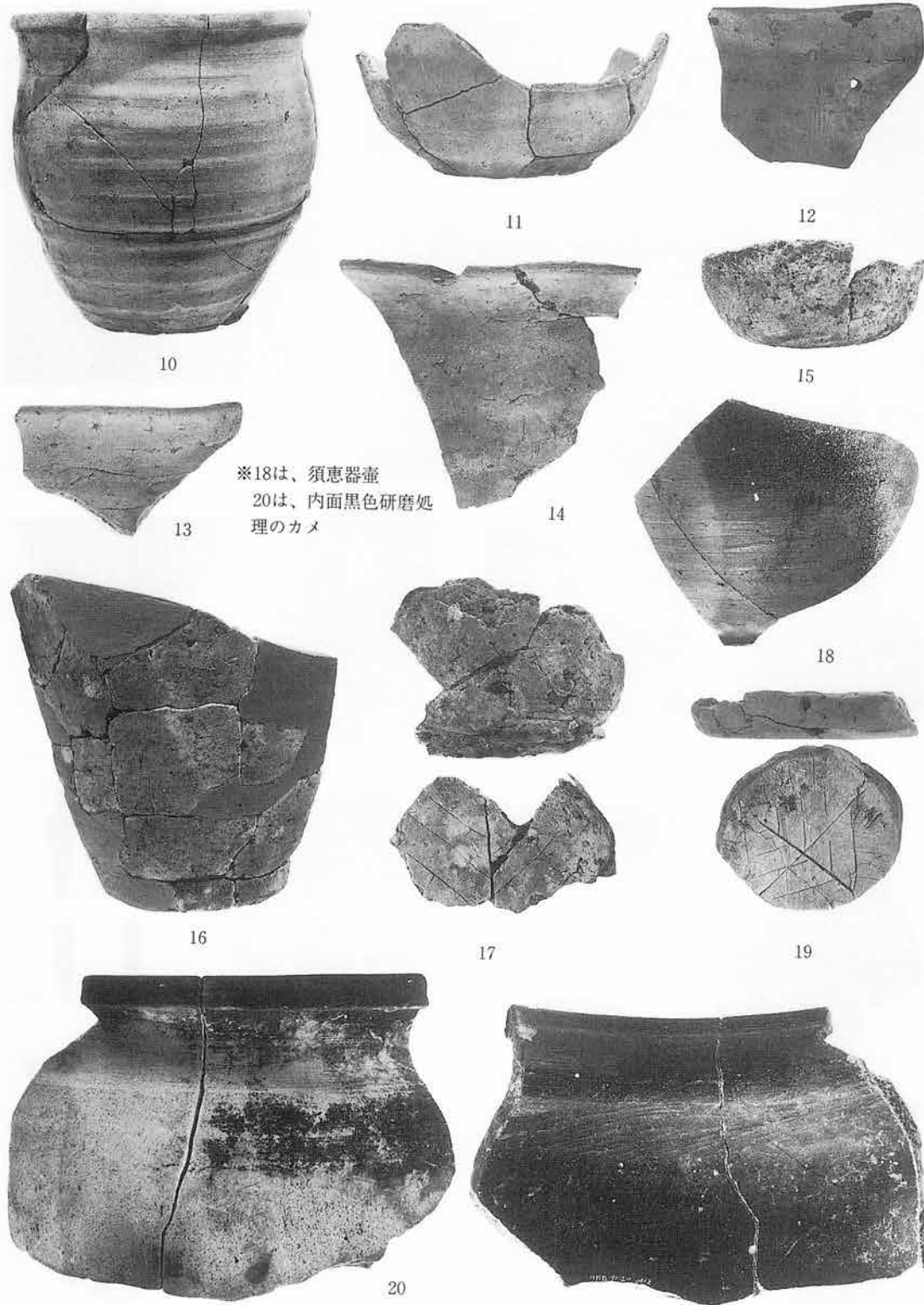


8

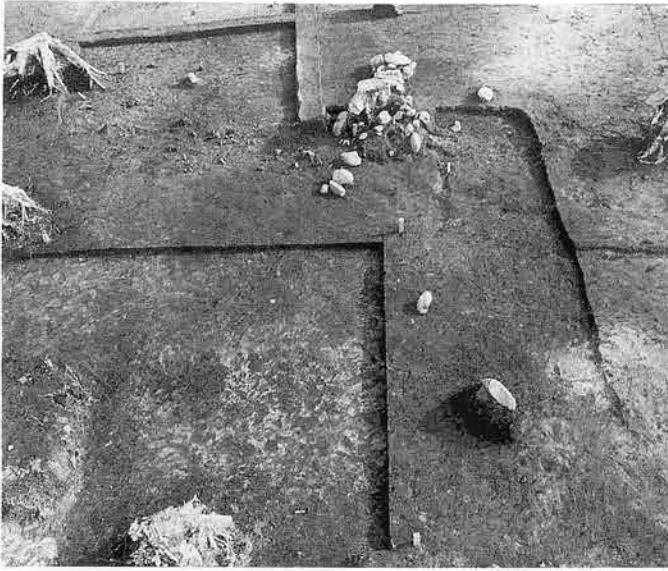


9

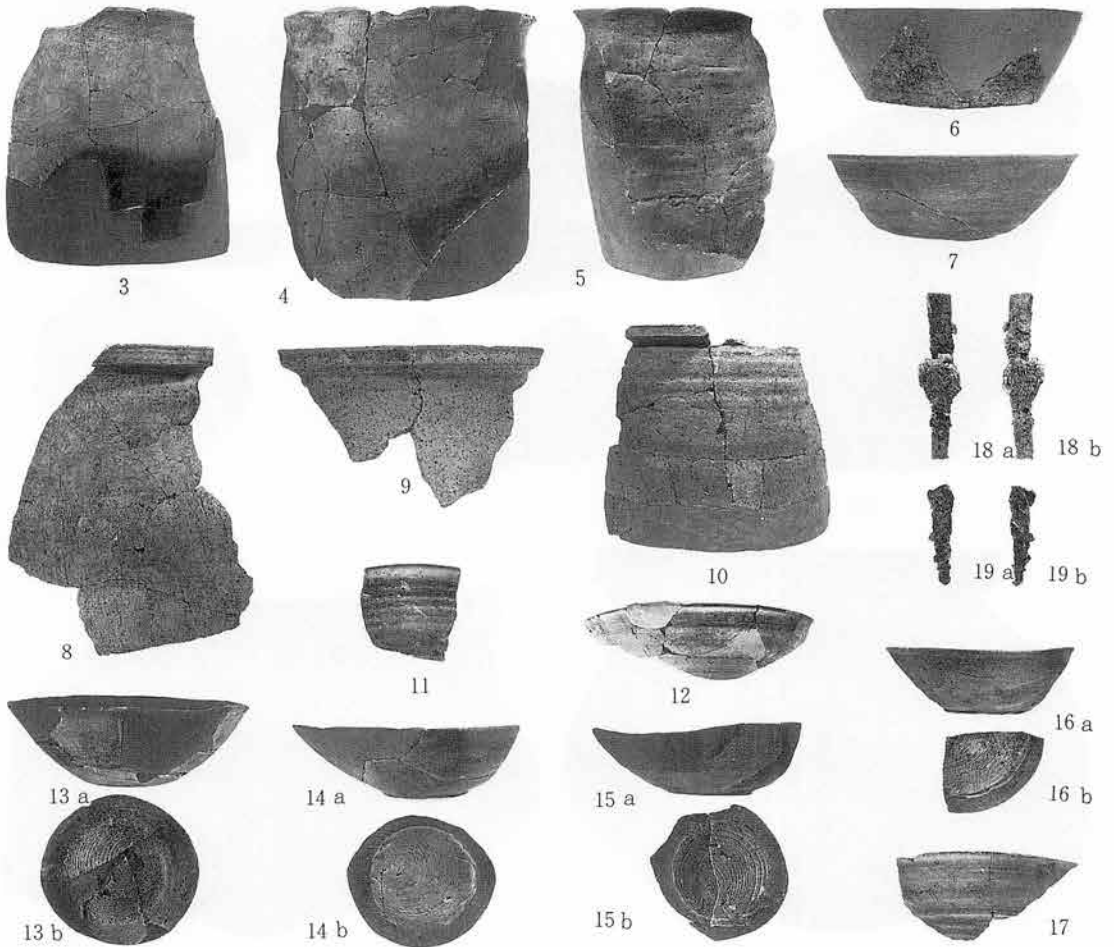
写真図版16：I 14-03住居址と出土遺物（1）



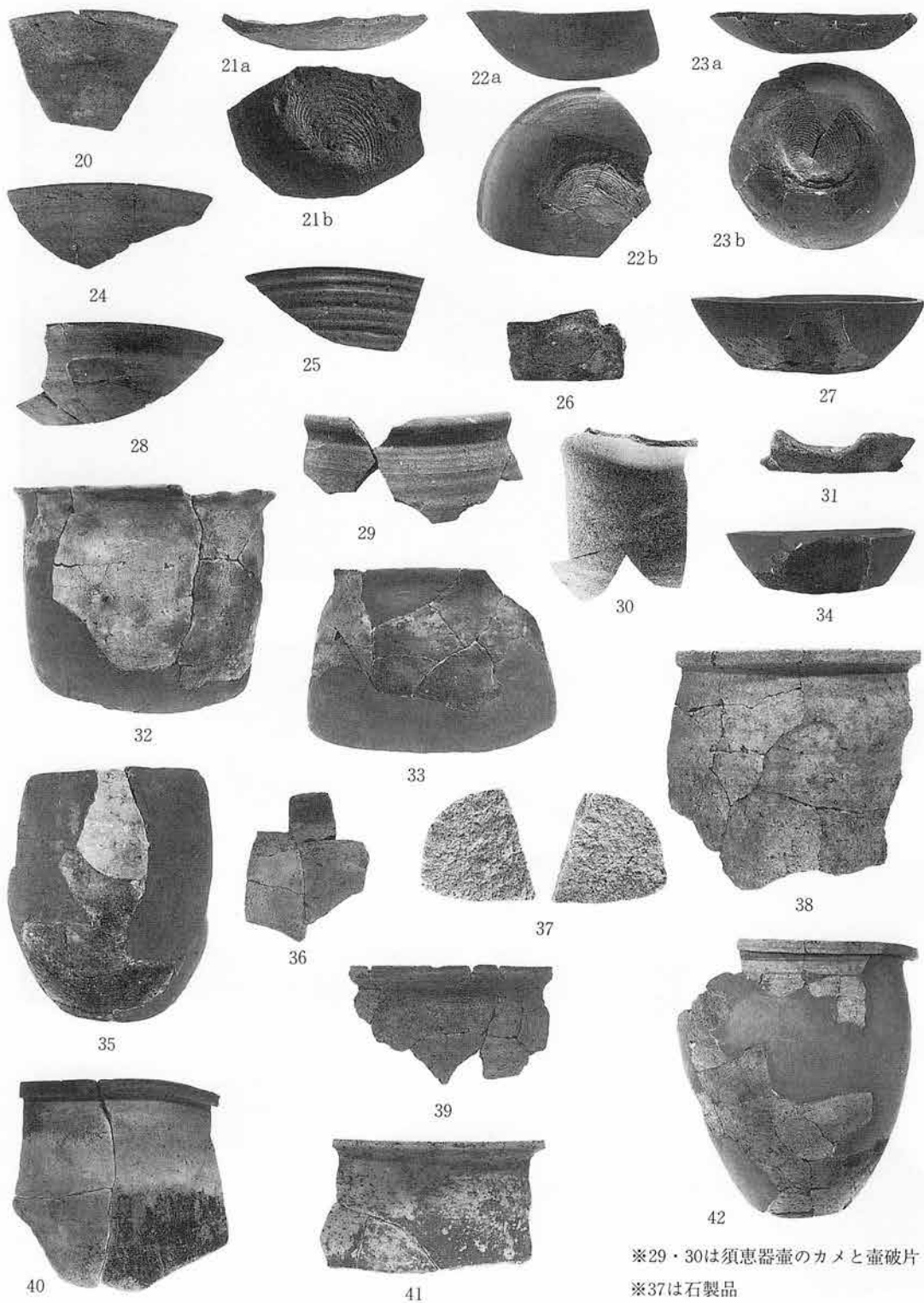
写真図版17：114-03住居址出土遺物（2）



1. 精査中の住居址全景（北々東から撮最）  
2. カマド部検出状態



写真図版18：E 28-01住居址と出土遺物（1）

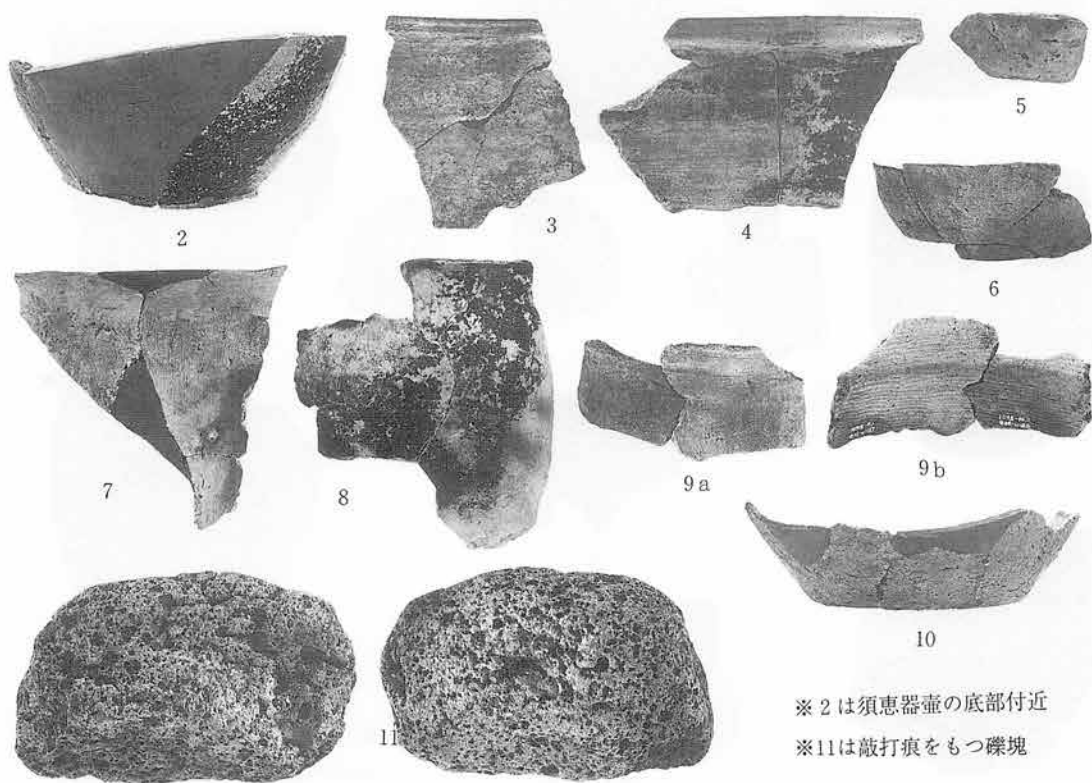


※29・30は須恵器壺のカメと壺破片  
 ※37は石製品

写真図版19：E 28-01住居址出土遺物（2）

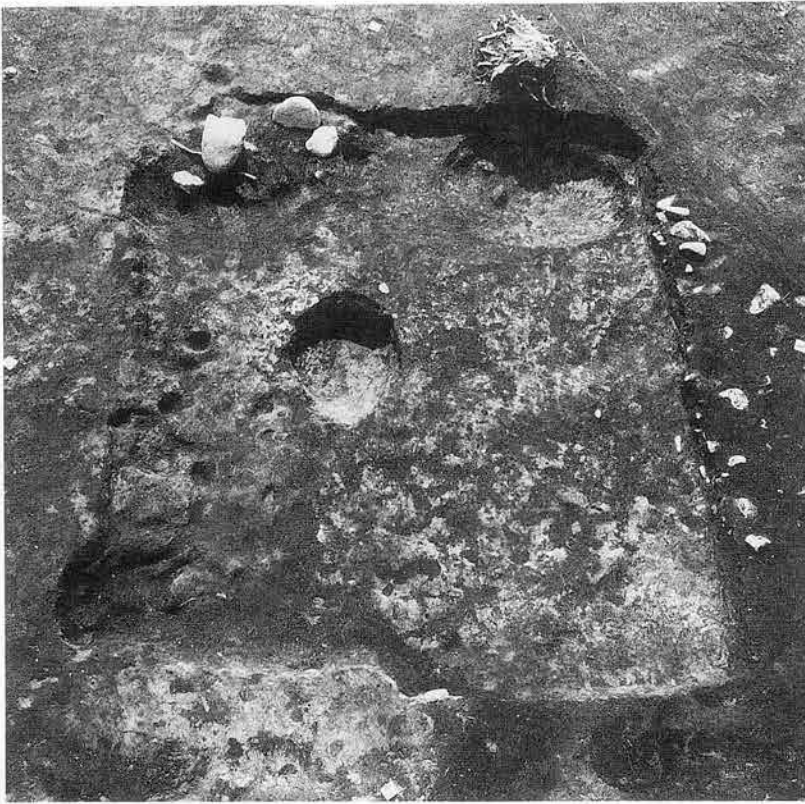


1. 住居址全景（精査中）



※ 2 は須恵器壺の底部付近  
 ※ 11 は敲打痕をもつ磔塊

写真図版20：G28-01住居址と出土遺物



1. 住居址全景 (カマド未精査段階)



2a



2b



3a



3b



4



5



6



7a



8a



9

10



11



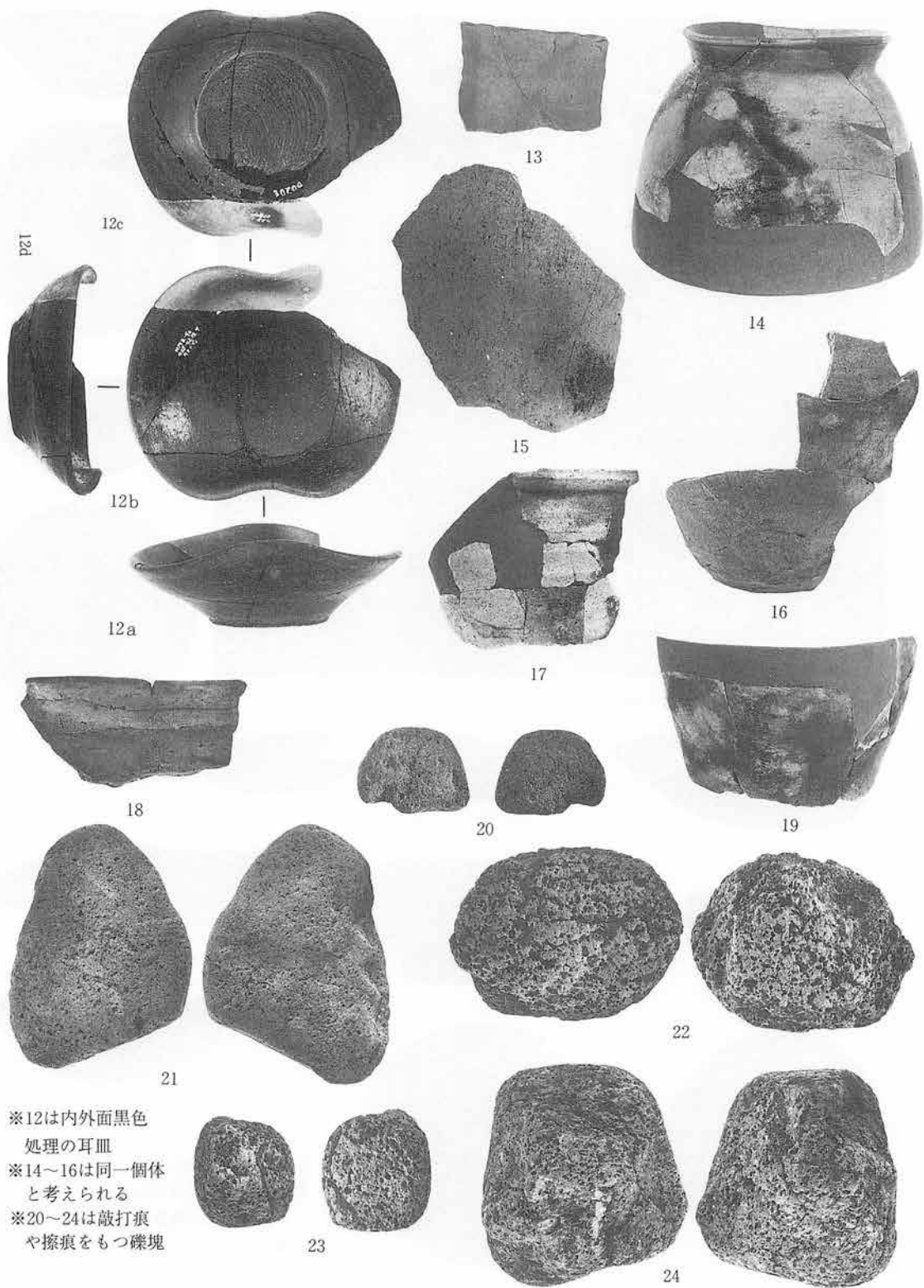
7b



8b

※ 2・3は口縁直下に3つの孔をもつ杯  
 ※ 7・8は内外面黒色処理の小形鉢  
 ロクロ整形・調整の後全面にミガキを  
 施している

写真図版21：G28-02住居址と出土遺物（1）



※12は内外面黒色  
 処理の耳皿  
 ※14～16は同一個体  
 と考えられる  
 ※20～24は敲打痕  
 や擦痕をもつ礫塊

写真図版22：G28-02住居址出土遺物（2）



1. 完掘全景（西南西から撮影）



2. 遺物出土状況



3. カマド脇土坑の確認状態



4



5



6

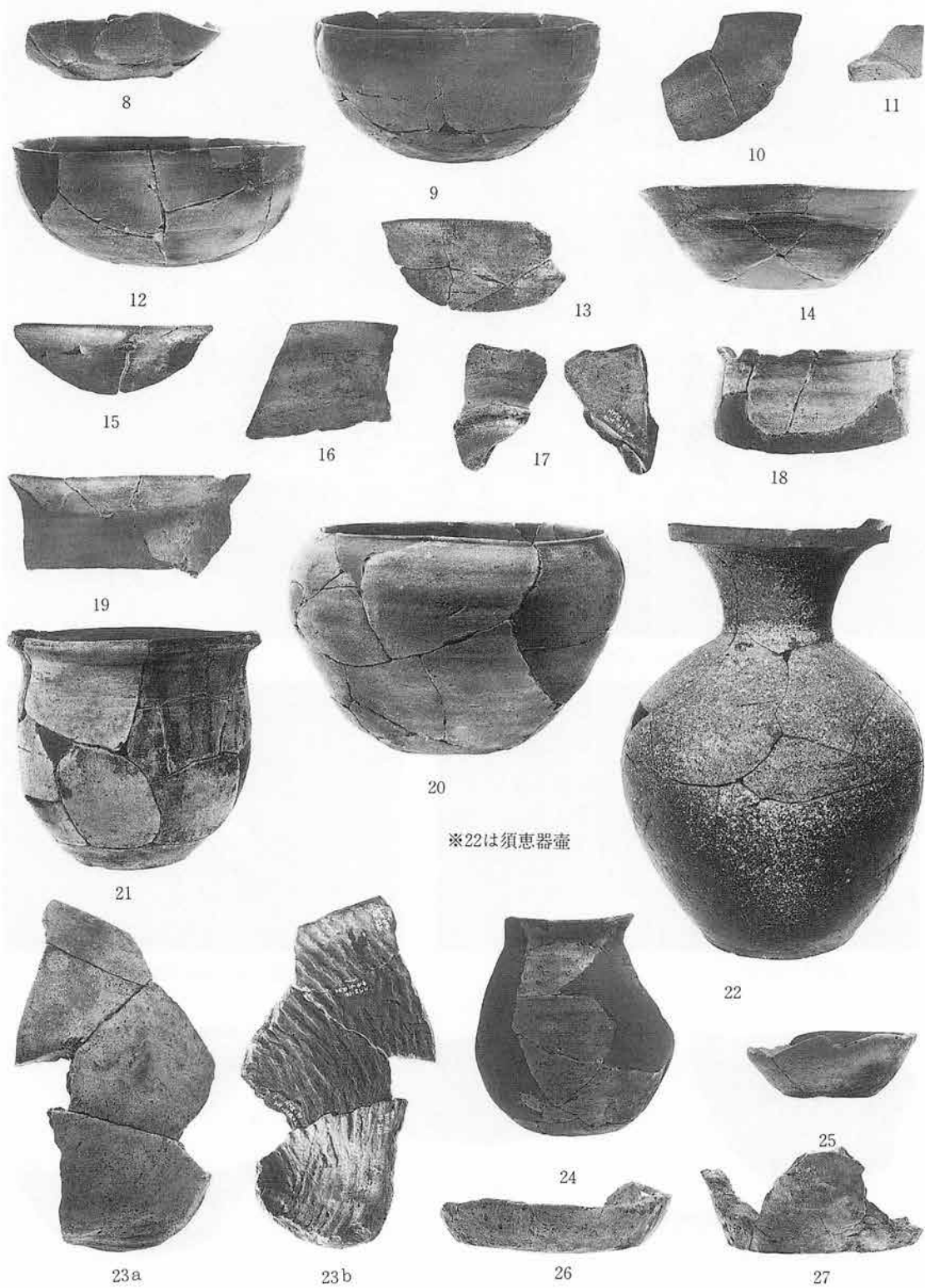


7

※ 4 の遺物は内外黒色研磨処理の土師器

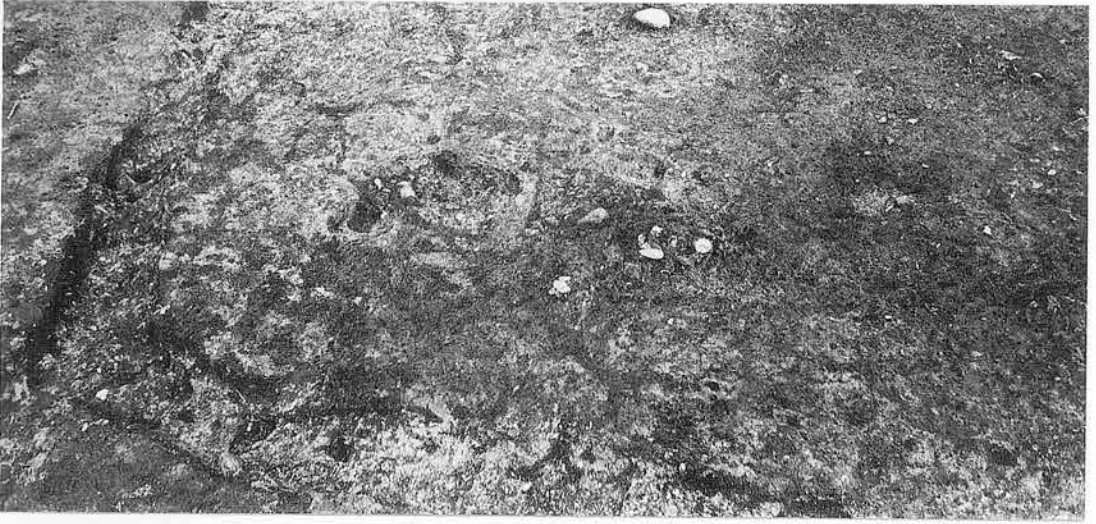
写真図版23：G29-01住居址と出土遺物（1）





※22は須恵器壺

写真図版24：G29-01住居址出土遺物（2）

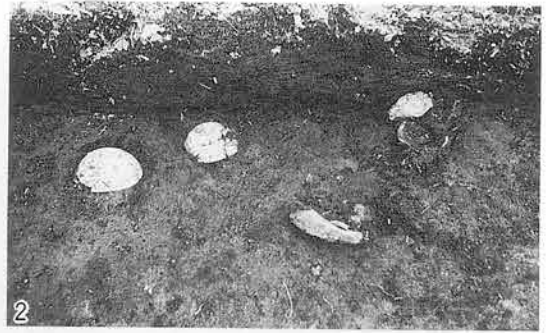


1. 小土坑群分布・完掘状況



※3は須恵器、8・9は  
砥石

写真図版25：G30区小土坑群と周辺出土の遺物



1. 完掘間近の土坑と遺物出土状態
2. 土坑確認時の遺物出土状態
3. 土坑埋土等の堆積状態

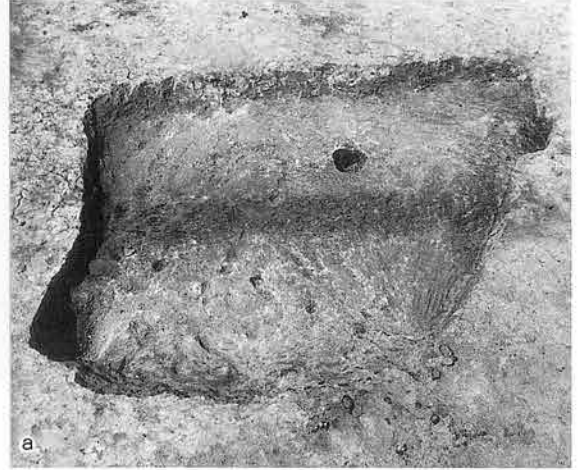


※7・9は須恵器 16  
～18は釘. 19は砥石

写真図版26 : F 28-001土坑と出土遺物



1. I 13-001土坑全景



2. F 25-001土坑全景 (a) と埋土断面 (b)

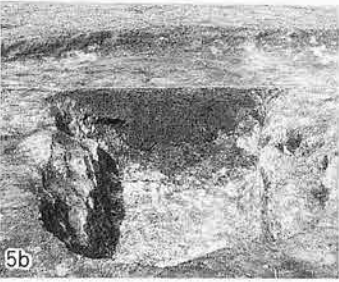


3. H 13-002土坑全景

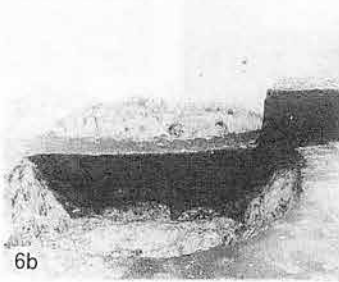


4. H 13-001土坑全景 (a) と埋土断面 (b)

写真図版27：土坑（1）



5. E28-001土坑



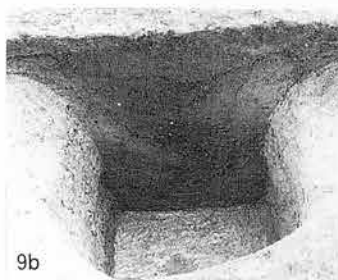
6. K35-002土坑



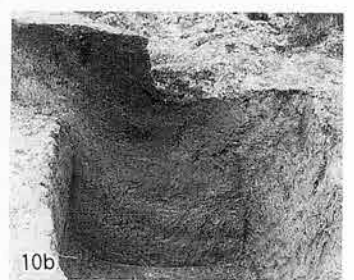
7. H26-001陥し穴状



8. G30-001陥し穴状



9. K30-002陥し穴状



10. K30-003陥し穴状

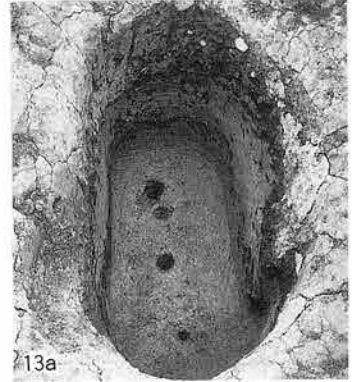
写真図版28：土坑（2）と陥し穴状遺構（1）



11a



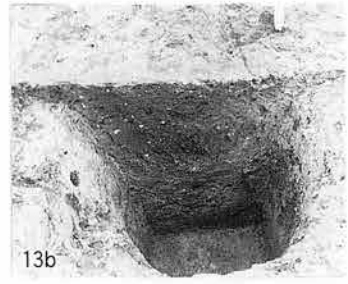
12a



13a



12b



13b

11. L 30-001陥し穴状

12. L 30-002陥し穴状

13. L 30-003陥し穴状



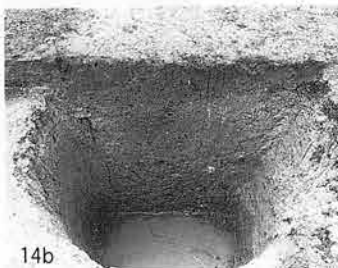
14a



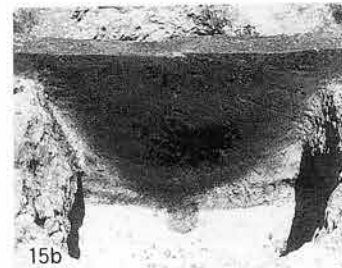
15a



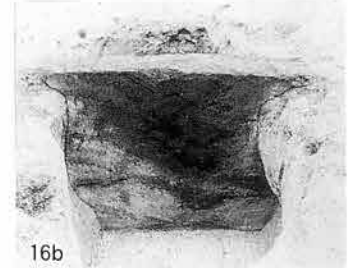
16a



14b



15b



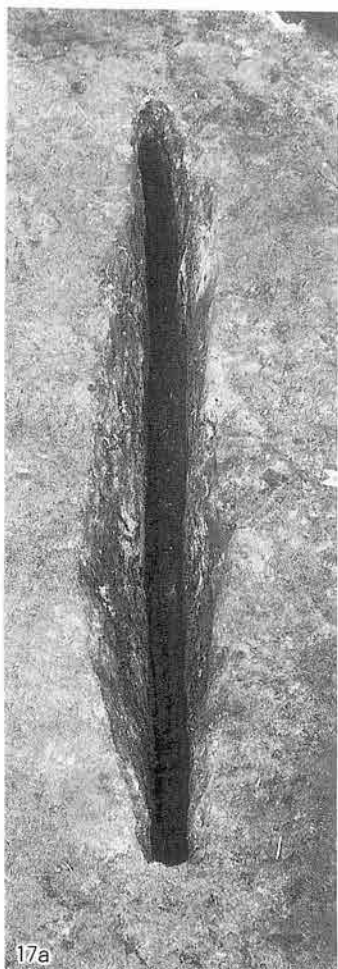
16b

14. L 30-004陥し穴状

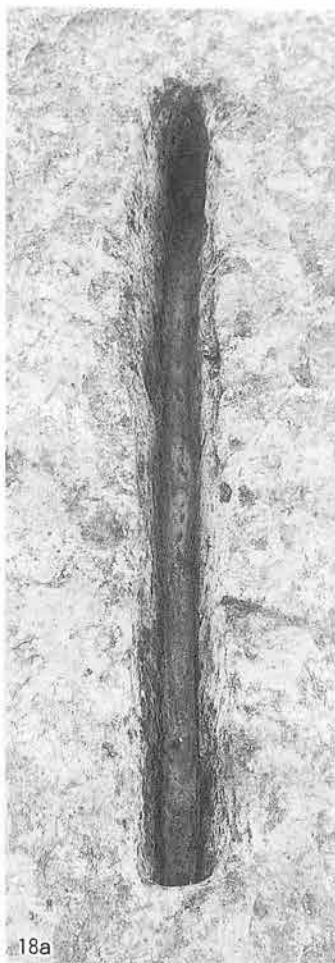
15. K 32-001陥し穴状

16. L 32-002陥し穴状

写真図版29：陥し穴状遺構（2）



17a



18a



19a



17b



18b



19b

17. L 29-003陥し穴状

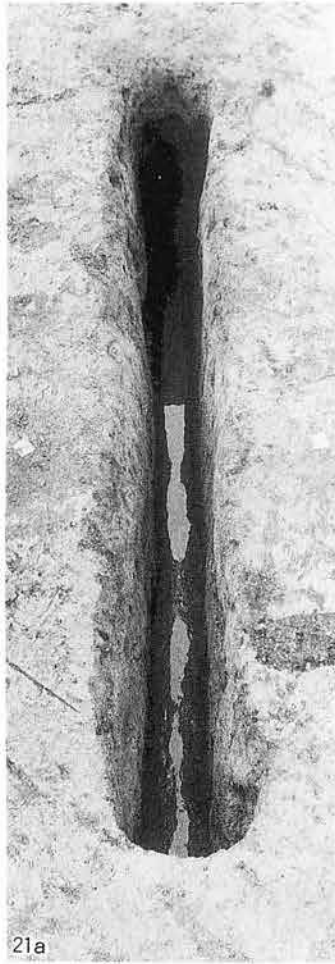
18. I 29-001陥し穴状

19. K 31-001陥し穴状

写真図版30：陥し穴状遺構（3）



20a



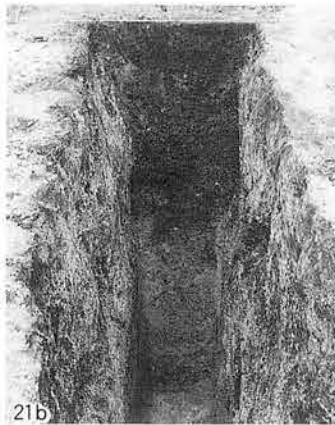
21a



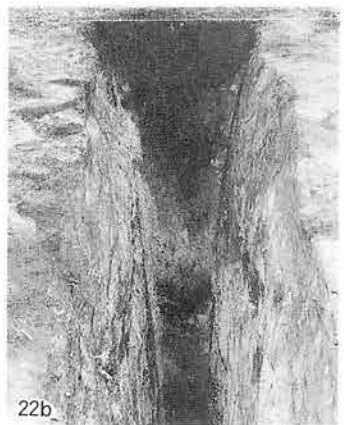
22a



20b



21b



22b

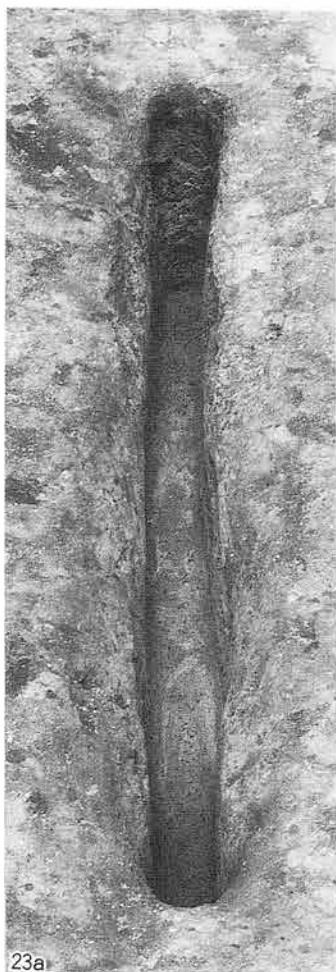
20. L.32-001陥し穴状

21. L.32-003陥し穴状

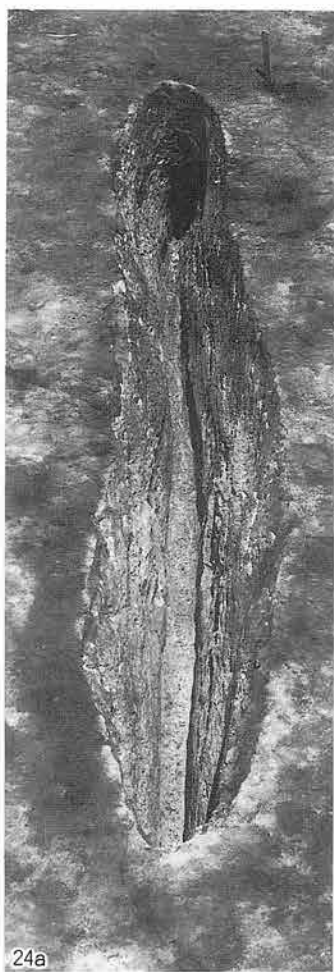
22. L.32-001陥し穴状

写真図版31：陥し穴状遺構（4）

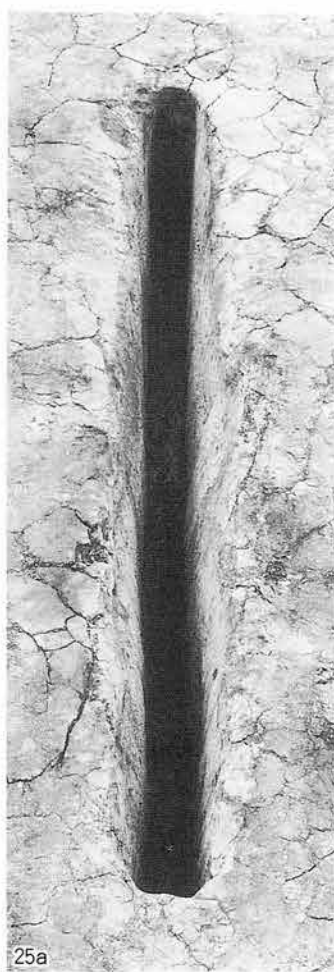




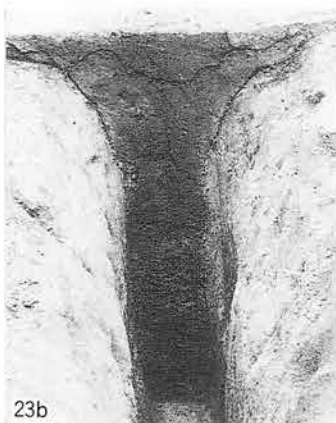
23a



24a



25a



23b



24b



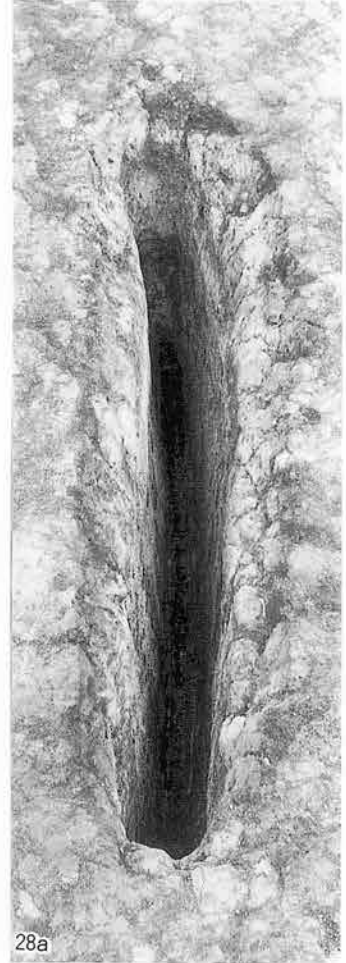
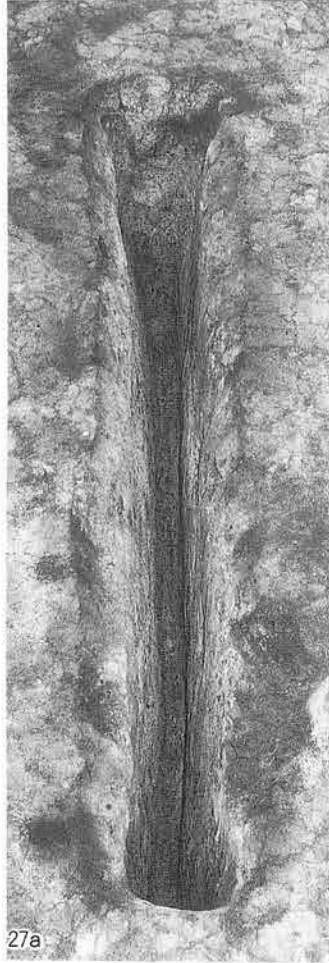
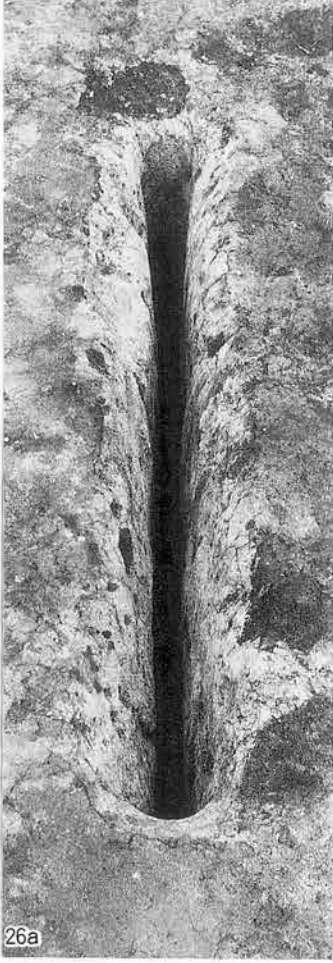
25b

23. L 33-001陥し穴状

24. J 34-001陥し穴状

25. K 34-001陥し穴状

写真図版32：陥し穴状遺構（5）

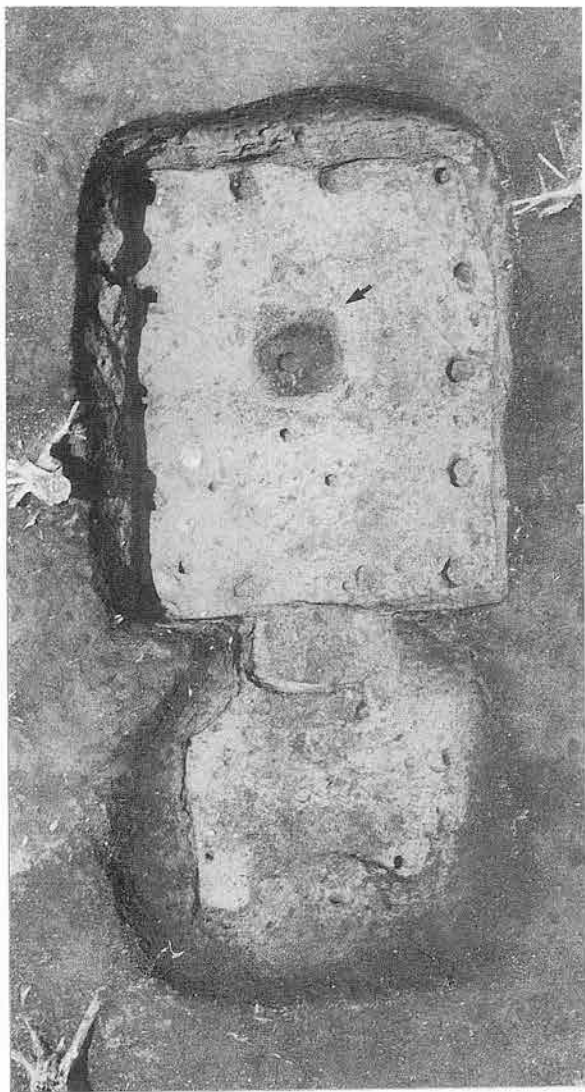


26. K 35-001陥し穴状

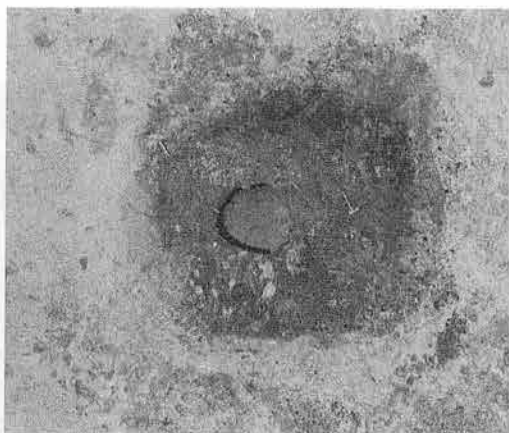
27. K 36-001陥し穴状

28. L 35-001陥し穴状

写真図版33：陥し穴状遺構（6）



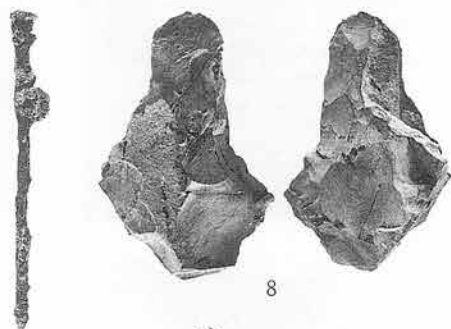
1. 工房址全景



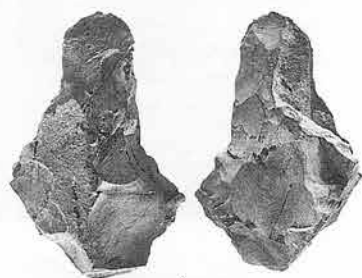
2. 炉部分を拡大 (矢印)



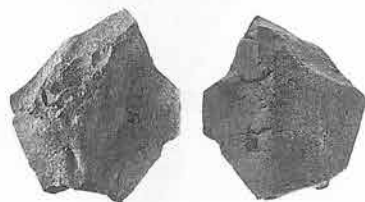
3. 片口付播鉢



6. 釘



8



9



7. 釘



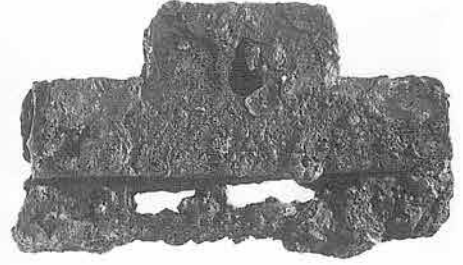
10



4. 柴刈鎌

5. 寛永通貨

写真図版34：H09-01工房址と出土遺物

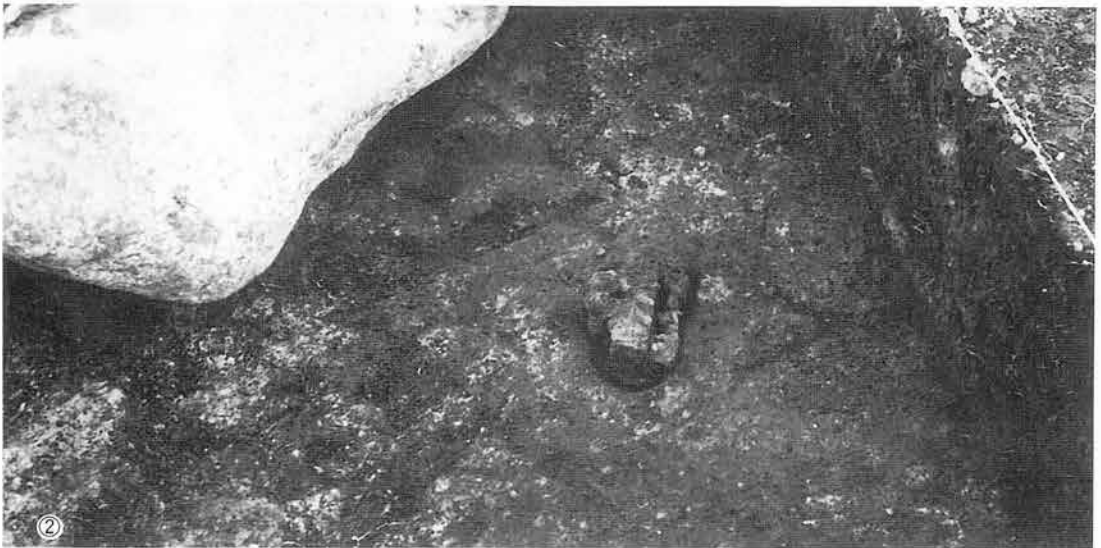


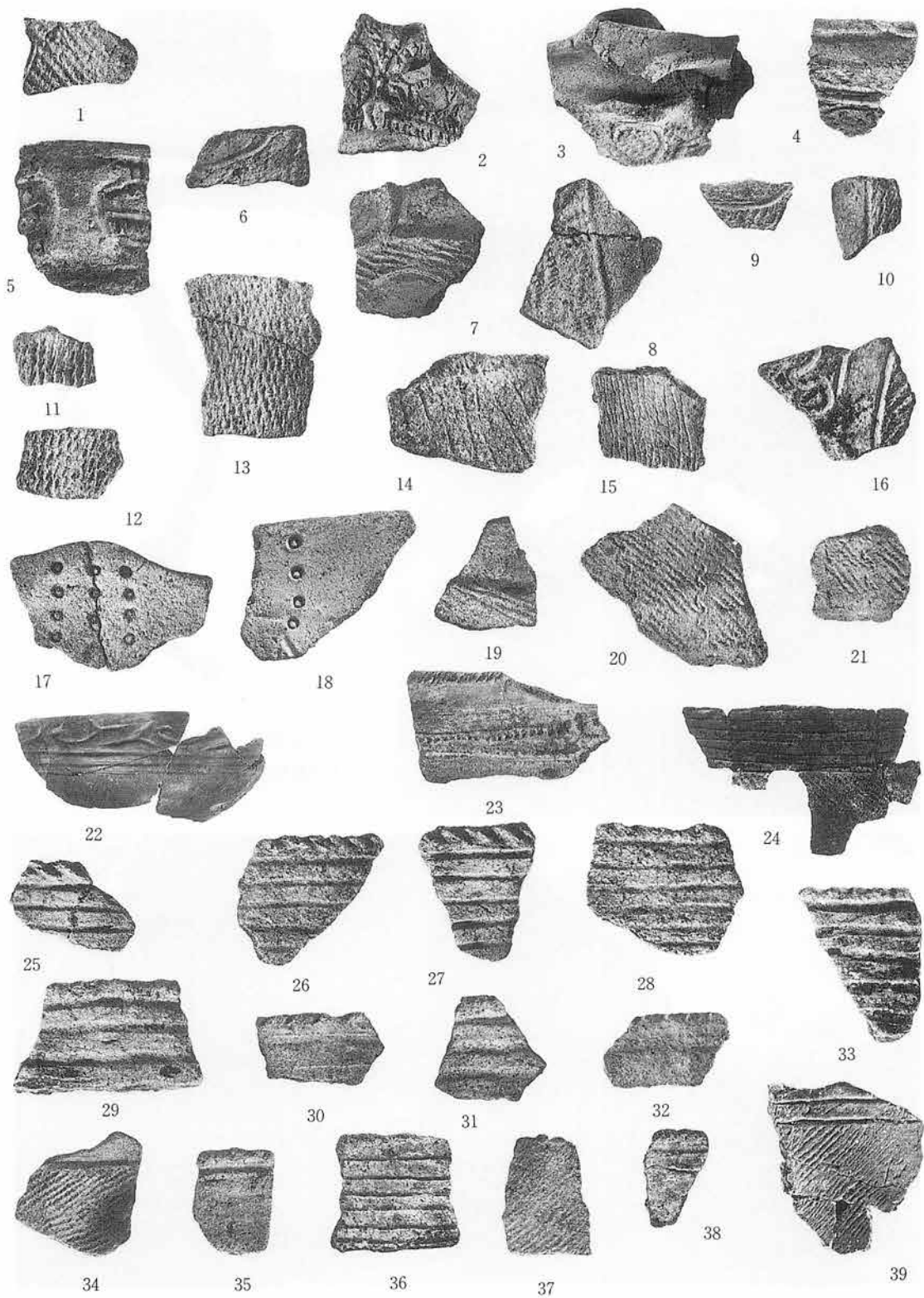
3. 南京錠



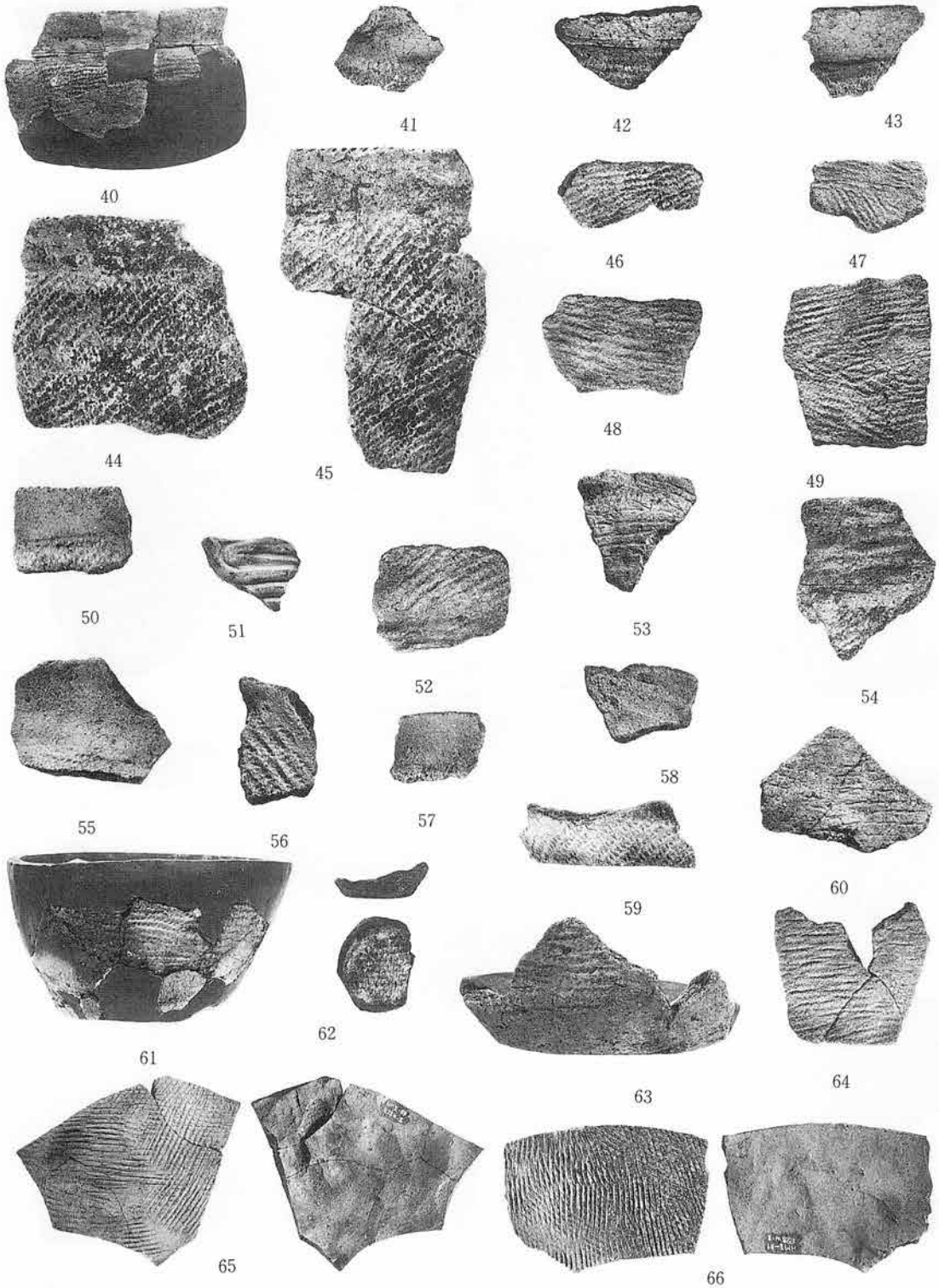
1. 工房址全景 (完掘)

2. 南京錠出土状態



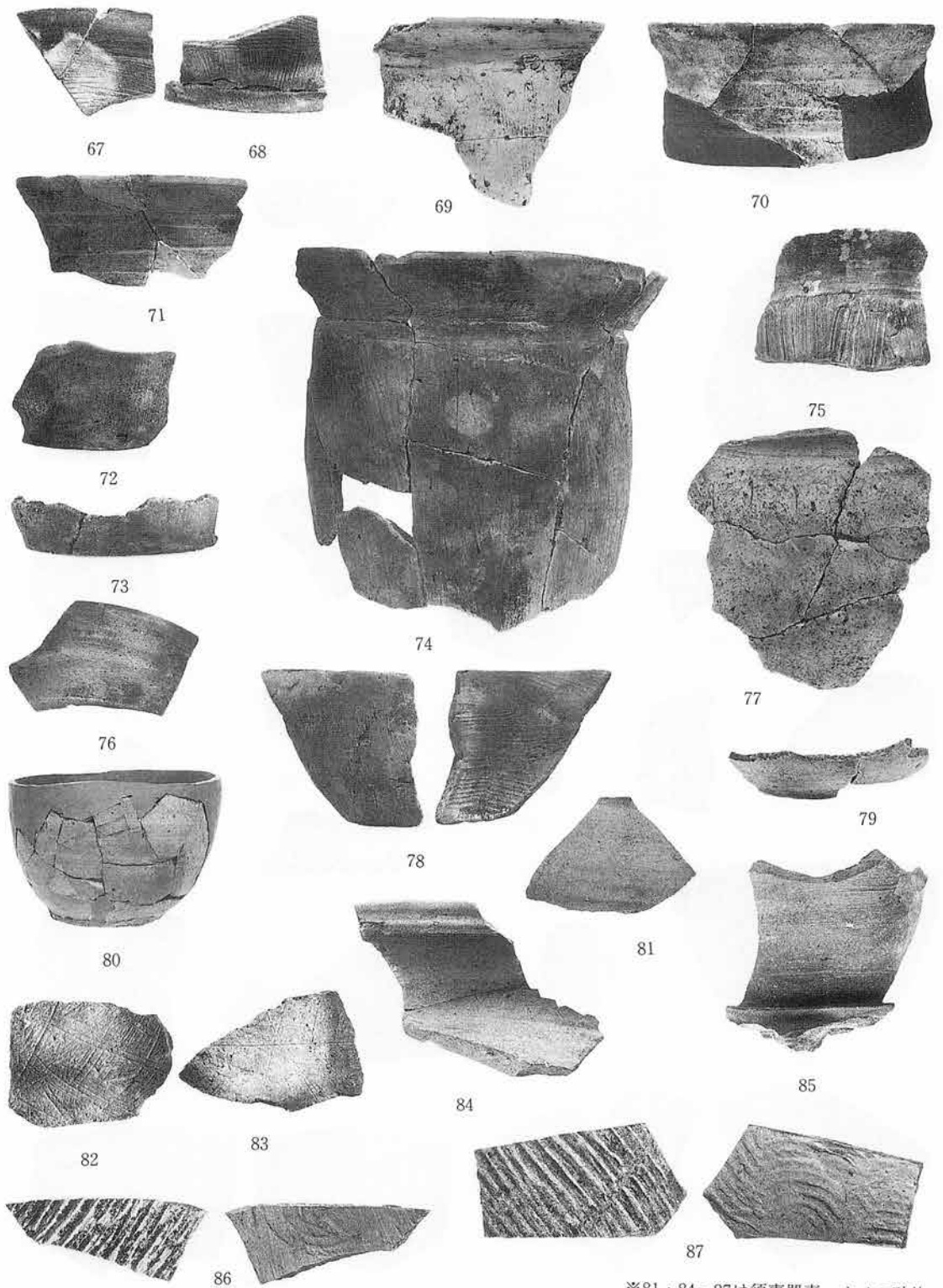


写真図版36：遺構外出土の遺物……土器（1）



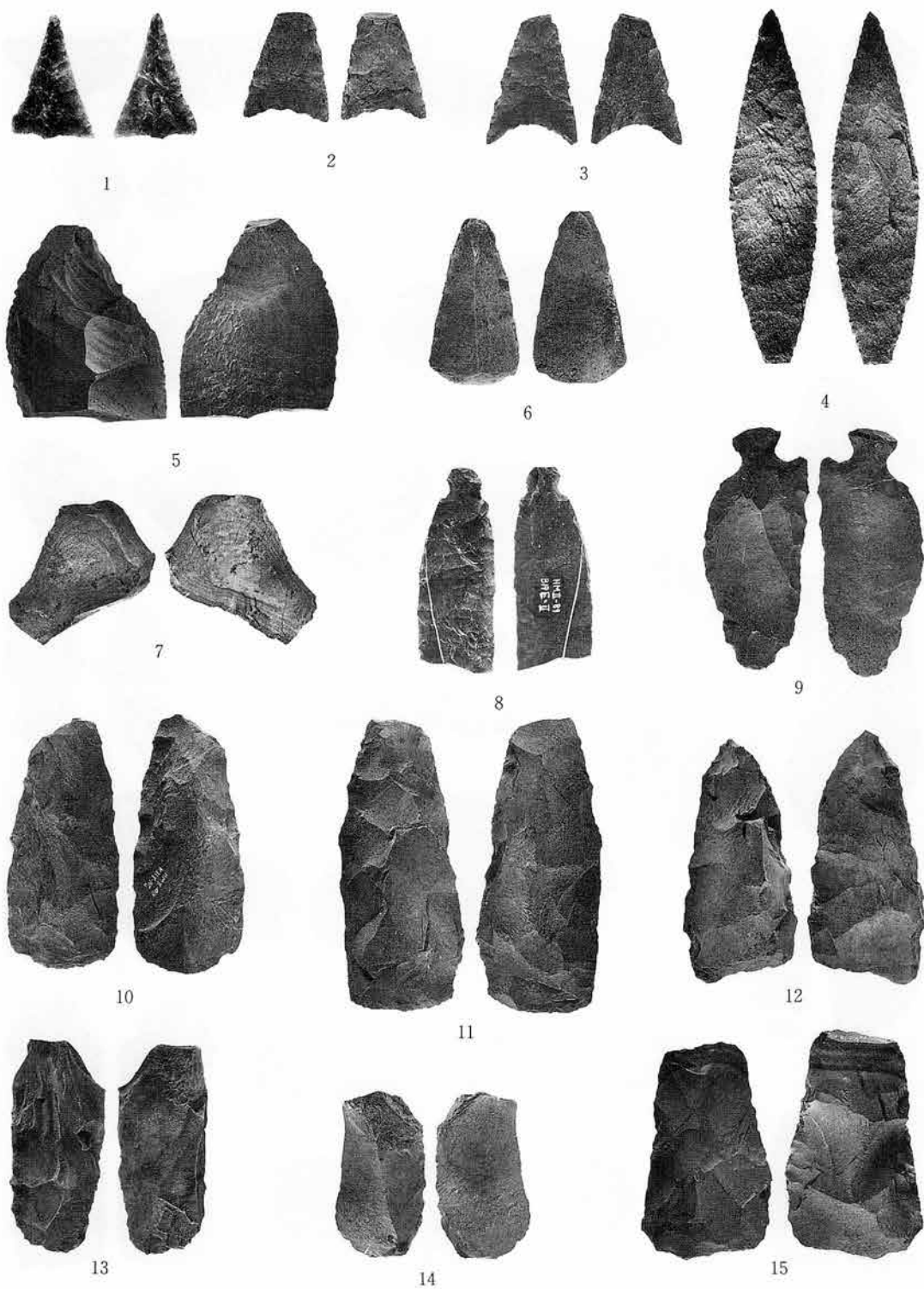
※65・66は須恵器カメの破片

写真図版37：遺構外出土の遺物……土器（2）



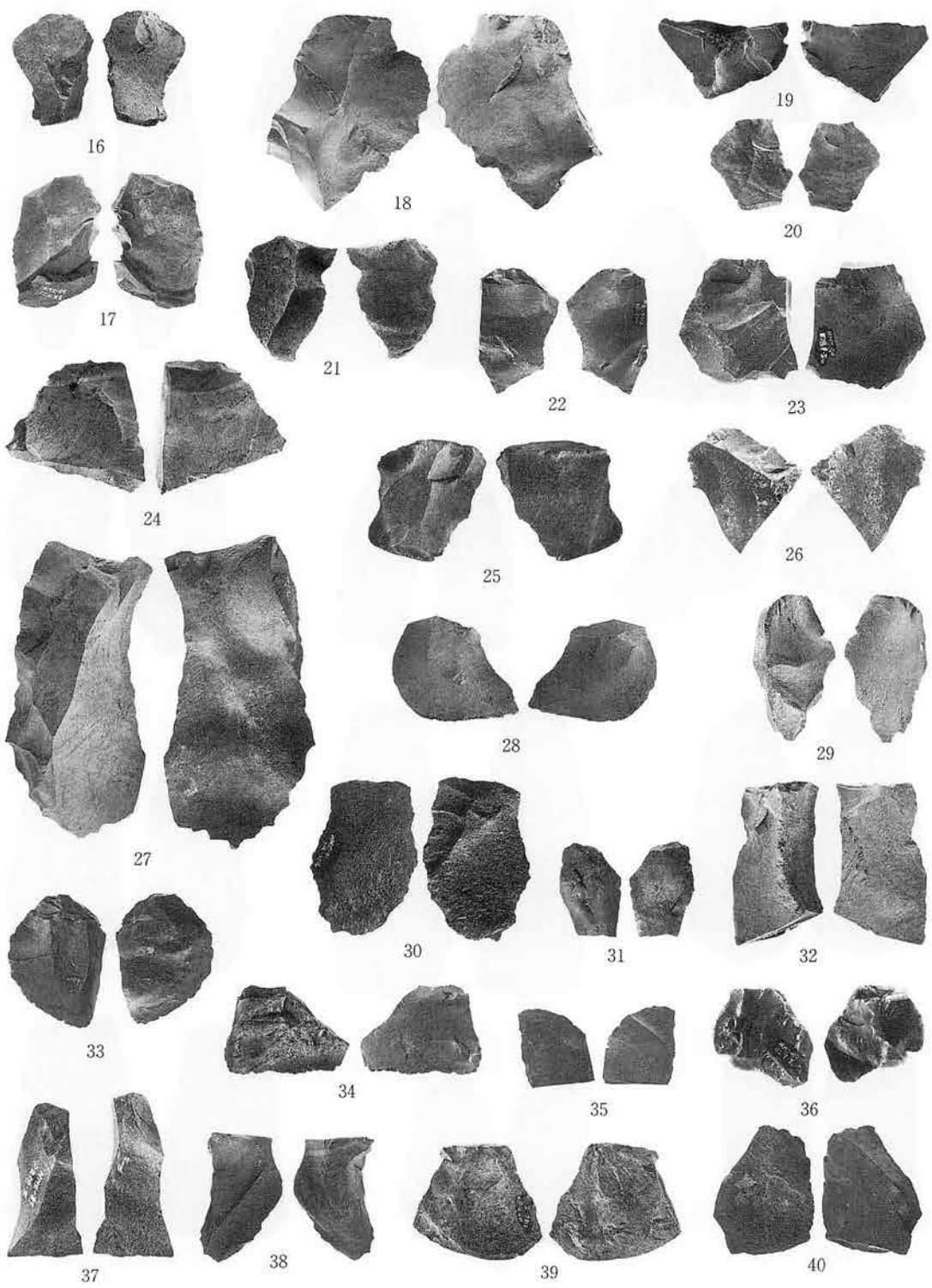
※81・84～87は須恵器壺・カメの破片

写真図版38：遺構外出土の遺物……土器（3）

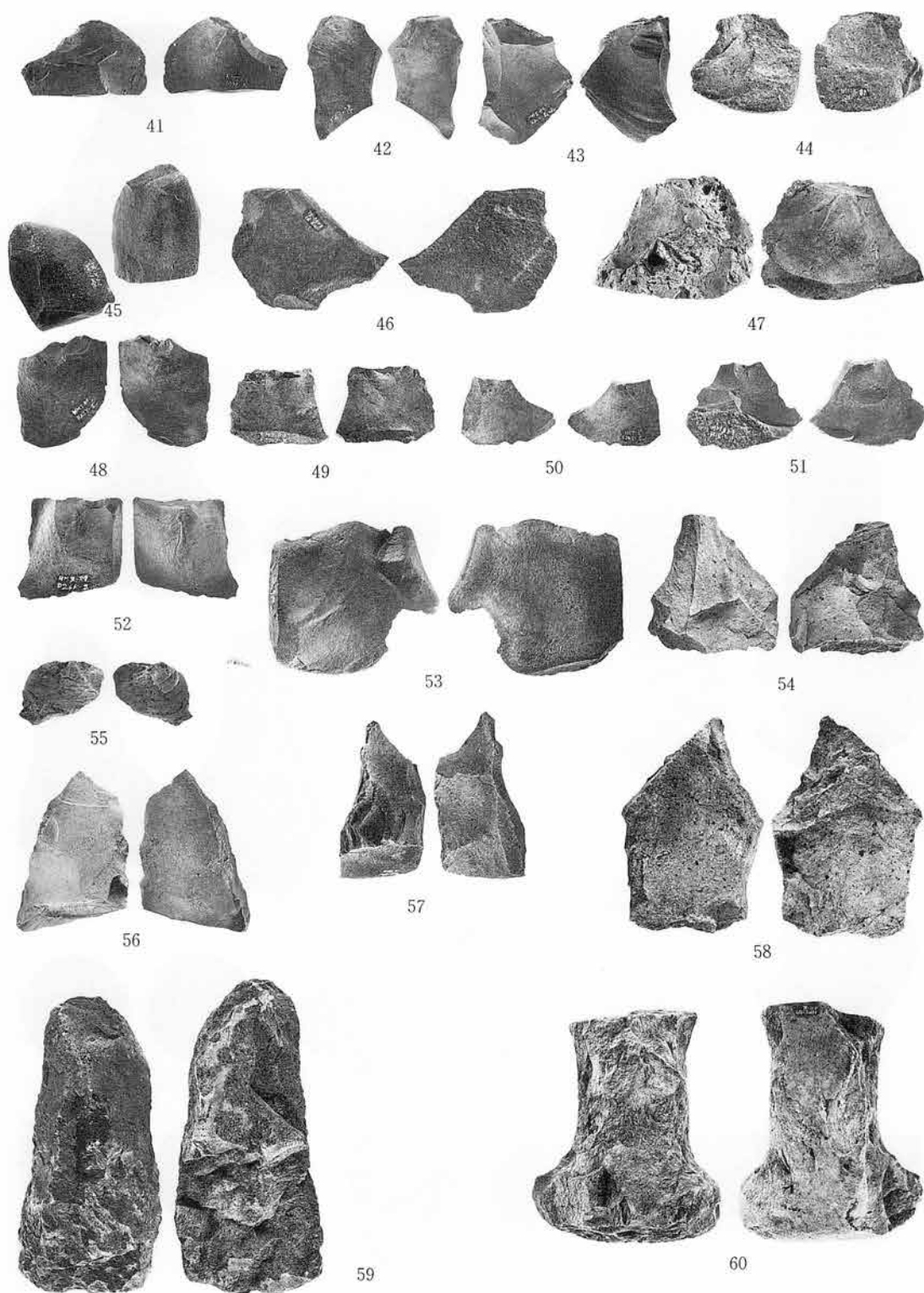


写真図版39：遺構外出土の遺物……石器（1）

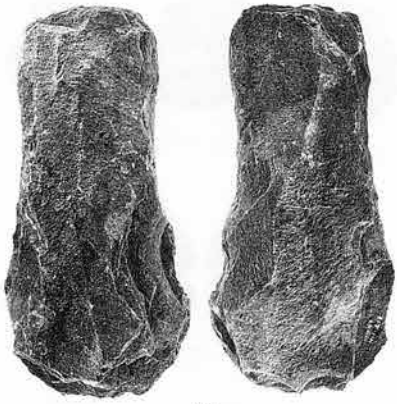




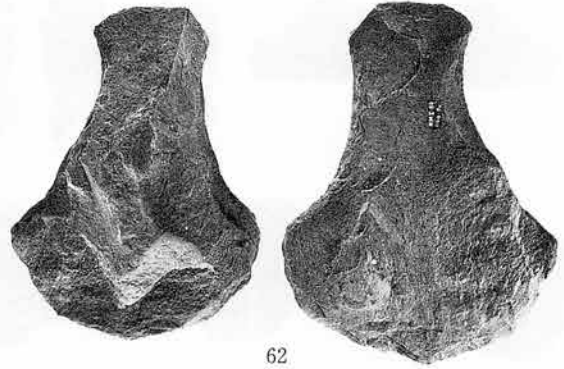
写真図版40：遺構外出土の遺物……石器（2）



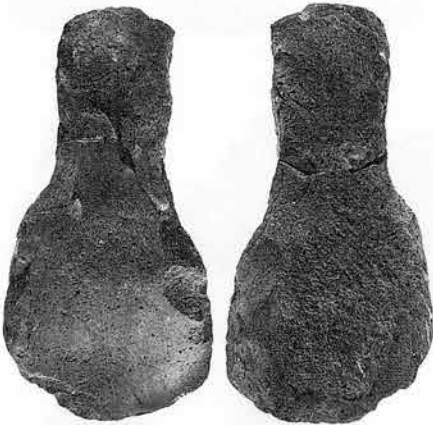
写真図版41：遺構外出土の遺物……石器（3）



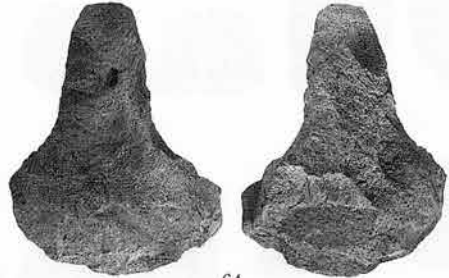
61



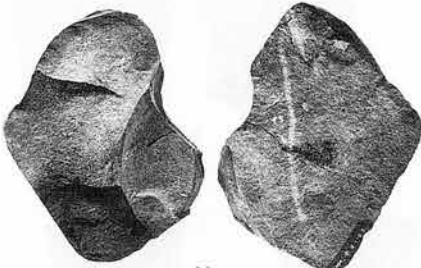
62



63



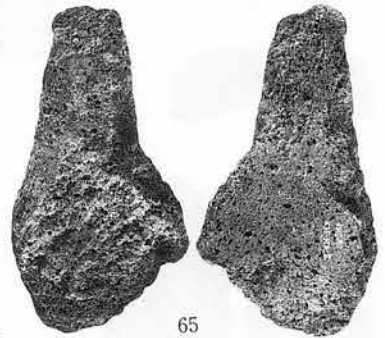
64



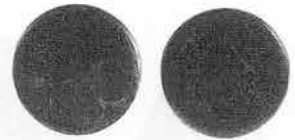
66



67



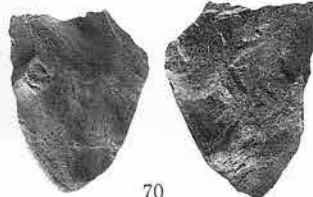
65



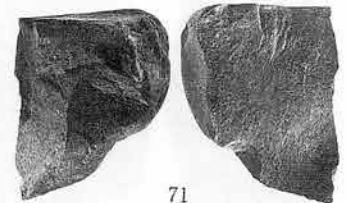
68



69

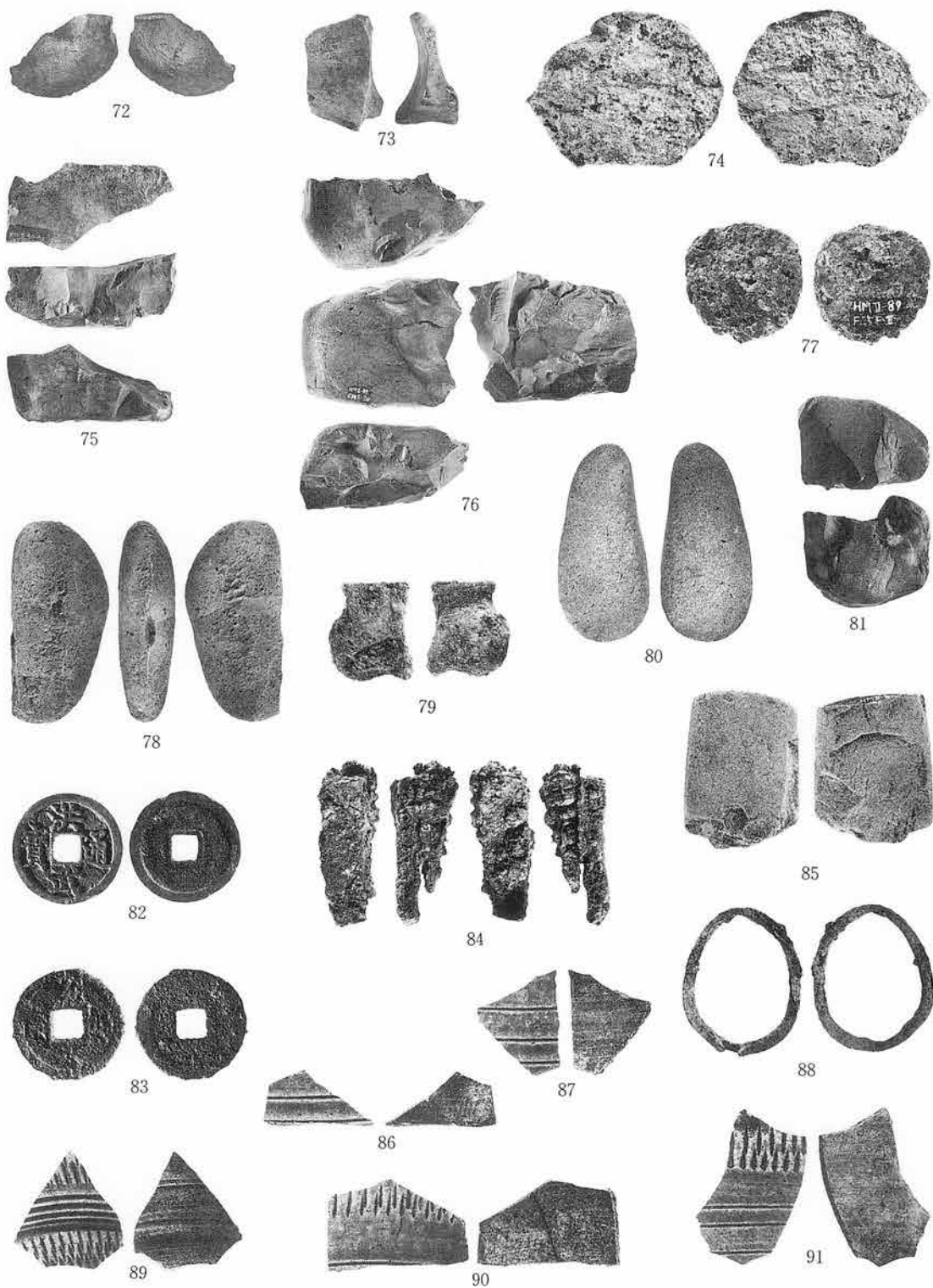


70



71

写真図版42：遺構外出土の遺物……石器（4）



写真図版43：遺構外出土の遺物……石器(5) 他

# 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事兼所長	小笠原 喜 一		
副 所 長	高 橋 敬 明		
[管理課]			
管理課長 (兼)	高 橋 敬 明	嘱 託	根 橋 文 一
課 長 補 佐	森 岡 陽 一	〃	吉 田 十 次
主 事	佐 藤 理	運 転 技 士 員	佐 藤 春 男
[調査課]			
調 査 課 長	村 上 康 昭	文 化 財 員	鎌 田 勉
課 長 補 佐	鈴 木 惠 治	〃	松 本 建 速
〃	三 浦 謙 一	〃	笹 平 克 子
主任文化財	高橋 與右工門	〃	花 坂 政 博
専門調査員	工 藤 利 幸	〃	佐々木 昭 彦
〃	中 川 重 紀	〃	金 子 田 宏
〃	藤 村 敏 男	〃	濱 星 雅 直
〃	高 橋 義 介	〃	羽 柴 直 人
〃	高 橋 正 一	〃	高 木 晃 透
〃	渡 辺 洋 清	期 限 付 員	小 山 内 透
文 化 財 員	佐 藤 實	〃	鎌 田 精 造
専門調査員	佐 瀬 隆 雄	〃	阿 部 中 元 明
〃	千 葉 孝 博	〃	柳 田 敬 磨
〃	東 海 林 隆 幹	〃	菅 原 敬 悦
〃	佐々木 弘 均	〃	千 葉 博 悟
〃	川 村 貞 行	〃	熊 谷 信 一 郎
〃	鈴 木 貞 格	〃	新 山 口 博 英
〃	伊 東 藤 邦 敏	〃	山 工 藤 剛 司
〃	斎 神 敏 明	〃	高 橋 英 樹
〃	佐々木 信 一	〃	溜 浩 二 郎
〃	小 原 真 一	〃	佐 藤 修 一
〃	酒 井 宗 孝		
[資料課]			
資 料 課 長	村 松 義 夫		
文 化 財 員	高 橋 一 浩		
専門調査員			

---

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第183集

八幡野Ⅱ遺跡発掘調査報告書

印刷 平成5年3月25日

発行 平成5年3月30日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185

TEL (0196) 38-9001

印刷 株式会社 吉田印刷

〒020 岩手県盛岡市名須川町23-27

TEL (0196) 25-2323

---

---

© 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1993



縮尺 S=1:2,000  
 本図は、「東北横断自動車 和賀 I.C. 路線測量」図と  
 同用地図とを複製・合成したものである。なお、元図の一部を  
 修整・消去している。

図版 2 : 遺跡周辺の地形と隣接遺跡 (八幡野 II 遺跡付図)